

EAST-ASIAN LIB. UNIVERSITY OF TORONTO



3 1761 03148 8653



















昭和四年十一月廿三日印刷  
昭和四年十一月廿八日發行

不許  
複製

編輯者兼

岩野眞雄

東京市芝區芝公園地七號地一番

印刷者

長尾文雄

東京市芝區芝浦町二丁目三番地

印刷所

日進舍

東京市芝區芝浦町二丁目三番地

東京市芝區芝公園地七號地一番

發行所

大東出版社

振替東京一九四七一  
電話芝二三〇一四〇番番

國譯一切經 毗曇部二







nes of the Buddha, vol. III, p. 249, footnote 2.) と釋し、つまり、舍利弗が大眾の面前に、佛陀に代つて説法して、編述したにつき、爾後の僧伽一般は、應に務として等誦すべきものといふ意味にとつてあるが、因みによつて参照すべし。リスデビツ氏は覺音のこの註に従ひ、同字を「和合唱誦すべき」[「教義」組織] The scheme of chanting together と譯してゐる of Dialogues of the Buddha, III. *ibid.* 一十卷最後の註を参照。

# 阿毘達磨集異門足論下卷訂正表

P. 70.	註、等極捨の第二行	を脱す、 ○○○	を脱し、 ○○○
P. 72.	本文、第一五行	能く勝〔斷〕行を行じ、進趣し、…	能行し、勝行し、進趣し……………
P. 73.	註、【七七】第二行	not for saking	not forsaking



"	同	isunāya	piśunāya
"	同 第三行	ma i)	maṇi)
P. 303.	本文、第四行	勿らむるなり。	勿からしむるなり。
"	同 第五行	説いて、彼れを破壊することを爲さず」と名く。	説かず。「其の」彼れを破壊するが爲め(の故に)」と名く
P. 310.	同 第八行	「高勝」と名く。	「高勝」と名くるが如く、
P. 311.	同 第二行	希はちる。	希はしめちる。
"	註、【三七】 第二行	erunapi)	verunapi)
"	同 第三行	ron	from
P. 313.	同 【四五】 第初、二行	early defin.)	clearly defin.)
"	同 【四六】 第二行	time	times
P. 314.	註、【四八】 第五行	(An ya?)	(Anṛya?)
P. 315.	同 【五二】 第三行	o ;	of.
"	註、【五三】 第二行	三を除く、中間……	三を除く中間……
"	同 【五四】 初行	Aviññāto	Aviññāte
"	同 第四行	bekennen.)	bekennen.
P. 318.	本文、第五、一三行	非聖言なる。	非聖言なるや。
"	同、第一五行	耳識已に了するに、	已に了するに(「耳識」とる)
"	註、【六二】 最終行	kennen.)	kennen.)
P. 319.	本文、第八行	是くの如きは非聖言……	是くの如きも非聖言……
"	註、【六六】 初行	aviññāto-	aviññāto-
P. 320.	同 【六八】 第二行	Declaring	Declaring

右訂正表補遺

P. 7.

第三段

二、集異足論の名義下

参考——南傳佛教の大註家覺音は集異門の原字「巴」  
Sangiti-paryāya(梵は「Sangiti-paryāya」を「衆會」  
應に「なすく」を所作)「samagghikavajja (cf. Dāḍog-



同	第九行
P. 299.	註、【一〇】初行
P. 300.	同 【一五】初行
P. 301.	本文、第一六行
P. 302.	同 第二二、二三行
”	同 第三行
”	同 第一七行
P. 303.	同 第二〇行
”	同 第一四行
”	同 第一六行
P. 305.	本文、第九行
”	註、【一八】第二行
”	同 第三行
”	同 【一九】第三行
”	同 【二〇】初行
”	同 第五行
”	同 第六行
”	註、【二〇】第七行
”	同 最終行
”	同 【二一】初行
”	同 第二行
P. 306.	本文、第八行
”	同 第一一行
”	註、【二三】初行
”	同 【二五】第二行

説くこと勿れと。	
Paiṣunya	
一連にとかる。	
樂はず、	
同	
穢麤なる、	
得ざらしむなり。	
知るべし、	
此の、	
雜語	
雜穢に於いて、離れず斷だず、	
Neumann-	
va su-	
from	
Brahma ala……	
Pugga a	
(P. 7)	
naga-	
avisaṃvāda	
Mu āvāda	
ativirato	
保すべく、	
信保を生じ、	
樂實、は	
Paiṣunya	

説くこと勿れ」と。	
Paiṣunya	
一連にとかる。	
樂はず、	
同	
穢麤なる、	
得ざらしむるなり。	
知るべし、	
此の中、	
雜穢語	
雜穢語に於いて、離れず、斷ぜず、	
Neumann-	
vāsu-	
from	
Brahmajāla……	
Puggala	
(P. 57)	
naga-	
avisaṃvāda	
Musāvāda	
peṭṭivirato	
保すべく、	
信保し、	
樂實とは、	
peṭṭivirato	



”	註、【一二一】第三行
”	同 【一二四】初行
”	同 第三行
P. 284.	本文、第一六行
P. 285.	本文、第一五行
”	同 最終行
P. 287.	本文、第九、一〇行
”	同 第一八行
”	註、第五行
P. 238.	本文、第一七行
”	註、【一五九】第一〇行
P. 289.	本文、第二行
”	同 第一〇行
P. 290.	註、【一七四】第二行
P. 291.	本文、第五行
P. 292.	同 第一一行
”	註、【一九三】初行
P. 293.	同 初行
”	同
P. 294.	註 【二】初行
P. 296.	本文、第三行
P. 296.	同 第四行
”	同 第六行

gñekkie	〇
ta	spara-
ound	
施、受、施具	
苦しむに非ず、	
捧げて	
臥刺に依り、或ひは臥灰に依り、或	
ひは臥柁に依り、或ひは臥板に依	
り、	
他を苦しむに非ず、	
” P.	
自らの支體	
ニヤナミイローカ氏	
爲めにし詞、壇中	
活かすに	
vattāni	
礦ならず、	
戒蘊の根門	
fe	tures
變じふの意。	
Pali:	
S t.	
勸請して	
已に覺り、	
覺らず、	

gñekkie	
tamapara-	
bound	
施、受、施具	
苦しむに非ず、	
捧げて	
刺に依臥し、或ひは灰に依臥し、或ひは柁に依臥し、	
或ひは板に依臥し、	
他を苦しむに非ず、	
” P.	
自ら、支體	
ニヤナミイローカ氏	
爲めにし、詞壇中	
活かるに	
vattāni	
礦ならず、	
戒蘊の、根門	
features	
變じの意。	
Pali:	
Skt.	
勸誡して	
已に覺し、	
覺せず、	

"	同 【三〇】 第六行
P. 273.	本文、第十六行
"	同 第十九行
P. 274.	本文、第二行
P. 275.	註、【五四】 初行
P. 276.	註、【六二】 第二行
"	同 【六四】 初行
P. 278.	註、【八七】
"	同 【八八】 初行
"	同 第三行
P. 279.	註、【八九】 第二行
"	同 第四行
"	同 【九四】 初行
P. 280.	本文、第九行
"	註、【一〇〇】 第二行
"	同
P. 281.	註、【一〇八】 第五行
P. 282.	本文、第四行
"	同 第九行
"	註、【一二】 第六行
"	同 【一二】 第六行
P. 283.	本文、第一八行
"	註、【一八】 初行
"	同 【二〇】 第二行
"	同 【二二】 初行

【一九】	他害すべきに
	欲界 戲忘念天
	欲界 意憤悲天
	前後身
	龜と……
	諸の四法の
	天界のこと。
tiṇḍa	
urḍh—	
滅	
añh—	
巴	
利他有り……	
ne	
ce tain	
si h	
黑暗處	
闇より	
remains in	
(cha iot-makers)	
大族姓の家	
vinipātāṃ	
ti amo	
lo am	

【一九五】	他が害すべきに
	欲界の戲忘念天
	欲界の意憤悲天
	最後身
	龍と……
	(八) 諸の四法の
	こゝでは天界のこと。
tiṇḍa	
durch—	
永滅	
añhi—	
巴	
利他行有り……	
no	
certain	
si ch	
黑暗處	
闇より	
remains in	
(chariot-makers)	
大族姓の家に生れ	
vinipātāṃ	
zāyano	
lokaṃ	



" 同【一七八】初行

P. 261. 本文、第三、四行

" 同 第七行

" 同 第十一行

" 註、【一八九】第三行

P. 263.

同 第七行

" 同【二〇五】第二行

" 同【二〇七】第二行

P. 264.

本文、第一〇行

P. 265.

本文、初行

" 本文、第六行

P. 266. 註、【二二五】第四行

" 同【二二六】第二行

P. 268.

本文、卷の九より第六行

" 註、【一】初行

" 同【五】初行

" 同【七】初行

P. 269. 本文、第六、第十八行

P. 270.

本文、最終行

P. 271.

同 第十八行

" 同 最終行

P. 272.

註、【二八】第五行

100. 證するを以つての……

100. 亦有邊亦有邊か。

問は應さに記す……

法。全幅

446. 諸經

etanatthasamhitam

b. ikkhim

應さに修集

清淨ならざるか。

清淨ならざるものなり。

Sine Syen e,

khinābhanga

施主の沙門、

諸の四法等、

(Hathaka)。

Sangrahavastu

最勝と爲す者は、

同

二に胎生、

出生する

一類の龍一類の妙翅、

100. 證せむを以つての……

100. 亦有邊亦無邊か。

問は是れ應さに記す……

法。全幅

44. 諸經

etam atthasamhitam

b. ikkhim

應さに「修」集、蓋し、現在傳の諸本には、唯だ、この所のみ、この修の字を記せぬから、今、前後を統一する爲めに入れて讀む。

清淨ならざるや。

清淨ならざるなり。

eine Spende,

khinābhanga

施主の、沙門、

(七) 諸の四法等、

(Hathaka)。

Sangraha. vastu

最勝と爲す者は、

同

二に胎生、

出生する

一類の龍、一類の妙翅、

Saia

P. 254.	同【一二六】第二行
"	同【一二七】第四行
P. 255.	同【一二八】初行
"	同【一二九】第二行
"	同【一三四】初行
"	同【一三五】第二行
P. 256.	本文、第一（行）
"	同 第一六行
"	註【一三八】第二行
"	同【一四二】初行
"	同【一四八】初行
P. 257.	本文、第五行
"	本文、第十六行
"	註、初行
"	同、第五行
"	同 第七行
"	同【一五五】第三行
P. 258.	註【一六七】第二行
"	同 第三行
"	註【一六二】第三行
P. 259.	註【一六八】第三行
"	同 第七行
"	同【一六九】第二行
"	同【一七二】終行
P. 260.	註【一七六】第二行

plugguna.	P <sub>lag</sub> una.
大集法巴共に……	大集法門共に……
tr̥ṣhotpādāḥ	tr̥ṣhotpādāḥ
uppaḥjati	uppaḥjati
cloth.	cloth.
時に執するなるや。	時に執するなるや。
〔是の〕如く、	〔是の如きの〕
Antarv—	Antarv—
Pratīsamuk ilka.	Pratīsamukṣika.
あひやかな……	あひやかな……
なる。	なる。
起ること有るに、	起ること有るに、
無因を因と……	無有を因と……
Wegen	Wegen
wickelt sich)	wickelt sich)
Gänge.)	Gänge.)
Justus	Just as
themouth [	the mouth.]
throu gh	through
(Rhyas D.—	(Rhyas D.—
Paṭṭavyākarapaṇi	Paṭṭavyākarapaṇi
vyākaraṇīya	(…… vyākaraṇīya
(上參照)	(同上參照)
類すべき無	類すべき無。



” 註、【五四】初行

” 註、【五七】初行

P. 248. 本文、第五行

同 第六、七、八行

” 同 第十二行

” 同 第十四行

” 註、【六〇】第三行

” 同 【六三】初行

” 同 註、第二行

P. 249. 同 【六五】初行

” 同 第三行

” 同 【六七】初行

” 同 第二行

” 同 【六八】初行

P. 250. 本文、初行

” 同 第十四行

” 同 【七九】第二行

P. 252. 註 【一〇一】第三行

” 同 【一〇三】初行

P. 253. 本文、第十八行

” 同 終行

” 註、【一一四】初行

(Sukkeyaditthi)

D<sup>o</sup>ṣṣiparimāṣa

未だ斷ぜず、未だ通知せざれば、

彼々の所得に於いて、自體を因と爲し、縁と爲して、繋し、等繋し、各別繋し、相ひ……

是れを瞋と爲す。

身繋は、

hangeh.)

Ātmavāda-upādāna

(Attavādupādāna)°

knōten.)°

keya

Kōrps.)°

未だ斷ぜず等、

(無問道)

(Attabhāva)°

未だ斷ぜず、未だ通知せざれば、

細なる二には……

sa irum……°

Nahung.)°

(Skt.) cutting

隨順し、

隨煩惱を起さば、

Spaśa

(Sukkeyaditthi)

D<sup>o</sup>ṣṣiparimāṣa

未斷、未通知ならば、

彼々の所得の自體に於いて、因と爲り、縁と爲りて、

繋し、等繋し、各別繋し、彼々の有情等は」相ひ……

是れを名けて瞋と爲す。

身繋は、

hangeh.)

Ātmavāda-upādāna

(Attavādupādāna)°

Knōten.)°

keya

Kōrps.)°

未斷、未通知等、

(無問道)

(Ā tabhāva) = loṭy°

未斷、未通知なら

細なる二には……

sa irum……°

Nahung.)°

(Skt.) = cutting

隨順するに、

隨煩惱を生起せば、

Spaśa

同 第五行

本文、第一三行

頭書及び本文第一四行

本文、第一七行

註【二】第五行

同 終より二行

本文、第二、三行

本文、第三行

註【一二】

註【一四】第三行

本文、第六行

同 第一六行

註【一二】初行

同 【一二】

本文、第十行

註【三四】第三行

本文、第十九行

註【四八】第四行

本文、第三及び第五、第八行

同 第四行

同 第七行

同 第十一行

同 第十八行

同 十九行及び終行

熟業。能盡諸業

無異熟

能盡諸業

意説は、業の能く諸業を盡すに名

which snettier

black cor

後に

同

是くの如き等巴、文……

caṣṣu Kṛu-vipākam)

欲食

無聞の異生有り。

Yoga)。

Sentam—

世尊

死後の常、相續者……

三には邪見、四に見取なり。

caṣṣa-vipākam

苦樂の邊を越ゆるの邊に至る

禁執取に於いて謂はく、

と禁との俱に……

結縛・隨・眠。

未だ斷せず、未だ通知せざれ

所得に於いて、自體を因と爲し、縁と爲して、繋し、等繋し、各別繋し、相

熟業。能盡諸業

無異熟

業能盡諸業

意は、〔是れを〕説いて、業能盡諸業と名く……

which is neither

black nor

後に

同

是くの如き等、巴文……

ca sūkha-vipākam—

欲食

無聞の異生有り。

Yoga)。

Sennu—

世尊

死後の常、相續者……

三には邪見、四に見取なり。

ca vinnavyāna

苦樂の邊を越ゆることに至る

禁に於いて執取して謂はく、

と禁との俱に……

結縛・隨眠。

未斷、未通知なら

所得の自體に於いて、因と爲り、縁と爲りて、繋し、等繋し、各別繋し、〔彼々の有情等は〕相



P. 226. 本文、第一六行  
 " 註、【九七】初行  
 P. 227. 本文、第九行  
 " 註、【一〇五】初、【一〇八】第二行  
 P. 229. 本文、第一九行  
 " 同 第一九—二〇行  
 P. 230. 本文、第一七行  
 " 註、初行  
 P. 232. 本文、第四行  
 " 同 第一八行  
 " 註、【一五一】初行  
 P. 234. 同 【一五七】第三行  
 " 同 【一五九】初行  
 P. 235. 同 【一七〇】第三行  
 " 同 【一七二】第六行  
 P. 237. 註、【一八一】初行  
 " 同 第八行  
 " 同 第十一三行  
 P. 239. 本文、「卷の第八」より第四行  
 " 同 第五行  
 " 同 最終行  
 P. 240. 本文、初行

樂はず  
 yimokha or  
 身語意行  
 大衆法門經  
 耳に聞く所  
 「鼻の鼻ぐ所の香、舌の嘗る所の味」  
 ……觸を觸せば  
 ……的に修道  
 無しは  
 無損害の觸を觸せば、  
 V. 14. udaya-  
resuli;  
 (puppa)  
 "battā"  
 (以上三、巴)  
 中の第一で段  
 六光  
 Fuder  
 若しは有損害、……  
 無損害法を積集……  
 可愛非愛  
 不黒不白異熟業能盡諸業

樂はず、  
 yimokha or  
 身語意行  
 大衆法門經  
 耳の聞く所  
 はすべてとる。蓋し、上二界には香味の二境はないといふが有部の教義に於ける定めなるが故である。俱舍卷一、十八界の諸門分別下參照。因みに、上二界殊に色界にはかく香味の二境の缺くるが故に、それに基く鼻舌二識も缺如すといふが、又有部の所立である。  
 ……觸を觸する時んば  
 ……的に修道の  
 若しは  
 無損害の觸を觸せざれば  
 …… Udaya —  
resuli;  
 (puppa)  
 "battā"  
 (以上三、梵)  
 ……第一の段  
 少光  
 Inder  
 若し、有損害、  
 無損害法を積集……  
 可愛非可愛  
 不黒不白異熟業能盡諸業

P. 217.

本文、第七行

"

註、【二七】第二行

P. 218.

頭書

P. 219.

本文、第一一七

P. 220.

頭書

"

註、【四八】第三行

P. 221.

頭書

"

本文、第一四、一八行

"

註、【五二】第二行

"

同

P. 222.

註、【六五】

P. 223.

本文、第六行

"

同 第一九行

"

註、【六八】第四行

"

同 【七二】第五行

P. 224.

本文、第三行

"

註、【八一】善軌

……、但だ蚊。

mānena

一九、四法迹

名けて法迹と爲す。

二〇、四應證法

Berhigung

一(二二)第二の四行

蚊蛇。

ギーティム經

Dhamma-khandhā

saṅkhamācāsi

若しは修して

諸漏永盡

「熱慮して隨嗜す」

の「故に」で作り

諸漏永盡

の全文

大正藏經には……「但だ蚊に作り、縮藏には蚊に作る。但し、大正藏經も、下の方は皆な蚊とす。蓋し蚊の方を正とせんか。

mānena

九、(一九)、四法迹

法迹と名く。

一〇、(二〇)、四應證法

Berhigung

一(二二)第二の四行

蚊蛇。

ギーティ經(「ム」とる)

Dhamma-khandhā

saṅkhamācāsi

若しは修し(「て」とる)

諸漏の永盡

「熱慮して隨嗜す」

……「と作り

諸漏の永盡

善軌。軌 dhura = rake = office, responsibility, charge. 一つまり軌とは責め、忍持、重擔などの意で、今

はそれを煩惱の一類としての軌 yosa (四軌、四法品

二六卷第八中参照)と簡別する爲めに善軌と記せる

ものである。「善軌を捨す」は 3) anikkhita-dhura

(Itys D. = not shrinking to it; Mrs. Rhys D. = undimining endurance) 因る 4) Ely is anikkhita-dhura kusaleu dhammesu なる字もあるから、

或ひは今の「善軌を捨せず」の原文は、これに準じたものであつたかとはかられず(参考一今の下巻 18.

註【五二】)



P. 205.	註、【二一七】(上段初行)
"	同 【二一八】第三行
"	同 【二一九】初行
"	同 【二二三】
P. 206.	同 【二二五】終より第四行
"	同 【二二七】第三行
P. 207.	同 【二四二】初行
P. 208.	同 【二六三】
P. 209.	同 【二七一】初行
"	同 第三行
"	同 第四行
"	同 【二七七】初行
P. 212.	頭書
"	本文、第一一行
"	註、【七】及び【八】第三行
P. 213.	頭書
"	本文、第六行
"	本文、第九行
"	同 第一六行
P. 214.	註、【一五】第三行
P. 215.	頭書
"	註、【一九】
P. 216.	頭書
"	本文、第三行
"	註、【二四】第三行

……の右三想	Uñmesajjhakkeṭṭen.)
apramāṇa	
……—Appa.)	
……ことなれば、……	
infinite	
sakraddhāni	
顯かに	
—Buddha	
Neumann	
angerüstet	
業因業因	
一五、四力	
……出と思惟	
Kenutniss	
一六、四處	
となり、智もて作證せしむ	
喜樂ある初靜慮	
隨煩惱(縛)	
Auflösung	
一七、四蘊	
(附記、……	
一八、四依	
學解の脱、……無學解の脱	
正統婆羅門	

……の三想	Uñmesajjhakkeṭṭen.)
apramāṇa	
……—Appa.)	
……ことなれば、	
infinite	
sakraddhāni	
顯かに	
—Buddha	
Neumann	
angerüstet	
業因業果	
五、(一五)、四力	
……出と思惟	
Kenutniss	
六、(一六)、四處	
とならしめ、智もて作證せむ	
喜樂ありて、初靜慮	
隨煩惱、纏	
Auflösung	
一七、(一七)、四蘊	
(附記、……	
一八、(一八)、四依	
學の解、脱、……無學の解、脱	
正統婆羅門	

"	同 第四行
P. 194.	註、【一三九】第四行
P. 195.	本文、第七行
"	同 第一三行
"	同 最終行
P. 196.	本文、第一六一七行
P. 197.	本文、第二行及び最後行
"	註、第一五行
"	同 同
P. 198.	同 【一六二】第二行
"	同 【一六六】終行
P. 199.	同 【一七七】
"	同 【一七九】
P. 200.	本文、第二、三行
"	同 第一六行
"	註、【一八七】初行
P. 201.	本文、初行
"	同、第二—三、五、一〇、一二行
"	同 第一三行
"	註、【一九〇】第二行
"	同 同
P. 202.	本文、第一二行
"	註、第二行
"	同 【一九四】第二行
P. 203.	同 【一九九】第二行

Erkenntnis	Der
欲三摩地斷行、成就神足	欲三摩地斷行成就神足
答ふ、増上……	答ふ、勤増上……
觀三摩地斷行成就の	觀三摩地斷行成就(の)とる)
苦の集の聖諦	苦集の聖諦
「一に」等	「一には」等
enthalten	enthalten
〔Lehre〕	〔Lehre〕
生ず	生ずる
karitva	karitva
Samyak	Samyak
Asamprinoṣya	Asamprinoṣya
……を樂み	……を樂び
斷と修を	斷と修とを
viryaśamādhi……	viryaśamādhi……
「一に」等	「一には」等
……を證する時に有する所の	……を證する時の所有の
無爲阿羅漢果	無爲の阿羅漢果
Neumann	Neumann
Schönungen	Schönungen
寂靜	寂靜
ung)	ung)
Neumann	Neumann
無愛	無有愛



P. 184.	本文、第四行
P. 185.	註、【五〇】第五行
"	同 【五一】初行
"	同 第二行
"	同 【五四】第二行
P. 186.	本文、第十二行
"	註、【六〇】第七行
"	同 【六一】第三行
"	同 【六二】第二行
P. 187.	本文、第一行
"	註、【七一】初行
P. 188.	本文、第三行、第一八行
"	同 第五行
"	同 第一〇行
P. 189.	本文、第一五行
"	註、第三行
"	同 【九〇】第三行
P. 190.	註、【一〇四】
P. 191.	同 【一一】第四行
"	同 【一二五】第六行
P. 192.	同 初行
"	同 【一二六】第三行
"	同 【一二二】第二行
"	同 第七行
P. 193.	同 【一二九】初行

苦聖諦なり、	苦の聖諦なり、
その準備的階段	その中の……………
Tripi Saṃcayāni	Tripi Saṃcayāni
purities	purities
speech	speech
所依と爲らんやと。	……と爲るやと。
身心ともは	……ともは
schweigen	Schweigen
principles	principle
世増上と名く。	世増上と名くと。
所學の法經を……	所學の法を……（「經」とる）
……と名く。	……と名くと。
阿練若に居り	……居し、
諸の惡、耽嗜	諸の惡耽嗜……
盡智と無生智は	……と無生智とは
もつて自己の	もつて自己の
Neumann	Neumann
Janā [i=] he knows	Janāti = [he] knows.
比較すべくなく	……をなく、
……苦・集・道……	……苦・集・滅・道……
……十智とる。	……十智ともする。
Unübertriffliche	Unübertriffliche
宇宙論（即ち、……	宇宙論に（即ち、……
……）を經、更に宿住以來……	……）を經、宿住以來……（「更に」とる）
……—jāna	……—jāna





" 同 第一三行  
 " 同 第一七一八行  
 P. 163. 本文、第二行及び第九—二〇行  
 " 註、【一二二】第三行  
 P. 164. 註、【一二二】第三行  
 P. 165. 本文、第一〇  
 P. 166. 同 終より第三—二行  
 P. 168. 同 (初より) 第六行  
 P. 165. 註、【一三八】初行  
 P. 167. 本文、初行  
 P. 168. 頭書  
 " 本文、第一一行  
 " 註、【一四五】初行  
 " 同 【一四六】第二行  
 P. 169. 本文、第一三行  
 " 註、【一五一】第三行  
 P. 170. 本文、第一〇行  
 " 同 第一二行  
 " 註、【一六二】第三行  
 " 同 【一六三】初行  
 P. 171. 本文、第八行  
 " 註、【一六七】初行  
 " 同 【一七〇】第三行  
 P. 172. 本文、第一一行  
 " 註、初行

「諸の有情有り」  
 同一の趣に進むと雖も、  
 増長の如是の類の業を造作し  
 ……べきなれで、  
 alonk-  
 定等に依るが故に  
 身もず、  
 三たび  
 別生記經の文  
 遍淨等天  
 光淨  
 Keumann  
 一一の所作事業  
 善定善友下)  
 ……に依りて起る  
 「一に」等  
 の文を  
 ……に依る 共  
 諸の有結  
 預流果  
 毘崩伽論  
 見もて善く通達す。  
 Rhys D.=3

「諸の有情有り」  
 同一趣趣なりと雖も、  
 右文に同じて改む。  
 ……べきなれど、  
 alo sunk-  
 依定等しきが故に  
 身も、「ず」とる)  
 二たび  
 分。別生記經の文  
 遍淨等の天  
 少淨  
 Keumann  
 一一の所作の事業  
 善言善友下)  
 ……起す  
 「一に」等  
 の文も  
 ……に依る不共  
 諸の有の結  
 預流果  
 毘崩伽論  
 見もて善く通達す。  
 Rhys D.—3

P. 153.	同 【三三】 初行
"	同 【三五】 初行
P. 154.	頭書
"	註、【四六】 第三行
"	同 【四八】 第一三行
P. 155.	本文、終より第四行
P. 156.	註、【六〇】 第三行
"	同 【六六】 第五行
P. 158.	同 【八一】 第三行
"	同 第五行
"	同 【八三】
"	同 【八六】 第三行
"	同 第四行
"	同 【八八】 第二行
P. 159.	本文、第一一行
"	同 第一九行
"	註、第六行
"	同 【九一】 第二行
P. 160.	本文、第三行
"	同 第四行
P. 161.	本文、最終行
P. 162.	同 第五行

(Tayo agyi)	食等食。
【巴利】増の文	今に則ち
統一者となすやうに	成辨するを得しむ。
house hold	解脫果を於くは
No. 5 Mrs.	法 伽尼論
(Yattu)	virtue
verdienstliche	卷第三、法品
亦、戒類との名け	思の類・作心意業
(處)としての酒	(Bhāvanāyana.....
亦、業を	亦、業と
亦、事と名け。	増長の如是の類の業を造化し
増長の如是の類の業を造化し	増上の如是の類の業を造作し

(Tayo agyi)	食等食。
【巴利】増の文	今は則ち
.....となすやうに(「とる」)	.....することを得しむ。
household	.....をおくは
No. 5, Mrs.	法僧伽尼論
(Yattu)	virtue
verdienstliches	.....三法品
亦、戒類と名け(「とる」)	思の類・作心意業
(處)としての酒	(Bhāvanāyana
亦、業と	亦、業と
亦、事と名け。	如是の類の業を造作、増上し、(但し、造作は大正藏經
本には造化に作る)	如是の類の業を造作、増上し、(但し、諸傳本、たゞ、
こゝのみ増上に作るはおかしく、恐らくは増長の誤なりし。	



"	同	【一六七】第八行
P. 146.	同	【一七〇】第二行
"	同	第三行
"	同	【一七二】第二行
"	同	第三行
"	同	第一〇行
"	同	【一七五】第二行
"	同	第九行
"	同	第二〇行
P. 147.	同	上段第一〇行
P. 148.	同	【一八五】第三行
"	同	【一九一】及び【一九二】初行
P. 149.	本文、題號を加へ、第三行、	
"	同	最終行
"	註、【三】初	
P. 150.	註、【一】第三行	
"	同	【一二】第二行
"	同	【一五】第二行
P. 151.	同	初行
"	同	【一九】第二行
"	同	【二一】初行
P. 152.	本文、第九行	
"	註、【二三】第三行	
"	同	【二四】第二行

101—10	quest of
	Daseinsucht
	The
	Neumann—
	Cūḥa-Mahapkyā— (参照)
	……しおけば、
	最初を煖法の。
	所謂見道と入る
	(本論 法品……)
	obfuscation
	(Nyāṭtiloka)
	「一に」等
	同上
	(梵=巴)
	Dreifach
	Neumann—
	本質的に無
	……起れる法意
	Neumann—
	— idhā
	眼と伏とにして
	‘Mūder hin ich ist’

101—110	quest of
	Daseinsucht
	The
	Neumann—
	Cūḥa-mahapkyā— (参照)
	……しおけば、
	最初を煖法(「の」とる)
	……に入る
	(本論七法品……)
	obfuscation
	(Nyāṭtiloka—……)
	「一には」等
	同上
	(梵=巴)
	Dreifach
	Neumann—
	本質的に無常。
	……法の意
	Neumann—
	— vidhā
	眼と伏とにして、
	‘Mūder hin ich ist’
	「加する所」を加ふ

" 同【一二三】第三行  
 " 同 第六行  
 " 同【一四】第四行  
 P. 135. 本文、第一〇行  
 " 註、【一九】第二行  
 " 同【二〇】終行  
 P. 137. 註、【二六】初行  
 " 同【三二】第二行  
 " 同【三三】初行  
 P. 138. 註、【三五】初行  
 " 同 第三行  
 P. 139. 同【三八】第二三行  
 " 同 第二七行  
 P. 140. 本文、第三行  
 " 註、第二行  
 " 同【四〇】第五行  
 P. 141. 本文、初行  
 " 同 第二、五、八行  
 " 同 第二二行  
 P. 142. 註、【四八】第一三行  
 P. 143. 本文、終より第三行  
 P. 144. 註、【五五】第四行  
 " 同 第六行  
 P. 145. 註、【六一】第四行  
 " 註、【六四】初行

aperi uddha-  
 g to,  
 如來。意現行  
 相ひ亂雜  
 (多の頭……)  
 palina  
 S-ṅgiti-S.  
 集法門經・一六  
 Sa giti-S.  
 Tisrah (Tṛṣṇā)  
 佛教 宙論  
 或ひは 説  
 といはんととまる  
 り 類智忍  
 途中に外  
 欲の説に於て  
 「一に」「二に」「三に」等は各  
 「欲界繫にして」「色界繫にして」、  
 「無色界繫にして」  
 に現在の  
 同段ありしものの如く  
 「一に」「二に」「三に」  
 今 文  
 paribhaje ti  
 =foomā  
 (Rkys Dtho—

aperiṣuddha—  
 gto.  
 如來の意……  
 相ひ難亂  
 (多羅の頭……)  
 palina  
 Saṅgiti-S  
 集法門經三・一六  
 Saṅgiti-S.  
 Tisrah tṛṣṇā  
 佛教 宙論  
 或ひは 廣説  
 といはんととまる  
 り 道類智忍  
 途中に外  
 欲の境に於て  
 「一には」「二には」「三には」等と改む。  
 は各「欲界繫の」「色界繫の」「無色界繫の」と改む。  
 には現在の  
 同段なりしものの如く  
 「一には」「二には」「三には」  
 今 文  
 paribhaje ti  
 =from ā  
 (Rkys D.—The



"	註、【四四】初行
P. 124.	本文、第三行
P. 125.	本文、第一〇行
"	同 第一三行
"	註、【五八】第五行
"	同 第六行
P. 126.	同 【六七】第六行
"	同 【六八】初行
"	同 【六九】初行
P. 127.	同 【七二】第二行
P. 128.	註、【七八】第二行
"	同 【七九】初行
P. 129.	同 【八二】第六行
P. 130.	本文、第四、一二行
P. 131.	註、【九三】第五行
"	同 【九四】第二行
P. 132.	本文、第一四行
P. 133.	註、【一〇三】第三行
P. 134.	註、第二行
"	同 【一一〇】第二一行
"	同 同
P. 135.	本文、第三行
"	註、【一二】初行
"	同 【一二】初行
"	同 【一二】第五行

Señhasapkaṇṇa	辯才と念と
	耆舊の長宿
	眞の生(年)上座
	自らの利を見
	たものが、
	と名けてあくる
Mithyavaniyutaraṇi	
Paṭṭa	
determined	
根本 律典	
……の第四、戒等……	
大麥酒、等。	
「定むで」の下	
引籠を	
條件事の實	
行の業身とは	
(Maddaṇṇapatti)	
khira)	
— (Mahāyutpatti)	
pari uddhaṇṇas	
第三の柁 <sup>〇</sup> 南	
諸の如來の三 <sup>〇</sup> 等	
parisuddhakāya -	
Tatthā	

Señhasapkaṇṇa	念と辯才と
	耆舊、長宿、
	眞の生(年)上座 <sup>〇</sup> とる)
	自らの利を見
	たものか、
	……あぐる
Mithyavaniyutaraṇi	
Paṭṭa	
determined.	
根本諸律典	
……の第四、五戒等……	
大麥酒等。	
「應に」を入れる。	
引籠を	
條件の事實	
……身業とは	
(Maddaṇṇapatti)	
khiraṇa)	
— 梵 (Mahāyutpatti)	
parisuddhaṇṇas.	
第三の柁 <sup>〇</sup> 南	
……業等	
parisuddhakāya -	
Tatthā -	

"	同 第七行
"	同 【一六九】第二行
"	同
"	同 【一七六】第二行
P. 114.	頭書
"	本文、第九行
"	同 第一〇行
"	註、【一八一】初行
P. 115.	註、【一八七】第五行
P. 116.	上段、【一九三】第二行
"	下段、初行
P. 117.	上段、【二〇五】第一二行
"	同、【二〇七】初行
P. 118.	同 【二一七】初行
"	下段【二二〇】第二行
"	同 【二二一】第二行
"	同 【二二六】第二行
P. 119.	本文、標題
"	同 卷の第四を加へ第六行
P. 120.	本文、第九行
"	註、【一二】第三行
P. 121.	註、【二二】第二行
P. 123.	本文、第五行
"	同 第一七行
"	註、【四〇】初行

nderedrei	有情に名くとし
	補特伽羅のこと
Sangiti, S.	
四(一四)、少分三行	
答ふ、一處なり	
少分三行とは	
(Atta).....	
英獨譯と準ず	
(ni + $\sqrt{do}$ = .....)	
Cullavideśa	
六天中の最上	
.....supatigha	
(Vijā cittaṇi)	
controlled;	
inserset	
vijāṇa	
(三)諸の三法の二の	
定心に依りて、能く.....	
し問ふ	
rūpaṇi	
A person o inverted.....	
終ひに遺失	
數多の法を開く	
Ugg. hetuṇa	

ndere drei	有情に名くとし、
	補特伽羅の意である
Sangiti, S.	
四(一四)、三行(少分とる)	
答ふ、一處の少分なり。	
三行とは(少分とる)	
(Atta).....	
.....準ず	
(ni + $\sqrt{ā}$ = .....)	
Cullavideśa	
六天中の最上の	
.....supatigha	
(Vijā cittaṇi)	
controlled;	
inserset	
vijāṇa	
.....の二の	
定に依りて、心、能く	
問ふ、「」とる	
rūpaṇi	
A person of inverted.....	
終ひに遺失(但し、縮藏本は遺失に作る)	
數、多く、法を開く	
Ugg. hetuṇa	



” 同 第九行  
 P. 105. 同 第七行  
 ” 同 第九行  
 ” 同 第一九行  
 P. 106. 同 第七行  
 ” 註、【一三一】初行  
 P. 107. 本文、初行  
 ” 註、初行  
 ” 同 第七行  
 ” 同 【一三四】初行  
 ” 同 【一三六】初行  
 P. 108. 註、【一三九】第三行  
 ” 同 【一四四】第二行  
 P. 110. 註、【一五七】第二行  
 P. 112. 註、【一六三】第二行  
 ” 同 第三行  
 ” 同 第五行  
 ” 同 第七行  
 ” 同 【一六六】第三行  
 ” 同 第四行  
 ” 同 第五行  
 ” 同 第六行  
 P. 113. 同 第二行  
 ” 同 行五行  
 ” 同 第六行

「……を滅し」の下  
 出離尋  
 寂靜、  
 此く  
 害尋に於いて、  
 Cīṭaviprayuktāḥ  
 靜、彼れが道……  
 寄與せられたる。  
 文等といふ  
 (……)yitar—  
 (……)duccarīṇāni  
 Wāṇel……  
 割愛  
 順に巴=、  
 odhiśeṣa  
 —r  
 とのみあざりしが。  
 一切有と名らべき  
 不生不時  
 之を、掲げた、  
 煩惱を  
 寂滅等を説き  
 añjāpā-d.  
 thesphore  
 higher heaven

同上、  
 無患尋  
 また、このまゝでよろしきも、現漢譯には「寂靜なり  
 と思惟し」と記す。  
 此の  
 無尋尋に於いて、  
 Cīṭaviprayuktāḥ  
 同前、原典は「靜なりと思惟し、彼れが……」と作る。  
 寄與せられたるもの。  
 文等をいふ  
 (……)yitar—  
 (……)duccarīṇāni  
 Wāṇel……  
 渴愛  
 順に巴=、  
 dhiśeṣa  
 or  
 とのみあざりしか。  
 一切有と名くべき  
 不生不死  
 之を掲げて、  
 煩惱を  
 寂滅等と説き  
 añjāpā-d.  
 the sphore  
 higher heaven

"	同
"	同 第一四行
"	註、【三三】第三行
P. 96.	本文、第四行
"	同 第五行
"	註、【三七】第一一行
P. 97.	本文、最終行
"	註、第三行
"	同 【五一】初行
P. 98.	本文、初行
P. 99.	註、【六九】第二行
"	同 【七〇】第二行
P. 100.	本文、第九行
"	同 第一〇一—一一行
"	註、【八五】第五行
P. 101.	本文、第四行
"	註、【八九】第二行
"	同 【九〇】
P. 102.	本文、第一二行
"	同 第一四行
"	同 第一九—二〇行
P. 103.	同 第一〇行
"	同 第一六行
P. 104.	本文、第八—九行

……に相應する已……  
 ……解脫と謂ふ。  
 般若  
 「……所の智と、見と、」の次、  
 ……無生智と謂ふ。  
 般若  
 損害を爲さむと欲する内に……  
 Avijjā-  
 Saṃpatti-S.  
 る已瞋……  
 impurity  
 of.  
 瞋恚  
 ……を爲さず、  
 ……の相應の・想……  
 六觸處を如實に知る  
 所依となつて……  
 aññā-  
 不善性  
 「能く自らを害することを爲し」の次  
 名けて出離尋と爲す。  
 箭の如く、惱害の如く、  
 寂靜なり、  
 「……ことを爲し」、の次

……に相應する心の・已……  
 ……解脫と名く。  
 般若  
 「明と」を入る。  
 ……無生智と名く。  
 般若  
 損害を爲さむと欲する、内に……  
 Avijjā-  
 Saṃpatti-S.  
 擾惱の爲さむと欲する、已瞋……  
 impurity  
 of.  
 瞋恚  
 ……爲すに非ず、  
 ……の受・想……  
 六觸處の如實を知る  
 所依となして……  
 aññā-  
 不善法  
 「能く」を入る。  
 出離尋と名く。  
 このまゝでもよけれど、原漢譯には「箭・惱害の如く」と記す、  
 同様、このまゝでもよきも原漢譯には、又、「……と思惟し」を入る。  
 「能く」を入る。



P. 86.	註、【二一〇】初行
"	同 【二一一】初行
P. 87.	本文、第七一八行
"	註、【二一六】第六行
P. 88.	上段、【二一八】第三行
"	下段、第三行
P. 90.	本文卷の第三を加へ第三行
"	註、【二】第四行
"	同 第八行
P. 91.	本文、第一二行
"	註、【八】
"	同 【一三】第二行
P. 92.	本文、初行
"	註、【一四】第七行
"	同 第一〇行
P. 93.	本文、第一二行
"	同 第一七行
"	註、【二二】第四行
P. 94.	本文、第二行
"	註、【二七】第三行
"	同 【二八】初行
"	同 第二行
"	同 【三〇】第四行
P. 95.	本文、第四行

saṃspārāḥ	「相應せる法」以下下の如く改む。
saṃyag, dṛṣṭi	……等と相同じて。
證得することを得ず	奢摩他及相應せる法……
earnest struggle o……	即ち、と解すべく、
Meritorious……Ungeliglichkeit	相應するべく
……未だしとの謂。	「答ふ」の下
善法を斷ぜむが……	「内心の止も得、」の下
heven……	(即ち、類の人あり……)
exerci, be……	出世の聖慧に攝する所の法に於ける
作さく	諸生活を念憶
	Jānapīḍya
	Softamouth jupate
	涅槃の 是……
	非學・非無學

saṃskārāḥ	「八」相應の——Saṃpratyutah(?)——とは、右註の如き
amyaḍṛṣṭi	奢摩他の止心に相應せる内界諸法の意。
證得せず。	……等相等じて。
earnest struggle of	奢摩他が相應の、法に於ける……
Meritorious……Ungeliglichkeit……	を解すべく、即ち、……
……未だしとの謂。(「と」ひとる)	相應すべく、
不善法を斷ぜむが……	「若し」を加ふ、
āśevanā……	「亦」を加ふ、
exerise……	(即ち、「類の人あり……)
作して言はく	出世の聖慧に攝する所の、法に於ける……
	……を憶念
	Jāna-vīdyā
	Sattanaṃ cutupapāte
	涅槃の名は……
	非學非無學

P. 70.

P. 71.

P. 72.

P. 74.

P. 77.

P. 78.

"

"

"

"

"

"

P. 80.

"

"

"

P. 82.

P. 84.

"

P. 85.

"

P. 86.

"

"

註、【七七】第一行

同 【八二】第二行

同 【九九】

本文、第九行

本文、第一三行

註、【一四六】初行

本文、第一七行

註、【一四七】初行

同 【一四八】第六行

同 【一四九】初行

同 【一五一】初行

同 第二行

同 【一五二】第五行

同 本文、第八行

註、第一行

同 【一六一】第三行

同 【一六三】第二行

註、【一七九】第二行

本文、第四、一五行

本文、第六行及第一七行

本文、第八行及第二〇行

同 第一九行

同 第七一〇、一三行

同 第一五行

註、【二〇八】初行

(Dukkha)

Neumann

(Dhamma—

相を了せずして已つて

惱害を爲せしめ

anattaññuta

是くの如きを無罪の存濟と名く

世尊説く………

the purpose………

Indriyesu

Balaññutavā

學の」意

巴、pāyaka………

善行無く

無罪有濟

(……Maññutānam upādāya……)

disagreement

|| frivolous

永斷すべし

如理に思惟して

同

是れを厭と爲し

……得て喜足を生じ、

……喜足すと名く。

前の【一〇六】

(Dukkha)

Neumann

(Dhamma—

相を了せずして已つて

惱害を爲せしめ

anattaññuta

是くの如きを名けて無罪の存濟と爲す

世尊の説く………

the purpose………

Indriyesu gu—

Balaññutavā

學の」意

巴、pāyaka………

妙行無く、

無罪の存濟

(……Maññutānam upādāya……)

disagreement.

|| frivolous

永斷せしむべし

如理に思惟し、

同

是を名けて厭と爲し、

……得て、便ち、喜足を生じ、

……喜足すと爲す

前註【一〇六】

"	上段、【二〇八】初行
"	下段、【二一八】初行
"	同【二一九】第三行
P. 62.	註・【二】第三行
"	同【三】第三行
"	同【五】第七行
P. 63.	本文第九、一二行
P. 64.	註・【一二】第二行
"	同【二三】第三行
P. 65.	同第七行
P. 67.	本文、第七行
"	第一二行
"	第一五行
"	第一七行
P. 68.	本文、第二行
"	註・【五四】
"	同【五八】第二三行
P. 69.	本文、第三行
P. 70.	本文、初行
"	最終行
"	註・【七三】第二行
"	同【七五】第二行

Nirvāṣaṇa	a
Vipaśyanā	
Neumann	
Zusich	
to put in	
離生の喜と樂を生じて	
多くの所作……	
determining	
verstehen	
南傳傳論	
非常・苦・空・非	
善巧作意有りて、非常・苦・空・非我	
非常・苦・空・非我	
非常・苦・空・非我	
非常・苦・空・非我	
Saṃmaṇasya	
Saṃskāra, vedanā—等(Saṃskāra-i)	
vijāna—(vijāna—)dhatu	
「麤ならず」の次、	
是れを供養と謂ふ	
「亦、」の次	
先註【一】の如し	
出だしむる	

Nirvāṣaṇa	
Vipaśyanā	
Neumann	
Zu sich	
to put	
離生の喜と樂と生じて、	
多くの所作……	
determining	
verstehen	
南傳傳論	
大正藏經本には苦不記。但し、宋・元・明諸本には有記	
善巧作意有りて、空・非我「非常・苦」の二をとる	
聖護藏本には、「非常・空・非我」(「苦」とる)	
大正藏經本は「非常・空・非我」(「苦」なし)。但し、宋・元・明諸本には今の通り。	
苦・空・非我(非常とる)	
Saṃmaṇasya	
saṃskāra(saṃskāra)—; vedanā, vijāna……	
「麤ならず」を入れる。	
是れを財供養と謂ふ	
「復た」入る。	
「先註第一卷【一】の如し」に改む。	
出でしむる	



P. 56.

註【一五〇】第一行

"

同【一五二】第一一二行

P. 57.

本文、第一〇行

"

同 第一一行

"

同 第一二行

"

同 同

"

同 第一三行

"

同 第一七行

"

註、第一行

"

同【一六四】初行

"

同 第二行

P. 58.

註、【一六九】初行

P. 59.

上段、【一七九】第二行

"

下段、【一八九】第二行

"

同【一九〇】第二行

P. 60.

上段、【一九八】

"

同【一九九】第二行

"

同【二〇〇】第三行

"

同【二〇一】第一行

"

下段、【二〇二】第四行

"

同【二〇三】第二一三行

"

同 第六行

P. 61.

上段、【二〇四】第二行

○阿利增一

Sang. S. II. 33. の次「参考—巴利增一」と。

趣他勝罪

趣衆餘罪

趣墮煮罪

趣對首罪

趣惡作罪

○「若しは顯了せず、若しは」の次、

三は悟性的果擇

Ign. ane

Unwissen

Bhavadṛṣṭi

Indiscretion

即波提耶

親教に準ずるもの意

「法蘊足論」の次、

childrens—

○(無除)

○(梵=色)

○除 or 殘

Pāli: iccittiya

數々令墮

desaṇṇa

巴利增一、

その代り、「衆集經二・六」入る。

他勝罪に趣するもの、

衆餘罪に趣するもの、

墮煮罪に趣するもの、

對首罪に趣するもの、

惡作罪に趣するもの、

○「已に」を入る。

○それは悟性的思擇

Ignorance

Unwissen.

Bhavadṛṣṭi.

Indiscretion.

即波提耶

……に準ずるもの意、

「第二卷の善士をいふか。因みに、本論第一五卷六法品・一〇六順不退法中の善友の説明も参照」を加ふ。

Childrens.—

○(衆餘)

○(梵=已)

○除 or 殘

Pāli: Paṇṇāsa

數々令墮

desanāya



註、【六〇】初行  
 P. 46.  
 ”  
 ”  
 同 【六二】初行  
 ”  
 同 【六六】初行  
 P. 47.  
 ”  
 ”  
 同 終より第二行  
 ”  
 ”  
 同 最終行  
 ”  
 註、【七三】  
 ”  
 P. 48.  
 ”  
 ”  
 同 【九一】  
 P. 49.  
 ”  
 頭書  
 本文、第五行

Nutrimant.  
 Nutriment.  
 Prajñapti.  
 問ふ、若し段食……  
 行に依つて住するとは  
 是れ行ににして  
 而も、有情は行に依つて  
 viparināma (第一行) aviparinā-  
 ma (第二行)  
 當さに常に言ふべきや、  
 citta viparyāṅka  
 sārva  
 五、緣已生、  
 當さに名の攝に言ふべきや。

云何が、非食、緣と爲りて、食と非食とを生ずるや。  
 答ふ、眼及び色が緣と爲りて、觸・意識・識食、及び、  
 受・想・作意等を生ず。  
 頗し、食と非食とが緣と爲りて、食と非食とを生じ、  
 食を生じ、非食を生ずること有りや。答ふ、生ず。  
 云何が、食と非食とが緣と爲りて、食と非食とを生  
 ずるや。答ふ、眼、及び、色、眼識が緣と爲りて、觸・  
 意識・識食、及び、受、想、作意等を生ず。  
 云何が、食と非食とが、緣と爲りて、食を生ずるや。  
 答ふ、眼、及び、色、眼識が緣と爲りて、觸・意識・識食  
 を生ず。  
 云何が、食と非食とが、緣と爲りて、非食を生ずるや。  
 答ふ、眼、及び、色、眼識が緣と爲りて、受、想、作  
 意等を生ず。  
 Nutrimant.  
 Nutriment.  
 Prajñapti.  
 ……觸食……  
 行によつて住するとは  
 是れ行にして  
 而も、有情は皆な行に依つて、  
 vipariṣama, avipariṣama  
 當さに常と言ふべきや、  
 citta viparyāṅka  
 sārva  
 五、緣已生  
 當さに名の攝と言ふべきや、



P. 42.

註、【三〇】

同 【三六】初行

同 【三七】第二段

本文、終より第四行

同 終より第二行

註、【四一】初行

同 【四四】初行

本文終より第四行及び第二行

註、【四六】初行

同 同

同 【四六】第二行

同 【五一】第二行

同 【五二】初行

P. 45.

本文終より第四行

註、【五四】

註、【五五】第四行

P. 46.

本文、第八行

同 第一六行

同 第一六一—一七行の間

正 憶あり。

白衣の下

勝方段

是れを無記の觸と謂ふ

諸の思、等思の次に

anāh =

vināya

無色界

(Parinibbāno)

pari = 入

nir =

mant

abhisambuddhyti

諸根を長養——

下の如く改む

ment

意思と……の上、

作意等と生ず

下文をハる

正記憶あり、

「梵 Paṇḍita-vāsa」とは「巴」odāta-vāsa」入れる。

勝手段或ひは勝方便に改む。

是を無記の觸食と謂ふ

現前等思を加ふ。

anāh =

vināya

無色界繫。

(Parinibbāno)

pari = 「通く」又は「圓かに」、又は「入」

nir =

ment

abhisambuddhyti

諸根の長養し

「南」Uddāna = table of contents, list, résumé, summary. 即ち、所謂標頭で、總標的韻文の意。(是れも立花教授の暗示に負ふ。)

ment

「觸と食との四句有るが如く」を入る。

作意等を生ず。

頗し、非食、縁と爲りて、非食を生じ、食を生じ、食と非食とを生ずること有りや。答ふ、生ず。

云何が、非食、縁と爲りて、非食を生ずるや。答ふ、眼及び色が縁と爲りて、受・想・作意等を生ず。

云何が、非食、縁と爲りて、食を生ずるや。答ふ、眼及び色が縁と爲りて、觸・意思・識食を生ず。

P. 36. 第一段第九行

P. 37. 本文、終より第八行

註、【三】の初行

同 第四行

同 同

P. 38.

註、【七】

P. 39. 本文第三行(初より)

註、【九】

註、【一〇】初行

同 第二行

同 第三—四行

P. 40. 註、【一五】初行

同 【一九】第五行

同 【二一】第三行

P. 41. 本文終より第六行

註第四行

同 同

同 【二四】第三行

當。集異門足論

互に想ひ慶慰し

*Jhānaprasaṅga*.....

附加せられた所

本論も

力士生處

光明想、當起想

折路伽林

梵 *Uḍḍiyatuka* ?

唱跋諸迦

「高く投出されたる人」

*Bhikkhu-saṅgaha*

to the truth

*Kathāya*

「若しは諸の有情は」の下、「此の諸

の食の」の上

殊らく今の文妙

.....もある故に、暫。

*Māṇḍgulāyāna*

集異門足論(當の字とる)。

互にれひ慶慰し

*Jhānaprasaṅga*.....

附加せられた所

本論等も

巴の例せば *Mahāparinibbāna suttanta* (p. 148) 等には *Uḍḍiyatukā* *Mallāna* 等とあるなら、これを譯して、今、力士生處とせるものなるべし。(この指示、同僚立花俊道教授に負ふ。)

光明想及び當起想

又、右同様の巴利大般涅槃經等には *Uḍḍiyatukā* *Mallāna* *Sāla-vannana* (長阿含遊行經には末維及樹間と記す)とあれば、その双樹林、即ち、巴の *Sāla-vannana* (梵の *Sāla-vannana* が *Sāla-vannana* (巴) or *Sāla-vannana* (梵)とあつて、今は則ち折路伽林と譯したか。(これも、立花教授の指示に負ふ。深く謝す。)

梵 *Uḍḍiyatuka* ?

唱跋諸迦

「高く投出されたる人又はもの」

*Bhikkhu-saṅgaha*

to the truth

*Kathāya*

「彼々の聚に於いて」を入る。

又、勝妙に改む。

.....もある故に、今の文と改む。

*Māṇḍgulāyāna*

P. 17.

三八、三根下第七段

P. 21.

一一、四預流支下の第五段

"

一三、四智の下第四段

"

一六、

"

一七、

P. 22.

二二、

"

二三、四修定行

P. 25.

第四段

"

同

P. 26.

九、五順下分結下

"

一一、

P. 27.

一五、五語路下

P. 29.

一一、

"

一五、六界下

P. 30.

一、七等覺支下第四段

P. 31.

一〇、七識住下

P. 32.

一一、八補特伽羅下第七段

P. 33.

巴利文 No. 2.

"

5.

P. 35.

第二段、註(二)

"

同註(四)

雜二六・一(大正六二四)

二五・大論(參照)

二六、四智(法・未・知・等・知他心)

四處(慧・諦・捨・寂摩)

四蘊(戒・定・慧・解脫)

復有四

5. Catasso samādhī bhāvanā

九、四刺(欲・悲・見・慢)

二七、四辯才法(義・詞・應・三)

7. Paṭcecam bhāgiyāni.....

五不の心過失

15. Codaṭṭena āvuso bhikkhunā

param codeṭṭu-kāmena.

六喜進・行

16. Cha dhātuyo.

七、覺意

10. Satta vipapaṇṇitituyo.

雜三三、一三.....別雜九・二一五

六・大正.....

Nava āgāṭṭapajīvinyā

Nava anuppubba viharā

同上、五位七十五法は眞にまゝまつたものとして等

異部字・輪論參照

雜二六・一(大正六二四)

二五、四・大論(參照)

二六、四智(法・未・知・等・知他心)

四處(慧・諦・捨・寂靜)

四蘊(戒・定・慧・解脫)

復有四行

5. Catasso samādhī bhāvanā.

九、四刺(欲・悲・見・慢)

二七四辯才法(法・義・詞・應)

7. Paṭcecam bhāgiyāni.....

五不忍過失

15. Codaṭṭena āvuso bhikkhunā

param codeṭṭu-kāmena.....

六喜近・行

16. Cha dhātuyo.

七、七覺意

10. Satta viḍāṇapajīvinyā.

雜三三、.....別雜九・二一五・大正.....

Nava āgāṭṭapajīvinyā

Nava anuppubba viharā

同上、五位七十五法の眞にまゝまつたものとして現はれたるは五位は品類足、七十五法は俱舍論と改む(この記憶の誤は木村泰賢博士の指示に負ふ)。

異部宗・輪論參照。



通	頁	本文又は註釋等の行数	誤	正
P. 2.		第九行	ゐぬ所でもないから	ゐぬ譯でもないから
"		第一〇行	二、本譯國譯について	二、本文國譯について
P. 3.		第一行	これをまつこととして	これをまつこととして
"		同	特に深述	特に陳述
"		同	この一文を結ぶと——	この一文を結ぶと——
"		第二三行	skt. Saṃgīti sūtrānta	skt. Saṃgīti sūtrānta
"		第一七行	漢譯長阿含	漢譯長阿含
P. 5.		第三段第一五行	摩訶拘絺維 <u>Mahākauśhila</u> [Kratu]	摩訶拘絺維造 <u>Mahākauśhila</u> <u>Kratu</u>
P. 6.		第二段第一八行	地置	位置
P. 8.		第二段第九段	その大要字義	その大要の字義
P. 9.		第一段第二二行	三論意義	三論玄義
"		第二段第一四行	<u>Matika</u> ( <u>Matika</u> )	<u>Matika</u> ( <u>Matika</u> )
"		同 第一九行	蒐められてゐたかの	蒐められてゐるかの
P. 13.		一九、破戒・破見の下の巴文	27. <u>Silavipatti ca dīṭṭhi-v. ca</u>	27. <u>Silavipatti ca dīṭṭhi-v. ca.</u>
P. 14.		巴利文 No. 12.	<u>ca añ āna-k. ca</u>	<u>ca añhāna-k. ca</u>
P. 14.		巴利文 No. 17.	<u>Muttuso cañ ca.....</u>	<u>Muttuso cañ ca .....</u>
"		No. 24.	<u>Samatha nimittañ ca pugga-</u> <u>ha-nemittañca</u>	<u>samatha nimittañca puggaha-nimittañca.</u>
P. 15.		五・三惡行下第五段	三、三不善業	三、三不善業
"		六、三妙行下巴	4. <u>Tipi suce ritāni</u>	4. <u>Tipi suceṇṇitāni</u>
"		一〇、三界	(色・無・色・滅)	(色・無色・滅)

上卷の序言中に於ける公約をふむ意味と、同上卷公刊の際に、知邊・未知邊からよせられた懇篤な御詞に少しでも酬ひたいとの意味とから、左に、出来るだけ入念な訂正表を調製して、附勒しておくことにした。餘り念を入れすぎたが爲めに、非常に大量なものになつたけれども、大方の諸君子は刊行者及び譯者が完璧・克明を期する用意のほどを寛恕せられることと思ふ。

序ながら、本表製作に因み、譯者は再度木村泰賢博士の懇なる御指示を受け、また同僚立花俊道・教授の篤き暗示・陽示を辱うした。切に感謝の誠意を致したい。それから、表後半の製作及び同本の讀合せ等については、山崎實勇、若槻修道二君を純ら煩はす所であつたが、同じく厚く御禮を白うしたい。尙、印刷關係の諸君が本譯終始の印刷に關してなされた異常なる努力に對しても、この機會に心からの感謝の意を表しておきたいと思ふ。

昭和四年十一月八日

渡邊 棊雄

阿毘達磨集異門足論上卷訂正表



## 索

## 引

(頁数は通頁を表す)

## —ア—

阿視羅筏底 (Aciravatī)	225
阿毘達磨 (Abhidharma)	16
愛結	215
愛盡	34
惡慧	154
惡作 (Kaukṛtya)	31
惡作罪	171
惡友	110
安住	257

## —イ—

已解脫	209
已勝解	34
悲結	215
異解脫	209
異極解脫	209
異熟 (Vipāka)	60
異熟惡	89
興赤 (Vilohita)	197
一切行	75
一切世間不可樂想	129
一切の識無邊處	217
一切の無所有處	217
一種身	159, 219
一種想	159, 218
引義利語	64
因緣 (Nidāna)	99
有 (Bhava)	75
有爲緣の定	90
有爲解脫	77
有行般涅槃	90
有色 (Rūpin)	160, 217
有情 (Sattva)	160, 217
有情居 (Sattvāvāsa)	218
有身見 (Satkāyadrṣṭi)	51, 169
有身滅	104
有對想	159, 166

## —ウ—

有貪隨眠	108
有覆無記	5
有漏	218
有漏行は苦	145
有漏善	5
烏沙斯星色	211
烏莫迦花 (Umapuṣka)	210
憂悔	55

## —エ—

依得	26
慧	155
慧解脫 (Prajñā-vimukti)	77
慧財	149
慧力	88
永斷	41, 48
易滿 (Subharata)	46
易養 (Supoṣata)	46
遠 (Dura)	2
緣已生法	47
緣起	47
厭逆俱行	76
厭逆食想	76
圓滿	82
鹽母那 (Yamunā)	225

## —オ—

黃 (Pita)	211
黃光	211
黃現	211
黃顯	211
黃定 (Pita saṃādhi)	240
黃遍處定	239
應	33
應供 (Bhujisaṃ)	122
應誦 (Geyā)	99
憶念毘奈耶 (Smṛti-vinaya)	179

## —カ—

可愛	22
----	----

可意	22
可喜	22
可樂	22
火界 (Tejodhātu)	114
火行	135
火定	230
火遍處定	228
加行	41
伽他 (Gāthā)	149, 155
家塵	24
果 (Phala)	59
過去 (Atīta)	2
過慢 (Attimāna)	215
我 (Ātman)	52
我所 (Ātmaniya)	52
我慢 (Asmimāna)	215
戒 (Sīla)	52
戒圓滿 (Sīla-samp.)	61
戒蘊	139
戒損減	59
戒禁取	52, 169
戒隨念	131
契經	99
骸骨	197
學の無間道	75
學無上	134
覺	154
羯尼迦花 (Karpikāra-puṣka)	211
簡擇	135
眼所識	22
眼觸身	107
眼內處	106

## —キ—

希天施	183
希法	99
記說 (Vyākaraṇa)	155
記別 (Vyākaraṇa)	19
鬼趣 (Preta-gati)	27
喜足	46

喜等覺支	143	下品	27	五成熟解脫處	55, 75
毀	195	外 (Bahya)	2	五淨居天	55, 94
譏	195	外道衆	158	五心裁	1, 32
愧	154	解僑陳那	82, 123	五心縛	1, 39
疑 (Vicikitsā)	52	解脫	209	五想	129
疑蓋	31	解脫處	85	五損減	55
疑結	215	懈怠	153	五損減	58
疑睡眠	169	懈怠事	189	五能忍功德	55, 57
礙究竟天	97	形 (Samsthāna)	213	五不還	55, 88
究竟	34	輕安等覺支	143	五不忍過失	55
教誡所	32	結 (Samyojana)	47	五妙欲	1, 22
經行 (Caṃkramāṇī)	24	結跏趺坐	258	五無堪能處	55, 66
行	254	見圓滿 (Dṛṣṭi-samp.)	63	五力	55, 87
行蘊	2	見結	215	牛主 (Gavām-pati)	82
行捨	114	見損減	60	光音天	92, 159
行取蘊	22	見取	169, 215	光明 (Nirbhāsa)	214
行無上	135	見隨眠	169	劫初起位	163
樂變化天	193	見無上	132	菴伽 (Gaṅgā)	87, 225
近 (Antika)	2	現前	6	廣果天	92
近事 (Upāsika)	124	現前而想	75	黑生類	137
近事女 (Upāsika)	124	現前毘奈耶	179	骨鎖	197
勤策 (Śrāmapera)	124	現在 (Pratyutpanna)	2	心の昧略の性	31
勤策女 (Śrāmaperikā)	124	賢勝 (Bhadrika)	82	金毘羅 (Kimbila)	39
		慳結	216	禁 (Vrata)	52
		顯 (Varpa)	213	根律儀	141
		顯形色	24	昏沈 (Styāna)	31
		顯色身	160	昏沈睡眠蓋	31
—ク—					
九有情居	214, 216	舉相	158	薩迦耶見 (Satkāya-dṛṣṭi)	215
九結	214	五蘊 (Pañca-skandhā)	2	網 (Sūkṣma)	2
句身 (Padakāya)	82	五圓滿	55, 60	細軟語	65
苦	195	五蓋	1, 30	栽孽	30
苦法智忍	145	五解脫處	55, 77	栽事	34
苦無我想	76	五見	142	財富圓滿 (Bhaga samp.)	60
求彼自性毘奈耶	179	五慳	1, 23	財富損減	58
求報施	183	五語路	55, 62	作者 (Kartṛ)	163
具足	159	五根	55, 87	三十三天	163
愚鈍	27	五識身相應	201	三十三天衆	194
空界 (Ākāśadhātu)	114	五取蘊	1, 21	三漏	86
空定 (Ākāśa-Samādhi)	249	五趣	1, 26	散亂 (Vikṣepa)	153
空無邊處定	251	五出離界	55, 97	慚	154
空遍處定	248	五順上分結	1, 52		
空無邊處解脫定	202	五順下分結	1, 51		
空無邊處天	160	五勝支	55, 67	尸羅 (Śīla)	193
—ケ—					
化者 (Nirmāta)	163				
下賤の本性	133				

止靜法	179	七慢類	215	重性	31
止相	156, 158	七妙法	142, 154	順喜處	111
四識身	166	七無過失事	142, 169	順上分結	53
四識身相應	200	七力	142	順下分結	51
四大王衆天	132, 193	失念	153	順受處	112
四大王衆天衆	194	嫉結	216	初靜慮	100
四大種	3	實語	64	所緣 (Ālambana)	102, 114
四大種所造	3	出慧	74, 170	所學處	32
四念住	86	出離界	100	處所 (Sthāna)	114
死生智證通	123	沙門衆	194	處得	26
死想	77	舍利子 (Śāriputra)	39	諸行は無常	144
資具	25	捨 (Upekṣā)	114	諸の地獄	26
熾然	41	捨財	149	少欲	46
自在者	163	捨心定	116	少欲論	47
自在身	209	捨隨念	131	正學 (Śikṣamūpā)	124
自知	153	捨相	158	正業 (Samyakkarmānta)	182
自脫 (Udāna)	99	捨等覺支	144	正語 (Samyagvāk)	182
時語	62	邪決定	34	正勤 (Samyagvyāyama)	182
事得	26	邪見 (Mithyādrṣṭi)	169, 215	正見 (Samyagdrṣṭi)	181
慈語業	121	邪見行	132	正思惟 (Samyaksamkalpa)	181
慈心定	103, 114	邪慢 (Mithyāmāna)	215		181
慈心業	121	主藏臣寶	132	正定 (Samyaksamādhi)	182
慈慈語	66	主兵臣寶	132	正盡苦慧	75, 170
色蘊 (Rūpa-Skandha)	2	取結 (Parāmarśa)	215	正知	67
色究竟天	93, 96	取自言持毘奈耶	179	正等覺	33
色讚慳	24	取多人語毘奈耶	179	正念 (Samyksampti)	182
色取蘊	21	種々身	2, 160	正念支 (Samyksampty-	
色食 (Rūparāga)	53	種々想	2, 160	apga)	176
色食順上分結	53	宿住智證通	128	正法所	32
識	254	受	254	正命 (Samyagājiva)	182
識蘊 (Viññāna-skandha)	2	受蘊 (Vedanā-skandha)	2	生死業	93
識界 (Viññāna-dhātu)	114	受取蘊	21	生者 (Sraṣṭr)	163
識取蘊	22	珠寶	132	生熟二藏	71
識住 (Viññāna-sthiti)	161	誦念	26	生般涅槃	89
識定 (Viññāna-samādhi)	252	習先施	183	勝 (Pranīta)	2
識遍處定	251	修所斷	53	勝解 (Adhimukti)	32, 257
識無邊處	205	集異法門	258	勝解力	197
識無邊處定	160, 254	衆會	156	勝支 (Pradhāna apga)	69
七財	142	衆同分	26	勝處	213
七止覺支	142	衆餘罪	171	聖慧	74, 170
七識住	142	十色處	3	聖道 (Āryamārga)	145
七定具	142	十遍處	221	燒十載木	229
七隨眠	142, 168	十無學法	221, 254	稱	195
七非妙法	142, 153	住 (Sthiti)	257	精進	154
七補特伽羅	142	住處堅	23	精進事	193



精進等覺支	143	水界 (Abdhātu)	114	善哉善哉 (Sadhu kho	
精進力	88, 150	水定	226	sādhū kho	144
證阿羅漢果	182	水遍處定	225	染著	22
證阿羅漢果向	182	睡眠 (Middha)	31		
證一來果	182	隨至施	182	—リ—	
證一來果向	182	隨順心	34	素出經 (Sūtra)	26
證不還果	182	隨順勝解	34	龜 (Andārika)	2
證不還果向	182	隨順信	34	龜獮語	65
證預流果	182	隨順欲	34	相續 (Samtati)	4
證預流果向	182	隨相識	117	想	254
攝止	257	隨法行	145	想蘊 (Samjñā-skandha)	2
上義	184	數取	181	想取蘊	22
上下	225			想受滅	109
上勝品	93	—セ—		付	31
上品	26	世間 (loka)	129, 163	僧隨念	130
上流般涅槃	91	世間有出沒慧	170	造作 (Samkalpa)	208
定 (Samādhi)	155	世第一法	145	象寶	132
定等覺支	143	是時 (Kāla)	156	增一法門	258
定力	88, 151	制約	255	增語 (Adhivacana)	175
淨解脫	196	青 (Nila)	210	增上 (Adhipati)	106, 114
淨戒	169	青瘀	197	增上慢 (Adhimāna)	215
淨信 (Śraddhā)	32, 68	青現 (Nila-nidarśanāni)	210	損滅	46
心輕安	143	青顯 (Nila-varṇāni)	210	—タ—	
心解脫 (Cittavimukti)	77	青光 (Nila-nirbhāsāni)	210	他化自在天	198
心所	21	青嚴具相	193	他勝罪	171
身 (Kāya)	6	青定 (Nila-samādhi)	237	他心智證通	127
身三惡行	255	青遍處定	236	多聞	149
身行識	23	星宿宮殿	229	墮煮罪	171
信 (Śraddhā)	154	赤 (Lobita)	211	諦 (Satya)	145
信勝解	146	赤現	211	大飲光 (Mahā Kāśyapa)	39
信力	88	赤顯	211	大迦多衍那 (Mahākātyā-	
神境智證通	127	赤光	243	yana)	39
神珠光明	220	赤定	242	大劫戾那 (Mahā-kapphina)	
深染青衣	210	赤遍處定	194		39
親財	139	剎帝利衆	225	大探菽氏	39
親屬圓滿 (Jñāti-samp.)	50	設臘婆 (Śarabdhū)	23	大士	150
親屬損減	58	舌所識	137	大師 (Sattā)	70, 82
嘆志 (Vyāpāda)	51	旃荼羅の家	159, 155	大執藏 (Mahā-upali?)	39
嘆志蓋	30	善士 (Satpurṣa)	74, 170	大准陀 (Mahā-cunda)	39
嘆志語	66	善通達慧	50	大水輪相	226
嘆隨眠	168	善軀	47	大善見 (Mahā-sudarśana)	39
瞋志相應	201	染 (Saṃkleśa)	31	大風輪相	233
盡智	254	染汚	31	大名 (Mahānāma)	39, 82
		染汚心	93, 96	大路 (Mahāpandhaka)	39
		善現天			

第二の七妙法	157			槃豆時縛迦花	211
第二の七非妙法	155	—十—			
啄噉 (Vikhādita)	187	内 (Adhyātmika)	2	—ヒ—	
擇法等覺支	143	—二—		非時 (Akāla)	156
擇滅	104			非時語	62
—チ—		二種の根	69	非情數 (Asattvākhyā)	4
知義	157	二分	31	非善士 (Asatpuruṣa)	154, 157
知時	158	二路	31	非想非々想處	94, 206
知衆	158	耳所識	22	非不成就	209
知補特伽羅有勝有劣	158	日輪火相	229	非梵行	67
知法	157	女寶	132	非妙 (Asatpuruṣa)	157
知量	158	如草覆地毘奈那 (Tṛpas-		非妙法 (Asatpuruṣa-	
地界 (Pṛthividhatu)	114	tāraka)	179	dharma)	157
地獄趣 (Nirayaḡati)	26	如來 (Tathāḡata)	38, 68	悲心定	103
地定 (Pṛthivi)	223	人趣 (Manuṣya-ḡati)	27	彼所作慧	75, 170
地遍處定	222	忍 (Kṣānti)	52	彼同分 (Tatsabhāya)	106
中般涅槃	89	—ネ—		卑慢 (Ūnamāna)	215
長者衆	194	涅槃	34, 184	譬喻 (Avadāna)	99
蔓薈 (Tandri)	31	念	155	苾芻 (Bhikṣu)	124
—テ—		念等覺支	142	苾芻尼 (Bhikṣuṇi)	124
天耳智證通	127	念無上	135	毘奈耶 (Vinaya)	26
天趣 (Deva-ḡati)	28	念力	88, 155	鼻所識	22
天隨念	132	—ノ—		平等戒	126
纏 (Pariṇavasthāna)	48	膜闍 (Vipūya)	197	平等成熟	71
—ト—		—ハ—		病損滅	55
杜多功德 (Dhūtaguṇa)	46	隄水	225	白 (Avadāta)	211
觀史多天	193	破壞	197	白現	211
等持 (Samādhi)	257	婆羅痾斯 (Bārāṇaseya)	210	白顯	211
等熱腹	71	婆羅門衆	194	白光	211
等住 (Samsthiti)	257	馬勝 (Aśvajit)	82	白定 (Avadāta-Samādhi)	246
等隨觀見 (Samanuṇaśyati)	52	馬寶	132	白遍處定	245
等無間 (Samantra)	113	八解脫	151, 196	—フ—	
掉舉 (Auddhatya)	31, 53	八懈怠事	181, 186	不憂悔	57
掉舉惡作蓋	31	八種の衆	181, 194	不繫	4
掉舉順上分結	53	八種の施	181	不散	257
當解脫	209	八勝處	181, 210	不實語	64
當勝解	34	八精進事	189	不寂	31
道類智	145	八世法	181, 194	不調柔性	31
得	194	八道支	181	不定	153
貪欲 (Kāmacchanda)	30	八福生	181, 193	不靜	31
貪欲蓋	30	八補特伽羅	181, 182	不信	153
		莫瞿 (Mahi)	226	不知義	156
				不知時	156
				不知衆	156

不知補特伽羅有勝有劣	157	本生 (jātaka)	99	無色貪 (Arūpa-rāga)	53
不知法	155	凡位中	145	無色貪順上分結	53
不知量	151	梵衆天	92, 219	無執	122
不知合	209	梵衆天之劫初起位	159	無所有處天	160
不癡毘奈耶 (Amūḍhavinaya)	179	梵天衆	194	無生智	254
不自知	156	—マ—			75
不得	194	魔天衆	194	無常苦想	75
不暴惡	57	慢 (Māna)	54, 215	無尋唯伺	8
不與自在	109	慢過慢 (Mānatimāna)	215	無相心定	117
不樂	116	慢結	215	無想有情天	216, 220
不亂	257	慢順上分結	54	無二 (Advayaṃ)	221, 225
怖畏施	162	慢隨眠	168	無熱天	92, 94
風界 (Vāyudhātu)	114	—ミ—			92, 94
風定 (Vāyu-samādhi)	233	未斷未遍知	82	無表語業	255
風遍處定	232	未來 (Anāgata)	2	無病圓滿 (Ārogya-samp.)	61
諷頌 (Gāthā)	99	妙	155	無覆無記	23
福生	194	妙臂 (Subāhu)	82	無邊	221
佛	31	妙法 (Saddharma)	155	無邊空	202
佛隨念	130	妙藥光明	229	無邊・無際	225
文身	82	—ム—			54
—ヘ—		無爲緣定	91	無明順上分結	54
吠濕摩風 (Viśva)	232	無爲解脫	77	無明結	215
吠嵐婆風 (Vairambhaka)	232	無我 (Anātman)	76	無明隨眠	168
別解脫	171	無學の正解脫	257	無滅 (Aniruddha)	39
別解脫戒經	37	無學の正見	254	無漏善	5
別解脫契經	171	無學の正語	255	霧氣 (Vāṣpa)	82
別首羅	171	無學の正業	256	—メ—	
辯才	158	無學の正勤	255	名身 (Nāmakāya)	82
邊執見 (Antagrāha dr̥ṣṭi)	215	無學の正思惟	256	明 (Vidyā)	129
遍處 (Kṛstnā-āyatana)	225	無學の正定	255	—モ—	
遍淨天	92	無學の正智	256	聞財	149
—ホ—		無學の正念	257	聞無上	133
補特伽羅	127	無學の正命	256	—ヤ—	
菩提	184	無愧	153	耶舍 (Yaśas)	82
方廣 (Vaipulya)	99	無行道	91	夜摩天	193
法慳	25	無行般涅槃	91	—ユ—	
法隨念	130	無垢 (Vimāla)	82	瑜伽師 (Yogin)	212
傍生趣 (Tiryagyonigati)	27	無見有對	4	—エ—	
傍布 (Tiryag)	221, 225	無間	6	譽	195
報恩施	183	無際	221	欲貪 (Kāmacchanda)	51, 116
暴惡	55	無慚	153		
本事 (Itivṛttaka)	99	無色 (Arūpin)	165		



欲貪隨眠	168	離滅	34	六思身	105, 103
欲樂 (Nanda)	39	離欲	41, 192	六識身	17
要名施	183	律儀 (Samvara)	255	六捨近行	111
		輪寶	132	六出離界	111
				六受身	6, 105
樂	195			六順退法	105, 109
樂根	81	劣 (Hina)	2	六順不退法	105
樂根相應	98			六順明分想	111, 129
				六生類	137
				六識身	105
利無上	133	漏盡智證通	123	六靜根法	111
利養	25	六愛身	105, 109	六隨念	111, 120
利養墜	25	六憂近行	111	六觸身	105, 107
理教	26	六可喜法	111, 121	六想身	10, 107
理と善法	36	六界	111	六通	111
離愛	41	六觀待	111, 136	六內處	105
離渴	41	六外處	105	六無上法	111
離親	41	六行身	14	六和敬法	127
離貪	41	六恒住	111	論義 (Upadeśa)	127
		六喜近行	111		

— 毗曇部二索引終 —



讀勸第二十二

佛の舍利弗の所説讀勸

爾<sup>四八</sup>の時に、世尊は舍利子の苾芻衆の爲めに、法を説いて已に訖れるを知り、臥より而も起つに、身心調暢たり。衣服を整理し、結跏趺坐して、舍利子を讃すらく、善哉、善哉、汝は今善く能く此の臺觀に於いて、苾芻衆と、如來所説の増一法門を和合結集せり。汝は今より諸の大衆の爲めに、數、復た是くの如きの法門を宣説すべし。此の法は能く諸の天人等をして、長夜、義利、安樂を證會せしむと。

世尊は、復た、苾芻衆に告げて言はく、汝等は皆な應さに、舍利子が説ける集異法門を受持讀誦すべし。是くの如きの法門は、能く、大善と、大義と、大法と、清白の梵行とを引き、復た、通慧と、菩提と、涅槃とを證せしむ。淨信にして出家せる諸の善男子は、是くの如きの法門を受持讀誦せば、久からずして、定むで、當さに所辨の事を辨すべしと。

時に、薄伽梵は是の語を説き已りて、諸の苾芻衆は歡喜踊躍して、佛足を頂禮して、信受奉行せり。

阿毘達磨集異門足論(終)

は、謂はく、能く境に於いて印可 *avadhāna* すと。而も亦、俱舍二五に曰はく、「無學の正」解脱の體に二有り。謂はく、有爲と無爲となり。有爲解脱とは無學の勝解を謂ひ、無爲解脱とは一切の惑の滅を謂ふ。有爲解脱を無學支と名く。支の名を立つることは有爲に依るを以つての故にと。尙、卷三、明と解脱の下參照。

【四〇】無學の正智、*Saṃgī*—*S. IX. Asekhaṃ samāhāraṃ* (*Rhys D.*—the right [or perfect] insight; Neumann—*Untrüglich rechte Weisheit*)。衆集經一九・無學の正智。大集法門經一〇・不壞の正智。

【四一】盡智と無生智、卷三、三法品の末尾のその解參照。尙、俱舍二五には、この二智を解脱の智と記す。

【四二】爾の時以下、舍利弗の結語 *gacchāmi*—*S.* は大體今と同文、即ち、その各品の書出し同様の結語に作り、衆集經は、やゝ、簡単に同準の文を記し、大集法門經に同す。

【四三】對しては、眼前にての意。

【四四】爾の時、以下の文、*Saṃgī*—*S.* 及び、衆集經は頗る簡單で、大集法門經は大體今の文に準ず。

【四五】結跏趺坐、*Nyāsitaṃ paryāpāṇaṃ ābhūya*, (*Paliṇṇaya*, *ābhūti*—[見三]=to bend [the legs] in crosswise.)

【四六】善哉、善哉、*Saṃgī*—*S. Sādhū sādhu, sādhu kīḥ*。

【四七】増一法門、大集法門經—大集法門。衆集經一缺。*Saṃgī*—*S.* は *Saṃgīti-paryāya* (*Rhys D.*—The scheme of elating together; Neumann—Die Gedankensreihe der Uebereinkunft.)—即ち、次の集異法門の原語を省く。(*S. Saṃgī*—*S.* の *Saṃgīti-paryāya* 字に關し、南方佛教の大註釋家覺音三藏は、*Saṃgīti-paryāya* とは *Saṃgīti-kāraṇa* 即ち衆會の務として、應さに讀記すべき教法」と註してゐる。參照すべし。)

【四八】集異法門、大集法門經は、再び大集法門に作る。衆集經、*Saṃgī*—*S.* は共に恰當の個所に相應字を缺く。



苦を思惟し、集に於いて集を思惟し、滅に於いて滅を思惟し、道

に於いて道を思惟する無學の作意に相應する所有の心の住、

等住、近住、安住、不散、不亂、攝止、等持、心一境の性、

是れを無學の正定と名く。

(九)無學の正解脫

云何が 無學の正解脫なる。 答ふ、諸の聖弟子の苦に於い

て苦を思惟し、集に於いて集を思惟し、滅に於いて滅を思惟し、

道に於いて道を思惟する無學の作意に相應する所有の心の勝

解、已勝解、當勝解、是れを無學の正解脫と名く。

云何が 無學の正智なる。 答ふ、盡智と無生智と、是れを

無學の正智と名く。

舍利弗の結語

爾の時に、舍利子は苾芻衆に告げて言はく、具壽よ、當さに

知るべし、佛は一法乃至十法に於いて、現等覺し已りて、諸の

弟子の爲めに、宣說開示せり。我れは大衆と皆な共に和合して、

親しく世尊に對して、已に結集し竟はれり。諸の苾芻衆は皆

な應さに受持し、他の爲めに演說し、廣く流布せしめ、佛滅度

の後、乖違有ること勿からしむべく、當さに、梵行に隨順するの

法律をして、久住して、無量の有情を利樂せしめ、世間の諸の

天・人の衆を哀愍して、殊勝の義利、安樂を獲せしむべしと。

【三〇】身三惡行とは、十不善業道中の身關係の三、即ち、殺生、偷盜、邪淫。

【三一】無表身業、Avijñapti Kāya-kamma (梵)、右註無表業の身表業に基けるもの、而して、今はその無學の善の身表業に基くものなる故、準上に善の身無表業。

【三二】無學の正命、Asekho sammā-jīvo (Rhyas D. — The right [or perfect] livelihood; Neumann — Untrüglieh rechtes Wandelu.) 衆集經 — 無學の正命。

大集法門經 — 不壞の正命。

【三三】邪命、Mithya-jīva (Miechā-jīva) = wrong livelihood. それに趣く身語惡行とは上に除外せられたる身三、語四の七惡行。

【三四】無學の正勤、Sang. — S. Asekho sammā-vīrya-mo (Rhyas D. — The right [or perfect] effort; Neumann — Untrüglieh rechtes Mühen.) 衆集經 —

七、無學の正方便。大集法門經 — 六・不壞の正精進。

【三五】無學の正念、Sang. — S. Asekha sammā-sati (Rhyas D. — The right [or perfect] mindfulness; Neumann — Untrüglieh rechtes Einsicht.) 衆集經 —

六、無學の正念。大集法門經 — 不壞の正忍。

【三六】無學の正定、Sang. — S. Asekha sammā-samādhi (Rhyas D. — The right [or perfect] concentration; Neumann — Untrüglieh rechtes Einigung.) 衆

集經 — 無學の正定。大集法門經 — 不壞の正定。

【三七】住、Sthiti (skt.)

【三八】等住、Sagasthiti (")

【三九】近住、Upasthiti (")

【四〇】等持、Samādhi.

【四一】無學の正解脫、Sang. — S. X. Asekha sammā-vimutti (Rhyas D. — The right [or perfect] emancipation as held by adepts; Neumann — Untrüglieh rechtes Erlösung.) 衆集經 — 一〇・無學の正解脫。大集

法門經 — 九・不壞の正解脫。

【四二】勝解、Adhimutti (Addhimutti) 數々已註の所なれど、尙、因みに記せば、俱舍四に曰はく、勝解

造、棄捨、防護、不行、不犯、船筏、橋梁、隄塘、牆塹、制約する所に於ける不踰、不踰の性、不越、不越の性、無表身業、是れを無學の正業と名く。

(五)無學の正命

云何が 無學の正命なる。 答ふ、諸の聖弟子の苦に於いて苦を思惟し、集に於いて集を思惟し、滅に於いて滅を思惟し、道に於いて道を思惟する無學の作意に相應する簡擇力の故に、邪命に趣く身語惡行に於いて得る所の無學の遠離、勝遠離、近遠離、極遠離、寂靜、律儀、無作、無造、棄捨、防護、不行、不犯、船筏、橋梁、隄塘、牆塹、制約する所に於ける不踰、不踰の性、不越、不越の性、無表身語業、是れを無學の正命と名く。

(六)無學の正勤

云何が 無學の正勤なる。 答ふ、諸の聖弟子の苦に於いて苦を思惟し、集に於いて集を思惟し、滅に於いて滅を思惟し、道に於いて道を思惟する無學の作意に相應する所有の勤、精進、勇健、勢猛、熾盛、難制、勵意、不息、是れを無學の正勤と名く。

(七)無學の正念

云何が 無學の正念なる。 答ふ、諸の聖弟子の苦に於いて苦を思惟し、集に於いて集を思惟し、滅に於いて滅を思惟し、道に於いて道を思惟する無學の作意に相應する所有の念、隨念、專念、憶念、不忘、不遺、不漏、不失法の性、心明記の性、是れを無學の正念と名く。

(八)無學の正定

云何が 無學の正定なる。 答ふ、諸の聖弟子の苦に於いて

す」。蓋し、その初め、寧ろ純道德的立場から、その理説體系中に誘導せられた佛教業論は、これを單なる要請 Postulat に留めず、宗教的信仰の必然に誘う所、科學的の正確さと、精緻とを要求することとなり、それは延ひて、然らば何故に、善惡行より善惡の果報を正確且つ、應報的に招致しうるか、この問題を引き起すことになり、そこに元來の「善惡行より善惡果」といふ道德的因果律の内奥に潜められたる主意識 Voluntarism を表に出し、且つ徹底させ、而もそれらの間に、右所謂科學的精神が多分に働いて、それは、一の言語行爲の剎那に、我々は一種、道德的操理的の意義ありて、殊に、創造力を有する形而上學的原理を招得する。故に、我々はその原理によつて、一の言語行爲は「剎那にして亡びて、その道德的意義は没失することなく、乃至、それをくまらずとも出來ないで、相應當然の報酬との懲罰的との果報を創造招得する所であると説明した。而して、この所謂道德的操理的意義あり、創造力ある形而上學的原理こそ、所謂無表業で (Avijāpi Karma)、已に前註の如く、謂ふ所の「一の言語行爲は外面に現はれて可知的であるから、これを表業 Vijāpi karma と命名すべきに對し、今は、形而上學原理の一種とすべきものとして、全然可知的乃至可覺的ではないから、稱して無表業とすべしとする所である。今の無表語業とは、かくて、そうした言語、行爲の二の條件によるべき無表業中の、言語に基くもので、無論、その中にも、今のは無學の正語業に基けるそれとして、善のそれとや言を要せぬ。而も、かかる無表業の應用的のものとして別解脱律儀その他の註解に於いて、已に幾度か解説して來たから、因みによつて、照合、參照を望む。

【七】無學の正業。 Sage—S. Asakko sammā-kammanto. (Bhys D.—The right [or: pious] action; Yumnun—Untüchtig rechte Handeln.) 衆經—無學の正業。大集法門經—不壞の正業。



(二)無學の正思惟

る所の無學の慧、是れを無學の正見と名く。

云何が<sup>三</sup>無學の正思惟なる。答ふ、諸の聖弟子の苦に於いて苦を思惟し、集に於いて集を思惟し、滅に於いて滅を思惟し、道に於いて道を思惟する無學の作意に相應する所有の思惟、等思惟、近思惟、尋求、等尋求、近尋求、推覓、等推覓、近推覓の、心をして、法に於いて、龜動にして轉ぜしむる、是れを無學の正思惟と名く。

(三)無學の正語

云何が<sup>三</sup>無學の正語なる。答ふ、諸の聖弟子の苦に於いて苦を思惟し、集に於いて集を思惟し、滅に於いて滅を思惟し、道に於いて道を思惟する無學の作意に相應する簡擇力の故に、<sup>三三</sup>邪命に趣く<sup>二四</sup>語の四惡行を徐いて、餘の語惡行に於いて、得る所の無學の遠離、勝遠離、近遠離、極遠離、寂靜、律儀、無作、無造、棄捨、防護、不行、不犯、船筏、橋樑、隄塘、牆壁、<sup>三七</sup>制約する所に於ける不踰、不踰の性、不越、不越の性、無表語業、是れを無學の正語と名く。

(四)無學の正業

云何が<sup>二九</sup>無學の正業なる。答ふ、諸の聖弟子の苦に於いて苦を思惟し、集に於いて集を思惟し、滅に於いて滅を思惟し、道に於いて道を思惟する無學の作意に相應する簡擇力の故に、<sup>三〇</sup>邪命に趣く<sup>三〇</sup>身三惡行を除いて、餘の身惡行に於いて、得る所の無學の遠離、勝遠離、近遠離、極遠離、寂靜、律儀、無作、無

正見。大集法門經—不壞の正見。ノイマン氏の「錯誤なき正しき認識」は無學の原字を何か思ひ間違しか。又、大集法門經の無學を不壞とするは無學の原字を何とか別途に解釋せるものか。(A. X. 112. も Saṅg—S. に準ず—以下また同じ)。

【一〇】盡智と無生智とは卷三、參照。而してこの二は今の一〇、無學の正智に配するが故に、茲には省く。

【一一】無學の正思惟。Saṅg—S. Asaṅko Samma-saṅkappo. (Rihys D.—The right or perfect intentions; Neumann—Untrüglich rechte Gesinnung.) 衆集經—無學の正思。大集法門經—不壞の正思惟。

【一二】無學の正語。Saṅg—S. Asaṅkha Samma-vācā (Rihys D.—The right or perfect speech; Neumann—Untrüglich rechte Rede.) 衆集經—無學の正語。大集法門經—不壞の正語。

【一三】邪命に趣く語の四惡行は、下の正命に配する故、今は除く。

【一四】語の四惡行とは、十不善業中の妄語、龜語、兩舌、綺語。

【一五】律儀。Saṅgavaṇa = restraint.

【一六】船筏及び橋樑は、諸の語惡行を流に譬へて、今の無學の正語とその流より超越せる船筏等に比せるもの。

【一七】制約云々、その上は直接、諸の語惡行に於ける遠離乃至、不犯等。而して、是れ以下は語惡行に對する諸の制約、即ち、戒律の如き等に於ける不犯、遠離即ち、不踰等。

【一八】無表語業。Avijjapīti vākkamma (梵)——已に註せし如く、無表 Avijjapīti (Avijñapti) の字は南傳論部でも、最後の論事 Kathavatthū 等に見出されるが、概念としては北傳論部に於いて(文學史的には)、初めて貢獻されたる所にして、殊にこの論の如きは、その最も、先驅たるものとして、最も留意に價



習し、數、修し、數、多く所作するなり。「而して」、既に、加行が引生ずる所の道に於いて、數、習し、數、修し、數、多く所作すれば、心便ち安住し、等住し、近住し、相續して、一趣にして一境に繫念し、此の境は遍く皆な是れ識なりと思惟す。心の安住し、等住し、近住し、相續して、一趣にして一境に繫念し、此の境は遍く、皆な是れ識なりと思惟して、二無く、轉無きに由りて、此れより乃ち識遍處定に入るなり。

「上・下」と言ふは、謂はく、上下の方なり。

「傍布」と言ふは、謂はく、東南等なり。

「無二」と言ふは、謂はく、間雜無きなり。

「無邊、無際」とは、謂はく、邊際の測り難きなり。

「是れ第十」とは、謂はく、諸の定中の漸次、順次、相續の次第の數を第十と爲すなり。

「遍處」と言ふは、謂はく、此の識無邊處、定中の所有の善の受・想・行・識を皆な「遍處」と名く。

## 二、十無學法

十無學法とは、云何が十となす。答ふ、一には無學の正見、

二には無學の正思惟、三には無學の正語、四には無學の正業、

五には無學の正命、六には無學の正勤、七には無學の正念、八

には無學の正定、九には無學の正解脫、十には無學の正智なり。

云何が「無學の正見なる。答ふ、盡智と無生智とに據せざ

【二】 識無邊處定とは、前の空遍處定の同段の場合に準じて知れ。

【三】 受・想・行・識とは、已註に準じて、識遍處定は自性が無色の故に、今色蘊は除く所である。

【八】 十無學法、Sāgga—S. Dasa asekhāhammā; (Skt. Daśa asāṅka-dharmā) (Bhṛṣṭa D.—Ten qualities belonging to the adept; Neumann—Zehn untrügliche [?] Dinge) 衆集經—十無學法。大集法門經—十具足行。さうまでもなく無學 Asāṅka (asekha) とは、已に所作已辦して、此の上修行の必用はなくなつた阿羅漢のこと、所謂四双八輩の聖者の中に於る阿羅漢向以下、預流向に及ぶまでの七聖を以つて學 Saikṣa (Sikha) とするに對するの語である。

而して、今は是くの如き無學阿羅漢の位に至り、始めて到達し、完成し、具足すべき十個の勝徳を數え、以つて、一國にしたもの即ち、十無學法で、佛教の修行哲學中、八聖道(八法品參照)の概して甚だ高調せらるゝを反映するものとして興味ある徳目の一とするに足る。(A. X. 112—Dasa asekhāya dharmā) 參考、——俱舍二五に曰はく、經に(中阿含・一八九、聖道經—M. 117. Mahācattāri saka sūta. 中・一七九、五支物主經—M. 78. Samanāyika Sutta) に

曰はく、學位(預流向—阿羅漢向)は八支(八聖道支)を成就し、無學位の中には具さに十を成就する。……論じて曰はく、有學の位の中には尙、餘縛の未だ解脫せざるもの有るが故に、解脫支無し。少縛のみ離るゝを脫者と名くべきに非ず。【又】解脫の體無きに、解脫の智を立つ可きに非ず……。

【九】 無學の正見。Sāgga—S. Asāṅka sammā-ditṭhi (Bhṛṣṭa D.—The right [or perfect] view; Neumann—untrügliche rechte Erkenntnis.) 衆集經—無學の

識遍處定修  
入の加行

りて、能く識定に入る。而も未だ識遍處定に入ること能はず。

問ふ、若し此の未だ能く識遍處定に入らざる者の識遍處定の加行は云何。觀行を修する者は、何の方便いふに由りて、乃ち、能く識遍處定に證入するや。答ふ、即ち前に入る所の如き識定に依りて、心をして隨順、調伏、趣向せしめ、漸次に柔和ならしめ、周遍して柔和ならしめ、一趣に定せしめ已つて、復た此の識は漸次増廣して、東南西北、遍く皆な是れ識なりと想す。

彼れは此の識は漸次増廣して、東南西北、遍く皆な是れ識なりと想するが故に、心便ち散動して、諸の相に馳流し、一趣にして一境に繫念し、此の境は遍く皆な是れ識なりと思惟すること能はず。彼れは心の散動して、諸の相に馳流し、一趣にして一境に繫念し、此の境は遍く皆な是れ識なりと思惟すること能はざるが故に、未だ識遍處定に證入すること能はず。故に、其の「散動馳流する心を攝ぜむが爲めの故に、遍識相に於いて、繫念思惟す。此れは遍く是れ識にして、遍く空等に非ずと。此の相を思惟して、精勤勇猛にして、乃至、心をして相續して久住せしむ。——斯の加行に由りて、乃ち、漸に能く識遍處定に入る。」

識遍處定修  
入の方便修

精勤して、數、此の加行を習し已りて、復た進んで此の定の方便を修行す。謂はく、加行が引生する所の道に於いて、數、

思惟し、假想し、觀察し、安立し、信解す。彼れは、此れに於いて、勝解力を以つて、是れ某の識なりと繫念し、思惟し、假想し、觀察し、安立し、信解するに由るが故に、心便ち散動して、諸の相に馳流し、一趣にして一境に繫念し、此の境は是れ識にして、餘に非ずと思惟すること能はず。彼れは心の散動して、諸の相に馳流し、一趣にして一境に繫念し、此の境は定むで是れ識なりと思惟すること能はざるが故に、未だ識遍處定に證入すること能はず。「故に、其の」散動馳流する心を攝ぜむが爲めの故に、一識相に於いて、繫念思惟す。謂はく、此れは是れ識にして、空等と爲すに非ずと。此の相を思惟して、精勤勇猛にして、乃至、心をして相續して久住せしむ。——斯の加行に由りて、能く<sup>二五</sup> 識定に入る。

識定修入の  
方便修行

精勤して、數、此の加行を習し已りて、復た、進んで此の定の方便を修行す。謂はく、加行が引生する所の道に於いて、數、習し、數、修し、數、多く所作するなり。「而して」、既に、加行が引生する所の道に於いて、數、習し、數、修し、數、多く所作すれば、心便ち安住し、等住し、近住し、相續して、一趣にして一境に繫念し、此の境は定むで是れ識相なりと思惟す。心の安住し、等住し、近住し、相續して、一趣にして一境に繫念し、此の境は定むで是れ識相なりと思惟して、二無く、轉無きに由

【二五】 識定、Vijjāna-samādhi (Vijjāna-samadhi) なるべし。



ば、心便ち安住し、等住し、近住し、相續して、一趣にして一境に繫念し、此の境は遍く皆な是れ空なりと思惟す。心の安住し、等住し、近住し、相續して、一趣にして、一境に繫念し、此の境は遍く皆な是れ空なりと思惟して、二無く、轉無きに由りて、此れより乃ち空遍處定に入るなり。

「上・下」と言ふは、謂はく、上下の方なり。

「傍布」と言ふは、謂はく、東南等なり。

「無二」と言ふは、謂はく、間雜無きなり。

「無邊、無際」とは、謂はく、邊際の測り難きなり。

「是れ第九」とは、謂はく、諸の定中の漸次、順次、相續の次第の數を第九と爲すなり。

「遍處」と言ふは、謂はく、此の空無邊處定中の 所有の善の色・受・想・行・識を皆な「遍處」と名く。

問ふ、識遍處定の加行は云何。觀行を修する者は、何の方便に由つて、而も能く識遍處定に證入するや。 答ふ、初修業者は創めて觀を修するの時、此の身中に於いて、或ひは清淨の眼識相を取り、或ひは清淨の耳識相を取り、或ひは清淨の鼻識相を取り、或ひは清淨の舌識相を取り、或ひは清淨の身識相を取り、或ひは清淨の意識相を取り、此れ「等」の諸の識に於いて、隨つて一相を取り、勝解力を以つて、是れ某の識相なりと繫念し、

# 10. 識無邊處

識定修行之加行

【二】 空無邊處定とは、當空遍處定の自性は已註の如く空無邊處定の故に、今、その遍處の體(自性)を出す爲めにかく記せるものである。

【三】 所有の善の等、右の如く、空遍處定の體は空無邊處にて、今は、例の如く助伴を并せ出すが爲めに、色等と列ねたるも、察するに、已にそは空無邊處を自性とし、無色關係のこと故、その助伴中、色は除くべきものなるべく、今それを并記するは誤なるべし。卷一八、八解脱中の同準の下等を参照せよ。

【三】 識遍處定、Vijāna kṣaipatyana (—Sj) (Rlyas D. 略す。Neumann—Des Bewusstseins Allheit)。この識といふは本文解説の如く、六識身のことである。これによりて、己身を周遍觀察するものが、今の定意である。従つて、この定は四無色定の第二、識無邊處定と相通じるもので、同前に、俱舍(二九)には識の淨無色を以つて其の自性と爲すといふ。

【四】 此の身中に於いて等、大乘では汎神論的立場から、識を亦通一切處的に周遍觀察しうるも、今は尙、そこまでゆかず、唯識の個人的唯心論にも行つてゐないので、識による觀察を唯、己身上にのみ限定した所に著眼すべし。

空遍處定修  
入の加行

問ふ、若し此の未だ能く空遍處定に入らざる者の空遍處定の加行は云何。觀行を修する者は、何の方便びんぷんに由りて、乃ち能く空遍處定に證入するや。答ふ、即ち前に入る所の如き空定に依りて、心をして隨順、調伏、趣向せしめ、漸次に柔和ならしめ、周遍して柔和ならしめ、一趣に定せしめ已りて、此の空は漸次増廣して、東南西北、遍く皆な是れ空なりと想し、彼れが此の空は漸次増廣して、東南西北、遍く是れ空なりと想するが故に、心便ち散動して、諸の相に馳流し、一趣にして一境に繫念し、此の境は遍く皆な是れ空なりと思惟すること能はず。彼れは心の散動して、諸の相に馳流し、一趣にして一境に繫念し、此の境は遍く是れ空なりと思惟すること能はざるが故に、未だ空遍處定に證入すること能はず。「故に、其の」散動馳流する心を攝ぜむが爲めの故に、遍空相に於いて、繫念思惟す。此れは遍く是れ空にして、遍く識等に非ずと。此の相を思惟して、精勤勇猛にして、乃至、心をして相續して、久住せしむ。――斯の加行に由りて、乃ち漸に能く空遍處定に入る。

空遍處定修  
入の方便修  
行

精勤して、數、此の加行を習し已りて、復た進んで、此の定の方便を修行す。謂はく、加行が引生する所の道に於いて、數、習し、數、修し、數、多く所作するなり。「而して」、既に、加行が引生する所の道に於いて、數、習し、數、修し、數、多く所作すれ

し、觀察し、安立し、信解するに由るが故に、心便ち散動して、諸の相に馳流し、一趣にして一境に繫念し、此の境は是れ空にして餘に非ずと思惟すること能はず。彼れは心の散動して、諸の相に馳流し、一趣にして一境に繫念し、此の境は定むで是れ空なりと思惟すること能はざるが故に、未だ空遍處定に證入すること能はず。「故に、其の」散動馳流する心を攝ぜむが爲めの故に、一空相に於いて、繫念思惟す。謂はく、此れは是れ空にして識等と爲すに非ずと。此の相を思惟して、精勤勇猛にして、乃至、心をして相續して、久住せしむ。——斯の加行に由りて、能く、空定に入る。

精勤して、數、此の加行を習し已りて、復た進んで、此の定の方便を修行す、謂はく、加行が引生する所の道に於いて、數、習し、數、修し、數、多く所作するなり。「而して」、既に、加行が引生する所の道に於いて、數、習し、數、修し、數、多く所作すれば、心便ち安住し、等住し、近住し、相續して、一趣にして一境に繫念し、此の境は定むで是れ空相なりと思惟す。心の安住し、等住し、近住し、相續して、一趣にして一境に繫念し、此の境は定むで是れ空相なりと思惟して、二無く、轉無きに由りて、能く空定に入る。而も未だ空遍處定に入ること能はず。

【10】空定、Ākāśa-samādhi (Ākāśa samādhi) な  
るべし。



心の安住し、等住し、近住し、相續して、一趣にして一境に繫念し、此の境は遍く皆な是れ白なりと思惟して、二無く、轉無きに由りて、此れより乃ち白遍處定に入るなり。

「上・下」と言ふは、謂はく、上下の方なり。

「傍布」と言ふは、謂はく、東南等なり。

「無二」と言ふは、謂はく、間雜無きなり。

「無邊、無際」とは、謂はく、邊際の測り難きなり。

「是れ第八」とは、謂はく、諸の定中の漸次、順次、相續の次第の數を第八と爲すなり。

「遍處」と言ふは、謂はく、此の定中の所有の善の色・受・想・行・識を皆な「遍處」と名く。

問ふ、空遍處定の加行は云何。觀行を修する者は、何の方便に由りて、而も能く空遍處定に證入するや。答ふ、初修業者は、創めて觀を修するの時、此の世界に於いて、或ひは舍上の空を取り、或ひは地上の空を取り、或ひは樹上の空を取り、或ひは巖上の空を取り、或ひは山上の空を取り、或ひは川中の空を取り、或ひは谷中の空を取り、此の「如き」等の空に於いて、隨つて一相を取り、勝解力を以つて、是れ某の空相なりと繫念し、思惟し、假想し、觀察し、安立し、信解す。彼れは此れに於いて、勝解力を以つて、是れ某の空なりと繫念し、思惟し、假想

## 九、空遍處

### 空定の加行

【九】空遍處定・ākāsa-kṛtsn'iyatana [samādhi] (ākāsa kṛtsn'iyatana [-S.]) (Itys D. 略す。Neumann—Das Raumer Allheit.) 空に空といふのは、虛無の意で、故に俱舍二九には(已註の如く)、空遍處定は空の淨無色をその自性となすといふ。便ちかゝる空をもつて周遍して觀察し、一切處に遍するの觀法をなすが、今の定の修行で、自ら、右俱舍の文の如く、所謂空無邊處定とその意義相通するものである。

定に依りて、心をして、隨順、調伏、趣向せしめ、漸次に柔和ならしめ、周遍して柔和ならしめ、一趣に定ぜしめ已つて、復た此の白は漸次増廣して、東南西北、遍く皆な是れ白なりと想し、彼れは此の白は漸次増廣して、東南西北、遍く是れ白なりと想するが故に、心便ち散動して、諸の相に馳流し、一趣にして、一境に繫念し、此の境は遍く皆な是れ白なりと思惟すること能はず。彼れは心の散動して、諸の相に馳流し、一趣にして、一境に繫念し、此の境は遍く是れ白なりと思惟すること能はざるが故に、未だ白遍處定に證入すること能はず。〔故に、其の〕散動馳流する心を攝ぜむが爲めの故に、遍白相に於いて、繫念思惟す。此れは遍く是れ白にして、遍く赤等に非ずと。此の相を思惟して、精勤勇猛にして、乃至、心をして相續して、久住せしむ。——斯の加行に由りて、乃ち、漸に能く白遍處定に入る。

白遍處定修  
入の方便修  
行

精勤して、數、此の加行を習し已りて、復た進んで、此の定の方便を修行す。謂はく、加行が引生する所の道に於いて、數、習し、數、修し、數、多く所作するなり。〔而して〕、既に、加行が引生する所の道に於いて、數、習し、數、修し、數、多く所作すれば、心便ち安住し、等住し、近住し、相續して、一趣にして一境に繫念し、此の境は遍く皆な是れ白なりと思惟す。

白定修入の  
方便修行

一境に繫念し、此の境は是れ白にして、餘に非ずと思惟すること能はず。彼れは心の散動して、諸の相に馳流し、一趣にして一境に繫念し、此の境は定むで是れ白なりと思惟すること能はざるが故に、未だ白遍處定に證入すること能はず。〔故に、其の〕散動馳流する心を攝ぜむが爲めの故に、一白相に於いて、繫念思惟す。謂はく、此れは是れ白にして、赤等と爲すに非ずと。此の相を思惟して、精勤勇猛にして、乃至、心をして相續して、久住せしむ。——斯の加行に由りて、能く<sup>ア</sup>白定に入る。

精勤して、數、此の加行を習し已りて、復た進んで、此の定の方便を修行す。謂はく、加行が引生する所の道に於いて、數、習し、數、修し、數、多く所作するなり。〔而して〕、既に、加行が引生する所の道に於いて、數、習し、數、修し、數、多く所作すれば、心便ち安住し、等住し、近住し、相續して、一趣にして一境に繫念し、此の境は定むで是れ白相なりと思惟す。心の安住し、等住し、近住し、相續して、一趣にして一境に繫念し、此の境は定むで是れ白相なりと思惟して、二無く、轉無きに由りて、能く白定に入る。而も未だ白遍處定に入ること能はず。

問ふ、若し此の未だ能く白遍處定に入らざる者の白遍處定の加行は云何。觀行を修する者は、何の方便に由りて、乃ち、能く白遍處定に證入するや。答ふ、即ち前に入る所の如き白

白遍處定修  
入の加行

【ハ】 白定<sup>ア</sup>Avadita-samāhiti (Odhara) なりし。



「上・下」

「上・下」と言ふは、謂はく、上下の方なり。

「傍布」

「傍布」と言ふは、謂はく、東南等なり。

「無二」

「無二」と言ふは、謂はく、間雜無きなり。

「無邊、際無」

「無邊、無際」とは、謂はく、邊際の測り難きなり。

「是れ第七」

「是れ第七」とは、謂はく、諸の定中の漸次、順次、相續の次第の數を第七と爲すなり。

「通」處「」

「遍處」と言ふは、謂はく、此の定中の所有の善の色・受・想・行・識を皆な「遍處」と名く。

八、白遍處  
白定修入  
の加行

問ふ、白遍處定の加行は云何。觀行を修する者は、何の方便に由りて、而も能く白遍處定に證入するや。答ふ、初修業者は、創めて觀を修するの時、此の世界に於いて、或ひは白樹を取り、或ひは白葉を取り、或ひは白花を取り、或ひは白果を取り、或ひは白衣を取り、或ひは種々の白莊嚴具を取り、或ひは白雲を取り、或ひは白水を取り、或ひは種々の諸餘の白物を取り、——彼れは是くの如き「等」に於いて、随つて一相を取り、勝解力を以つて、是れ某の白相なりと繫念し、思惟し、假想し、觀察し、安立し、信解す。彼れは此れに於いて、勝解力を以つて、是れ某の白なりと繫念し、思惟し、假想し、觀察し、安立し、信解するに由るが故に、心便ち散動して、諸の相に馳流し、一趣にして、

【七】白遍處定、*Avadāta-kṛtsnāyātana* [—*samādhi*] (*Odāta kraṇṇāyātana* [—*S.*]) (Rlys D.—*蓋下*。Neumann—*Des Weissen Allheit.*)

の赤は漸次増廣して、東南西北、遍く皆な是れ赤なりと想し、彼れは此の赤は漸次増廣して、東南西北、遍く是れ赤なりと想するが故に、心便ち散動して、諸の相に馳流し、一趣にして一境に繫念し、此の境は遍く皆な是れ赤なりと思惟すること能はず。彼れは心の散動して、諸の相に馳流し、一趣にして一境に繫念し、此の境は遍く是れ赤なりと思惟すること能はざるが故に、未だ赤遍處定に證入すること能はず。「故に、其の」散動馳流する心を攝ぜむが爲めの故に、遍赤相に於いて、繫念思惟す。此れは遍く是れ赤にして、遍く黄等に非ずと。此の相を思惟して、精勤勇猛にして、乃至、心をして、相續して、久住せしむ。——斯の加行に由りて、乃ち、漸に能く赤遍處定に入る。

赤遍處定修  
入の方便修  
行

精勤して、數、此の加行を習し已りて、復た進んで、此の定の方便を修行す。謂はく、加行が引生する所の道に於いて、數、習し、數、修し、數、多く所作するなり。「而して」、既に、加行が引生する所の道に於いて、數、習し、數、修し、數、多く所作すれば、心便ち安住し、等住し、近住し、相續して、一趣にして一境に繫念し、此の境は遍く皆な是れ赤なりと思惟す。心の安住し、等住し、近住し、相續して、一趣にして一境に繫念し、此の境は遍く皆な是れ赤なりと思惟して、二無く、轉無きに由りて、

赤定修入の  
方便修行

一境に繫念し、此の境は定むで是れ赤なりと思惟すること能はざるが故に、未だ赤遍處定に證入すること能はず。故に、其の散動馳流する心を攝ぜむが爲めの故に、一赤相に於いて、繫念思惟す。謂はく、此れは是れ赤にして、黃等と爲すに非ずと。此の相を思惟して、精勤勇猛にして、乃至、心をして相續して、久住せしむ。——斯の加行に由りて、能く赤定に入る。

精勤して、數、此の加行を習し已りて、復た進んで、此の定の方便を修行す。謂はく、加行が引生ずる所の道に於いて、數、習し、數、修し、數、多く所作するなり。「而して」、既に、加行が引生ずる所の道に於いて、數、習し、數、修し、數、多く所作すれば、心便ち安住し、等住し、近住し、相續して、一趣にして一境に繫念し、此の境は定むで是れ赤相なりと思惟す。心の安住し、等住し、近住し、相續して、一趣にして一境に繫念し、此の境は定むで是れ赤相なりと思惟して、二無く、轉無きに由りて、能く赤定に入る。而も未だ赤遍處定に入ること能はず。

赤遍處定修  
入の加行

問ふ、若し此の未だ能く赤遍處定に入らざる者の赤遍處定の加行は云何。觀行を修する者は、何の方便に由りて、乃ち、能く赤遍處定に證入するや。答ふ、即ち前に入る所の如き赤定に依りて、心をして隨順、調伏、趣向せしめ、漸次に柔和ならしめ、周遍して柔和ならしめ、一趣に定ぜしめ已つて、復た此

【六】 赤定、Lobhisamādhi (梵＝巴) なるべし。



「傍布」

「傍布」と言ふは、謂はく、東南等なり。

「無二」

「無二」と言ふは、謂はく、間雜無きなり。

「無邊・無際」

「無邊、無際」とは、謂はく、邊際の測り難きなり。

「是れ第六」

「是れ第六」とは、謂はく、諸の定中の漸次、順次、相續の次第の數を第六と爲すなり。

「遍處」

「遍處」と言ふは、謂はく、此の定中の所有の善の色・受・想・行・識を皆な「遍處」と名く。

七、赤遍處

赤遍處  
と定修入  
とその加  
行

問ふ、赤遍處定の加行は云何。觀行を修する者は、何の方便に由りて、而も能く赤遍處定に證入するや。答ふ、初修業者は創めて觀を修するの時、此の世界に於いて、或ひは赤樹を取り、或ひは赤葉を取り、或ひは赤花を取り、或ひは赤果を取り、或ひは赤衣を取り、或ひは種々の赤莊嚴具を取り、或ひは赤雲を取り、或ひは赤水を取り、或ひは種々の諸餘の赤物を取り、一彼れは是くの如き「等」に於いて、隨つて一相を取り、勝解力を以つて、是れ某の赤相なりと繫念し、思惟し、假想し、觀察し、安立し、信解す。彼れは此れに於いて、勝解力を以つて、是れ某の赤なりと繫念し、思惟し、觀察し、安立し、信解するに由るが故に、心便ち散動して、諸の相に馳流し、一趣にして一境に繫念し、此の境は是れ赤にして、餘に非ずと思惟すること能はず。彼れは心の散動して、諸の相に馳流し、一趣にして

【五】 赤遍處定、Iohita-kṛtsnāyatana (—sunnadhi)  
(Iohita-kṛtsnāyatana (—S.)) (Rhyas D. 略す。  
Neumann—Des Rothen Altheit.)

れは此の黃は漸次増廣して、東南西北、遍く是れ黃なりと想するが故に、心便ち散動して、諸の相に馳流し、一趣にして一境に繫念し、此の境は遍く皆な是れ黃なりと思惟すること能はず。彼れは心の散動して、諸の相に馳流し、一趣にして一境に繫念し、此の境は遍く是れ黃なりと思惟すること能はざるが故に、未だ黃遍處定に證入すること能はず。〔故に、其の〕散動馳流する心を攝ぜむが爲めの故に、遍黃相に於いて、繫念思惟す。此れは遍く是れ黃にして、遍く青等に非ずと。此の相を思惟して、精勤勇猛にして、乃至、心をして相續して、久住せしむ。

——斯の加行に由りて、乃ち、漸に能く黃遍處定に入る。

精勤して、數、此の加行を習し已りて、復た進んで、此の定の方便を修行す。謂はく、加行が引生する所の道に於いて、數、習し、數、修し、數、多く所作するなり。〔而して〕、既に、加行が引生する所の道に於いて、數、習し、數、修し、數、多く所作すれば、心便ち安住し、等住し、近住し、相續して、一趣にして一境に繫念し、此の境は遍く皆な是れ黃なりと思惟す。心の安住し、等住し、近住し、相續して、一趣にして一境に繫念し、此の境は遍く皆な是れ黃なりと思惟して、二無く、轉無きに由りて、此れより乃ち黃遍處定に入る。

「上・下」

「上・下」と言ふは、謂はく、上下の方なり。

故に、未だ黃遍處定に證入すること能はず。「故に、其の」散動馳流する心を攝ぜむが爲めの故に、一黃相に於いて、繫念思惟す。謂はく、此れは是れ黃にして、青等と爲すに非ずと。此の相を思惟して、精勤勇猛にして、乃至、心をして相續して、久住せしむ。——斯の加行に由りて、能く<sup>【四】</sup>黃定に入る。

黃定修入の  
方便修行

精勤して、數<sup>しうんく</sup>、此の加行を習し已りて、復た進んで、此の定の方便を修行す。謂はく、加行が引生する所の道に於いて、數、習し、數、修し、數、多く所作するなり。「而して」、既に、加行が引生する所の道に於いて、數、習し、數、修し、數、多く所作すれば、心便ち安住し、等住し、近住し、相續して、一趣にして一境に繫念し、此の境は定むで是れ黃相なりと思惟す。心の安住し、等住し、近住し、相續して、一趣にして、一境に繫念し、此の境は定むで是れ黃相なりと思惟して、二無く、轉無きに由りて、能く黃定に入る。而も未だ黃遍處定に入ること能はず。

黃遍處定修  
入とその加  
行

問ふ、若し此の能く黃遍處定に入らざる者の黃遍處定の加行は云何。觀行を修する者は、何の方便に由りて、乃ち、能く黃遍處定に證入するや。答ふ、即ち前に入る所の如き黃定に依りて、心をして、隨順、調伏、趣向せしめ、漸次に柔和ならしめ、周遍して柔和ならしめ、一趣に定ぜしめ已つて、復た此の黃は漸次増廣して、東南西北、遍く皆な是れ黃なりと想し、彼

【四】 黃定、Tiro-samāpatti (梵＝巴) なるべし。



「無二」と言ふは、謂はく、間雜無きなり。

「無邊、無際」とは、謂はく、邊際の測り難きなり。

「是れ第五」とは、謂はく、諸の定中の漸次、順次、相續の次第の數を第五と爲すなり。

「遍處」と言ふは、謂はく、此の定中の所有の善の色・受・想・行・識を皆な「遍處」と名く。

問ふ、黃遍處定の加行は云何。觀行を修する者は、何の方便に由りて、而も能く黃遍處定に證入するや。答ふ、初修業者は創めて觀を修するの時、此の世界に於いて、或ひは黃樹を取り、或ひは黃葉を取り、或ひは黃花を取り、或ひは黃果を取り、或ひは黃衣を取り、或ひは種々の黃莊嚴具を取り、或ひは黃雲を取り、或ひは黃水を取り、或ひは種々の諸餘の黃物を取り、——

彼れは是くの如き「等」に於いて、隨つて一相を取り、勝解力を以つて、是れ某の黃相なりと繫念し、思惟し、假想し、觀察し、安立し、信解す。彼れは此れに於いて、勝解力を以つて、是れ某の黃なりと繫念し、思惟し、觀察し、安立し、信解するに由るが故に、心便ち散動して、諸の相に馳流し、一趣にして一境に繫念し、此の境は是れ黃にして餘に非ずと思惟すること能はず。彼れは心の散動して、諸の相に馳流し、一趣にして一境に繫念し、此の境は定むでは是れ黃なりと思惟すること能はざるが

【三】黃遍處定、Pita kṛtānāyatana [—samāhi] (Pita kṣaipyatana [—S.]) (Rhyas D.—略)。Neumann—Das Gelben Altholt.)

て一境に繫念し、此の境は遍く皆是れ青なりと思惟すること能はず。彼れは心の散動して、諸の相に馳流し、一趣にして一境に繫念し、此の境は遍く是れ青なりと思惟すること能はざるが故に、未だ青遍處定に證入すること能はず。「故に、其の」散動馳流する心を攝ぜむが爲めの故に、遍青相に於いて、繫念思惟す。此れは遍く是れ青にして遍く黄等に非ずと。此の相を思惟して、精勤勇猛にして、乃至、心をして相續して、久住せしむ。——斯の加行に由りて、乃ち、漸に能く青遍處定に入る。

青遍處定證  
入の方便修  
行

精勤して、數、此の加行を習し已りて、復た進んで、此の定の方便を修行す。謂はく、加行が引生する所の道に於いて、數、習し、數、修し、數、多く所作するなり。「而して」、既に、加行が引生する所の道に於いて、數、習し、數、修し、數、多く所作すれば、心便ち安住し、等住し、近住し、相續して、一趣にして一境に繫念し、此の境は遍く皆是れ青なりと思惟す。心の安住し、等住し、近住し、相續して、一趣にして一境に繫念し、此の境は遍く皆是れ青なりと思惟して、二無く、轉無きに由りて、此れより乃ち青遍處定に入るなり。

「上・下」

「上・下」と言ふは、謂はく、上下の方なり。

「傍布」

「傍布」と言ふは、謂はく、東南等なり。

に非ずと。此の相を思惟して、精勤勇猛にして、乃至、心をして相續して久住せしむ。——斯の加行に由りて、能く、青定ニに入る。

青定證入の  
方便修行

精勤して、數、此の加行を習し已りて、復た進んで、此の定の方便を修行す。謂はく、加行が引生する所の道に於いて、數、習し、數、修し、數、多く所作するなり。「而して」、既に、加行が引生する所の道に於いて、數、習し、數、修し、數、多く所作すれば、心便ち安住し、等住し、近住し、相續して、一趣にして一境に繫念し、此の境は定むで是れ青相なりと思惟す。心の安住し、等住し、近住し、相續して、一趣にして一境に繫念し、此の境は定むで是れ青相なりと思惟して、二無く、轉無きに由りて、能く青定に入る。而も未だ青遍處定に入ること能はず。

青遍處定證  
入の加行

問ふ、若し、此の未だ能く青遍處定に入らざる者の青遍處定の加行は云何。觀行を修する者は、何の方便いふんに由りて、乃ち、能く青遍處定に證入するや。答ふ、即ち前に入る所の如き青定に依りて、心をして、隨順、調伏、趣向せしめ、漸次に柔和ならしめ、周遍して柔和ならしめ、一趣に定ぜしめ已つて、復た此の青は漸次増廣して、東南西北、遍く皆是れ青なりと想し、彼れは此の青は漸次増廣して、東南西北、遍く是れ青なりと想するが故に、心便ち散動して、諸の相に馳流し、一趣にし

【二】 青定、*Nilasamādhī* (sati = *jīti*) なるべし。



## 卷の第二十

### \* (二)二種の十法の下

(五)青遍處  
青定證入の  
加行

問ふ、青遍處定の加行は云何。觀行を修する者は、何の方いかん便に由りて、而も能く青遍處定に證入するや。答ふ、初修業者は、創めて觀を修するの時、此の世界に於いて、或ひは青樹を取り、或ひは青葉を取り、或ひは青花を取り、或ひは青果を取り、或ひは青衣を取り、或ひは種々の青莊嚴具を取り、或ひは青雲を取り、或ひは青水を取り、或ひは種々の諸餘の青物を取り、——彼れは是くの如き「等」に於いて、隨つて一相を取り、勝解力を以つて、是れ某の青相なりと繫念し、思惟し、假想し、觀察し、安立し、信解す。彼れは此れに於いて、勝解力を以つて、是れ某の青なりと繫念し、思惟し、假想し、觀察し、安立し、信解するに由るが故に、心便ち散動して、諸の相に馳流し、一趣にして一境に繫念し、此の境は是れ青にして餘に非ずと思惟すること能はず。彼れは心の散動して、諸の相に馳流し、一趣にして一境に繫念し、此の境は定むで是れ青なりと思惟すること能はざるが故に、未だ青遍處定に證入すること能はず。「故に、其の」散動馳流する心を攝ぜむが爲めの故に、一青相に於いて、繫念思惟す。謂はく、此れは是れ青にして、黄等と爲す

【\*】(二)二種の十法の下とは、原漢典には、十法品第十一の二に作る。

【一】青遍處定 Nīla-kṛtsāyatanā [—Samādhī] (Nīla-kṛtsāyatanā [—S.]) (Rhyas D. 略す。Non-mann—Des Bianon alheit.) 即ち、顯色たる現實の青を周遍觀察して、間隙なき修行である。

ば、心便ち安住し、等住し、近住し、相續して、一趣にして一境に繫念し、此の境は遍く皆な是れ風なりと思惟す。心の安住し、等住し、近住し、相續して、一趣にして一境に繫念し、此の境は遍く皆な是れ風なりと思惟して、二無く、轉無きに由りて、此れより乃ち風遍處定に入るなり。

「上・下」

「上・下」と言ふは、謂はく、上下の方なり。

「傍布」

「傍布」と言ふは、謂はく、東南等なり。

「無二」

「無二」と言ふは、謂はく、間雜無きなり。

「無邊、無際」

「無邊、無際」とは、謂はく、邊際の測り難きなり。

「是れ第四」

「是れ第四」とは、謂はく、諸の定中の漸次、順次、相續の次第の數を第四と爲すなり。

「遍處」

「遍處」と言ふは、謂はく、諸の定中の所有の善の色・受・想・

行・識を皆な「遍處」と名く。

風遍處定未  
入者の能入  
の加行

問ふ、若し此の未だ能く風遍處定に入らざる者の風遍處定の加行は云何。觀行を修する者は、何の方便いふんに由りて、乃ち能く風遍處定に證入するや。答ふ、即ち前に入る所の如き風定に依りて、心をして隨順、調伏、趣向せしめ、漸次に柔和ならしめ、周遍して柔和ならしめ、一趣に定せしめ已りて、此の風は漸次増廣して、東南西北、遍く皆な是れ風なりと想し、彼れが此の風は漸次増廣して、東南西北、遍く是れ風なりと想するが故に、心便ち散動して、諸の相に馳流し、一趣にして一境に繫念し、此の境は遍く皆な是れ風なりと思惟すること能はず。彼れは心の散動して、諸の相に馳流し、一趣にして一境に繫念し、此の境は遍く是れ風なりと思惟すること能はざるが故に、未だ風遍處定に證入すること能はず。〔故に、其の〕散動馳流する心を攝ぜむが爲めの故に、遍風相に於いて、繫念思惟す。此れは遍く是れ風にして、遍く火等に非ずと。此の相を思惟して、精勤勇猛にして、乃至、心をして相續して、久住せしむ。——斯の加行に由りて、乃ち、漸に能く風遍處定に入る。

觀行者の方  
便修行

精勤して、數、此の加行を習し已りて、復た進んで、此の定の方便を修行す。謂はく、加行が引生する所の道に於いて、數、習し、數、修し、數、多く所作するなり。〔而して〕、既に、加行が引生する所の道に於いて、數、習し、數、修し、數、多く所作すれ



彼れは此れに於いて、勝解力を以つて、是れ某の風なりと繫念し、思惟し、假想し、觀察し、安立し、信解するに由るが故に、心便ち散動して、諸の相に馳流し、一趣にして一境に繫念し、此の境は是れ風にして餘に非ずと思惟すること能はず。彼れは心の散動して、諸の相に馳流し、一趣にして一境に繫念し、此の境は定むで是れ風なりと思惟すること能はざるが故に、未だ風遍處定に證入すること能はず。〔故に、其の〕散動馳流する心を攝ぜむが爲めの故に、一風相に於いて、繫念思惟す。謂はく、此れは是れ風にして、火等と爲すに非ずと。此の相を思惟して、精勤勇猛にして、乃至、心をして相續して、久住せしむ。——斯の加行に由りて、能く風定に入る。

精勤して、數、此の加行を習し已りて、復た進んで、此の定の方便を修行す。謂はく、加行が引生ずる所の道に於いて、數、習し、數、修し、數、多く所作するなり。〔而して〕、既に、加行が引生ずる所の道に於いて、數、習し、數、修し、數、多く所作すれば、心便ち安住し、等住し、近住し、相續して、一趣にして一境に繫念し、此の境は定むで是れ風相なりと思惟す。心の安住し、等住し、近住し、相續して、一趣にして一境に繫念し、此の聲は定むで是れ風相なりと思惟して、二無く、轉無きに由りて、能く風定に入る。而も未だ風遍處定に入ること能はず。

苑音義の字解は俗説字解で、吠 Vāi は暫らく from として所説の如くなり得んも、風婆加 rambhaka = rambha + ka は寧ろ rambha = sounding, roaring なるべく、かくて、吠も、亦、こゝでは to and fro, about, away 等の意で、畢竟、wind that roars off 即ち、咆哮暴動する風の意とするが妥當とせん。

【四六】大風輪相、上の大小輪下の註參照。

【四九】風定、Vāyū-samādhi (Vāyo-S.) なるべし。

の境は遍く皆な是れ火なりと思惟して、二無く、轉無きに由りて、此れより乃ち、火遍處定に入るなり。

「上・下」と言ふは、謂はく、上下の方なり。

「傍布」と言ふは、謂はく、東南等なり。

「無二」と言ふは、謂はく、間雜無きなり。

「無邊、無際」とは、謂はく、邊際の測り難きなり。

「是れ第三」とは、謂はく、諸の定中の漸次、順次、相續の次第の數を第三と爲すなり。

「遍處」と言ふは、謂はく、此の定中の所有の善の色・受・想・行・識を皆な「遍處」と名く。

問ふ、風遍處定の加行は云何。觀行を修する者は、何の方便に

(四)風遍處  
風定の加行

由りて、而も能く風遍處定に證入するや。答ふ、初修業者は、創めて觀を修するの時、此の世界に於いて、或ひは東方の所有の風相を取り、或ひは南方の所有の風相を取り、或ひは西方の所有の風相を取り、或ひは北方の所有の風相を取り、或ひは有塵風相を取り、或ひは無塵風相を取り、或ひは吠濕摩風相を取り、或ひは吠嵐婆風相を取り、或ひは小風相を取り、或ひは大風相を取り、或ひは無量風相を取り、或ひは大風輪相を取り、——是くの如き等に於いて、隨つて一相を取り、勝解力を以つて、是れ某の風相なりと繫念し、思惟し、假想し、觀察し、安立し、信解す。

【四】風遍處定、Vāyu-kṛtsnayatanā (Vāyo-kṛtsnayatanā) (Rūps D-略す。Neumann—Der Tenth Altheit.) 風とは、又、現實的假の風で、他は上に準じて知るべし。

【五】吠濕摩風、Viśva, 譯して不朽風といふ。又吠濕波、毘濕婆等に作る。瑜伽論記上には種々巧莊嚴風といふ。

【六】吠嵐婆風、Vairambhaka. 毘嵐、毘嵐婆、轉嵐、吠嵐等に作り、迅猛風と譯す。慧苑音義上には、吠は散なり、藍婆は所至なり。曰はく、この風の至る所、悉く皆な散壞すればなりと。又曰はく、前註の水輪の下、の風輪も亦これと同名なりと。慧林音義十三に曰はく、劫災(世界壞滅の時に内外の各三災等有りと稱せらるゝ)それ俱舍十一等參照)時の大猛風の名なり。此の風、猛暴にして、能く、世界を壞すと。因みに右慧

に依りて、心をして隨順、調伏、趣向せしめ、漸次に柔和ならしめ、周遍して柔和ならしめ、一趣に定せしめ已つて、復た、此の火は漸次増廣して、東南西北、遍く皆な是れ火なりと想す。彼れが此の火は漸次増廣して、東南西北、遍く是れ火なりと想するが故に、心便ち散動して、諸の相に馳流し、一趣にして一境に繫念し、此の境は遍く皆な是れ火なりと思惟すること能はず。彼れは心の散動して、諸の相に馳流し、一趣にして一境に繫念し、此の境は遍く是れ火なりと思惟すること能はざるが故に、未だ火遍處定に證入すること能はず。「故に、其の」散動馳流する心を攝ぜむが爲めの故に、遍火相に於いて、繫念思惟す。此れは遍く是れ火にして、遍く水等に非ずと。此の相を思惟して、精勤勇猛にして、乃至、心をして相續して、久住せしむ。

——斯の加行に由りて、乃ち漸に能く火遍處定に入る。

精勤して、數、此の加行を習し已りて、復た進んで此の定の方便を修行す。謂はく、加行が引生する所の道に於いて、數、習し、數、修し、數、多く所作するなり。「而して」、既に、加行が引生する所の道に於いて、數、習し、數、修し、數、多く所作すれば、心便ち安住し、等住し、近住し、相續して、一趣にして一境に繫念し、此の境は遍く皆な是れ火なりと思惟す。心の安住し、等住し、近住し、相續して、一趣にして一境に繫念し、此



に非ずと思惟すること能はず。彼れは心の散動して、諸の相に馳流し、一趣にして一境に繫念し、此の境は定むで是れ火なりと思惟すること能はざるが故に、未だ火遍處定に證入すること能はず。〔故に、其の〕散動馳流する心を攝ぜんが爲めの故に、一火相に於いて、繫念思惟す、謂はく、此れは是れ火にして、水等と爲すに非ずと。此の相を思惟して、精勤勇猛にして、乃至、心をして相續して、久住せしむ。——斯の加行に由りて、能く火定に入る。

## 火定の方便修行

## 火遍處定修入の加行

精勤して、數、此の加行を習し已りて、復た進んで、此の定の方便を修行す。謂はく、加行が引生する所の道に於いて、數、習し、數、修し、數、多く所作するなり。〔而して〕、既に、加行が引生する所の道に於いて、數、習し、數、修し、數、多く所作すれば、心便ち安住し、等住し、近住し、相續して、一趣にして一境に繫念し、此の境は定むで是れ火相なりと思惟す。心の安住し、等住し、近住し、相續して、一趣にして一境に繫念し、此の境は定むで是れ火相なりと思惟して、二無く、轉無きに由りて、能く火定に入る。而も未だ火遍處定に入ること能はず。問ふ、若し、此の未だ能く火遍處定に入らざる者の火遍處定の加行は云何。觀行を修する者は、何の方便に由りて、乃ち能く火遍處定に證入するや。答ふ、即ち前に入る所の如き火定

【一四四】火定、上の地定、水定に準じて知れ。

由りて、而も能く火遍處定に證入するや。 答ふ、初修業者は、

創めて觀を修するの時、此の世界に於いて、或ひは清淨二三九の日輪火

相を取り、或ひは妙藥光明火相を取り、或ひは神珠光明火相を

取り、或ひは星宿宮殿火相を取り、或ひは火聚大猛焰相を取り、

或ひは燒村大火焰相を取り、或ひは燒城大火焰相を取り、或ひ

は燒川大火焰相を取り、或ひは燒野大火焰相を取り、或ひは燒

十載木大火焰相を取り、或ひは燒二十載木大火焰相を取り、或

ひは燒三十載木大火焰相を取り、或ひは復た燒四十載木大火焰

相を取り、或ひは復た燒五十載木大火焰相を取り、或ひは復た

燒百載木大火焰相を取り、或ひは燒千載木大火焰相を取り、或

ひは燒百千載木大火焰相を取り、或ひは燒無量百載木大火焰相

を取り、或ひは燒無量千載木大火焰相を取り、或ひは燒無量百千

載木大火焰相を取り、——彼れは是くの如きの諸の火焰相の先

きには漸く熾然たり。復た極めて熾然たり、轉た遍く熾然たり、

後には皆な洞然たるを見、是くの如き等に於いて、隨つて一相

を取り、勝解力を以つて、是れ某の火相なりと繫念し、思惟し、

假想し、觀察し、安立し、信解す。彼れは此れに於いて、勝解

力を以つて、是れ某の火なりと繫念し、思惟し、假想し、觀察

し、安立し、信解するに由るが故に、心便ち散動して、諸の相

に馳流し、一趣にして一境に繫念し、此の境は是れ火にして餘

【二三】 日輪火相、太陽所發の光明の火相を觀すること。

【二四】 妙藥光明とは、妙藥から發する光明の火の相を念すること。但し、藥の字を、宋元明の三本では樂に作る。

【二五】 神珠光明、神珠神珠（摩尼寶珠）所發の光明。

【二六】 星宿宮殿とは、日、月を初め、諸の星宿にはすべて宮殿有りて、その中に四大王所部（所屬）の天衆居すとせらる。俱舍十一等參照。

【二七】 燒十載木とは、載は車一杯といふ意で、同様のもの十の木をやいた大火焰の相を觀すること。

地遍處定の  
方便修行

て、精勤勇猛にして、乃至、心をして、相續して久住せしむ。  
——斯の加行に由りて、乃ち漸に能く水遍處定に入る。

精勤して、數、此の加行を習し已りて、復た進んで此の定の  
方便を修行す。謂はく、加行が引生する所の道に於いて、數、習  
し、數、修し、數、多く所作するなり。「而して」、既に、加行が引生  
する所の道に於いて、數、習し、數、修し、數、多く所作すれ  
ば、心便ち安住し、等住し、近住し、相續して、一趣にして一  
境に繫念し、此の境は遍く皆な是れ水なりと思惟す。心の安住  
し、等住し、近住し、相續して、一趣にして一境に繫念し、此  
の境は遍く皆な是れ水なりと思惟して、二無く、轉無きに由り  
て、此れより乃ち水遍處定に入るなり。

「上・下」

「傍布」

「無二」

「無邊、無際」

「是れ第二」

「遍處」

第の數を第二と爲すなり。  
「遍處」と言ふは、謂はく、此の定中の所有の善の色・受・想・

行・識を皆な「遍處」と名く。

（三）火遍處、  
火定の加行

問ふ、火遍處定の加行は云何。觀行を修する者は、何の方便に

【三六】火遍處定、Tijśakṛtsnāyatana (sumadhī)  
(Tijo-kasira-yatana) (Rhy D. 一略。Neumann  
—Des Feners Allhoit.) 上に準じ、現實的假の火に  
よつて、周遍觀察すること、上に準ず。



水遍處定の  
加行

する所の道に於いて、數、習し、數、修し、數、多く所作すれば、心便ち安住し、等住し、近住し、相續して、一趣にして一境に繫念し、此の境は定むで是れ水相なりと思惟す。心の安住し、等住し、近住し、相續して、一趣にして一境に繫念し、此の境は定むで是れ水相なりと思惟して、二無く、轉無きに由りて、能く水定に入る。而も未だ水遍處定に入ること能はず。

問ふ、若し此の未だ能く水遍處定に入らざる者の水遍處定の加行は云何。觀行を修する者は、何の方便に由りて、乃ち能く水遍處定に證入するや。答ふ、即ち前に入る所の如き水定に依りて、心をして隨順、調伏、趣向せしめ、漸次に柔和ならしめ、周遍して柔和ならしめ、一趣に定せしめ已つて、復た、此の水は漸次増廣して、東南西北、遍く皆な是れ水なりと想し、彼れが此の水は漸次増廣して、東南西北、遍く是れ水なりと想するが故に、心便ち散動して、諸の相に馳流し、一趣にして一境に繫念し、此の境は遍く皆な是れ水なりと思惟すること能はず。彼れは心の散動して、諸の相に馳流し、一趣にして一境に繫念し、此の境は遍く是れ水なりと思惟すること能はざるが故に、未だ水遍處定に證入すること能はず。〔故に、其の〕散動馳流する心を攝ぜむが爲めの故に、遍水相に於いて、繫念思惟す。此れは遍く是れ水にして、遍く地等に非ずと。此の相を思惟し

視羅筏底水相を取り、或ひは莫鹽<sup>一三五</sup>河水相を取り、乃至、或ひは東大海水相を取り、或ひは南大海水相を取り、或ひは西大海水相を取り、或ひは北大海水相を取り、或ひは四大海水相を取り、或ひは大水輪相を取り、——是くの如き等に於いて、随つて一相を取り、勝解力を以つて、是れ某の水相なりと繫念し、思惟し、假想し、觀察し、安立し、信解するに由るが故に、心便ち散動して、諸の相に馳流し、一趣にして一境に繫念し、此の境は是れ水にして餘に非ずと思惟すること能はず。彼れは心の散動して、諸の相に馳流し、一趣にして、一境に繫念し、此の境は定むで是れ水なりと思惟すること能はざるが故に、未だ水遍處定に證入すること能はず。「故に、其の」散動馳流する心を攝ぜんが爲めの故に、一水相に於いて、繫念思惟す。謂はく、此れは是れ水にして、地等と爲すに非ずと。此の相を思惟して、精勤勇猛にして、乃至、心をして相續して、久住せしむ。——斯の加行に由りて、能く水定<sup>一三六</sup>に入る。

精勤して、數、此の加行を習し已りて、復た進んで、此の定の方便を修行す。謂はく、加行が引生ずる所の道に於いて、數、習し、數、修し、數、多く所作するなり。既にして加行が引生

恒河の支流で、上流恒の南に居る。同上五大河の一。  
【一三】毘羅婆、Sambhū 薩羅山、薩羅浮等とも記す。  
又、恒河の一支流で、五大河の一。  
【一四】阿視羅筏底、Aśravatī 伊羅跋提、阿夷跋提等とも記す。準上。

【一五】莫鹽、Māṇ 摩鹽等とも記す。又、佛時代の五大河の一。

【一六】大水輪、Maha-jala-māṇḍala。例の須彌山説の宇宙形態論に従くば、世界は層級的に成立しおるもので、まづ、大空間の、最下に風輪 Vāyu-māṇḍala ありて、その上に水輪有り、その水輪の上表が凝結して金輪と成り、その金輪の上に須彌山は居止すと。今は則ち、その第二の水輪のことで、風輪まづ虚空に依止して生ずるや、有情の業の増上力によりて、大雲雨起りて、風輪上に澍ぎ、積んで水輪と成る。その未だ凝結せざる間には、深さ十一億二萬輪繕那等なりと。但しこの深さ等の量については、傳説によりて異がある。總じて、これらの所説は、長阿含因本經、世起經、樓炭經、立世阿毘曇論一、俱舍十一等を參照せよ。

【一七】水定、Ap(Ayo)-samādhi なるべし。上の地定に準じて知れ。

生する所の道に於いて、數、習し、數、修し、數、多く所作すれば、心便ち安住し、等住し、近住し、相續して、一趣にして一境に繫念し、此の境は遍く皆な是れ地なりと思惟す。心の安住し、等住し、近住し、相續して、一趣にして一境に繫念し、此の境は遍く皆な是れ地なりと思惟して、二無く、轉無きに由りて、此れより乃ち地遍處定に入るなり。

「上・下」

「上・下」と言ふは、謂はく、上下の方なり。

「傍布」

「傍布」と言ふは、謂はく、東南等なり。

「無二」

「無二」と言ふは、謂はく、間雜無きなり。

「無邊、無際」

「無邊、無際」とは、謂はく、邊際の測り難きなり。

「是れ第一」

「是れ第一」とは、謂はく、諸の定中の漸次、順次、相續の次の數を第一と爲すなり。

「遍處」と言ふは、謂はく、此の定中の所有の善の色・受・想・行・識を皆な「遍處」と名く。

(二)水遍處・水定の加行

問ふ、水遍處定の加行は云何。觀行を修する者は、何の方便に由りて、而も能く水遍處定に證入するや。答ふ、初修業者は、

創めて觀を修するの時、此の世界に於いて、或ひは大水注相を取り、或ひは大泉水相を取り、或ひは大池水相を取り、或ひは大陂水相を取り、或ひは大湖水相を取り、或ひは殘伽水相を取り、或ひは鹽母那水相を取り、或ひは設臘婆水相を取り、或ひは阿

【三】上・下 Urthvayam (Uddham), adhas (celus) (Rhys D. Above, below; Neumann - Durch und durch.)

【三】傍布 Tiriyam (Tiriyam) (Rhys D. - Across; Neumann - Durch und durch. 中に含めたいふか)。

【三】無二 Advayan (') (Rhys D. - Homogeneous; Neumann - Ungeheilt.)

【三】無邊、無際 Apramāna (Apramāna) (Rhys D. - Without limits; Neumann - Unermesslich.)

【三】是れ第一 Mahāyutpatti; Saṅg. - S. 共に缺。以下も準ず。

【三】遍處 Kṛtsnā-āyatana (Kṛtsnā-āyatana) (Neumann - Ort der Allheit.) 俱舍二九に曰はく、一切遍に於いて、周徧觀察して、間際有ること無し。故に遍處と名くと。前註參照。

【三】所有の善の等、俱舍二九に曰はく、十が中の「前」八は皆な(第四靜慮に依り)、是れ無貪を自性とす。若し助伴(相應隨伴)を并すれば、五蘊を性と爲す。…後の二遍處(二無色定に依り)は、次の如く、空と識との二の淨無色を其の自性と爲す云々。

【三】水遍處定 Apāramāṇa (somaññhi) (Āpāramāṇa) (Rhys D. - 不快明。Neumann - Das Wassers Allheit.) その意義、方法は前の地の場合參照。

【三】陂水、陂は元來堤防の義で、陂水はそのドテをもつて圍まれた中のためいけの水。

【三】殘伽、Gaṅgā 又恒河等と譯す。雪山に發して南東に走り、ベンゴール灣に注げる大河。所謂五大河の隨一。

【三】鹽母那、Yamunā. 又耶暮(又は菩)那等種々に記す。同じく恒河に合流して、ベンゴール灣に注ぐ大



地遍處定修  
入の加行

て、能く地定に入る。而も未だ地遍處定に入ること能はず。

問ふ、若し此の未だ能く地遍處定に入らざる者の地遍處定の加行は云何。觀行を修する者は、何いふの方便に由りて、乃ち能く地遍處定に證入するや。答ふ、即ち前に入る所の如き地定に依りて、心をして隨順、調伏、趣向せしめ、漸次に柔和ならしめ、周遍して柔和ならしめ、一趣に定せしめ已つて、復た此の地は漸次増廣して、東南西北、遍く皆な是れ地なりと想し、彼れは此の地は漸時増廣して、東南西北、遍く是れ地なりと想するが故に、心便ち散動して、諸の相に馳流し、一趣にして一境に繫念し、此の境は遍く皆な是れ地なりと思惟すること能はず。彼れは心の散動して、諸の相に馳流し、一趣にして一境に繫念し、此の境は遍く是れ地なりと思惟すること能はざるが故に、未だ地遍處定に證入すること能はず。故に、其の散動馳流する心を攝ぜむが爲めの故に、遍地相に於いて繫念思惟す。此れは遍く是れ地にして、遍く水等に非ずと。此の相を思惟して、精進勇猛にして、乃至、心をして相續して、久住せしむ。——斯の加行に由りて、乃ち、漸に能く地遍處定に入る。

地遍處定修  
入の方便

精勤して、數、此の加行を習し已りて、復た進んで、此の定の方便を修行す。謂はく、加行が引生ずる所の道に於いて、數、習し、數、修し、數、多く所作するなり。既に、加行が引

假想し、觀察し、安立し、信解す。彼れは此れに於いて、勝解力を以つて、是れは某の地なりと繫念し、思惟し、假想し、觀察し、安立し、信解するに由るが故に、心便ち散動して、諸の相に馳流し、一趣にして一境に繫念し、此の境は是れ地にして餘に非ずと思惟すること能はず。彼れは心の散動して、諸の相に馳流し、一趣にして一境に繫念し、此の境は定むで是れ地なりと思惟すること能はざるが故に、未だ地遍處定に證入すること能はず。〔故に、其の〕散動馳流する心を攝ぜむが爲めの故に、一地相に於いて、繫念思惟す。謂はく、此れは是れ地にして、水等と爲すに非ずと。此の相を思惟して、精勤勇猛にして、乃至、心をして相續して、久住せしむ。——斯の加行に由りて、能く地定に入る。

地定證入の  
方便

精勤して、數、此の加行を習し已りて、復た進んで、此の定の方便を修行す。謂はく、加行が引生する所の道に於いて、數、習し、數、修し、數、多く所作するなり。既に、加行が引生する所の道に於いて、數、習し、數、修し、數、多く所作すれば、心便ち安住し、等住し、近住し、相續して、一趣にして一境に繫念し、此の境は定むで是れ地相なりと思惟す。心の安住し、等住し、近住し、相續して、一趣にして一境に繫念し、此の境は定むで是れ地相なりと思惟して、二無く、轉無きに由り

【三】地定 Pethivi (Puthavi)-samāhi なるべし。  
蓋し、こは能く、地を觀じて、未だ、遍一切處たることとは得ぬ定をいふ。

第五遍處

復た次に、具壽よ、青遍しと一が想し、是くの如く上・下・傍  
布・無二・無邊・無際なり。是れ第五遍處なり。

第六遍處

復た次に、具壽よ、黃遍しと一が想し、是くの如く上・下・傍  
布・無二・無邊・無際なり。是れ第六遍處なり。

第七遍處

復た次に、具壽よ、赤遍しと一が想し、是くの如く上・下・傍  
布・無二・無邊・無際なり。是れ第七遍處なり。

第八遍處

復た次に、具壽よ、白遍しと一が想し、是くの如く上・下・傍  
布・無二・無邊・無際なり。是れ第八遍處なり。

第九遍處

復た次に、具壽よ、空遍しと一が想し、是くの如く上・下・傍  
布・無二・無邊・無際なり。是れ第九遍處なり。

第十遍處

復た次に、具壽よ、識遍しと一が想し、是くの如く上・下・傍  
布・無二・無邊・無際なり。是れ第十遍處なり。

十遍處の論釋

(一) 地遍處  
問ふ、地遍處定の加行は云何。觀行を修する者は、何の方便  
に由りて、而も能く地遍處定に證入するや。答ふ、初修業者  
は、創めて觀を修するの時、此の大地の彼彼の方所に於いて、  
若しは高、若しは下、若しは刺、若しは杙、若しは鹹、若しは  
榛、若しは險、若しは穢、——是くの如き等の處は皆な思惟  
せず。此の大地の彼彼の方所に於いて、平坦顯了にして、猶ほ  
掌中の如く、淨園林を具して愛す可きの樂處は、隨つて一相を  
取り、勝解力を以つて、是れ某の地相なりと繫念し、思惟し、

今、改めて讀む。

【一〇】火遍し、Tejas-kṛtsnāṃ (Tejo-kṛtsnāṃ)°

【一一】風遍し、Vāyu-kṛtsnāṃ (Vāyo-kṛtsnāṃ)°

【一二】青遍し、Nīla-kṛtsnāṃ (Nīla-kṛtsnāṃ)°

【一三】黃遍し、Pīṭha-kṛtsnāṃ (Pīṭha-kṛtsnāṃ)°

【一四】赤遍し、Lohita-kṛtsnāṃ (Lohita-kṛtsnāṃ)°

【一五】白遍し、Avadāta-kṛtsnāṃ (Odhāta-kṛtsnāṃ)°

【一六】空遍し、Ākāśa-kṛtsnāṃ (Ākāśa-kṛtsnāṃ)

(Rhyas D.: Space; Neumann — Des Reumes Allhe-

it.)

【一七】識遍し、Vijñāna-kṛtsnāṃ (Viññāna-kṛtsnāṃ)

(Rhyas D.: Consciousness; Neumann — Des Bewus-

stseins Allheit.)

【一八】地遍處定、Pṛthivī-kṛtsnāyuktam (sammādhī)

(pṛthivy-kṛtsnāyuktam (S.)) (Rhyas D.: S. 譯はこゝ

に引出すべく、餘り、快明ならず。Neumann — Der

Erde Allheit.)。こゝに地といふは四大種中の抽象的

實の大としての地には非ず。顯形二色を體となす假の

地大である。かくて、この現實の假の地大を以つて、

一切處に遍ずと觀じ、從つて能觀の行相(智のハタラ

キ)も亦一切處に通じ、間隙有ること無しといふが、今

の觀法の要點で、要する處、かくして、全精神を地相

を以つて充たし、その外の意識は驅出して、以て、精

神の清淨、煩惱の盡滅を企圖するのをその要旨とする。

【一九】杙は、木のきり株で、かゝるものゝ多い危地。

【二〇】榛、イバラに似て叢生する一種の木で、總じて



# 十法品第十一

## (一)二種の十法の上

時に、舍利子の、復た、衆に告げて言はく、具壽よ、當さに知るべし、佛は十法に於いて、自ら善く通達し、現等覺し已りて、諸の弟子の爲めに宣說開示せり。我れ等は、今、應に、和合結集して、佛滅度の後、乖諍有ること勿からしむべく、當さに、梵行に隨順するの法律をして、久住して、無量の有情を利樂せしめ、世間の諸の天人の衆を哀愍して、殊勝の義利、安樂を獲せしむべし。十法とは云何。此の中に、略して、二種の十法有り。謂はく、十遍處と十無學法となり。

一、十遍處  
第一遍處  
十遍處とは、云何が十と爲す。具壽よ、當さに知るべし、地遍しと一が想し、是くの如く上・下・傍布・無二・無邊・無際なり。是れ第一遍處なり。

第二遍處  
復た、次に、具壽よ、水遍しと一が\*想し、是くの如く上・下・傍布・無二・無邊・無際なり。是れ第二遍處なり。

第三遍處  
復た次に、具壽よ、火遍しと一が想し、是くの如く上・下・傍布・無二・無邊・無際なり。是れ第三遍處なり。

第四遍處  
復た次に、具壽よ、風遍しと一が想し、是くの如く上・下・傍布・無二・無邊・無際なり。是れ第四遍處なり。

十法品第十一

【九六】十法品第十一、漢譯には、十法品第十一の一と記し、且つ(一)二種の十法の上の記はなく、これは今、新につけし處。

【九七】十遍處 Sang. — S. X. 2. 漢二經缺。A. X. 25 (V. 46); 20. 4 (V. 60); Nettipakaraṇa p. 89; cf. Dhammasaṅgani 202 (p. 41f). 婆沙八五、俱舍二九。

【一〇〇】十無學法 Sang. — S. X. 6. 衆集經十・一。大集法門經一〇・一〇。A. X. 112 (V. 222). 中阿含一八九・M. 117 (III. 76f). 中阿含一七九・M. 78 (II. 29).

【一〇一】十遍處 (Mahāyutpatthi) Dasa kṛtsāyatanāni (Sang. — S. Dasa kasiyapattanāni) (Rhyas D. — 10 objects for self-hypnosis; Neumann — Zehn Orte der Altheit.) 前の八勝處の下に註記せる如くに、八解脫、八勝處の二と共に、三界の煩惱を遠離すべき一具の禪觀の勝法とさるゝ所にして、地、水、火、風、青、黃、赤、白、空、識の十通りに、無邊無二の觀法をなし、以つて、一切對象から食を遠離すること。蓋し、史的には同じく、外道思想からの誘導假來なるべく、やゝ、迷妄的禪觀といふ感もまぬがれざるべし。舊譯には十一遍處とす。

【一〇二】地遍しと一が想し、Pṛthivīkṛtsāṇaṁ ity eke saṁjānate (Pāṭhavi-kṛtsāṇaṁ eko saṁjānāti).

【一〇三】是くの如く、Iti (paṭi — wanting).

【一〇四】上・下・Urdhvaṁ (Uddhaṁ), Adhas (Adho).

【一〇五】傍布・Tiryag. (Tiryak).

【一〇六】無二・Advayaṁ (?)

【一〇七】無邊・Apramāṇaṁ (Apramāṇaṁ).

【一〇八】無際・Mahāvṛtapatthi. Sang. — S. 並びに缺。

【一〇九】水遍し・Apeṇsāṇaṁ (Āpo-kṛtsāṇaṁ).

※「が想し」の想の字を、大正藏、縮藏共に相に作る。

(四) 第四有

情居

「有」色等

「一種想」

「有色」、「有情」、「一種身」は、亦、前に説くが如し。

「一種想」とは、謂はく、彼の有情は唯樂想のみ有るが故に、

「一種想」と名く。

餘の文の例釋

餘は前に説くが如し。

(五) 第五有

情居

「有」色等

「想」無く

「別想無きあり」

「有色」、「有情」は、亦、前に説くが如し。

「想無く」と言ふは、總じて想無きことを顯はす。

「別想無きあり」とは、別して想無きことを顯はす。

此の中には想を以つて上首と爲して、一切の心・心所法の無

きことを顯はすなり。

「無想有情天」

「無想有情天の如し」とは、謂はく、別して無想有情天を顯示

す。

「是れ第五」等

「是れ第五」等は、義、前に説くが如し。

(六) 第六

以下諸

「無」色

「有情居」

「無色」とは、謂はく、彼の有情は無色にして、無色身を施設し、有色の處無く、有色の界無く、色蘊無し。故に「無色」と名

「有」情

「有情」とは前に説くが如し。

「一切の色想を超え」

「一切の色想を超え」等は、八解脱の中に廣く説くが如し。

然れども、此の中に於いては、唯、有漏の受・想・行・識を取り

て「有情居」と爲す。

【九〇】 餘等の文中、「遍淨天の如し」に相當する文は、衆集經—遍淨天是れなり。大集法門經—謂はく三禪天なり。

【九一】 想無く、E<sup>1</sup> Asañño (Skt. Asaññah) (Rhyas D.—Without perception; Neumann—Ohne Wahrnehmung.) 衆集經—今と同。

【九二】 別想無き等、巴文の相應下には Appaṭisaṃvedinā. 蓋しその梵相應字は Apratisaṃvedinā ならざるべからず。もし然らば、「覺受なし」等と譯すべきならんが、衆集經は恰もこの方に同じて、前出の如く、「覺知する所無し」とす。大集法門經は相應の字缺。

【九三】 無想有情天、Deva asaṃjñasattvāḥ (Deva asaññasattā)(Rhyas D.—Unconscious devas; Neumann—Die Götter unbewusst im Wesen.) 衆集經—無想天。大集法門經—無想天。蓋しこれは第四靜慮所攝の無想定(卷三の註參照)を修行せるものが受生せるの天にして、同じて第四禪天に攝し、巴利論典中にも盛に散説せられたる所のものである。

【九四】 別して無想有情天等、大正藏、縮藏等、別して無想有想天等とあるも、無想有情の誤記ならざるべからず。

【九五】 無色、第五識住の論釋下參照。

【九六】 八解脱、前卷所解中の第四解脱の文下をさす。及び、同前に、七識住下の第五識住下の第五識住の論釋等の文參照。

【九七】 唯、有漏のとは、「有情居」の論釋に關する文(し

て、その意味に關しては、前の第一有情居の論釋下の文についでに註を見よ。

の有情と共に伴侶と爲る。時に前生者は、便ち、是の念を作さく、此の有情の類は、是れ我が所化なり。我れは此の類及び餘の世間に於いて、是れ自在者なり、作者なり、化者なり、生者なり、起者なり、是れ眞の父祖なりと。

時に、諸の有情も、亦、是の念を作さく、我れ等有情は是れ彼れが所化なり。彼れは有情及世間の物に於いて、是れ自在者なり、作者なり、化者なり、生者なり、起者なり、是れ眞の父祖なりと。

故に「一想」と名く。

「梵衆天の如し」

「梵衆天の如し」とは、謂はく、此の義の中には、總じて梵衆等の天に生在するものは、種種の身有るも、唯、一想有ることを顯はすなり。

「劫初起位」とは、謂はく、劫の初めて生ずる時なり。

「劫初起位」  
「是れ第二」

「是れ第二」等は義、前に説くが如し。

「有色」、「有情」

「有色」、「有情」は、亦、前に説くが如し。

「(三)第三有情居」  
「一種身」

「一種身」とは、謂はく、彼の有情は一顯色身、一種相、一種形有りて、種種の顯色無く、種種の相無く、種種の形無し。故に

「一種身」と名く。

「種々想」

「種種想」とは、謂はく、彼の有情は樂想、不苦不樂想有り、故に「種種想」と名く。

その他例釋—

餘は前に説くが如し。

り。大集法門經—欲界の人・天なり。

【八一】 是れ第一等、衆集經—是れ初衆生居なり。大集法門經—是れ衆生居なり(數字すべて缺く)。

【八二】 有情居、Sattvāśāna (Sattvāśāna) (Rlys D.—Sphere inhabited by beings; Neumann—Ort der Wesen.) 衆集、大集法門經—衆生居。

【八三】 此の中とは、今は第一有情居—欲界の人・天中のことなれば、その欲界の人・天中の所有のの意。

【八四】 有漏とは、無漏の五蘊では、有情の大體世俗的人情によつて欣樂する所としての今の有情居とならず。それは寧ろ、出世居ともいふべき故に、簡んで、有漏と斷れるもの。

【八五】 一種想とは、同じく七識住の下參照。衆集經—一想。大集法門經—一想。

【八六】 彼處とは、七識住の文中には、「先づ光音等の天衆の同分より没して」と作る。

【八七】 梵衆天、衆集經—梵光音天、大集法門經—初禪天。—七識住下參照。

【八八】 一種身、七識住下參照。衆集經—一身。大集法門經—一身。

【八九】 餘は等といふ中、「光音天の如し」とは、衆集經—「光音天是れなり」。大集法門經—「謂はく、二禪天なり」。



「是れ第一」

の天を顯示す。故に、「人及び一分の天の如し」と名く。  
 「是れ第一」とは、漸次、順次、相續の次第の數の第一たるなり。

「有情居」

「有情居」とは、謂はく、諸の有情の居る所、住する所、依る所、止る所、樂生する所の處なり。即ち、總じて、此の中の所有の有漏の色・受・想・行・識・蘊を「有情居」と名く。

(二)第二有情居

「有色等」

「有色」、「有情」、「種種身」は、義、前に説くが如し。

「一種想」

「一種想」とは、謂はく、諸の有情は時有り、分有りて、此の世界の劫の將さに壞せんとするの時に於いて、多く、上の光音等の天衆の同分中に往生して、彼れに於いて、意成の色身を具足し、根に缺減無く、支分圓滿にして、形顯清淨に、長壽にして久住す。時有り、分有りて、此の世界の劫の初めて成るの時に於いて、下の空中に於いて、空宮殿の歎然として起る有り。一有情有りて、壽と、業と、福との盡きて、彼處より沒して、下の梵世の空宮殿中に生じ、獨一にして侶無く、長壽にして久住す。時に彼の有情は長時住し已りて、歎然として愛を生じ、及び、不樂を生じ、是くの如きの念を作さく、云何が當さに諸の餘の有情をして我が同分を生ぜしめて、我が伴侶と爲らしめんやと。彼の有情の此の心願を起すに當りて、餘の有情の壽と、業と、福との盡きて、復た彼れより沒して、下の梵宮に生ずる有り。前

【一〇】別想無き、巴、Appamāṇavedhino。衆集經—覺知する所無し。

【一一】無想有情天。Devā Animijisattvāh (Devā Anāha-sattā) 漢二經は無想天。

【一二】無色の有情等、第六有情居の文は、七識住の第五及び前卷(一八)の八解脫中の第四解脫の文と同じ。衆集經—復た、衆生有り、空處に住す。大集法門經—「空無邊處天是れ衆生居なり」。

【一三】一切の空無邊處等、第七有情居の文は、同上、第六識住、及び、第五解脫の文に同じ。衆集經—「復た、衆生有り、識處に住す。大集法門經—「識無邊處天、是れ、衆生居なり」。

【一四】一切の識無邊處等、第八有情居の文は、同じく、第七識住及び第六解脫の文に同す。衆集經—「復た、有情有り、不用處に住す。大集法門經—「無所有處天、是れ、衆生居なり」。

【一五】一切の無所有處等、第九有情居は七識住になく、こゝに新加せられたる第二で、而も、八解脫中の第七解脫と完全文の同す所である。衆集經—「復た、衆生有り、有想無想處に住す。大集法門經—「非想非非想處天、是れ、衆生居なり」。

【一六】有色等、卷一七の七識住第一識住下のその文及び註釋參照。衆集經—「或ひは衆生有り。大集法門經—相當文なし」。

【一七】有情、同準に、七識住の下、及び、卷五、參照。漢二經は右註に照順せよ。

【一八】種々身、同準に、七識住の下の等參照。衆集經—若干種身。大集法門經—種々身。

【一九】種種想、同上。衆集經—若干種種想。大集法門經—種々想。

【二〇】人及び等も、同上。衆集經—天及び人は是れな

第八有情居

無色の有情の一切の識無邊處を超え、無所有に入り、無所有處を具足して住するあり。無所有處天の如し。是れ第八有情居なり。

第九有情居

無色の有情の一切の無所有處を超え、非想非非想處に入り、具足して住するあり。非想非非想處天の如し。是れ第九有情居なり。

九有情居の論

(一)第一有情居

「有情」  
「有色」  
「有情」

此の中、「有色」とは、謂はく、彼の有情の有色にして、有色の身を施設し、有色の處有り、有色の界有り、色蘊有るが故に、「有色」と名く。

「有情」とは、謂はく、諦義勝義にては、諸の有情は獲す可らず、得す可らず、所有無く、現有に非ずと雖も、而も蘊界處に依りて有情を假立し、諸の想、等想、施設、言説は轉ず。謂はく、有情、人、意生、儒童、命者、生者、養者、士夫、補特伽羅と。故に「有情」と名く。

「種種身」

「種種身」とは、謂はく、彼の有情は種種の顯色身、種種の相、種種の形有りて、一顯色に非ず、一相に非ず、一形に非ず。故に「種種身」と名く。

「種々想」

「種種想」とは、謂はく、彼の有情は樂想、苦想、不苦不樂想有り。故に「種種想」と名く。

「人及び一分の天の如し」

「人及び一分の天の如し」とは、謂はく、總じて、人及び欲界

【六三】戒禁取、Śīlavataparāmāṣa(梵)、「餘戒、亂戒を至妙の戒たり、禁たり、勝修行哲學たりと謬想する見。一卷十二、五順下分結下參照。

【六四】疑結、Viśikṭhā-s. (Viśikṭhā-s.) (七結の譯中—Rhyś D.—Doubt; Neumann—Festschn. des Zweifelns.) 一卷十二、五蓋、五順分結下等參照。

【六五】嫉、Iṛṣyā (Iṣā+十結の一) 一人の得、興盛等のことに於いて、心の喜ばざること。一法僧伽尼論 1121. 俱舍二十一等參照。又十纏の二(卷二、參照)。

【六六】慳、Matsarya (Macchariyā+十結の一) 一財、法、巧(他人に便利を與へること) 色、得等に於いて相違し、憎著すること一法僧尼論 1122. 俱舍二十一等參照。同じく十纏の一。

【六七】九有情居、(Mahāyūṭpati) Nava sattvāśāḥ (Sarg.-S.—Nava sattvāśā) (Rhyś D.—Nine spheres inhabited by beings; Neumann—Neun Orte der Wesen.) 漢二經は共に九衆生居。衆生の欣樂して住する所の意で、即ち、有情居の名を立てたものにて、已記七識住の外に、非想非非想處(有頂又は第一有)と、第四禪天攝の無想有情天とを加へ、九有情居と稱す。蓋し、七識住の場合に於けるが如く、諸の惡趣は、有情の欣びてその中におけること無く、第四禪天(但し、無想有情天は除き)は、その中の衆生の、常に無想に入らむことを願うて、第四禪天そのものからは出でむことを求むるが故に、右九以外は有情居と立てずと。俱舍八等參照。

【六八】有色の有情等、第一有情居より第四までは、前の七識の第一より第四までと全く同文である。

【六九】想無く等、第五有情居は、則ち、七識住の場合に今新加せられたる所謂無想有情天で、下の論釋下の註を見よ(想無く、Bh. Aśakṣina)。



(八)嫉結

云何が嫉結なる。答ふ、心の忍許せざる、是れを嫉結と名く。

(九)慳結

云何が慳結なる。答ふ、心の祕愷有る、是れを慳結と名く。

二、九有情居

第一有情居

九有情居とは、云何が九と爲す。答ふ、有色の有情の種々身有り、種々想有るあり。人及び一分の天の如し。是れ第一有情居なり。

第二有情居

有色の有情の種々身有り、一種想有るあり。梵衆天の劫初起位の如し。是れ第二有情居なり。

第三有情居

有色の有情の一種身有り、種々想有るあり、光音天の如し。是れ第三有情居なり。

第四有情居

有色の有情の一種身有り、一種想有るあり。遍淨天の如し。是れ第四有情居なり。

第五有情居

有色の有情の想無く、別想無きあり。無想有情天の如し。是れ第五有情居なり。

第六有情居

無色の有情の一切の色想を超え、有對想を滅し、種々想を思惟せず、無邊の空に入り、空無邊處を具足して住するあり。空無邊處天の如し。是れ第六有情居なり。

第七有情居

無色の有情の一切の空無邊處を超え、無邊の識に入り、識無邊處を具足して住するあり。識無邊處天の如し。是れ第七有情居なり。

慢すること。

【五】 慢過慢、Manatimāna—自らより勝れたるに比し、更に自ら勝るとして慢すること。

【五】 我慢、Asmimāna—五取蘊に於いて、我々所を執して、心の慢すること。

【五】 増上慢、Adhimāna—未だ體達しない勝徳を、已に證達するやうに謂ふ慢。

【五】 卑慢(眞諦、下慢)、Umanāna (Omāna)—相手に對し、自らの劣れるは認めても、その程度に應ぜず、唯、僅かのみ劣れるやうに思ひ、且ついふの慢。

【五】 邪慢、Mithyamāna (Miccāmāna)—自ら徳無きを、敢て稱して、有徳と云ふに名く。

【五】 無明結、Avijjā-S. (Avijjā-S.) (七結中の譯—Rhyas D.—Ignorance; Neumann—Fesseln des Nichtwissens.)—卷三、三不善根下、癡等參照。

【五】 見結、Dṛṣṭi-S. (Diṭṭhi-S.) (七結中の譯—Rhyas D.—False opinion; Neumann—Fesseln des Ver-meinens.)

【五】 薩迦耶見、Sakkāya-diṭṭhi (Sakkāya diṭṭhi) 所謂有身見で、幾度か所註の如く、我我所の見。

【五】 邊執見、Antagāhā-diṭṭhi (梵)—已身に關する二個の極端なる見で、その常住(死後)を主張する所謂常見と、同じく斷滅を説く斷見とをいふ。

【五】 邪見、Mithyādiṭṭhi (Micchā-diṭṭhi)—善惡行、その因果等を信ぜぬ謬見。

【五】 取結、Parāmārśa (梵)、雜一八には—(他は同ずるも)—他取結と譯す。捉取の意 (seizing) より、執取する意見の意となり、かくて、今の二見を含むとされしもの。前記の如く、巴文の七結中にはこれは缺く。

【五】 見取、Dassitiparāmārśa (梵)—劣法を無上の理想—解脱涅槃なりと執取する見。



(一)愛結

云何が愛結なる。答ふ、三界の食、是れを愛結と名く。

(二)恚結

云何が恚結なる。答ふ、諸の有情に於いて、損害を爲さむと欲する、内に栽孽を懷く、擾惱を爲さむと欲する、已瞋、當瞋、現瞋、樂うて過患を爲す、極めて過患を爲す、意の極めて憤恚する、諸の有情に於いて、各、相ひ違戾する、過患を爲さむことを欲する、已に過患を爲す、當に過患を爲す、現に過患を爲す、是れを恚結と名く。

(三)慢結

云何が慢結なる。答ふ、七慢類有り、説いて慢結と名く。云何が七と爲す。答ふ、一には慢、二には過慢、三には慢過慢、四には我慢、五には増上慢、六には卑慢、七には邪慢なり。此の七慢類を合して、慢結と爲す。

(四)無明結

云何が無明結なる。答ふ、三界の無智を無明結と名く。

(五)見結

云何が見結なる。答ふ、三種の見を見結と名く。云何が三と爲す。答ふ、一には薩迦耶見、二には邊執見、三には邪見なり。是くの如きの三見を合して見結と爲す。

(六)取結

云何が取結なる。答ふ、二種の取を取結と名く。云何が二と爲す。答ふ、一には見取、二には戒禁取なり。是くの如きの二の取を合して、取結と爲す。

(七)疑結

云何が疑結なる。答ふ、諦に於ける猶豫、是れを疑結と名く。

尙、この結には三結(有身見、疑、戒禁取)、五順上下分結(何れも五法品下参照)、七結(今の九中、取、嫉妬を除き、その代りに有食を加ふ—Sangh. S. VII. 13; A. VII. 8. &c.)、十結(今の九中、取なく、その代りに戒禁取を入れ、愛結を欲食に作り、而して、有食を加ふ—Dhammasangani III. 3ff. Vibhanga p. 391 &c.)等種々あれば照合せよ。

【五】愛結、Anuṇaya-samyojjina (梵=巴)。(七結中の譯—Rhyas D.—Compliance; Neumann—Fesseln der Willfährigkeit.)、又、隨順結(眞諦—俱舍經論)とも譯し、三界の食 raga が心意に隨順し、かくて可愛なるによつて、その名と、その譯とある所である。

【六】恚結、Pratigraha (Pratigraha-S.)同上、Rhyas D.—Opposition; Neumann—Fesseln der Gelästigkeit.)—これの釋文については卷三等参照。因みに、前の愛結は心意隨順の結なりしに對して、これは心意違戾の結で、Pratigraha (Pratigraha) は已註の如く、又、有對の原字なるを注意せよ。かくして、眞諦は(俱舍經論)違逆結と譯す。

【七】慢結、Māna-S. (同上、Rhyas D.—Conceit; Neumann—Fesseln des Dünkels)

【八】七慢類、D. Sutta māna—卷一七参照—cf. Vibhanga, p. 383. 俱舍一九。これに對し、發智論(二〇)には、更に延長的に九慢を説く(同俱舍一九、参照)。俱舍は(一九)、後者は前者より離出すとなすが、已にかく解せらるゝ如く、その關係を留意すべきに足るべし。

【九】慢、Māna—自分が、より劣であり、等であるに於いて、敢えて勝となし、等となして慢するをいふ。

【五〇】過慢、Atimāna—自分に比して、勝れたると等しきとに對し、より勝れたりとし、乃至等しと稱して

「青 現」

「青現」とは、謂はく、此の青色は如是の眼識が所行の境界にして、亦、是れ意識が所行の境界なり。故に「青現」と説く。

「青 光」

「青光」とは、謂はく、此の青色は種々の光明を能く現じ、能く發す。故に「青光」と説く。

餘は前に説くが如し。

「若しは青」等を説くが如く、「若しは黄」等も亦爾なり。

(六〇) (八)  
第六一第  
八解脫の  
例釋

## 九法品第十

## \* 二種の九法

時に、\*舍利子の、復た、衆に告げて言はく、具壽よ、當さに知るべし、佛は九法に於いて、自ら善く通達し、現等覺し已りて、諸の弟子の爲めに、宣説開示せり。我れ等は、今、應さに、和合結集して、佛滅度の後、乖謬有ること勿からしむべく、當さに梵行に隨順するの法律をして、久住して、無量の有情を利樂せしめ、世間の諸の天・人の衆を哀愍して、殊勝の義利、安樂を獲しむべし。九法とは云何。此の中に、略して、二種の九法有り。所謂九結と九有情居となり。

一、九 結

九結とは、云何が九と爲す。答ふ、一には愛結、二には恚結、三には慢結、四には無明結、五には見結、六には取結、七には疑結、八には嫉結、九には慳結なり。

【三〇】 如是とは、色境に對し、眼根を通じて眼識の行じ、緣取、認識するが如く、その色境の中、青色はその眼識中の青を認識すべきものが緣すべきなる故にこの言あり。

【三二】 意識とは、第六識のことなるはいふまでもなけれど、佛教の智識論に従へば已に上座部等以來、前五識は各別に各自の對象を有し、決して、他の領域を犯さねど、獨り、第六・意識の一のみは、獨特の對象として、法處を有する外に、尙、併せて、前五境のすべてをも了別し得とせらる。で、今は則ち、その第六・意識の認識をも併示して、この言を附録せるものに他ならぬ。

【三〇】 青光・Nīla-nirbhāsani (Nīla-nibhāsani)

【三一】 光明・Kīrbhāsa (Nībhāsa) or bhāsa=splendour

※二種の九法とは、原漢典には無し。

【三二】 九結、Sang-s. IX. wanting 漢二經も缺。九結は總じて、巴利聖典の間では喧説せられざりしものの如く、その例を餘り見ず。且つ、毘崩伽論の如きに至るまで、その雜事品中の第九の部に掲げておらぬ。俱舍二十一。雜一八・? (大正四九〇中) = S. \*

【三三】 九有情居、Sang-s. IX. 8. 衆集經一九・一(九法はこの唯一)。大集法門經一九・一(同唯一)。A. IX. 24. (IV. 401) 俱舍九。

【三三】 九結・Nava-samyojanāni (Nava samyojanāni or sañjojanāni) 蓋し、結 samyojana ('', or sañ-fojana) とは samyuj=to bind together なる動詞より來た語で、心を結びて、眞正・本然の活動をなさしめず、かくして、結果に於いて、有情を三界の苦境に、再び、結びつける所謂煩惱を意味し、普通、その煩惱の中、特に、今、舉明する如き九を一團にして九結と稱す。

「如是想有り」

「如是想有り」とは、謂はく、如實の想の正しく現在前するなり。

「第一」

「第二」とは、謂はく、諸の定の中の漸次、順次、相續の次第の数の第一たるなり。

「勝處」

「勝處」とは、謂はく、此の定の中の所有の善の色・受・想・行・識を皆な「勝處」と名く。

(二) 第二勝處

「内に色想有り、外色多を觀す」等とは、謂はく、觀する所の色の、其の量の廣大にして、無邊、無際なるが故に、名けて多と爲し、餘は前に説くが如し。

(三) 第三勝處

「内に色想無く」とは、謂はく、彼れは内の各別の色想到に於て、已に遠離し、已に別遠離し、已に調伏し、已に別調伏し、已に滅没し、已に破壊す。彼れは内の各別の色想到に於て、已に遠離し、已に別遠離し、已に調伏し、已に別調伏し、已に滅没し、已に破壊するに由るが故に、「内に色想無く」と名く。

(四) 第四勝處

「内に色想無く、外の諸の色を觀す、若しは青なり」とは、謂はく、總じて所有の青色、青聚、青衆を顯示す。故に「若しは青なり」と説く。

(五) 第五勝處

「内に色想無く、外の諸の色を觀す、若しは青なり」とは、謂はく、總じて所有の青色、青聚、青衆を顯示す。故に「若しは青なり」と説く。

「青顯」

「青顯」とは、謂はく、此の青色は是れ顯にして、形に非ざるが故に、「青顯」と説く。

【三】 如是想有り、Evaṃsaṃjñi bhūvati (evaṃsaṃjñi hoti) (Rhy D. "Transcending this [object] he is aware of doing so; Neumann - Nimant es also vult.) 衆集經は前の「勝知見を起す」の前に於いて「……是くの如く觀する時、勝知……」と作る。梵巴二文より見ても、この「如是」とは「かくて」(梵. 巴. 自ら好惡の外色を知り、觀することを如實に反省し、思想す)ることの意とすべし。

【四】 第一、Prathamam (Pathamam)

【五】 勝處 Abhibhāvayātana (Abhibhāyātana)

【六】 所有の善の等、俱舍二九に曰はく、八の自性は皆な是れ無貪なり、若し助伴を並すれば五蘊を性と爲す、と。

【七】 内に色想有り(但し、原漢典には「無し」とあるも、誤記ならざるべからず)等、原文概ね前出の故に省く。衆集經の文も概ね同じ。且つ、その外は如上の註記に準ず。

【八】 内に色想無く、Abhiyānam arūpasamjñi (Aj-jhattaṃ arūpasamjñi) (リネン・ヒン氏譯は「無し」を「色想有り」と前同様に作るか。Neumann - Innou ohne Formwahrnehmung.) 衆集經も今と同文。

【九】 外色等は、少を觀するは第三勝處、多を觀するは第四勝處。

【一〇】 若しは青、Nīlani.

【一一】 青顯 Nīla-varipāni (Nīlavappāni)

【一二】 顯 Vappa (Vappa) = colour.

【一三】 形 Saṃsāhāna (梵) = shape or form.

【一四】 青現 Nīla-nidarāṇani (Nīla-nidassanani)



想を未だ遠離せず、未だ別遠離せず、未だ調伏せず、未だ別調伏せず、未だ滅没せず、未だ破壊せず。彼れは内に於ける、各別の色想を未だ遠離せず、未だ別遠離せず、未だ調伏せず、未だ別調伏せず、未だ滅没せず、未だ破壊せざるに由るが故に、

「内に色想有り」と名く。

「外色少を觀ず」

「外色少を觀ず」とは、謂はく、觀する所の色の其の量の甚だ小に、微細にして、多に非ざるが故に、名けて少と爲す。

「若しは好」

「若しは好」とは、謂はく、觀する所の色の、已に、善く、青・

黃・赤・白を磨瑩せるが故に、「若しは好」と名く。

「若しは惡」

「若しは惡」とは、謂はく、觀する所の色の、未だ、善く、青・

黃・赤・白を磨瑩せざるが故に、「若しは惡」と名く。

「彼の〔如きの〕諸の色に於いて、勝知勝見あり」

「彼の〔如きの〕諸の色に於いて、勝知勝見あり」とは、謂はく、即ち、彼の觀する所の諸の色に於いて、已に欲貪を伏し、已に欲貪を斷じ、已に欲貪を超え、彼れに於いて、已に勝知勝見を得、

降伏し、自在にして、都べて所畏無きなり。貴勝の人或ひは貴勝子の、勝知見を以つて、僮僕を執取し、降伏し、自在にして、都べて所畏無きが如く、諸の瑜伽師も、亦、復た是くの如く、觀する所の色に於いて、已に欲貪を伏し、已に欲貪を斷じ、已に欲貪を超え、彼れに於いて、已に勝知勝見を得、降伏し、自在にして、都べて所畏無し。

【一六】 白、Avadāta (Odāta) = white.

【一七】 烏沙斯星色、Uśanśārka-rāga (Ośadhi-tāraka) = the morning star. 原漢典は「又」の如くがある。

【一八】 内に色想有り、Adhyātma-rūpa-sañjñā (Ajñā-tam rūpa-sañjñā) (Rhyas D. - When any one pictures to himself some material feature of his person; Neumann - Innen nimmt man Formen wahr, [einig.]) 衆集經も今の文と完く同し。

【一九】 外色少を觀ず、Bahirdhā rūpaṃ paśyati parittāni (Bahiddhā rūpaṃ passati parittāni) (Rhyas D. - And sees [corresponding] features in others as small; Neumann - Aussen sieht man Formen, wenig.) 衆集經亦同文。

【二〇】 若しは好、Suvarpa (Suvarūpa) (Rhyas D. - Lovely; Neumann - Schöne.) 衆集經一無。

【二一】 若しは惡、Duvārāṇāni (Dubbhāṇāni) (Rhyas D. - or ugly; Neumann - und unschöne.) 衆集經は缺。

【二二】 彼の諸の色等、Tāni khalu rūpāny abhihiyā-jānāty abhihiyā paśyati (Tāni abhihiyāya 'jānam-passanti) (Rhyas D. - [thinks], 'I know, I see'; Neumann - Solche überwindend sagt man sich, 'Ich weiss, ich seh' es') 衆集經「勝知見を起す」

【二三】 瑜伽師、Yogin. 禪觀の修行者。

第六勝處

あり、如是想有る、是れ第五勝處なり。

内に色想無く、外の諸の色を觀ず、若しは黄、黄顯、黄現、黄光なり。猶ほ、羯尼迦花、或ひは、婆羅泥斯の深染黄衣の、若しは黄、黄顯、黄現、黄光なるが如く、内に色想無く、外の諸の色を觀ず、若しは黄、黄顯、黄現、黄光なるも、亦、復た是くの如し。——彼の「如きの」諸の色に於いて、勝知勝見あり、如是想有る、是れ第六勝處なり。

第七勝處

内に色想無く、外の諸の色を觀ず、若しは赤、赤顯、赤現、赤光なり。猶ほ、藥豆時縛迦花、或ひは、婆羅泥斯の深染赤衣の、若しは赤、赤顯、赤現、赤光なるが如く、内に色想無く、外の諸の色を觀ず、若くは赤、赤顯、赤現、赤光なるも、亦、復た是くの如し。——彼の「如きの」諸の色に於いて、勝知勝見あり、如是想有る、是れ第七勝處なり。

第八勝處

内に色想無く、外の諸の色を觀ず、若しは白、白顯、白現、白光なり。猶ほ、烏沙斯、星色、或ひは、婆羅泥斯の極鮮白衣の、若しは白、白顯、白現、白光なるが如く、内に色想無く、外の諸の色を觀ず、若しは白、白顯、白現、白光なるも、亦、復た是くの如し。——彼の「如きの」諸の色に於いて、勝知勝見あり、如是想有る、是れ第八勝處なり。」

八勝處の論釋  
(一)第一勝處  
「内に色想有る」

「内に色想有る」とは、謂はく、彼れは内に於いて、各別の色

abhedgātāni (Baliadhā rīpāni possati appamānāni) = 「外の色の無量なるを觀む。」

【五】第五勝處は翻譯名義集では第三。以下準じて、順に第六が第四、第七が第五、第八が六となつてゐる。

【六】青 Nīla.

【七】青顯 Nīla-varṇāni (N-varṇāni) = indigo in colour.

【八】青現 Nīla-nidarśanāni (N-nidarsanāni) = indigo in visible expense.

【九】青光 Nīla-nirbhāsāni (N-nirbhāsāni) = indigo in lustre.

【一〇】烏莫迦花 Umakapūṣka (sompenna) (Ummā-pūṣpha) = umak (umma) flower (B) 文はこれらの例に「き」一、青、青顯一を繰返す。尙、原漢典には、

烏莫迦花「の如く」の字をおくも、今は省いて讀む。

【一一】婆羅泥斯の Varāṇaseya (Barnaseyyaka) (coming from Bārāṇasi). 婆羅泥斯とは今日のワナレス Benares に、經章成道、初説法の地を共に控

有名な所。今の衣は一種のモスリンなりと。

【一二】深染青衣の字は、B) には唯、Ubaho bhāga-vimāṭṭham (Rhyas D. - Delicately finished on both sides) 梵 (Māhāvīryapatti) には「唯」衣 Vastraṇ

【一三】黄 Pīta (梵 = ED) = yellow.

【一四】羯尼迦花 Karṇikāra-pūṣka (Karṇikāra-pūṣpha) = karṇikāra (Karṇikāra) flower. 此の下にも、原

漢典は「の如く」をおく。

【一五】婆羅泥斯等は、前の場合と同じ。

【一六】赤 Lobita (Lohitakāni) = red.

【一七】藥豆時縛迦花 Bandhujīyaka-pūṣka (B-bandhujīyaka) — 原漢典は「の如く」をおく。

## 卷の第十九

## (二) 諸の八法の二

## 10. 八勝處

八勝處とは、云何が八と爲す。答ふ、内に色想有り、外色

## 第一勝處

少を觀ず、若しは好、若しは惡なり。彼の諸の色に於いて、勝知勝見あり、如是想有る、是れ第一勝處なり。

## 第二勝處

内に色想有り、外色多を觀ず、若しは好、若しは惡なり。彼の諸の色に於いて、勝知勝見あり、如是想有る、是れ第二勝處なり。

## 第三勝處

内に色想無く、外色少を觀ず、若しは好、若しは惡なり。彼の諸の色に於いて、勝知勝見あり、如是想有る、是れ第三勝處なり。

## 第四勝處

内に色想無く、外色多を觀ず、若しは好、若しは惡なり。彼の諸の色に於いて、勝知勝見あり、如是想有る、是れ第四勝處なり。

## 第五勝處

内に色想無く、外の諸の色を觀ず、若しは青、青顯、青現、青光なり。猶ほ烏莫迦花、或ひは婆羅痾斯の深染青衣の、若しは青、青顯、青現、青光なるが如く、内に色想無く、外の諸の色を觀ず、若しは青、青顯、青現、青光なるも、亦、復た是くの如し。——彼の「如きの」諸の色に於いて、勝知勝見

【一】 諸の八法の二は 原漢譯は八法品第九の二に作る。

【二】 八勝處 (Mahāyutputti) Aśīv abhihava-yatanāni (Sang. — S. Añña abhihavyatanāni) (Rhyas D. — Eight positions of mastery; Neumann — Acht Grade der Ueberwindung) 衆集經一缺。大集法門經一八勝處。大智度論二十一には青捨(八解脫を初門と爲し、勝處を中行と爲し、一切處(十偏處—十法品參照)を成就と爲す云云と記し、かくてこの三は三界の食を遠離すべき一具の觀觀の勝法とさるゝも、實をうば、三者各に、本來獨立的觀法の形式として佛教内に恐らくは外道から誘導せられた處を、かく、整理組織した所とすべし。(abhihavyatana = abhihava + yatanāni, — abhihava = overcoming, powerful, overpowering) 因に Mahāyutputti では、今の第二、第三の二なく、順送りにして、別の第七、第八の二勝處を加ふ。

【三】 内に色想等の第一勝處の原文を譯出せば、(梵文和譯、楠亮三郎博士作、翻譯名義大集 3. 113b. 等參照。梵巴二文は極く些少の相違を認めらるゝ)。「一人あり、己身(内)上の色に關する想有りて、諸の外の色に關して、好惡色なるを觀る。而もこれらの諸の色に關し、勝自在を得て知り、勝自在を得て見(巴は—而もこれらの諸の色に關し、勝自在を得つゝ、我れは知り、我れは見るとて)、是の如きの想あるものとなる。是れ第一勝處なりと。——他の勝處は大體準すべき故に、特異の箇所のみ譯を出さむ。

【四】 外色多を觀ず、Bahiddha rūpaṃ paśyati 等。



て暫時不生ならしめ、已生の想受をして暫時息滅せしむ。此れを齊<sup>なり</sup>りて想受滅解脫定に入ると名く。

「第八」とは、謂はく、諸の定中の漸次、順次、相續の次第の數を第八と爲すなり。

「解脫」とは、謂はく、此の定中の諸の解脫、異解脫、異極解脫、已解脫、當解脫、是れを「解脫」と名く。

復た次に、若し法の、想の微細なるを因と爲し、想の微細なるを等無間と爲し、想不和合の義、非成就の義に由る、是れを「解脫」と名く。

此の中、想受滅解脫定とは、云何が想受滅、云何が想受滅解脫、云何が想受滅解脫定にして、想受滅解脫定と説くや。答

ふ、「想受滅」とは、謂はく、想及び受の滅し、寂し、靜し、没せる、是れを「想受滅」と名く。

「想受滅解脫」とは、謂はく、想と受との滅せる諸の解脫、異解脫、異極解脫、已解脫、當解脫、是れを「想受滅解脫」と名く。

「想受滅解脫定」とは、謂はく、想受滅、及び、想受滅解脫の隠せず、背せず、現前して、自在身の證得する所なる、是れを

「想受滅解脫定」と名く。

【三五】第八、Aśīṣṇo (Aśīṣṇo.)

【三六】解脫等とは、上の八解脫總註下に、婆沙の文を引きていへる棄背、即ち、煩惱等を棄背せるその一、一の棄背、乃至は、その棄背と同時に證なる擇滅涅槃のこと。蓋し、擇滅については、異説あれども、煩惱の數に従つて無數なりといふが有部の正義である。

【三七】若し法の等、俱舍二九に曰はく、微々心の後に此の定は現前す。前は想心に對して已に微細と名く。此れは更に微細なり。故に微々と曰ふ。是くの如きの心に次ぎて、滅盡定に入る云云。

【三八】等無間、Samantā (巴) 梵 彼々の法の無間に此々の諸の生ずること、又は前念の心心所の體の一なるが如く、後念所起の心心所も、その體がまた一にして(等)、而も二者の間に第三の法の間入することなきをいふ。

【三九】不和合とは、想の和合、現前せぬ義で、この想受滅定は非想非々想處攝なること上言の如くなれば、その非想非々想處の非想に應ぜる所言となすべし。

【四〇】非成就とは、想は和合現前はせぬが、それかといつて、完く想を、可能的にまで、遠離棄背し去れるものでもないとの意で、畢竟、同上、非非想の所應の言とすべし。

【四一】想受滅、Sañña-vedayita-nirodha (Sañña-vedayita-nirodha.)

【四二】想と受との等、右の解脫等に關する註を参照せよ。

【四三】自在身とは、想受滅し、諸の擾亂靜まりたる自在の身の意なるべく、Santana-kāya、又は類語にてもありしか。

能く、非想非々想處解脫定に證入す。

【第七】

【第七】とは、謂はく、諸の定中の漸次、順次、相續の次第の數を第七と爲すなり。

【解 脫】

「解脫」とは、謂はく、此の定中の所有の善の受・想・行・識を皆な「解脫」と名く。

（八）第八解 脫

「一切の非想非非想處を超え」

「一切の非想非非想處を超え」とは、云何が一切の非想非々想處を超ゆる。答ふ、將さに想受滅解脫に趣入せむと欲するの時、一切の非想非々想處の想に於いて、皆な能く超越し、平等超越し、最極超越す。是の故に、説いて、一切の非想非々想處を超ゆと爲す。

「想受滅に入り、身作證し、具足して住す」  
「想受滅解脫の加行」

「想受滅に入り、身作證し、具足して住す」とは、問ふ、此の想受滅解脫の加行は云何。觀行を修する者は、何の方便に由りて、想受滅解脫定に入るや。答ふ、初修業者は、創めて觀を修するの時、一切行に於いて、造作を願はず、思覺を欲せずして定に入り、但だ、是の念を作さく、云何が當さに未生の想受をして暫時不生ならしめ、已生の想受をして暫時息滅せしむべきやと。彼れは諸の行に於いて、造作を願はず、思覺を欲せずして定に入り、但だ、是の念を作さく、云何が當さに未生の想受をして暫時不生ならしめ、已生の想受をして暫時息滅せしむべきやと。故に心の所願に隨つて、時有りて能く未生の想受をし

【二〇】第七、Saptamo (Sattamo.)

【二〇】一切の非想非非想處等、Sa sarvaṇo naivasa-njāṇāsaṃjāṇāyatanam samatikkramaṃ. (Sabbaso nevaṇṇā-nāsaṃjāṇāyatanam samatikkramaṃ) 衆集經

「有想無想處を度し。」

【二一】想受滅等、Saṃjāvedhāyānirodhāni kāyena saṃjāpatti (卷三、三善尋下。俱舍五等を見よ) のこと、これは、廣くは非想非非想處定の一分に攝せられ(卷一七、七識住下——後尾——の文参照)、九次第定(長阿含布吒婆羅經參照)の時には、又、その最頂とせらる。

【二三】造作とは、Saṃkalpa (Saṃkappa) なるべく、思の心所は心をして、能く、造作あらしむ等といふが如く、思念し、意欲するの義。(Saṃkalpa = wish, intention &c.)

【二四】思覺も同じて、思念し、覺受し、領納すること。

龜・障と爲すべく、後に應さに非想非々想處を思惟して靜・妙・離と爲すべし。彼れは既に無所有處を思惟して苦・龜・障と爲し、亦、復た非想非々想處を思惟して靜・妙・離と爲すが故に、心、便ち、散動して、諸の相に馳流し、一趣にして一境に繫念し、相續して、非想非々想處を思惟すること能はず。彼れは心の散動して、諸の相に馳流し、一趣にして一境に繫念し、相續して、非想非々想處を思惟すること能はざるが故に、未だ住心にして、非想非々想處解脫定に入ること能はず。「便ち、其の」散動馳流の心を攝せむが爲めの故に、専ら繫念して、非想非々想處の相を思惟す。此の相を思惟して、精勤勇猛にして、乃至、心をして相續して久住せしむ。

斯の加行に由りて、非想非々想處解脫定に入る。

修觀行者の非  
想非想處解  
脫定に入る方  
便

精勤して此の加行を、數、習し已りて、復た進んで此の定の方便を修行す。謂はく、加行の引生する所の道に於いて、數、習し、數、修し、數、多く所作するなり。既に加行の引生する所の道に於いて、數、習し、數、修し、數、多く所作すれば、心、便ち、安住し、等住し、近住し、相續して、一趣にして一境に繫念し、此れは是れ非想非々想處なりと思惟す。心の安住し、等住し、近住し、相續して、一趣にして一境に繫念し、是くの如きの非想非々想處を思惟し、二無く、轉無きに由りて、便ち、



方便を修行す。謂はく、加行の引生する所の道に於いて、數、習し、數、修し、數、多く所作するなり。既に加行の引生する所の道に於いて、數、習し、數、修し、數、多く所作すれば、心、便ち、安住し、等住し、近住し、相續して、一趣にして一境に繫念し、此れは是れ無所有處なりと思惟す。心の安住し、等住し、近住し、相續して、一趣にして一境に繫念し、是くの如きの無所有處を思惟し、二無く、轉無きに由りて、便ち、能く無所有處解脫定に證入す。

〔第六〕とは、謂はく、諸の定中の漸次、順次、相續の次第の數を第六と爲すなり。

〔解脫〕とは、謂はく、此の定中の所有の善の受・想・行・識を皆な〔解脫〕と名く。

〔一切の無所有處を超え〕とは、云何が一切の無所有處を超ゆなる。答ふ、將さに非想非々想處に趣入せむと欲するの時、一切の無所有處に於いて、皆な能く超越し、平等超越し、最極超越す。是の故に、説いて、一切の無所有處を超ゆと爲す。

「非想非々想處に入りて具足して住す」  
非想非々想處解脫の加行

〔非想非々想處に入りて、具足して住す〕とは、問ふ、此の非想非々想處解脫の加行は云何。觀行を修する者は、何の方便に由りて、非想非々想處解脫定に入るや。答ふ、初修業者は、創めて觀を修するの時、先きに應さに無所有處を思惟して、苦

【三五】 無所有に入り……Nati kīḍa ity ākīḍanya-  
yatanaṃ upasampajja viharati. (Natti kīḍoti  
ākīḍaṇṇiyatanaṃ upasampajja viharati.) 衆集經  
不用處に住す。

【三六】 苦・麁・障、前には麁・苦・障の順にす。

【三七】 第六、Paṇṇo (Oḍḍhilo.)

【三八】 一切の無所有處を超え、Sa sarvaṇa ākīḍa-  
ṇyayatanaṃ samutikkramaṃ (Sabbaso ākīḍaṇṇā-  
yatanaṃ samutikkramaṃ) 衆集經「不用處を度  
し。」

【三九】 非想非非想處等、Naṭṭasaṃjāṇasampajāya-  
tanaya upasampadaya viharati (nevaṇṇāṇā-nāṇā-  
yatanaṃ upasampajja viharati) 衆集經「有想無  
想處に住す。」

〔六〕第六解  
「一切の識無邊處を超え」

「一切の識無邊處を超え」とは、云何が一切の識無邊處を超ゆる。答ふ、將さに無所有處に趣入せむと欲するの時、一切の識無邊處に於いて、皆な能く超越し、平等超越し、最極超越す。是の故に、説いて、一切の識無邊處を超ゆと爲す。

「無所有に入り、無所有處を具足して住す」

「無所有に入り、無所有處を具足して住す」とは、問ふ、此の無所有處解脫の加行は云何。觀行を修する者は、何の方便に由りて、無所有處解脫に入るや。答ふ、初修業者は、創めて觀を修するの時、先きに應さに識無邊處を思惟して苦・龜・障と爲すべく、後に應さに無所有處を思惟して靜・妙・離と爲すべし。彼れは既に識無邊處を思惟して苦・龜・障と爲し、亦、復た無所有處を思惟して靜・妙・離と爲すが故に、心、便ち、散動して、諸の相に馳流し、一趣にして一境に繫念し、相續して、無所有處を思惟すること能はず。彼れは心の散動して、諸の相に馳流し、一趣にして一境に繫念し、相續して、無所有處を思惟すること能はざるが故に、未だ住心にして、無所有處解脫定に入ることは能はず。〔故に、其の〕散動馳流の心を攝せむが爲めの故に、専ら繫念して、無所有處の相を思惟す。此の相を思惟して、精勤勇猛にして、乃至、心をして相續して久住せしむ。

修觀行者の無所有處解脫定に入る方便

斯の加行に由りて、無所有處解脫定に入る。精勤して此の加行を、數、習し已りて、復た進んで此の定の

滿定によつて、下地を龜等と觀じ、上地を靜等として願求するものである。而して、今いふ所は、——第四禪は尙、龜 *fourth* で淨妙に非ず、故に、それは未だ妙に非ずして、苦なり、されど、然るに拘らず、人はこれに満足して、とかくに上を欣求せざるが故に、これ正しく障ありと觀じること。

〔三八〕靜・妙・離とは、右の反對に、空無邊處が、諸の煩惱擾亂を離れて、靜 *static* (又は淨) なり。かくて一切の內的の患なきを以て妙、*bravita* なり。同じく外の患の一切離脫せられたるを以て離 *nibbanata* なりと觀すること。

〔三九〕第四、*Caturtho* (*Caturtho*)

〔四〇〕受・想・行・識とは、第三解脫までは四禪關係のものなりし故に、尙、色關係ありしが、今や、第四解脫以上は無色定關係の故に、色なく、よつて、今も五蘊中の四無色蘊のみをあぐ。俱舍二九に曰はく、四無色解脫は四無色の定善を以て性とす。無記と善とに非ず。〔是れは〕性じやうの微劣なるが故に。亦、散善に非ず。〔是れは〕性じやうの微劣なるが故に。今は前に同じて、その助伴を并せしめたものである。

〔四一〕一切の空無邊處を超え、*Sa sarvasā ākāśānāntaryāyatanam samatikkramaṃ* (衆集經—空處を度)。

〔四二〕無邊識に入り等、*Anantaṃ vijāṇaṃ itī vijāṇānāntaryāyatanam upasampadya viharati* (Anantaṃ vijāṇaṃ itī vijāṇānāntaryāyatanam upasampadya viharati) 衆集經—識處に住す。

〔四三〕第五、*Pañcama* (〃)

〔四四〕一切の識無邊處を超え、*Sa sarvasā vijāṇānāntaryāyatanam samatikkramaṃ* (衆集經—度識處)。



處を思惟すること能はず。彼れは心の散動して諸の相に馳流し、一趣にして一境に繫念し、相續して、識無邊處を思惟すること能はざるが故に、未だ住心にして識無邊處解脫定に入ること能はず。〔仍つて、其の〕散動馳流の心を攝せむが爲めの故に、専ら繫念して、識無邊處の相を思惟し、此の相を思惟して、精勤勇猛にして、乃至、心をして相續して久住せしむ。

斯の加行に由りて、識無邊處解脫定に入る。

觀行を修する者の識無邊處解脫定に入る方便

精勤して此の加行を、數、習し已りて、復た進んで此の定の方便を修行す。謂はく、加行の引生する所の道に於いて、數、習し、數、修し、數、多く所作するなり。既に加行の引生する所の道に於いて、數、習し、數、修し、數、多く所作すれば、心、便ち、安住し、等住し、近住し、相續して、一趣にして一境に繫念し、此れは是れ識無邊處なりと思惟す。心の安住し、等住し、近住し、相續して、一趣にして一境に繫念し、是くの如きの識無邊處を思惟し、二無く、轉無きに由りて、便ち、能く識無邊處解脫定に證入す。

〔第五〕とは、謂はく、諸の定中の漸次、順次、相續の次第の數を第五と爲すなり。

〔解脫〕とは、謂はく、此の定中の所有の善の受・想・行・識を皆な「解脫」と名く。

〔二七〕四識身相應とは、卷一七參照。前の色想を除く故に、(外界關係の前五識中の) 殘る耳鼻舌身の四識相應の想をいふの意。

〔二八〕五識身相應とは、右色想を上で除外したとせず、かくて外界關係の全前五識相應の想をいふとする説。

〔二九〕瞋恚相應とは、有對想は原に *Paṭigha* (*Paṭigha* と稱し、この原字は又七隨眠等の場合の瞋恚に當る字の故に、文字の上から釋して、かく説くものである。〔三〇〕此の義の中等の評取の説は前の七識住の下のと同し。

〔三一〕有對想を滅し、*Paṭighasaṃjñānaṃ astaragāmaṇaṃ* (*Paṭighasaṃjñānaṃ attharagāmaṇaṃ*)。大集法門經「瞋恚想を滅し」(卷一七、參照)。

〔三二〕種々想 *Nānāvyaśajjāna* (*nānāvyaśajjāna*)

〔三三〕有覆纏者とは、覆 *Māraṇa* (梵) の纏 (卷二の註參照) あるもの (自の罪をかくさんとする十纏中の一罪) といふ意ではなく、有覆纏は即ち *Parivara-dāna* (= *overfunctioned*) で、尙、惑纏、惑縛のあるものの意なるべし。

〔三四〕種々想を思惟せず、*Nānāvaśajjānaṃ amānusekharā* (*Nānāvaśajjānaṃ amānusekharā*) 此句、漢二經、殊に衆集經) は缺。

〔三五〕無邊空に入り等、*Anantaṃ ākāśaṃ ity ākāśānantaṃ upasampadya vitarati* (*Anantaṃ ākāśaṃ ti ākāśānantaṃ upasampadya vitarati*)。衆集經「住空處解脫。

〔三六〕空無邊處解脫定は、空無邊處解脫を具足して住すべき所以の定。

〔三七〕愈・苦・障とは、次の靜・妙・離と共に、有漏の六行觀といはれる觀法の形式で、凡夫がその有漏心による



念し、此れは是れ空無邊處なりと思惟す。心の安住し、等住し、近住し、相續して、一趣にして一境に繫念し、是くの如きの空無邊處を思惟して、二無く、轉無きに由りて、能く空無邊處解脫定に證入するなり。

「第四」とは、謂はく、諸の定中の漸次、順次、相續の次第の數を第四と爲すなり。

「解脫」とは、謂はく、此の定中の所有の善の受・想・行・識を皆な「解脫」と名く。

〔五〕第五解脫——  
「一切の空無邊處を超え」

「一切の空無邊處を超え」とは、云何が一切の空無邊處を超ゆる。答ふ、將さに識無邊處に趣入せむと欲する時、一切の空無邊處想に於いて、皆な能く超越し、平等超越し、最極超越す。是の故に説いて、一切の空無邊處を超ゆと爲すなり。

「無邊識に入り識無邊處を具足して住す」  
識無邊處解脫の加行

「無邊識に入り、識無邊處を具足して住す」とは、問ふ、此の識無邊處解脫の加行は云何。觀行を修する者は、何の方便に由りて、識無邊處解脫定に入るや。答ふ、初修業者は、創めて觀を修するの時、先きに應さに空無邊處を思惟して眞・苦・障と爲すべく、後に應さに識無邊處を思惟して靜・妙・離と爲すべし。彼れは既に空無邊處を思惟して苦・眞・障と爲し、亦、復た識無邊處を思惟して靜・妙・離と爲すが故に、心、便ち、散動して諸の相に馳流し、一趣にして一境に繫念し、相續して、識無邊

大乘義章一三。法華玄義四上、その他。

【一九】第一、Prahmo (pahlmo)

【二〇】諸の定中とは、八の諸解脫定中の意。

【二一】解脫、Vimokṣah (Vimokho)

【二二】所有の善の等、前三解脫はすべて無貪を性とし、貪を治す。されど、その同時の一切の條件、即ち、所謂助伴を并すれば、皆な五類を性とすと説く（俱舍二九、その他參照）。

【二三】第二、Dvityo (dutyō)

【二四】淨解脫、śubham vimokṣam (Vibhanga—Subhan tveva adhimutto)

【二五】加行、Paryoga (Paryoga) = preparation, practices,

【二六】淨解脫定とは、右淨解脫を身作證し、具足して住すべき所以としての定。

【二七】取るは、觀じ、緣取るの意。

【二八】青嚴具相とは、青色の嚴具の相の意。

【二九】道、Marga (Marga)とは、加行引生の智の意と解すべし。

【三〇】黄・赤・白とは、以上は専ら青相觀によつてとけるが、同時に、黄相觀、赤相觀、白相觀もなしうと例釋せるもの。

【三一】第三、Tṛtīyo (Tutyō)

【三二】一切の色想等、Sa dāryaṇo rūpaṇaṁ jñānam samatikkamā (sadbhavo rūpa-saññānaṁ samatikkamā) の句、卷一七の七識住、第五識住の下の論釋の文參照。衆集經「色想を度し」。

【三三】眼識身相應等、卷一七の第五識住の釋文には、唯「一切の眼識身相應の想」とのみいふ。

【三四】有對想、卷一七參照。Pratighasamjñā (Prati-ghasamjñā)

空無邊處解脫  
の加行

「無邊空に入り、空無邊處を具足して住す」とは、問ふ、此の空無邊處解脫の加行は云何。觀行を修する者は、何の方便に由りて、空無邊處解脫定に入るや。答ふ、初修業者の、創めて觀を修する時は、先きに應さに第四靜慮を思惟して龜・苦・障と爲すべく、後に應さに空無邊處を思惟して靜・妙・離と爲すべし。彼れは既に第四靜慮を思惟して龜・苦・障と爲し、亦、復た、空無邊處を思惟して靜・妙・離と爲すが故に、心、便ち、散動して、諸の相に馳流し、一趣にして一境に繫念し、相續して、空無邊處を思惟すること能はず。彼れは心の散動して諸の相に馳流し、一趣にして一境に繫念し、相續して、空無邊處を思惟すること能はざるが故に、未だ住心にして空無邊處解脫定に入るに、専ら繫念して空無邊處の相を思惟し、此の相を思惟して、精勤勇猛にして、乃至、心をして相續して、久住せしむ。

斯の加行に由りて、空無邊處解脫定に入る。

空無邊處解脫  
定に入る方便  
の修行

精勤して此の加行を數、習し已りて、復た進んで此の定の方便を修行す。謂はく、加行が引生ずる所の道に於いて、數、習し、數、修し、數、多く所作するなり。既に加行の引生ずる所の道に於いて、數、習し、數、修し、數、多く所作すれば、心、便ち、安住し、等住し、近住し、相續して、一趣にして一境に繫

【二七】一切の空無邊處等、同上、第六識住の文に照せよ。

【二八】一切の識無邊處等、同上、第七識住の文参照。

【二九】若し有色のとは、前記の梵巴の文を直譯せば、「有色のものが、諸の色を觀す」と。

【三〇】内とは、例によつて、己身の上に於るの意。

【三一】各別の色想とは、己身の上の諸の色を各別に觀じて、色想有り、かくして、貪あること。

【三二】勝解力、俱舍四に曰はく、勝解とは謂はく境に於いて印可す。原には *Adhimokṣa-bhāna* (*Adhimokṣa-bhāna*) と記す。

【三三】青瘀等、卷二、卷六等参照。所謂不淨觀の九想(巴利十不淨中の第一で、一切衆生は死して日や風にさらわれ、變色すべきことを觀す。(俱舍二二等参照。Vināla, 梵)。

【三四】膿爛、*Vipīṇa*、同上、膿爛、腐敗すること。

【三五】破壞、*Vijāṇama*、同上、死屍の破壞すること。

【三六】離散、*Vikṣipta*、同上、死屍の諸部分の散亂すること。

【三七】啄噉、*Vikāṭita*、同上、鳥獸の來て啄噉すること。

【三八】異赤、*Vilūta*、血塗とも記し、血肉地に塗ること。

【三九】骸骨、*Vidaṅṭha*、(もしこの梵字に當らば、死屍の焚燒せられて、骨の灰土に歸すること)。

【四〇】骨鎖、*Pāṣṭhi* (同上、もしこの梵字に當らば、死屍の血肉已に盡きたる骨格のこと)。

備考、以上、實は傳によつて、諸説や、紛糾せるものがあつて、充分快明には註釋し難し。必要に應じ、下記本文獻を點見すべし。——智度論二十一。四十四。



相應の諸の想、等想、乃至、廣く説いて、是れを「有對想」と名く。

## 第二説

復た次に、有るが説かく、五識身相應の諸の想、等想、乃至、廣く説いて、是れを「有對想」と名くと。

## 第三説

復た次に、有るが説かく、瞋恚相應の諸の想、等想、乃至、廣く説いて、是れを「有對想」と名くと。

## 本論の評取

今、此の義の中には、四識身相應の諸の想、等想、乃至、廣く説いて、是れを「有對想」と名く。

## 「有對想を減し」

此の定中に入る時は、彼の「如きの」有對想を已に斷じ、已に遍知し、已に遠離し、已に別遠離し、已に調伏し、已に別調伏し、已に滅没し、已に破壊す。是の故に説いて、「有對想を減し」と爲す。

## 「種々想」

「種々想を思惟せず」とは、云何が「種々想」なる。答ふ、有覆纏者が所有の染汚の色想、聲想、香想、味想、觸想と、諸所有の想の若しは不善なると、諸所有の想の若しは非理が所引なると、諸所有の想の能く定を障礙すると、是くの如きの一切を「種々想」と名く。

## 「種々想を思惟せず」

此の定中に入るの時は、「此の」種々想に於いて、引發せず、隨引發せず、等引發せず、思惟せず、已思惟せず、當思惟せず。斯れに由るが故に、「種々想を思惟せず」と説く。

【一〇】彼れは等、巴は、順 Anurohā (Complanos) も碍 (virohā) 散 vādhupā 滅 atthagatā もなしと。

【一七】世の邊等、巴、Bhavasā Pargā (有二三有を超えたる) と。

【一八】八解脫 (Mahāyūṭṭhi) Añña vimokkāḥ (Sang—S. Añña vimokkā) (Rhyas D.—8 delivernices; Neumann—Acht Freirungen.) 漢二經八解脫。禪觀の一種で、三界の煩惱を斷盡、解脫する所以の勝方便とせらるるもの。又八背捨と稱す。染汚八四に曰はく、棄背の故に解脫と名く。何等の解脫が何等の心を棄背するや。答ふ、初二解脫は色貪心を棄背し、第三解脫は不淨觀の心を棄背し、四無色處解脫は各自に次下地の心を棄背し、想受滅解脫は一切有所緣心を棄捨す。故に棄背の義は是れ解脫の義なりと。

【一五】若し有色等、Rūpi rūpāni paśyati. (Rūpi rūpāni paśati.) (二歐譯は長文、譯略す) 衆集經「色を觀ず。大集法門經「内に色想有りて、外色を觀ず。」

【一六】内に等、Adhyātman nupasanujā bahirūpāni paśyati (Ajjhattam rūpa-saññi eko bahi—adha rūpāni paśati.) 衆集經「内に色想無くして外色を觀ず。大集法門經「同文。」

【一七】淨解脫等、Sūbhan vimokkām kīyena sāka—ktitvopasamjāda viharanti 衆集經「淨解脫。大集法門經「淨解脫を具足して住す。」(Sang—S. の文は今とち異り。Vibhaṅga—Sūbhan tveva adhi—mutto hoti.)

【一八】一切の色想等、以下は各長文の故に、必要に應じ、下の句句、言々の論釋の下に、諸傳の列記すべきをあげし。因にこの文は前の卷一七、七識住中、第五識住下の文と照合せよ。



住し、近住し、相續して、一趣にして一境に繫念し、青相を思惟して二無く、轉無きに由りて、便ち、能く淨解脫定に證入するなり。

黄・赤・白三觀の例釋

青相を觀するが如く、<sup>101</sup>黄・赤・白を觀することも、其の所應に隨つて、亦、復た是くの如し。

【第三】

<sup>101</sup>第三とは、謂はく、諸の定中の漸次、順次、相續の次第の數を第三と爲すなり。

【解脫】

「解脫」とは、謂はく、此の定中の所有の善の色・受・相・行・識、是れを「解脫」と名く。

【第四解脫——色想】

【第一說】

「一切の色想を超え」とは、云何が「色想」なる。答ふ、眼識身相應の諸の想、等想の性、現想の性、已想の性、已現想の性、當想の性、當現想の性、是れを色想と名く。

第二說

復た次に、有るが説かく、五識身相應の諸の想、等想、乃至、廣く説いて、是れを「色想」と名くと。

評取

今、此の義の中には、<sup>105</sup>眼識身相應の諸の想、等想、乃至、廣く説いて、是れを「色想」と名く。

「一切の色想を超え」

此の定に入る時は、彼の「如き」の色想到に於いて、皆な能く超越し、平等超越し、最極超越す。是の故に「一切の色想を超え」と説く。

【有對想】  
【第一說】

「有對想を滅し」とは、云何が「有對想」なる。答ふ、<sup>106</sup>四識身

同・*Cetana dukkha*.

【二】樂・*Sukha* (7. *Sukha*) (*Rhys D. — Pleasant; Nemann — Wohl*) 漢一經一ハ・樂。

【三】身及び心の樂・身樂は巴・*Kāyikaṅkha*. 心樂は・*Cetasika Sukha*.

【四】世尊の云・A. VIII. 5. (IV. p. 159); 6. (IV. 159 f.)

【五】得つ等・*Nyāyika* (右巴增一譯中) — *Gewinn* (得)・*Verlust* (非得)・*Verehrung* (稱)・*Vernichtung* (譏)・*Lob* (譽)・*Fidel* (毀)・*Glick* (樂) und *Unglick* (苦)。

【六】無常にして等の一句、原漢文の無常意生欲の下三字は果して如何に讀むべきか。今は暫らく、意生 (*Manuṣja* = man or human being) の欲の對象、又は、欲の所生の意で、文の如く讀めるものである。巴利相應文は *ete anicci manuṣeṣu dhammā nassatā vipariṇāmadhammā* といひて「これら(得以下の八)は無常なり、人 *Manuṣeṣu* (即ち、今の論に意生といふもの) 中に於る法にして、非常性なり、變易法たり」と。

【七】智者、巴・*Samadā* (*Sattimā* *samedho* 思慮ある賢者は「と記す)。

【八】如實に知りとは、巴では *Ette an katiyā* (*Nyāyika* durch *sehnent*) 「これをよく知し巴」に當るか。

【九】現見して等・巴・*Avekkanti vipariṇāmadhammā*. (*Nyāyika* durch *Erkennt sie als dem Wechsel unterworfen*) 「變易法を伺察す」に當るか。

【十】愛と非愛との法に於いてとは、同上・*Itthassa dhammā, anitthanto*.

衣、青嚴具相を取り、或ひは所餘の種々の青相を取る。

既に是くの如きの諸の青相を取り已りて、勝解力に由りて、此の色は是れ某の青相と思惟し、想念し、觀察し、安立し、信解す。彼れは既に是くの如く勝解力に由りて、此の色は是れ某の青と思惟し、想念し、觀察し、安立し、信解するが故に、心、便ち、散動して諸の相に馳流し、一趣にして一境に繫念し、【此の色は是れ青にして餘に非ず】と思惟すること能はず。彼れは心の散動して諸の相に馳流し、一趣にして一境に繫念し、【此の色は定むで是れ青】と思惟すること能はざるが故に、未だ住心にして、淨解脫定に入ること能はず。「故に、其の」散動馳流の心を攝せむが爲めの故に、一の青相に於いて繫念思惟す。謂はく、此れは是れ青にして、非青相に非ずと。此の相を思惟して、精勤勇猛にして、乃至、心をして相續して久住せしむ。

斯の加行に由りて、淨解脫定に入る。

修觀行者の淨  
解脫定に入る  
方便

精勤して此の加行を數、習し已りて、復た進んで此の定の方便を修行す。謂はく、加行の引生ずる所の道に於いて、數、習

し、數、修し、數、多く所作するなり。既に加行の引生ずる所の道に於いて、數、習し、數、修し、數、多く所作すれば、心、便ち、安住し、等住し、近住し、相續して、一趣にして一境に繫念し、此の色は定むで是れ青相なりと思惟す。心の安住し、等

Aoht veltliche Dinge.)。衆集經一世八法。大集法門經一八種の世法。世間に於ける得失乃至苦樂等の八法を列ねたもので、知るべし。又、世間の八風(翻譯名義集)の名もある。

【一〇】得・Tābha (") (Rlyo D.—Gāhne; Ke: na—Erlangen.) 衆集經一利。大集法門經一利。

【一一】可愛の色……は所謂五欲。即ち、五妙欲、五欲功德といはるもの。

【一二】衣服以下四は、所謂四供養物。

【一三】病緣の等・E' Glān-pocceya-bhesajje-pari-khara (medicinal ap. lincos for use in sickness)

【一四】不得・Aibha (") (Rlyo D.—Iccese; Neumann—Nichterlangen.) 二漢經は衆。

【一五】毀・Ninda (V. ") (Rlyo D.—blame; Neumann—Tadel) 漢二經は毀。

【一六】揄揚とは、ほめそやし、喝采し、譽言すること。

【一七】譽・Prañisa (Praisest) (Rlyo D.—Praise; Neumann—Lob.) 漢二經は衆。

【一八】稱・Ysa (III. Yusa) (Rlyo D.—fame; Neumann—Ruhm) 漢二經は稱。——原語は今Mahā-vyūpatitiを標準に掲げる所なるも、寧ろ、これは前の

譽下のそれと入れ代ゆべき心地あるを見ん。

【一九】譏・Aysā (IV. Aysa) (Rlyo D.—Obsecrity; Neumann—Sclande) 漢二經は譏。——同準に原語は寧ろ毀下のそれと入れ代けたる所とせん。

【二〇】苦・Dukka (8. Dukkha) (Rlyo D.—Pains; Neumann—Wele.) 漢二經一七。苦。

【二一】順苦受觸の等、苦受を惹起すべき觸の(心所の)活動ありつゝ意°E (Akya or mano)—samphassaṇa dukkham, (sustaining, vedayitum)

【二二】身及び等、身苦はE' Kāyika dukkha 心苦は

數を第一と爲すなり。

「解 脫」

(二) 第二解 脫

「解脫」とは、謂はく、此の定中の所有の善の色・受・想・行・識、是れを「解脫」と名く。

「内に色想無くして、外の諸色を觀す」

「内に色想無くして、外の諸色を觀す」とは、謂はく、彼れは内に於ける各別の色想を已に遠離し、已に別遠離し、已に調伏し、已に別調伏し、已に滅没し、已に破壊し、彼れは内に於ける各別の色想を已に遠離し、已に別遠離し、已に調伏し、已に別調伏し、已に滅没し、已に破壊するに由るが故に、勝解力に由りて、外の諸の色を觀じて、或ひは青瘀と作し、或ひは膿爛と作し、或ひは破壊と作し、或ひは離散と作し、或ひは啄噉と作し、或ひは異赤と作し、或ひは骸骨と作し、或ひは骨鎖と作す。是れを「内に色想無くして、外の諸色を觀す」と名く。

「第二」とは、謂はく、諸の定中の漸次、順次、相續の次第の數を第二と爲すなり。

「解 脫」

「解脫」とは、謂はく、此の定中の所有の善の色・受・想・行・識、是れを「解脫」と名く。

第三解脫——淨解脫の加行

「淨解脫を身作證し、具足して住す」とは、問ふ、此の淨解脫の加行は云何。觀行を修する者は、何の方便に由りて、淨解脫定に入るや。答ふ、初修業者の創めて觀を修する時は、青樹相を取る。所謂青莖、青枝、青葉、青花、青菓なり。或ひは青

【12】長者衆、巴、*Galapati-parisa* (Rhya D.—Assemblies of householders; Neumann—Die Versammlung der Bürger)。巴註の如く、豪商の衆。但し、一般にこの長者及び居士の二に關する用法及び説明は、やゝ混沌錯雜せるありて、甚だ快明なること能はず。卷九、參照。

【13】沙門衆、巴、*Samaṇa-parisa* (Rhya D.—Assemblies of religious reclus; Neumann—Der Versammlung der Asketen)。又、巴註の如く、婆羅門教以外の諸印度宗教に於る出家求道者の衆。

【14】四大王衆天衆、巴、*Cātummahārājī kappasī* (Rhya D.—Assemblies of four-king-devas; Neumann—Die Versammlung der Götter der Gegen-den.)

【15】三十三天衆、巴、*Tāvātīma-parisa* (Rhya D.—Assemblies of three and thirty devas; Neumann—Die Versammlung der Götter der Dreihunderteing.)。以上二は前註參照。

【16】魔天衆、巴、*Māra-parisa* (Rhya D.—Assemblies of Mara devas; Neumann—Die Versammlung sinnlichen Götter)。他化自在天衆のこととて、その澤山の衆は、欲界最上の其の天(他化自在天)に居して、欲界衆庶の佛道修行を障礙せんといふ。

【17】梵天衆、巴、*Brahma-parisa* (Rhya D.—Assemblies of Brahma-devas; Neumann—Die Versammlung der heiligen Götter)。大梵天(色界初禪最上天)を中心とする色界初禪の三天のこと。三天の他の二は梵輔天と梵衆天。

【18】八世法、(Mahāyutputti) *Asyau loka-dharmā* (Georg.—St. Asyha lokadharmā) (Rhya D.—8 matters of worldly concern; Neumann—VIII.



第五解脫

空に入り、空無邊處を具足して住す。是れ第四解脫なり。

「一切の空無邊處を超え、無邊識に入り、識無邊處を具足して住す。是れ第五解脫なり。」

第六解脫

「一切の識無邊處を超え、無所有に入り、無所有處を具足して住す。是れ第六解脫なり。」

第七解脫

一切の無所有處を超え、非想非非想處に入り、具足して住す。是れ第七解脫なり。

第八解脫

一切の非想非非想處を超え、想受滅に入り、身作證し、具足して住す。是れ第八解脫なり。――

八解脫の論釋  
(一)第一解脫  
「若し有色に觀ず」

「若し有色にして、諸色を觀ず」とは、謂はく、彼れは内に於ける各別の色想を未だ遠離せず、未だ別遠離せず、未だ調伏せず、未だ別調伏せず、未だ滅没せず、未だ破壊せず。彼れは内に於ける各別の色想を、未だ遠離せず、未だ別遠離せず、未だ調伏せず、未だ別調伏せず、未だ滅没せず、未だ破壊せざるに由るが故に、勝解力に由りて、外の諸の色を觀じて、或ひは青瘵と作し、或ひは膿爛と作し、或ひは破壞と作し、或ひは離散と作し、或ひは啄噉と作し、或ひは異赤と作し、或ひは骸骨と作し、或ひは骨鎖と作す。是れを「若し有色にして、諸色を觀ず」と名く。

「第

一」

「第一」とは、謂はく、諸の定中の漸次、順次、相續の次第の

八法品第九

るにつけて、論としての釋をなさんとするに際し、或ひは大體解し易きを以つての故にといふ見解で、その前文を論釋することはすべて略したものと、然らざれば、脫文のあるものなるべし、或ひは、單に、第一乃至第八福生の字等のみ釋して、その前の餘文を省くとはおかしければ、全脫文(本の梵文の)なりしやも計られず。

【三七】福生、巴・Dānupatti、即ち、已註の通り、巴では、施生で、施が福因となつて、福果を感得し、彼此の善生を得しめる故に名くる所なるが、今、漢譯では、その因に對する果の福によつて、名を立て、福生といふものである。

【三八】八種の衆 Sang- S. Aṭṭha Parisa (Rhyas D. 8 assemblies; Neumann—Acht Versammlungen.) 欲界及び色界初禪天に亘る八部の衆を列ねたもので、リスデビツ氏はこれ以外の衆を記せぬは、經にその記なきと、かゝる團體 Herenvoly 制度の認められざるが爲めならんと解している (Dialogues of the Buddha III. 241. footnote 3.)

【三九】刹帝利衆、巴・Khattiya-parisa (Rhyas D. 1. Assemblies of nobles; Neumann—IX. Die Versammlung der Krieger.) 印度の四姓といふ婆羅門教徒の制めた社會制度の第二位とされる貴族武士族の衆。因みに、總じて漢傳ではこれはその社會制度の順序のまゝに第二位に記述され、巴利傳では今の論の如く第一位に記せるゝが普通なるも、今はやゝ、その意味で、漢傳としての異例とするに當る。

【四〇】婆羅門衆、巴・Brahmaṇa-parisa (Rhyas D. 1. Assemblies of Brahmins; Neumann—Versammlung der Priester) 同上の第一位とせられた僧族(殊に婆羅門教の)の衆。

伽他

れを名けて樂と爲す。

【一六三】世尊の此れに於いて、伽他を説いて言はく、――

得と、不得と、毀と、譽と、

及び、稱と、譏と、苦と、樂とは、

無常にして、意生の欲なり。

變壞法にして、保し難し。

智者は如實に知り、

現見して生死を伏し、

愛と非愛との法に於いて、

心に欣恚を生ぜず。

彼れは順と違とに逢ふと雖も、

而も能く棄し伏し滅し、

一切に於いて解脱して、

世の邊に彼岸に至る、

と。

八、八解脱

第一解脱

【一七二】八解脱とは、云何が八と爲す。答ふ、若し有色にして、諸色を觀す。是れ第一解脱なり。

第二解脱

【一七三】内に色想無くして、外の諸色を觀す。是れ第二解脱なり。

第三解脱

【一七四】淨解脱を身作證し、具足して住す。是れ第三解脱なり。

第四解脱

【一七五】一切の色想を超え、有對想を滅し、種々想を思惟せず、無邊

べし。

【一七六】彼れは是の處等、巴文にはその一句を缺く。

【一七七】富貴を受け以下、巴は又、可成異り、而も是の如きことは、我れは(佛陀)具戒者に對してのみいふ。

犯戒者に對してには非ず。友よ、具戒者の心願は清淨性の故に妙果有り」といふ。即ち、今の論は再生後の富貴の生に於る當人の心情につきていひ、諸巴文は上

來の一般的行文の更に但し書きをして、具戒清淨の意義を發揚するの言に作る。

【一七八】尸羅、Sīla (Sīla) の音譯で、戒のこと。

【一七九】心願清淨、巴、Ceto-paripūriṇa sūdhātta。

【一八〇】四大王衆天、卷一六、六隨念下參照。巴は以下も各詳説す。

【一八一】三十三天、同上。

【一八二】夜摩天、Yāmadēvāḥ。巴註の所なれど、因に記すると、時分天、唱樂天ともいひ、欲界六天中の第三。

【一八三】觀史多天、Vissatā devāḥ。又兜卒天と記し、善知足又は喜足天と譯す。六欲天中の第四で、その所受に對し喜足の心を生ずるが故に名くと。

【一八四】樂變化天、卷五を見よ。

【一八五】他化自在天、同上。

【一八六】梵衆天は卷五、卷一七、その他參照。

【一八七】離欲とは、梵衆天は、上の人に關するの文中、(而して巴に)富貴を受け、自在、安樂なりと雖も、而も尸羅を具し、心願清淨なり」と等といふ所を、巴文でも亦、而も是くの如きことは、我れは具戒者に對してのみいふ。犯戒者に對してには非らず。離欲者、Vīriya

に對してのみいふ。具欲者に對してには非らず。友よ、具戒者の心願は離欲性の故に vīriyagāṇi 妙果有り」と云云といふ。

【一八八】此の中等、例により、以上經文そのまゝを記せ

(三)毀

云何が毀と名くる。<sup>一五三</sup> 答ふ、諸の隱背に有りて、現在前せざるを、稱せず、讃せず、歎せず、美せず、亦、揄揚せずして言はく、彼れは信・戒・聞・捨・慧等を皆な具足せずと。是れを名けて毀と爲す。

(四)譽

云何が譽と名くる。<sup>一五五</sup> 答ふ、諸の隱背に有りて、現在前せざるを、稱し讃し、歎し、美し、亦、復た揄揚して言はく、彼れは信・戒・聞・捨・慧等を悉く皆な具足すと。是れを名けて譽と爲す。

(五)稱

云何が稱と名くる。<sup>一五六</sup> 答ふ、諸の隱背せずして、正しく現在前するを、訶せず、毀せず、罵せず、辱せずして、稱し、讃し、歎し、美し、亦、復た揄揚して言はく、汝は信・戒・聞・捨・慧等を悉く皆な具足すと。故に名けて稱と爲す。

(六)譏

云何が譏と名くる。<sup>一五七</sup> 答ふ、諸の隱背せずして、正しく現在前するを、訶し、毀し、罵し、辱して、稱せず、讃せず、歎せず、美せず、亦、揄揚せずして言はく、汝は信・戒・聞・捨・慧等を皆な具足せずと。是れを名けて譏と爲す。

(七)苦

云何が苦と名くる。<sup>一五九</sup> 答ふ、順苦受觸に觸せらるゝが故に身及び心の苦の、不平等受にして、受類の所攝なるを生ず。是れを名けて苦と爲す。

(八)樂

云何が樂と名くる。<sup>一六二</sup> 答ふ、順樂受觸に觸せらるゝが故に、身及び心の樂の、是れ平等受にして、受類の所攝なるを生ず。是

(dwelling.)

【一八】燈明・巴<sup>1</sup> Padīparyāṇ (Material for lighting a lamp, lamps and necessities.)

【一九】富貴の人、巴は、例の、刹帝利の大族、婆羅門の大族、居士の大族の、五欲功德を受用し、多く園饒する所あるを見等の文に作る。因みに巴文では、この句の上に……諸の施をして「彼はその施す所によりて、所希あり」と記す。

【二〇】善根・Kusāla-mūla (Kusala-mūla)。今の巴文には缺く。布施を表示としての身口意の三業(卷三、参照)は、善因としての意義堅固にて抜くべからざる上に、能く妙果を生じ、且つ、餘の善を更に派生するが故に名く。

【二一】願はくは等、巴は「あはれ、願くは、我れは、身壞命終して、刹帝利の大家……居家の大家の伴侶 abhavyatṭha」として生れむことを」と。

【二二】彼れは此の心に於いて等、巴<sup>2</sup> So taṇ, cittaṃ dāhātī (Rhyas D.—This thought he holds fixed), taṇ cittaṃ adhiṭṭhātī (firmly established), taṇ cittaṃ bhāvēti (and expends it.)

【二三】下劣の喧騒等、巴は<sup>3</sup> Tesaṃ taṇ cittaṃ hīna viññatṭha uttarāṇ abhavyatṭha ……と記す。それを

Rhyas D.—This thought set free in a lower range, and not expanded to any-thing higher; Neumann-

Und weil sich ihm das Herz da zu Minderem neigt, er zu Höherem es nicht ausgedehlet hatte, と譯し、二家、必ずしも一ならざるが、蓋し、

「爲めに、この心は、以下に於いては解脱せるも、以上に於いては、修せざれば——恰もその生に轉じゆく、

tatā<sup>4</sup> upatītyā samvattatī<sup>5</sup>」とも譯すべきか。何れにせよ、今の漢譯と比し、可成、相隔るは以つて知る



上文の論釋—

「此の中、是れを第一乃至第八と名く」とは、漸次、順次、相續の次第の數を第一乃至第八と爲すなり。

「福生の意義」

「福生」と言ふは、問ふ、何の故に、此れを説いて名けて福生と爲すや。答ふ、福果を攝受して、此れ「等」の處に於いて生ずるが故に、「福生」と名く。

七、八種の衆

八種の衆とは、云何が八と爲す。答ふ、一には刹帝利衆、二には婆羅門衆、三には長者衆、四には沙門衆、五には四大王衆、六には三十三天衆、七には魔天衆、八には梵天衆なり。

(一) 刹帝利衆  
(二) (一八) 衆  
その他の諸衆の例

云何が刹帝利衆なる。答ふ、彼れの色を顯示し彼れの蘊を顯示し、彼れの部を顯示す。是れを刹帝利衆と名く。

八、八世法

乃至、梵衆も、廣く説いて、亦、爾なり。

八、八世法

八世法とは、云何が八と爲す。答ふ、一には得、二には不得、三には毀、四には譽、五には稱、六には譏、七に苦、八には樂なり。

(一) 得

云何が得と名くる。答ふ、若し可愛の色・聲・香・味・觸と、

衣服、飲食、臥具、病緣の醫藥「等」の資生の什物とに於ける諸の得、別得、已得、當得、是れを名けて得と爲す。

(二) 不得

云何が不得なる。答ふ、若し可愛の色・聲・香・味・觸と、

衣服、飲食、臥具、病緣の醫藥「等」の資生の什物とに於ける諸の不得、不別得、不已得、不當得、是れを不得と名く。

worse; Neumann - dass diese Krankheit sich weiterentwickeln könnte) 即ち、唯、「この病は増進することもあるん。故に精神を引發して……」等とのみあつて、「便ち身命を捨して……」等の文は巴には見えず。

【一二】 精進事-ārabba-vatthu.

【一三】 八福生-Śaig-Ś. Aṭṭha dānupattiyo (Bhaya D.-Eight rebirths due to giving gifts; Neumann -acht Arten der gabenwiederkehrn)。

巴の Dānupattiya とは、布施 Dana によつて、生れゆくべき處 upatti の意で、所願によつて、布施をなし、以つて、その所願の如く、よく生を受くべき八處、即ち人中の富貴より、四大王衆天、三十三天、夜摩天、觀史多天、樂變化天、他化自在天、梵衆天、これを稱して、八福生とする。卷五の三欲生(四大王衆天、三十三天、夜摩、觀中多の四欲界天を一とし、樂變化を二、他化自在を三とす)と、三樂生(梵衆、極光淨、遍淨の三天)とを、やや一緒にした趣ある所にして、參照すべし。

【一四】 貧窮以下、原漢譯には、最後に再び、苦行を記し、五を列ぬるも、卷五、三福業事下等の文に照らして、今の如く改む。因に、Śaig-Ś. A. VIII. 35 (IV. 239) 等は唯、沙門、婆羅門の二を記するに過ぎず。

【一五】 衣服、巴- Vattana (B. inent.)

【一六】 飲食、巴- A-maṇa (food). Pāṇa (drinking)。但し、巴は以上の二の順を逆にし、次に車乘 Yāna を加ふ。

【一七】 香華、巴- Mala (garlands), gandha (perfumes) + Vilopama (ointment)

【一八】 房舍、臥具、巴- Seyyā + āvāṇṭha (bed and

## 六、八福生

(二一)(八)  
その他の  
七福生の  
例釋

第八福生の  
時の差別相

八福生とは、云何が八と爲す。具壽よ、當さに知るべし、一類有るが如し。諸の沙門、或ひは婆羅門、貧窮・苦行・道行・乞者に、衣服、飲食、及び、諸の香華、房舍、臥具、并びに燈明等の資生の什物を施す。「而も」富貴の人を見て、便ち、是の念を作さく、此の布施が所集の善根に由りて、願はくは、我れは來生には、當さに是くの如きの富貴の人の類を得むことをと。彼れは此の心に於いて、若しは習し、若しは修し、若しは多く所作す。彼れは「此の」心に於いて、若しは習し、若しは修し、若しは多く所作するに由りて、先きに下劣の誼難を愛樂すと雖も、後ちに便ち勝妙の寂靜を欣求す。彼れは是の處有りて、身壞命終して、還つて人中に生じ、富貴の類を得。「而して已に」富貴を受け、自在安樂なりと雖も、而も尸羅を具し、心願清淨なり。先きの人身中にて尸羅の淨なるが故に。是れを第一福生と名く。

人に生れて富貴の類を得ることを願ふが如く、是くの如く、四大王衆天、三十三天、夜摩天、觀史多天、樂變化天、他化自在天、梵衆天に生ぜむことを願ふも、應さに知るべし、亦、爾なり。

然れども、梵衆天のみ差別有るは、應さに離欲と説くべきことなり。

(Bhy D.—8. basis of setting aloof an undertaking; Neumann—8 Zustände der Anspannung.)<sup>9</sup> すなへて、右の懈怠事の逆で、大旨知るべし。その巴利との順序等の相違もすべて準ず。

【九】身輕利にして、巴、Kīyo 'luko (前にあつた悶重の反對に、輕快なること)。

【九】能く進んで等、巴、Kammatto (作業に堪ゆこと)。

【100】精進熾然として、巴は viriyam ārabhātī (精進を引發す)と。

【101】身力強盛にして、巴、Balaṇā (powerful, energetic)。

【101】能く進むでは「巴は右文の場合に準ず。」

【102】大師の聖教等、巴、佛の教法につづて、作意すること能はざりき (Nānekhiya Buddhamaṇa, Sāvaṇa, manasikāraṇa) と。

【102】應さに自ら策勵して等、巴は「今、應さに我れは精進を引發すべし。——不得を得すべく、……乃至、……未だ身證せざる所を身證し得んが爲めに」と。

【102】明日に至り等、前の八懈怠の場合に準じ、巴は、「事業をなすべき管なり」と。

【102】大師の聖教等、巴は右註に準ず。

【102】當さに道路を行く等、巴は懈怠事の場合に準じ、「行くべき管なり」。

【102】正しく病苦等、巴、Uppanno hoti apyamaṭṭako ābaddho (少分の病の起れる有)。

【102】或ひは是の處等、巴、Thānaṃ kho pun' ettha vijjati (Bhys D.—It is possible; Neumann—aber es ist wohl möglich)。

【110】斯の病苦に等、巴、Yam me ābaddho pva-gāheyya (Bhys D.—that the ailment may grow

(七)第七精進事

復た次に、具壽よ、一類有るが如し。正しく<sup>10.5</sup>病苦の嬰纏する所と爲す。便ち、是の念を作さく、我れは既に病苦の嬰纏する所たり。或ひは是の<sup>10.6</sup>處有りて、斯の病苦の嬰纏する所たるに因りて、便ち身命を捨して、大師の教に於いて、空しく所得無けむかと。是の念を作し已りて、精進熾然として、未だ得ざるを得むと求め、未だ至らざるを至らむと求め、未だ證せざるを證せむと求む。是れを第七精進事と名く。

(八)第八精進事

復た次に、具壽よ、一類有るが如し。病苦の嬰纏は愈ゆと雖も、未だ久しからず。「便ち」是くの如きの念を作さく、我れは病苦の嬰纏する所に遭ふて、愈ゆと雖も、未だ久からず。或ひは是の<sup>10.7</sup>處有りて、病苦還た起りて、斯の病苦に因りて、便ち身命を捨し、大師の教に於いて、空しく所得無けむかと。是の念を作し已りて、精進熾然として、未だ得ざるを得むと求め、未だ至らざるを至らむと求め、未だ證せざるを證せむと求む。是れを第八精進事と名く。

是くの如きの八種を精進事と名く。

問ふ、何に緣りて、此の八を精進事と名くるや。答ふ、精進とは、謂はく、策勵にして、此の八事に由りて、「其の」未だ生ぜざるは而も生じ、生じ已れるは、倍、復た増長廣大となる。此の因縁に因りて精進事と名く。

【八〇】 應さに進んで等の代りに、巴は「事業をなすべき我が體は應さに疲倦すべし、寧ろ、今、我れは横臥せんのみ」と。

【八一】 身力等、巴には見えず。

【八二】 具壽よの第五事は、巴は第四。

【八三】 晝の字、巴にはなきこと上の如く、かくて下の、今、夜分等の字の、巴に、なきも亦、準ず。

【八四】 道路等を、巴は、Māṅgo gataṭṭhi。

【八五】 具壽よ等、第六事は巴は第三。

【八六】 明日に至りて、巴はなし。

【八七】 當きに道路等、巴、Māṅgo gantabbho loṭi。(道をゆくべき筈になつてゐること)。

【八八】 應さには進んでの代りに、巴は、「實に道を行くべき我が身は疲倦すべし。今、寧ろ、我れは横臥せんのみ」と。

【八九】 身力を長養等、巴にはなし。

【九〇】 具壽よ等、第七事は巴も同じく七。下の第八事につては素より知るべし。

【九一】 病苦の爲めに等、巴、Uppanno loṭi appama-tako ābāho. = has arisen some slight disease.

【九二】 身力羸劣以下、巴は唯、Atthi kappo nīṇa-jittu (横臥することの適當なることあるのみと)。

【九三】 病苦等、巴、Gāṇā vūṭṭhito loṭi acīra-vūṭṭhito gelaṇṇa. (病より復起し、近く、病より復起せり)と。

【九四】 身力云云以下は、巴は上に準ず。

【九五】 懈怠事、巴、Kusīla-vatthu (梵は Kuśīla-vastu?)

【九六】 懈惰を、宋元明三本、及び、宮内省本には、懶惰に作る。

【九七】 八精進事、Sang-s, Añña āmbola vatthu i



(四) 第四精進事

復た次に、具壽よ、一類有るが如し。明日に至り、諸の事業を作さむことを期して、便ち是の念を作さく、我れは既に明日當さに事業を作して、大師の聖教を修學するに暇無かるべし。今、夜分に於いて、應さに預め精勤して、當の間缺を補ふべしと。是の念を作し已りて、精進熾然として、未だ得ざるを得むと求め、未だ至らざるを至らむと求め、未だ證せざるを證せむと求む。是れを第四精進事と名く。

(五) 第五精進事

復た次に、具壽よ、一類有るが如し。晝道路を行き、是くの如きの念を作さく、我れは晝時に於いて、既に道路を行き、大師の聖教を修學するに暇無かりき。今、夜分に於いて、應さに自ら策勤して、先きの間缺を補ふべしと。是の念を作し已りて、精進熾然として、未だ得ざるを得むと求め、未だ至らざるを至らむと求め、未だ證せざるを證せむと求む。是れを第五精進事と名く。

(六) 第六精進事

復た次に、具壽よ、一類有るが如し。明日に至り、當さに道路を行くべきことを期し、便ち是の念を作さく、我れは既に明日當さに道路を行き、大師の聖教を修學するに暇無かるべし。今、夜分に於いて、應さに預め精勤して、當の間缺を補ふべしと。是の念を作し已りて、精進熾然として、未だ得ざるを得むと求め、未だ至らざるを至らむと求め、未だ證せざるを證せむと求む。是れを第六精進事と名く。

右文をすべて繰返す。

【三】 身力云云、巴は、Tassā me kāyo kilaṇṭho sammāno、即ち我が身は疲憊して、作業に堪えずと。

【四】 進んで等、巴には缺く。

【五】 將息、將は養ふ、息は生で、結局、養生の意。

【六】 遂に精勤して、巴、Na viriyam arabhātī、(發勤せず)。

【七】 未だ得ざるを等、巴、Appattasā putiya(未得を得せむが爲め)。

【八】 未だ至らざるを等、巴、Anadhigatassa adhi-gamaya(未だ到達成就せざるを、到達成就する爲め)。

【九】 未だ證せざるを等、Asasevikkatassā sasevikkhaya(未だ體達せざるを體達し得むが爲め……發勤せずの意)。

【一〇】 具壽よ等、第二事は巴諸傳では第六。

【一】 身飽きて等、巴、Tassa me kāyo garuko alammato masoṭṭhaṃ maṭṭhe(爲めに、我が身は重くして、作業に堪えず。洵に重悶なり)——この最後の字、覺音等の特異の見解あり、巴利字典等について見るべし)。

【二】 具壽よ等の第三事は、巴は第二。

【三】 晝の時、巴にはなし。

【四】 事業を營んで、巴、Kammam karitvā hoti、

【五】 身力勞倦せり、巴、Kāyo kilaṇṭho、

【六】 今、夜分等、巴、缺。因に、下の「所修」を、大正藏經、縮藏共に行修に作る。今、前後の文に照して改む。

【七】 具壽よ等第四事は、巴第一。

【八】 明日に至りて、巴無し。下文中準じて知るべし。

【九】 諸の事業を作さむと等、巴は、Kammam karitvāṃ hoti=to do some work、即ち、事業をする筈になつてゐると。

能く進んで所修の勝行を修するに堪ゆと。是の念を作し已りて、精進熾然として、未だ得ざるを得むと求め、未だ至らざるを至らむと求め、未だ證せざるを證せむと求む。是れを第一精進事と名く。

(二)第二精進事

復た次に、具壽よ、一類有るが如し。城邑に依止し、或ひは聚落に住し、日の初分に於いて、衣を著し、鉢を持し、城邑等に入りて、巡行乞食す。彼れは乞食するの時、是くの如きの念を作さく、願はくは美妙の衆多の飲食を得むことをと。若し遂ぐることを得ば、便ち是の念を作さく、我が食は既に多く、身力強盛にして、能く進んで所修の勝行を修するに堪ゆと。是の念を作し已りて、精進熾然として、未だ得ざるを得むと求め、未だ至らざるを至らむと求め、未だ證せざるを證せむと求む。是れを第二精進事と名く。

(三)第三精進事

復た次に、具壽よ、一類有るが如し。晝、事業を營んで、是くの如きの念を作さく、我れは晝時に於いて、既に事業を營み、大師の聖教を修學するに暇無かりき。今、夜分に於いて、應さに自ら策勤して、先きの間缺を補ふべしと。是の念を作し已りて、精進熾然として、未だ得ざるを得むと求め、未だ至らざるを至らむと求め、未だ證せざるを證せむと求む。是れを第三精進事と名く。

ikat place.

【五】 日の初分より鉢を持してまで、巴、無し。下文もすべて同ず。

【六】 衣をつけ、巴、*Nivāsati* 整衣等とよく漢譯され、衣類(袈裟)をつけ改めること。(今は「衣をつけ已りて」といふ *Garud* 形であらう)。

【七】 鉢を持し、巴、*Pāṭa* [*civranā*] *ekāya* 一般には、今の巴の「*じ*」示す通り、鉢と衣とをとりてとあるが習慣で、鉢 *Pāṭa* (*patthā*) とは應量器、略して應器等といふ、比丘らの行乞の器。鉢はその音譯の片語である。因みに衣をとりといふは體につけた餘の衣、即ち、所謂三衣の一番上の衣(唱出羅僧衣)を腕上にもちての意。

【八】 巡行乞食す。巴、*Piṇḍāya caranto* (乞食して、巡行しながら)。

【九】 彼れは以下、得むことをまで、巴諸傳には見えす。次文も同様。

【一〇】 美妙の等、雜一六・九(大正、四一五)に従へば、衆多比丘、曾つて、佛の王舍城迦蘭陀竹園に在りしとき、食堂に集り、説いて曰はく、某甲の檀越は鹿疎食を作り、食し已つて、頗る味無く、力無し。されば、我らは寧ろ、かゝる鹿疎食を捨て、乞食を行ずるに如かず。所以の者何となれば、乞食巡行する時んば、好食を得、好色を見、時に好聲を聞き、多人に識られ、亦、衣被、臥具、鬘樂を得と。而して、佛陀はかゝる論議は智に趣かず、覺に趣かず、涅槃に趣かず、非義不饒益のものなれば、決して、かゝる論議を作すべきには非ずと教へた云云といふが、今以つて參考とすべし。

【一一】 若し遂げざればとは、巴には「鹿疎の食を志願のまゝに十分に獲ず。是くの如きの念を作さく」と。

【一二】 我れは等、巴は巡行乞食から、鹿疎の食云云の



だ至らざるを至らむと求め・未だ證せざるを證せむと求めず。是れを第七懈怠事と名く。

### (八)第八懈怠事

復た次に、具壽よ、一類有るが如し。病苦九三の嬰纏九四は愈ゆと雖も、未だ久しからず。「便ち」是くの如きの念を作さく、我れは病苦の嬰纏する所に遭ふて、愈ゆと雖も、未だ久しからず。身力羸劣にして、進んで所修の勝行を修するに任ぜず。且らく應さに偃臥して、以つて自ら將息すべしと。是の念を作し已りて、遂に精勤して、未だ得ざるを得むと求め・未だ至らざるを至らむと求め・未だ證せざるを證せむと求めず。是れを第八懈怠事と名く。

是くの如きの八種を懈怠事と名く。

### 八懈怠事一結 懈怠事の名義

問ふ、何に緣りて、此の八を懈怠事九五と名くるや。答ふ、懈怠とは、謂はく、懈九六情にして、斯の八事に由りて、「其の」未だ生ぜざるは而も生じ、生じ已れるは、倍九七、復た、増長廣大となる。此の因緣に由りて、懈怠事と名く。

### 五、八精進事 (一)第一精進事

八精進事とは、云何が八と爲す。具壽よ、當さに知るべし、一類有るが如し。城邑に依止し、或ひは聚落に住し、日の初分に於いて、衣を著し、鉢を持し、城邑等に入りて、巡行乞食す。彼れは乞食するの時、是くの如きの念を作さく、願はくは美妙の衆多くの飲食とを得むことをと。若し遂げされば、心に便ち是の念を作さく、我れは食少なりと雖も、而も身輕利九八にして、

慳吝の垢を除滅せむと欲して、而も惠施を行ずるなりと。

【五】 瑜伽を養くるが爲めとは、Sarg. 5. には、以下はすべて記せず。? Yogasam bhāratam. 俱舍、正理二論は今と同ず。正理亦解して曰はく、施に由るが故に無悔を得、展轉して、乃し心一境性に至るが爲めの故に、惠施を行ずる心と。

【六】 通慧は、Abhijā (Abhinna) なるべく、已に幾度か出でたる如く、通即慧で、六神通等のこと。これは但舍、正理の二論も記せず。

【七】 菩提は、Bodhi の音譯で、所謂覺と譯するもの。これも亦、二論の記せざる所。

【八】 涅槃は、改めて註する要もなしとして、今の論文は次の字と一緒に連ねて、涅槃の上義と讀むも可。

【九】 上義は Uparatha (Uttamatha) 俱舍、正理共に記し、正理は殊に釋して曰らく、上義は謂はく涅槃なり。初施より乃至一切生死を得るが故に、或ひは、又、惠施を行じて勝生因を得るが故に、これらによつて、能く涅槃法を引發し證するなり云云。

【一〇】 可祠とは、供養するに足るの意なるべし。總じてこの偈の用所を尙づきとめ得ざるが Hiv. 38 (p. 98) の偈はやゝ參考とするに足るものもならん。

【一一】 八懈怠事、Sarg. 5. 8. Añña kamma-vatthūni (Rhys. D. 8 bases of slothness; Neumann—8 Zustände der Apathung.) 比丘が、修學に關し、懈怠の心情を催らす八個の事情をあげたもの。

【一二】 具壽よ等第一事は、巴諸傳は第五に作る。

【一三】 城邑、巴 Gāma=a parish or village having boundaries and distinct from the surrounding countries.

【一四】 聚落、巴 Nigama=a small town or a ma-



第四懈怠事と名く。

(五)第五懈怠事

復た次に、具壽よ、一類有るが如し。晝、道路を行きて、是くの如きの念を作さく、我れは晝時に於いて、既に道路を行き、身力勞倦す。今、夜分に於いて、進んで所修の勝行を修すること能はず。且らく應さに偃臥して、以つて自ら將息すべしと。是の念を作し已りて、遂に精勤して、未だ得ざるを得むと求め。未だ至らざるを至らむと求め。未だ證せざるを證せむと求めず。是れを第五懈怠事と名く。

(六)第六懈怠事

復た次に、具壽よ、一類有るが如し。明日に至り當さに道路を行くことを期し、便ち是の念を作さく、我れは既に明日當さに道路を行くべし。應さに進んで所修の勝行を修すべからず。且らく應さに偃臥して、身力を長養すべしと。是の念を作し已りて、遂に精勤して、未だ得ざるを得んと求め。未だ至らざるを至らむと求め。未だ證せざるを證せむと求めず。是れを第六懈怠事と名く。

(七)第七懈怠事

復た次に、具壽よ、一類有るが如し。正しく病苦の嬰纏する所と爲す。「便ち」、是くの如きの念を作さく、我れは正しく病苦の嬰纏する所たり。身力羸劣にして、進んで所修の勝行を修するに任ぜず。且らく應さに偃臥して、以つて自ら將息すべしと。是の念を作し已りて、遂に精勤して、未だ得ざるを得むと求め。未

正理も同字なるも、解釋は缺く。

【四】希天施、Sangī-s, はこれを缺き、その代りに、V. Sānu dānan ti' dānam deti (Bhys D.—One gives because one thinks 'giving is blessed') と云をおく。而して今の希天施に當るものは A. VIII. 33 (IV. 236) —Imahū dānanā dāva kāyasa bheda parāṇa mārāṇa sugāṇa bhagga lokāṇa upajāṇissāmi ti' dānam deti) 即ち、「我れは今、この種を行じ已りて、身壞命終して、死後、善趣は天世界に上生すべしとて施を行ず」といふがある。正理、俱舍ともに、前の要名施と順序を述にす。

【五】生天の勝異果は、原文は寧ろ、この譯の如くありしかと察するも、特に論議的讀方として「天の勝異果を生ずることを希求して……」と訓ずるも可なるべし。蓋し、第十一卷五趣の下に解説せられたる如く、天趣は無覆無記の色受想行識蘊をいふもので、而も是れ天趣の所屬なれば、それらは天の勝果であり、且つ、又、その天の勝果は前世の勝業又は善業に對して酬ひられたもので、即ち、因の善なるに對し、果の無覆無記なる、異にして熟せるものに他ならざれば、正しく是れ、異熟果たるべき故である。

【六】心を莊嚴するが爲め、Sangī-s, Uttāpāṇikāra (Bhys D.—[One gives] because one wishes to adorn one's mind; Neumann—aus Herzen serforderniss.) 俱舍、正理も、今と同句。而して正理の釋して曰、信等の七聖財(卷一六)を引發せんむがめの意と。

【七】心を資助するが爲め、Sangī-s, Uttāpāṇikāra (Bhys D.—[because one wishes to] equip one's heart; Neumann—aus) Herzensbe-dürfniss.) 俱舍「正理も同句」正理の釋すらく、諸の

さく、願はくは美妙の衆多の飲食を得むことをと。若し遂ぐるを得ば、心に便ち是の念を作さく、我れは食既に多く、身飽きて悶重なり。進んで所修の勝行を修すること能はず。且らく應さに偃臥して、以つて自ら將息すべしと。是の念を作し已りて、遂に精勤して、未だ得ざるを得むと求め・未だ至らざるに至らむと求め・未だ證せざるを證せむと求めず。是れを第二懈怠事と名く。

(三)第三懈怠事

復た次に、具壽よ、一類有るが如し。晝、事業を營んで、是くの如きの念を作さく、我れは晝時に於いて、既に事業を營み、身力勞倦せり。今、夜分に於いて、進んで所修の勝行を修すること能はず。且らく應さに偃臥して、以つて自ら將息すべしと。是の念を作し已りて、遂に精勤して、未だ得ざるを得むと求め・未だ至らざるに至らむと求め・未だ證せざるを證せむと求めず。是れを第三懈怠事と名く。

(四)第四懈怠事

復た次に、具壽よ、一類有るが如し。明日に至り、諸の事業を作さむことを期して、便ち是の念を作さく、我れは既に明日當さに事業を作すべし。應さに進んで所修の勝行を修すべからず。且らく應さに偃臥して、身力を長養すべしと。是の念を作し已りて、遂に精勤して、未だ得ざるを得むと求め・未だ至らざるに至らむと求め・未だ證せざるを證せむと求めず。是れを

【Rhyś D.—One gives be-ānāse 'he gave to me'; Neumann—Im Gedanken, Man hat mir gegeben' eine Gabe geben.】俱舍正理共に、これが説明を記せず。  
【譯】求報施' Sarg.—S. 'Dasanti me ti' dānañ deti. (Rhyś D.—One gives because 'he will give to me'; Neumann—Im Gedanken, 'Man wird mir geben' eine Gabe geben.)

【三】習先施' A. VIII. 33. (IV. 236.)—Dinnapubhāra katupubbāra piyupīṭṭhaheti, na arahāmi porāṇa-kulavamsena hāpetuñ ti dānañ deti. 即ち「父及び祖父は先に施を行じ、施を」成ぜり。この舊き家風を破るは我が價せざる所なりとて施を行ず」と。蓋し、Sarg.—S. にはこれはなくて代りに、「我れは炊ぎ、彼れらは炊がず。炊ぐ私の炊がざるものに、施を施さざるは、應ぜざる所なりとて施を行ず」といふをおく。俱舍、正理は共に先人、父祖の家法に習らひて、惠族を行ずるなりと釋す。

【五】種族云々、舊來の家法によつて布施をする意味の種族を斷ち、家法を破ることになる云云の意。乃至は舊來の家法によつて、布施を行じ來つたお蔭を以つて、種族を斷たず、脈絡として、家系を傳えてゐるが、もし、今、自ら布施せざるならば、逆にその功德力の加疵がなくなつて、遂に家系をも斷つに至らんとはいふ布施の神秘力を云爲するの意とも解すべし。

【FO】要名施' Idāna me dānañ dadda kalyāṇo kittisaddo abhuggasohati' dānañ deti. (Rhyś D.—One gives, because one thinks: 'from the giving of this gift by me, an excellent report will spread abroad'; Neumann—Im Gedanken, 'Wenn ich diese Gabe hergebe, werde ich in guten Ruf gelangen' eine Gabe geben.) 俱舍及び



智者は自ら應さに知るべし、

梵行は立ち、生は盡くと。」

是くの如きの大利益は

應さに知るべし、布施に由る。

若し此れに緣りて修行せば、

必らず常樂を證得す。

と。

八懈怠事とは、云何が八と爲す。具壽よ、當さに知るべし。

一類有るが如し。城邑に依止し、或ひは聚落に住し、日の初分

に於いて、衣を著け、鉢を持し、城邑等に入りて巡行乞食す。

彼れは乞食の時、是くの如きの念を作さく、願はくは、美妙の衆

多の飲食を得むことをと。若し、遂げざれば、心に便ち是の念

を作さく、我れは食既に少く、身力羸劣にして、進んで所修の

勝行を修すること能はず。且らく應さに偃臥して、以つて自ら

將息すべしと。是の念を作し已りて、遂に精勤して、未だ得

ざるを得むと求め・未だ至らざるに至らむと求め・未だ證せざ

るを證せむと求めず。是れを第一懈怠事と名く。

復た次に、具壽よ、一類有るが如し。城邑に依止し、或ひは

聚落に住し、日の初分に於いて、衣を著し、鉢を持し、城邑等

に入りて、巡行乞食す。彼れは乞食の時、是くの如きの念を作

Ziel der Heiligkeit verwickelungen lernen.) 衆集經  
一阿羅漢向。

【四〇】證阿羅漢果 Arhat (Arhant) (Rhyas D.—One  
who is Arhant; Neumann—Der Heilige). 衆集經  
一阿羅漢。

【四一】法蘊論とは、その卷三、證淨品第三の餘、及び、  
沙門果品第四を見よ。

【四二】八種の施 Saṅg—S. Aṭṭha dāna-vatthuni  
(Rhyas D.—8 bases of giving gifts; Neumann—  
Acht Arten Gaben zu spenden). 種々の動機による  
布施八種を數舉したもので、前掲の如く、俱舍、正理  
等何れも説述しおる所である。

【四三】隨至施 Saṅg—S. Aśṛjja dānaṃ deti. (Rhyas  
D.—One gives, because [an object of hospitality]  
has approached; Neumann—? Aus Zwang eine  
Gabe geben.) 俱舍、正理も今の譯と同字。俱舍は宿  
舊師の説(光記釋すらく、是れは有部の先師なり)といひ、  
して、已に近づき至るに隨つて施與するなりといひ、  
正理も、有情の、隨つて投じ違るに應じ、衣食を施與  
するものにして、深く敬重するが故の布施ではなから  
と斷つてゐる。

【四四】怖畏施 Saṅg—S. Bhaya dānaṃ deti. (Rhyas  
D.—One gives from fear; Neumann—Aus Furcht  
eine Gabe geben.) 俱舍、正理も同字。

【四五】若し施を行ぜずして等、正理には二種あつて、  
一には災厄を觀て、これを將息せしめむが爲めに行ず  
るの施なりと爲し、即ち、今の論の釋に近似しおり、  
二には、施物そのものに懷相の現ぜるが故に、寧ろ施  
して失はざらんといいふので施すの類と稱し、俱舍はそ  
の後説のみを掲ぐ。

【四六】報恩施 Saṅg—S. Adāsi me' ti dānaṃ deti.

四、八懈怠事  
(一)第一懈怠

(二)第二懈怠  
怠事



心の清淨なるを以つての故に、  
遂に、欣を證得す。  
即ち、此の欣心に從つて、  
復た、勝喜を發生し、  
此の心喜に由るが故に、  
又た、身輕安を起す。  
此の身輕安に從つて、  
智者の心は樂を受し、  
心の樂を受するに由るが故に、  
定心、一境に轉じ、  
是の如きの勝定に依り、  
心は淨にして、染濁無く、  
調順にして、堪能有り。  
如實の知見を發す。  
如實の知見に由り、  
便ち、身を厭患し、  
既に、身を厭患すれば、  
智者は正しく能く離し、  
能く遠離するを以つての故に、  
貪瞋癡を解脫し、

【三】證預流果向' Srota-āpatti-pratipannaka (So-  
tāpatti-phala-saocchikiriyāya paṭipanna (Rhys D.  
—One who has worked for the realizing of the  
Fruit of stream-attainment; Neumann—Der das  
Ziel oder Hörschaft verwirklichen lern.) 衆集  
經—須陀洹向。

【四】證預流果' Srota-āpanna (Soṭṭanna) (Rhys  
D.—One who has attained stream; Neumann—  
Der zur Hörschaft gelangt ist.) 衆集經—須陀洹。

【五】證一來果向' Sakadāgāmi-pratipannaka (Saka-  
dāgāmi-phala-saocchikiriyāya paṭipanna) (Rhys D.  
—One who has worked for the realizing the  
Fruit of once-returner; Neumann—Der das Ziel  
der Einmalwiederkehr verwirklichen lern.) 衆  
集經—斯陀含向。

【六】證一來果' Sakadāgāmi (Sakadagāmi) (Rhys  
D.—One who is a Once-returner; Neumann—Der  
einmal wiederkehrt.) 衆集經—斯陀含。

【七】證不還果向' Anāgāmi-pratipannaka (Anāgā-  
mi-phala-saocchikiriyāya paṭipanna) (Rhys D.—  
One who has worked for the realizing of the  
Fruit of never-returning; Neumann—Der das Ziel  
Der Nichtwiederkehr verwirklichen lern.) 衆集  
經—阿那含向。

【八】證不還果' Anāgāmi (") (Rhys D.—One  
who is a Never-returner; Neumann—Der nicht  
wiederkehrt.) 衆集經—阿那含。

【九】證阿羅漢果向' Arahantapannaka (Arahantā-  
ya (for Arahanta-phala-saocchikiriyāya) paṭipanna)  
(Rhys D.—One who has worked for the realizing  
of the Fruit of Arhantship; Neumann—Der das

天上に生ずべし。今布施するに由りて、天の妙樂を受けむと。是れを希天施と名く。

(八)心を莊嚴するが爲め等の施

云何が心を莊嚴せむが爲め、心を資助せむが爲め、瑜伽を資けむが爲め、通慧<sup>四六</sup>、菩提<sup>四七</sup>、涅槃<sup>四八</sup>、上義を得むが爲めの故の施なる。答ふ、一類有るが如し、是の念を作して言はく、我が心

は長夜、貪瞋癡の雜染する所と爲す。心の雜染の故に、有情は雜染あり。心の清淨の故に、有情は清淨なり。若し惠施を行ぜば、便ち欣を發起す。欣の故に喜を生じ、心、喜するが故に身、輕安なり。身、輕安の故に樂を受す。樂を受するが故に心、定す。心定するが故に如實に知見す。如實に知見するが故に厭を生ず。厭の故に能く離す。離するが故に解脫を得。解脫の故に涅槃を證すと。是くの如きの布施は、漸次に諸の勝妙法を増長し、展轉して、菩提、涅槃、微妙の上義を證得す。

加他

世尊の此れに於いて伽陀を説いて言はく——

衆相圓滿にして、

慳貪を捨離せる所への

施の、質直にして、時に應ぜば

必らず、大果を獲。

智者の善淨心にしての

施は可<sup>五</sup>祠可愛にして、

の、屢次上出の命清淨その外も參照。

【一】正勤、Samygygyāma (Sammā-vāyama)

(Rhyas D.—Right exertion; Neumann—reclites Müha.) 衆集經—正方便。大集法門經—正精進。法蘊

足論同前、及び、本論卷七・四力中の精進力下、卷十三・

五勝支(第四)、卷十四・五力等參照。

【二】正念、Samyksamāpi (Sammā-sati) (Rhyas D.—Right mindfulness; Neumann—Recht Einsicht.) 漢二典も同じ。法蘊足論—同上。本論卷二・具

念正知下、卷七・四法迹下、卷一四・五力等參照。

【三】正定、Samyaksamādhi (Sammā-Samādhi) (Rhyas D.—Right; meditation and tranquility; Neumann—Rechte Einigung.) 衆集經、大集法門經

—今と同譯。法蘊足論—同上。本論卷二・出入定善巧下、

卷三・奢摩他毘鉢奢那の下、卷下・三學の下、卷六・

四禪、四無色、卷七・四力中の定力下、卷十四・五力

等參照。

【四】前に等、實はまとまつて、前に廣説せること無し。かくて、如上各項について記せるが如き、下及び、

詳しくは差當り法蘊足論如上の箇所を參照せよ。

【五】八補特伽羅、Sang.—S. Aṭṭha puṭṭhala dakkhiṇeyā (Rhyas D.—Eight types of persons worthy of offerings; Neumann—Acht der Verehrung würdige Menschen.) 衆集經—八人。卷六・四證諄の下に、四及八輩として出されしを初め、已に幾度か紹介

された佛教の聖者の初入位以上、阿羅漢の究竟位に至るまでの八人をいふもので、廣く知らるる佛教項目の一である。本論の卷二、卷六の四沙門果等の下に於いて

各、註解しおきたれば、今は特に註せぬが、總じて、

向とは初入の準備位又は豫備的段階で、果とはその本

格的なるをいふ所である。

す。彼れは是の念を作さく、若し施を行ぜずして、如是如是の衰損有ること勿れと。是れを怖畏施と名く。

(三)報恩施

云何が報恩施なる。答ふ、一類有るが如し、是の念を作して言はく、彼れは既に會つて我れに如是如是の物を施す。我れも、亦、應さに彼れに如是如是の物を施すべし。豈に彼れが恩を得て、酬報せざらんやと。是れを報恩施と名く。

(四)求報施

云何が求報施なる。答ふ、一類有るが如し、是の念を作して言はく、我れ、今、若し、彼れに如是如是の物を施さば、彼れも、亦、當さに我れに如是如是の物を施すべしと。他が報を反すことを期して、惠施を行す。是れを求報施と名く。

(五)習先施

云何が習先施なる。答ふ、一類有るが如し、是の念を作して言はく、我が父祖は常に惠施を行じ、我が家は長夜惠施して無斷なり。我れ今生じて信家施家に在り。我が家は本來常に布施を樂ぶ。我れ若し施さずば、便ち種族を斷たむと。種族を護らむが爲めに惠施を行す。是れを習先施と名く。

(六)要名施

云何が要名施なる。答ふ、一類有るが如し、廣大妙善の稱譽、聲頌、美名を得むが爲めに、諸の方域に通じて惠施を行す。是れを要名施と名く。

(七)希天施

云何が希天施なる。答ふ、一類有るが如し、生天の勝異熟果を希求して惠施を行す。——謂はく、我れは命終して當さに

に、正しく八正道の名を與うべく、今の *Senge* 一は、八正又は八正性 *Aṣṭa-sammatā* (*Rhys D.* — *right factors of character and conduct*; Neumann—*Acht Reechtheiten*) の名を附す。その全體と各支との詳細に關しては、前記諸關係佛典の外、差し當つては、最も近く、法蘊足論六、聖諦品第一〇の清諦下のその解說や、乃至、廣くは、東西の諸原始佛教研究書等を参照すべし。

【三】正見 *Samyagdr̥ṣṭi* (*Samādriṭhi*) (*Rhys D.* — *Right views*; Neumann—*Rechte Erkenntniss*) 漢二經も正見。法蘊足論の右記、卷六、及び今の論の如上卷二、正知、思擇力、具見、見と如理勝、卷三、三善根、卷一三、五圓滿等の下参照。

【四】正思惟 *Samyaksamkalpa* (*Sammā-samkalpa*) (*Rhys D.* — *Right intentions*; Neumann—*Rechte Gesinnung*) 衆集經—正志。大集法門經—今と同。法蘊足論—同前。本論卷三・三妙行下の意妙行等参照。

【五】正語 *Samyagvāk* (*Sammāvācā*) (*Rhys D.* — *Right words*; Neumann—*Rechte Rede*) 衆集經、大集法門經、共に今と同。法蘊足論—同上、並びに、本論卷三・三妙行下の語妙行。卷九、四攝事、卷一〇、四語妙行、同四聖言等の下参照。

【六】正業 *Samyak-karmānta* (*Sammā-kammanta*) (*Rhys D.* — 以下略記に *ぎ*、同著の *Buddhism 1925 p. 108* に *よ* 補 *ぎ*—*Right behaviour*; Neumann—*Rechtes Handeln*) 兩漢典も今の譯字に同ず。法蘊足論—同上、並に、本論卷四・三妙行下の身妙行等参照。

【七】正命 *Samyagjīva* (*Sammā-jīva*) (*Rhys D.* — *Right mode of livelihood*; Neumann—*Rechtes Wandeln*) 漢二經と同譯。法蘊足論同上参照。本論



思惟、三には正語、四には正業、五には正命、六には正勤、七には正念、八には正定なり。

此の八道支は前に廣く説くが如し。

## 二、八補特伽

八補特伽羅とは、云何が八と爲す。答ふ、一には證預流果

向、二には證預流果、三には證一來果向、四には證一來果、五には證不還果向、六には證不還果、七には證阿羅漢果向、八には證阿羅漢果なり。

是くの如き八種の補特伽羅は法蘊論に廣く其の相を説くが如し。

## 三、八種の施

八種の施とは、云何が八と爲す。答ふ、一には隨至施、二

には怖畏施、三には報恩施、四には求報施、五には習先施、六には要名施、七には希天施、八には心を莊嚴せむが爲め、心を資助せむが爲め、瑜伽を資けむが爲め、通慧、菩提、涅槃、上義を得むが爲めの故の施なり。

## （一）隨至施

云何が隨至施なる。答ふ、一類有るが如し、隣近者に施し、

親近者に施し、現至者に施す。謂はく、是の念を作さく、云何が乞者の現に來つて、此に至るに而も施さざらんやと。是れを隨至施と名く。

## （二）怖畏施

云何が怖畏施なる。答ふ、一類有るが如し、怖有るが故に施し、畏有るが故に施し、怖畏に纏ぜらるゝに由りて惠施を行

P. 387.

【10】八解脱。Sang. S. VII. 1. 1. 衆集經八二〇。大集法門經八一。A. VII. 66 (IV. 306)。中阿含二四。大因經D. XV. 35. (II. 70)。D. XVI. 3. 33. (II. 11)。A. I. 20. 55 (I. 40)。Vibhanga, p. 342. 俱舍

二九。正理八〇。婆娑八四及び一五二等。

【11】八勝處。Sang. S. VII. 10. 衆集經無。大集法門經八一。A. VII. 65 (IV. 305)。A. X. 29. 6. (V. 61)。A. I. 20. 47. (I. 40)。D. XVI. 3. 24. (II. 110)。婆娑八五。俱舍二九。

【12】八道支。この譯字のまゝを、原梵語に翻せば、*Asia-marga-angani* とするべきなれど、普通には、*Ārya-śāṅga-marga Mahavyūṭpatti* (*ariya atthāṅga marga*) 即ち八聖道又は八聖道支とあるを常に

とす。蓋し、從來の一般の見解をもつてしては勿論のこと、一般佛典でも、何れも、佛教修行哲學として最も中心的代表的なるものとなし、所謂四諦の第四・道諦の如きは、最も多く、この八聖道と即一視せらるゝ程なるが、卒直に卑見を吐露し得ば、こは、已に卷第十二中、緣起に關し、いふ所のあつたと同じく、佛陀の遺佛徒らが、佛說憶持の便法を求めて、簡單な數目的形式により、廣く佛教思想項目をまとめて得た所産の一と判斷すべき所なるべく、かゝる意味で、この八聖道に於いて、現に、最も顯著な一面になつてゐる道德的教説の如きは、かの律藏に於いては、多く、單なる人間道とし、紳士道、淑女道としてのべられてゐる以外、何らの佛教修行哲學としての重大な意義を賦與せられてゐないのに、正しく着眼すべし。とにあれ、かくして、數ふる所に八支あつて、その一、一は正——平等、正平、妥當、その他の意により——の字を心づけられてゐるから、神聖視しては、八聖道なると共

# 卷第十八

## 八法品第九

### (一) 諸の八法の一

時に、舍利子の、復た、衆に告げて言はく、具壽よ、當に知るべし、佛は八法に於いて、自ら善く通達し、現等覺し已りて、諸の弟子の爲めに、宣説開示せり。我れ等は、今應に、和合結集して、佛滅度の後、乖諍有ること勿らしむべく、當に梵行に隨順するの法律をして、久住して、無量の有情を利樂せしめ、世間の諸の天・人の衆を哀愍して、殊勝の義利、安樂を獲しむべし。八法とは云何。嵬柁南に曰はく、

道支と、數取と、施と、  
懈怠と、精進と、福と、  
衆と、世法と、解脫と、  
勝處との、各、八種なるなり。

と。

一〇の八法  
八道支、八補特伽羅、八種の施、八懈怠事、八精進事、八福生、八種の衆、八世法、八解脫、八勝處有り。

一、八道支  
八道支とは、云何が八と爲す。答ふ、一には正見、二には正

【※】八法品第九等、漢譯には、八法品第九の一と作り。次の(一)諸の八法の一は無し。

【一】數取とは、補特伽羅 (Puggala) のことと、屢註の如く、有情の、數々五趣を取り、その間を輪廻するによつて、詳しくは數取趣、略しては今の如く數取の譯字を與ふと。

【二】八道支、Sang. — S. VIII. 2. 衆集經八・三。大集法門經八・四。A. VIII. 34. (IV. 238.); D. XVII. 27. (II. 216.); D. XIX. 61. (II. 251.); D. XXII. 21. (II. 311—313.); D. XXIII. 31. (II. 353); S. 45. 8. (V. 8—18) — 一般に S. 45. の諸經及び雜二八の諸經その他、これが關係經典は甚だ多し。Vibhanga XI. (pp. 265.)

【三】八補特伽羅、Sang. — S. VIII. 3. 衆集經八・四。大集法門經八・缺。A. VIII. 80 (IV. 332); VIII. 89—90 (IV. 292—3); 雜三三・一三 (大正九三) = 別雜九・二五 (一五六) = A. VI. 10 (III. 284.) の關係の經も亦多し。Puggala Paññatti. I. 47—50; VIII. 1.

【四】八種の施、Sang. — S. VIII. 6. 漢二經缺。A. VIII. 31. (IV. 236.) 俱舍十八。順正理論四四。

【五】八懈怠事、Sang. — S. VIII. 4. 漢二經缺。A. VIII. 80. (IV. 332.); Vibhanga, p. 385.

【六】八精進事、Sang. — S. VIII. 5. 漢二經缺。A. VIII. 10—18. (IV. 334.)

【七】八福生、Sang. — S. VIII. 7. 漢二經缺。A. VIII. 35. (IV. 239.)

【八】八種の衆、Sang. — S. VIII. 8. 漢二經缺。A. VIII. 69 (IV. 367.); D. XVI. 3. 21. (II. 102.); M. XII. (I. 72.)

【九】八世法、Sang. — S. VIII. 9. 衆集經八・一。大集法門經八・三。A. VIII. 5—6 (IV. 156f.); Vibhanga.

Tassa-pāpiyyasika) (Rhys D.—The proceeding for the obstinate; Neumann—Die schlimmste Weise.) 犯者の自白、懺悔の分明を缺き、或ひは自ら犯とし、或ひは犯となさざる等の場合に、羯磨を興へて、尙、妄語を取えてし、實をはかざる如き場合あらば、その態度に對して、與うそま罪法である。

【101】取多人語毘奈耶、Yadbhūyāsikya (5. Yebhūyāsikā)(Rhys D.—The proceeding by a majority of the chapter; Neumann—Abweisung durch die Mehrheit.) 是非の判斷、紛糾して決せざるが如き時、戒行圓滿、事理曉通の上座比丘らを撰んで、舍羅Salaka (Salaka) なる一種の算機により、その上座らの與みするものゝ多少によつて、是非の決をとる規定、即ち、寧ろ多人數關係によるものである。

【102】取自言持毘奈耶、Pratijñākaraka (Pratijñaya)

(Rhys D.—The proceeding on confession of guilt; Neumann—Annahme des Geständnisses.) 犯人の罪を決するは壓勢によるべきものではなく、あくまで、本人の自白、發露をまつて、羯磨すべしとの本義を示したものである。多くは取自言治に作る。

【103】如草覆地毘奈耶、Tīpavattānka) (Rhys D.—The proceeding by covering over as with grass; Neumann—Gras darüber streuen.) 草の地に伏する如く、相諍ふ諸の比丘らの、互に相謝して、諍をやめることの規定。或ひは、相互の如法の態度によつて、諍をやむること、草の泥を覆ふが如くなるべきことの定め。

【104】止諍法、Adhikaraṇa-samatha (Adhikaraṇa-samatha.)



此の中に、世尊の伽他を説いて曰はく、——

信と、戒と、善友とを具し、

寂に居し、精勤を樂び、

念と、正知とを成就するを、

七無過事と名く、

と。

### 三、七止淨法

七止淨法とは、云何が七と爲す。

答ふ、一には 現前毘奈

耶、二には 憶念毘奈耶、三には 不癡毘奈耶、四には 求彼

自性毘奈耶、五には 取多人語毘奈耶、六には 取自言持毘奈

耶、七には 如草覆地毘奈耶なり。是くの如きを名けて七止淨

法と爲す。

### 止淨法

問ふ、何に緣りて、是の七を 止淨法を名くるや。 答ふ、

淨とは謂はく、彼此の鬭訟違淨にして、斯の七法の隨一の現前するに由りて、所起の淨をして皆な調うて、止息せしむ。此の因縁に由りて、止淨法と名く。

innocent; Neumann—Abweisung durch Erinne-  
rung.)—比丘が無根の罪を被せられた際、當事比丘を  
僧伽の集りの座に誘出し、その憶念、想出を促し、斷じ  
て無根なることを憶念によつて立證し、清淨を證明す  
るの規である。  
【100】不癡毘奈耶、Amūḍha-viñaya (Amūḍha-vi-  
ñaya) (Rhys D.—The proceeding in the case of  
those who are no longer out of their mind;

【一七】七止淨法、Sarg.—5. Adhikaraṇa samāhā  
(Rhys D.—7 rules for the pacifying and suppre-  
sion of disputed questions; Neumann—Sieben  
der Mittel um Streitigkeiten anzulösen.)—漢二經  
は無し。Adhikaraṇa(梵=ED)とは dispute 即ち  
淨論、Samāhā (ED) Samāhā (梵)とは止の意に  
て、かくて、今の七止淨法との譯も出でし所なるが、蓋  
し、淨とは僧伽に於いての淨論—殊に、説戒等に關して  
のそれを指し、その決裁、判斷の爲めの依規たるもの七  
をあげて、その名をつけたものである。cf. Vinaya  
piṭaka II. 73—104. 五分律一〇、七滅淨法。十誦律二  
〇、同上名等。一向最も手近くは、赤沼智善氏の「阿  
含の佛教」四三四頁以下を参照。

【一九】現前毘奈耶、Samukha-viñaya (Samun-  
khaviñaya) (Rhys D.—The proceeding face to  
face; Neumann—Abweisung durch Gegenüber-  
stellen.) 現前とは、當事者現前の意とすべく、教法や  
律の制乃至、犯、不犯等の問題の起つた際に、僧伽全  
體が出揃つて、その前へ、當事者出席し、事の顛末を  
明白にして、もつて淨論を決する毘尼の制。

【二〇】憶念毘奈耶、Smiti-viñaya (Sati-viñaya)  
(Rhys D.—The proceeding for the consciously

Neumann—Abweisung durch Entblößen.) 癡Mū-  
ḍha (Mūḍha)とは狂癡、癡狂のこと、この不癡毘奈耶  
によると、もし犯人がかゝる狂癡の病があつて犯す所  
ありし場合には犯戒とせず、唯、不癡=健康狀態にあり  
し場合に所犯あるとき、これを罪とすといふので、つま  
り、不癡と癡とをよく調へて、所犯の、罪になるか否  
かを裁く標準たるべくある。

【二一】求彼自性毘奈耶、Tasāva bhavayīya (4.

「聖 慧」

「聖慧」と言ふは、二種の聖有り。一には善の故に聖なり。二には無漏の故に聖なり。此の慧は具さに二種の聖に由るが故に、説いて名けて聖と爲す。故に、「聖慧」と名く。

「出 慧」

「出慧」と言ふは、謂はく、彼れは是くの如きの慧を成就するが故に、能く欲界を出離し、及び、能く色・無色界を出離す。故に、「出慧」と名く。

「善通達慧」

「善通達慧」とは、謂はく、彼れは是くの如きの慧を成就するが故に、苦・集・滅・道の「四」諦に於いて、苦集滅道の相に能く通達し、善く通達し、各別に通達するに由り、是の故に、名けて、「善通達慧」と爲す。

「彼所作慧」

「彼所作慧」とは、謂はく、彼れが所引の <sup>九六</sup>學の無間道の所有の勝慧を、此の中には説いて、「彼所作慧」と爲す。

「正盡苦慧」  
「正」

「正盡苦慧」とは、云何が「正」と名くるや。答ふ、<sup>九六</sup>因の故に、門の故に、理趣の故に、行相の故に、説いて名けて「正」と爲す。

「盡苦慧」

「盡苦慧」とは、五取蘊を名けて苦と爲し、此の慧は能く五取蘊をして盡き、等盡し、遍盡せしめて、永盡を證するが故に、

「盡苦慧」と名く。

「是れを第七と名く」

「是れを第七と名く」とは、漸次、順次、相續の次第の數を第七と爲すなり。

「無過失事」

「無過失事」とは、謂はく、能く清淨を顯示するの増語なり。

【九六】學の無間道等、卷一三、五勝文下參照。

【九六】因の故に等、同上、卷一三參照。

就し」と爲す。

「久しき作と等」

「久しき作と、久しき説とを皆な能く憶念す」とは、謂はく、此の念に由りて、曾つて更る事<sup>ふ</sup>に於いて、忘せず、失念せず、心に明記す。是の故に、説いて、「久しき作、久しき説を皆な能く憶念す」と爲す。

「是れを第六と名く」

「是れを第六と名く」とは、漸次、順次、相續の次第の數を第六と爲すなり。

「無過失事」

「無過失事」とは、謂はく、能く清淨を顯示するの増語なり。

（七）第七無過失事

「具慧安住し」とは、云何が「慧」と名くるや。答ふ、若し、

「具慧安住し」

出離・遠離が所生の善法に依り、諸の法相に於いて、能く簡擇し、極簡擇し、廣く説いて、乃至、毘鉢舍那ある、是れを名けて

「慧」と爲す。

「安住し」

安住しと言ふは、謂はく、是くの如きの慧を成就するに由るが故に、諸の法相に於いて、能行し、勝行し、進趣し、證會す。斯れに由るが故に「具慧安住し」と説く。

「世間有出沒慧」

「世間有出沒慧を成就す」とは、世間とは、謂はく、五取蘊なり。

云何が五と爲す。謂はく、色取蘊、受・想・行・識取蘊なり。彼れは是くの如きの慧を成就するに由るが故に、能く如實に此の五取蘊の生及び變壞を知る。斯れに由るが故に、「世間有出沒慧を成就す」と説く。

【七】具慧安住しは、卷一三、五勝支の下より推すに、巴 Pāṭhaḥa hoti.

【八】世間有出沒慧、以下はすべて、卷一三・五勝支下の解並びに註參照。



「勤有り」

「<sup>ハハ</sup>勤有り」とは、謂はく、即ち精進の堅固なることを顯示するが故に、「勤有り」と名く。

「勇堅猛有り」

「<sup>ハハ</sup>勇・堅・猛有り」とは、謂はく、精進力を成就するに由るが故に、勇決にして取し、堅住して取し、猛利にして取し、諸有の取する所の是れ善にして、惡に非らざると隨つて取する所の相とを守護して捨せざること、他の國を獲て、善く能く守護するが如し。是の故に、説いて、「<sup>ハハ</sup>勇・堅・猛有り」と爲す。

「諸の善法に於いて、常に鞭を捨てず」

「<sup>ハハ</sup>諸の善法に於いて、常に鞭を捨てず」とは、謂はく、善法に於いて、勤勇を捨てず、熾然精進して、間無く、斷無し。是の故に説いて、「諸の善法に於いて、常に鞭を捨てず」と爲す。

「是れを第五と名く」

「是れを第五と名く」とは、漸次、順次、相續の次第の數を第五と爲すなり。

「無過失事」

「無過失事」とは、謂はく、能く<sup>ハハ</sup>清淨を顯示するの増語なり。

「(六〇)第六無過失事」

「<sup>ハハ</sup>具念安住し」とは、云何が「念」と爲すや。答ふ、若し出離・遠離が所生の善法に依る諸の念、隨念、乃至、廣く説いて是れを名けて「念」と爲す。

「具念安住し」

「最勝なる常委の念支を成就し」

「最勝なる常委の念支を成就し」とは、謂はく、八支の聖道を説いて、常委と名け、此の念は是れ彼れが一支の所攝なり。謂はく、正念支なり。是の故に説いて、「最勝なる常委の念支を成

【八六】勤有り、同上、Dulha-parakkamo.

【八七】勇・堅・猛有りとは、卷一三、五勝支の下の註を且よ。

【八八】諸の善法等、同準に、卷一三、五勝支下の註參照。

【八九】清淨、以上には、清淨なる永斷とありしも、こゝ以下で、單に清淨に作るは、永斷なれば則ち清淨なるが故とすべく、脱字とする必要はなからむ。

【九〇】具念安住し、巴 Sati-nepakkha = mastering memory or mindfulness.

【九一】念、Sati.

【九二】正念支、Samyakamity-anga (Samma-sati-anga)

「空<sup>ニ</sup>適<sup>ニ</sup>舍<sup>ニ</sup>を長<sup>ニ</sup>じ」

『空<sup>ニ</sup>適<sup>ニ</sup>舍<sup>ニ</sup>を長<sup>ニ</sup>じ』とは、謂はく、閑寂の空<sup>ニ</sup>適<sup>ニ</sup>舍<sup>ニ</sup>に住して、簡擇力に由りて、歡喜愛樂して、愁思を生ぜず、心に厭<sup>えん</sup>怖<sup>おそ</sup>無く、身心及び諸の善法を増長す。是の故に、説いて『空<sup>ニ</sup>適<sup>ニ</sup>舍<sup>ニ</sup>を長<sup>ニ</sup>じ』と爲す。

「勤めて自義を修するなり」

『勤めて自義を修するなり』とは、謂はく、諸の愛盡<sup>ニ</sup>離滅<sup>ニ</sup>涅槃<sup>ニ</sup>を最上義と名け、亦、自義と名く。是くの如きの義に於いて、精勤修學して、疾かに證得することを求む。是の故に、説いて、『勤めて自義を修するなり』と爲す。

「是れを第四と名く」

「是れを第四と名く」とは、漸次、順次、相續の次第の數を第四と爲すなり。

「無過失事」

「無過失事」とは、謂はく、能く清淨を顯示するの<sup>レ</sup>増語なり。

（五）第五無過失事  
「勤めて精進して住し」  
「精進」

「勤めて精進して住し」とは、云何が「精進」なる。答ふ、若し出離・遠離が所生の善法に於いて、精勤、勇猛にして勢用あり、策勵して、制伏す可からず、策心の相續する、是れを「精進」と名く。「而して」彼れは是くの如きの精進を成就するに由りて、修習する所に於いて、能行し、勝行し、進趣し、證會す。是の故に説いて、「勤めて精進して住し」と爲す。

「勢<sup>ハ</sup>有り」

「勢<sup>ハ</sup>有り」とは、謂はく、彼れは上品の精進の圓滿するが故に、「勢<sup>ハ</sup>有り」と名く。

【二】空<sup>ニ</sup>適<sup>ニ</sup>舍<sup>ニ</sup>を長<sup>ニ</sup>じとは、つまりこゝでは譬喻で、下文の如く、空<sup>ニ</sup>適<sup>ニ</sup>舍<sup>ニ</sup>に坐禪辨道して、身心及び諸の善法を増するの意。

【三】増語、Adhiyacana. 名號の意。

【四】勤めて精進して住し」等、巴、Viriyaṃbha  
|| zeai; resolution, energy. 卷十二、五勝支下の巴文は、Araḍḍha-viriya vilharati.

【五】勢<sup>ハ</sup>有り、卷十三、五勝支下の巴文よりすれば、Thamavā.

して、「善と交通す」と爲す。

「是れを第三と名く」とは、漸次、順次、相續の次第の數を第三と爲すなり。

「無過失事」とは、謂はく、能く清淨の永斷を顯示するなり。

（四）第四無過失事  
「樂うて閑寂に居し」とは、云何が名けて樂うて閑寂に居すと爲すや。答ふ、諸の空適舍を皆な閑寂と名け、若し此の中に住して、歡喜愛樂して愁思を生ぜず、心に厭怖無し。是の故に説いて、「樂うて閑寂に居し」と爲す。

「二の遠離を具す。謂はく、身遠離及び心遠離なり」とは、謂はく、此の中に住して、能く勤めて修學し、内心寂止して、靜慮を離れず、妙觀を成就し、空適舍を長じ、勤めて自義を修するなり。

「蓋し、能く勤め、修學し、内心寂止し」とは、謂はく、此の中に住して、能く勤めて精進して、世間の四種の靜慮を修學するなり。

「靜慮を離れず」とは、謂はく、世間の四種の靜慮に於いて、常に勤めて恩慕し、下ならず、劣ならず、怯無く、斷無し。是の故に説いて、「靜慮を離れず」と爲す。

「妙觀を成就し」とは、謂はく、世間の四種の靜慮相應の妙慧を具足し成就す。是の故に、説いて「妙觀を成就し」と爲す。

【六】閑寂、巴、*Pāṭisaṭṭhāna* = retirement for the purpose of meditation; solitude, privacy, seclusion.

【七】内心寂止、雜一五——大正藏經三六七に曰はく、當に勤め方便して、禪思を修習し、内に、その心を寂すべし……是くの如くむば、如實顯現す云々と。

【八〇】此の中は、空適舍の中。

【八一】世間の等、有漏の四靜慮のことで、所謂四禪（舊譯）、又は四靜慮（新譯）を、凡夫心によつて修せるもの。



復た次に、若し補特伽羅有りて、具戒、具徳、乃至、廣く説く。故に「善友」と名く。

「善友に親近し」

斯の善友に於いて、親近し、等親近し、極親近し、隨順し、承奉し、供養し、恭敬す。是の故に説いて「善友に親近して」と爲す。

「善を伴侶と爲し」

云何が名けて「善を伴侶と爲し」と爲すや。答ふ、斷生命、若しは不與取、若しは欲邪行、若しは虚誑語、若しは諸の酒を飲むことに於いて、皆な能く遠離し、止息し、棄捨し、厭思し、永斷するを説いて名けて「善」と謂ひ、此の善者と伴を爲し、侶を爲し、隨順し、趣向して、身心二無し。是の故に、説いて、「善を伴侶と爲し」と爲す。

「善と交通す」

云何が名けて「善と交通す」と爲すや。答ふ、若し具信、具戒、多聞、具捨、具慧「等の者」に於いて、隨轉し、隨屬し、隨順して逆せず。是の故に、説いて、「善と交通す」と爲す。

第二説

復た次に、若し出離・遠離「が所生」の善法を具足するものに於いて、隨轉し、隨屬し、隨順して逆せず。是の故に、説いて、「善と交通す」と爲す。

第三説

復た次に、若し出離・遠離「が所生」の善法を具足するものに於いて、樂を一にし、欲を一にし、喜を一にし、愛を一にし、樂を同うし、欲を同うし、喜を同うし、愛を同うす。是の故に説

とも記す)。  
【七〇】最勝の善法とは、この種の佛教の至上善たる擇滅涅槃の意。  
【七一】門、Dvāra。  
【七二】上首、Pannukha (Pannukha)。  
【七三】別解脱法Ⅱ右、別解脱契經のこと。  
【七四】他勝罪以下は、律の所謂五篇の罪科で、第一卷末尾の註参照。  
【七五】別首罪は、第一卷には對首罪に作る。  
【七六】執惡とは、旃陀羅 Gandhaka (前註)のこと。殺人等を主るが故に、この名がある。  
【七七】酤酒の記、著目すべく、勿論、尙、大乘の不酤酒に何ら直接の關係ある譯にはあらざれど、而も、小乘一般の不飲酒戒に因み、この記事あり、且つ、それが大乘の不酤酒戒に自らの關係を豫想せしむべき點で、注意に價せん。

四には音楽の家、五には<sup>一七</sup>酤酒の家なり。諸の聖弟子は、此の

所説の五非軌則と五非所行とに於いて、常に樂うで、遠離し、

止息し、棄捨し、正軌則及び正所行に於いて、具足し成就す。

斯れに由るが故に、「軌則・所行具足せざる無し」と説く。

「微小の罪に於いて、大怖畏を見」

「微小の罪に於いて、大怖畏を見」とは、謂はく、小罪に於いて、極怖想を起す。斯れに由るが故に、「微小の罪に於いて、大怖畏を見」と説く。

「學處を受學して常に毀犯無し」

「學處を受學し、常に毀犯<sup>ぼん</sup>無し」とは、謂はく、聖弟子は、是の念を作さず。——我れは如是如是の學處に於いては、應に勤めて修學すべし。我れは如是如是の學處に於いては、勤めて修學せざらむと。【而も】諸の聖弟子は常に是の念を作さく。一切

の如來、應、正等覺、廣く説いて、乃至、佛・薄伽梵の自知自見して、凡そ制立する所の一切の學處は、我れ皆な受學して、常に毀犯無からむと。斯れに由るが故に、「學處を受學し常に毀犯無し」と説く。

「是れを第二と名く」

「是れを第二と名く」とは、漸次、順次、相續の次第の數を第二と爲すなり。

「無過失事」

「無過失事」とは、謂はく、能く清淨の永斷を顯示す。

【三】第三無過失事

「善友」

「善友に親近して」とは、云何が「善友」なる。答ふ、一切の如來、應、正等覺、及び、佛弟子は皆な「善友」と名く。

七、見體達に於いて、*Diffhi-paivadeha*……。

又、衆集經の同上は——

二、減食欲を勤む（これは右 *Sang-s* の三相應か）。三、破邪見を勤む（これは今の論の第七、具慧安住等に當つべきやも知れず）。

四、多聞を勤む。

【六】前にとは、卷七、四力下、及び、卷一三、五勝支下參照。

【三】無過失事は、恐らく、梵 *Niruddha-vastu*。前註參照。

【三】清淨の永斷——諸漏已盡、一切永斷の清淨相で、つまり覺音所註の如く（前註を見よ）、阿羅漢果の當相を指すとすべし。

【六】淨戒、*gāṇḍī-s* の *ḍikkha*（學處）に當らむ。

【五】身律儀等、卷五、三福業事の下等參照。

【六】安住とは、同上、*Kamādāna* = *undertaking, acquiring*。

【三】別解脫とは、波羅提木叉 *Pātimokkha* (*Pātimokkha* の *pa* は *prā* = *separative*, *mokkha* = *emancipation* としての譯。而してこの別解脫即ち波羅提木叉は是れ佛徒の身口命等を調伏制御するもの、即ち、律儀の故に (*samvara* = *restraint*)、別解脫 = 律儀の意にて、又、別解脫律儀と記せるものである。因みに卷五、三學の下參照（俱舍一四等參照）。

【六】半月半月、卷四、三舉罪事下の布瀝他の註及び卷十二、五心裁下の同等を見よ。

【六】別解脫契經、*Pātimokkha-sutta* (*Pātimokkha-sutta*)、*prātimokkha* は上の如く、*sūtra* (*sutta*) 即ち今戒經と譯すものは簡條の意で、要するに、普通小乘二百五十戒等といふ律藏に於ける比丘、比丘尼等の日常言動の規（卷十二、心々裁下參照。又は別解脫戒經



「淨戒」 作の業なり。謂はく、身律儀、語律儀、命清淨、是れを「淨戒」と名く。

「安住」 「安住」とは、謂はく、淨戒を成就して、修行し、勝行し、進趣し、契會す。故に「安住」と名く。

「別解脱」 「精勤して、別解脱律儀を守護し」とは、云何が「別解脱」なる。

答へて謂はく、諸の如來、應、正等覺、廣く説いて、乃至、佛・薄伽梵の自知自見して、諸の苾芻の爲めに、半月半月に、常に宣説する所の「別解脱契經、是れを「別解脱」と名く。

別解脱の名釋

問ふ、何に緣りて、此れを説いて、別解脱と名くるや。答ふ、最勝の善法の此れを「門と爲し、此れを上首と爲し、此れを初縁と爲すに由りて、別行し、別住す。斯れに由るが故に、別解脱の名を立つ。

「精勤して別解脱律儀を守護し」

「精勤して、此の律儀を守護し」とは、謂はく、是くの如きの別解脱法に於いて、恒に隨作し、恒に隨轉す。斯れに由るが故に、「精勤して、別解脱律儀を守護し」と説く。

「軌則所行具足せざる無く」

「軌則・所行具足せざる無く」とは、謂はく、諸の苾芻衆は、五の非軌則及び五非所行有り。云何が名けて五非軌則と爲すや。

五非軌則  
五非所行

答ふ、一には、他勝罪、二には衆餘罪、三には墮煮罪、四には別首罪、五には惡作罪なり。云何が名けて五非所行と爲すや。答ふ、一には國王の家、二には執惡の家、三には姪女の家、

と大體相照してゐて、それに到るべき七の條件とする所を掲げるが故に、稱して、七無過失事となす所以である。尙、衆集經の譯字に到つては共に原字の摸索を容易に許さぬも、その意味は自ら同ずるものなること、蓋し、一見して察するに剩りあらん。

【二四】淨信を修植し等の文は、卷七、四力下、卷十三、五勝支下等參照。この第一無過失事相當のものは、今の *gāthā* の中には見えず。衆集經も同上。

【二五】淨戒に安住し等は、卷九、自苦等の四補特伽羅の下、卷一六、六生類下等參照。【二六】所記の「學處の受持に於いて、熾烈なる欲有り、當來に、それに於いて、遠離せざらむとの愛ありて存す」云々が、即ち、これに當るべし。衆集經は「戒行を勤む」。

【二七】善友に親近等、【二八】七無過失事中には見えず。衆集經も然り。

【二九】樂うて等、【三〇】所掲の七中の第四、「燕坐又は獨住に於いて *Paṭisaṇṇa*、熾然の欲あり、當來に、それに於いて遠離せざらむとの愛有りて存す」に相當すべし。衆集經は七「禪定を勤む」。

【三一】勤めて等、卷一三、五勝支下を參照せよ。【三二】【三三】七中の第五、「勤精進に於いて *Vīryānubhū*、熾然の欲有り……」が即ちこれに當るべし。衆集經五「精進を勤む」。

【三四】具念安住して等、【三五】七中の第六「念安住に於いて *Sati-negakko*……」に相當。衆集經は六、「正念を勤む」に配せん。

【三六】世間有出沒慧等、同上、卷一三、五勝支下參照。【三七】【三八】の七中、所應を見ず。衆集經亦丁度相應するものなし。參考、【三九】所記の残り——

二、法の觀察に於いて *Dhamma-nisantiya*……、三、願の調伏に於いて *Ichha-vinaye*……。



是れを第五無過失事と名く。

第六無過失事  
復た次に、具壽よ、聖弟子有り、具念安住して、最勝常委の念支を成就し、久しき作と、久しき説とを皆な能く憶念す。是れを第六無過失事と名く。

第七無過失事  
復た次に、具壽よ、聖弟子有り、具慧安住し、世間有出沒慧、聖慧、出慧、善通達慧、彼所作慧、正盡苦慧を成就す。是れを第七無過失事と名く。

七無過失事の論釋  
(一)第一無過失事  
「如來所に於いて、淨信を修植す」  
「淨信」  
「如來」  
「淨信」  
「如來所に於いて、淨信を修植す」とは、云何が「如來」なる。答ふ、應、正等覺を説いて、「如來」と名く。

云何が「淨信」なる。答ふ、若し出離遠離が所生の善法に依る諸の信、信の性、廣く説いて、乃至、心清淨の性の故に、「淨信」と名く。

即ち此の淨信を如來所に於いて、已に修植し、當に修植し、現に修植す。是の故に、説いて、「如來所に於いて、淨信を修植し」と爲す。

「根生じ」等の言は、前に廣く説くが如し。

「是れを第一と名く」とは、漸次、順次、相續の次第の數を第一と爲すなり。

「無過失事」とは、謂はく、能く、清淨の永斷を顯示す。

「淨戒に安住し」とは、云何が「淨戒」なる。答ふ、諸の所

【七】邊執見、Antagrahidrsi、死後の斷滅(斷見)と己身の常住(死後・常見)と二邊を執するの見。

【八】邪見、Mithyadrsi、妙行を信ぜず、惡行を信ぜず、因果を撥無し、父母無く、三世なく、業因業果等をなするの見。

【九】見取、Dagimamāsa、劣法を以つて最上にして清淨の解脱涅槃等と執するの見。

【十】戒禁取、Śāvaka-parimāsa、因に非るを因と計し、道に非るを道と計すること、例へば、外道の拔髮等の俗戒をもつて至上得解脱の戒禁なりなどとするの類。

【十一】疑隨眠、Viakṛtsā-A. (No. 4, Viakṛtoḥ-A.) (Rhs D.—The bias of doubt; Neumann—Anwahnung von Zweifel.)

【十二】諦、Satya (Succa) は「眞理の義で、蓋し、苦(哲學的問題)」、集(その因由、從來)、滅(佛教の理想)「道(理想體達の方法)」の四聖諦を云す。

【十三】七無過失事、Sapta nirdoḥa-vastūni? (Sang-S. Satta niddesa vattūni; A. VN. 18 and 39, 4—Satta niddesa vattūni.) (Rhs D.—7 bases of arhatship; Neumann—Sieben Strecken der Aufklärung.) 衆集經・七勤行。大集法門經一無し。

「今」の論が無過失事と譯せるは今記するが如く、原梵字が Nirdoḥa (fruitless) vastūni とありしならむ。而して、巴利の Niddesa をそのままに譯せば問答體の解説にして、恰もノイマン氏の所譯に同すべきものである。而もこれには已に巴智一の異字もある如く、南方佛教の大註家覺音法師所註に従ふと、この字は本來耆那教からの借字で、これ阿羅漢果を表すの語に他ならずと。これがリスデビツ氏の阿羅漢果への七要件と譯した所以であるが、要するに、今の論自らは無過失事を釋して「清淨なる永斷」といひ、自ら、覺音所註

(六)見隨眠

云何が見隨眠なる。答ふ、五見、是れを見隨眠と名く。謂はく、有身見、<sup>一四八</sup>邊執見、<sup>一四九</sup>邪見、<sup>一五〇</sup>見取、<sup>一五一</sup>戒禁取なり。是くの如きの五見を見隨眠と名く。

(七)疑隨眠

云何が疑隨眠なる。答ふ、諦に於ける猶豫、是れを疑隨眠と名く。

二、七無過失

七無過失事とは、云何が七と爲す。具壽よ、當さに知るべし、聖弟子有り、如來所に於いて、淨信を修植し、根生じ、安住し、沙門、或ひは婆羅門、或ひは天・魔・梵、或ひは餘の世間の爲めに、如法に引奪せられず。是れを第一無過失事と名く。

第二無過失

復た次に、具壽よ、聖弟子有り、淨戒に安住し、精勤して、別解脱律儀を守護し、軌則・所行具足せざる無く、微小の罪に於いて、大怖畏を見、學處を受學して、常に毀犯無し。是れを第二無過失事と名く。

第三無過失

復た次に、具壽よ、聖弟子有り、善友に親近して、善を伴侶と爲し、善と交通す。是れを第三無過失事と名く。

第四無過失

復た次に、具壽よ、聖弟子有り、樂<sup>一五七</sup>うて閑寂に居し、二の遠離を具す。謂はく、身遠離及び心遠離なり。是れを第四無過失事と名く。

第五無過失

復た次に、具壽よ、聖弟子有り、勤めて精進して住し、勢有り、勤有り、勇・堅・猛有り。諸の善法に於いて、常に輒を捨てず。

相對的に解せるに對して、今の二證者は必ずしも然りとせず、寧ろ各別に見たものなるが、察するに、今の「<sup>一五八</sup>有身見」のまた、少くとも二隨眠は相持的のものと見ざりしか。便ち、同經は一は第一に掲げ、他は第六番目として、完く相はなして列記せる所である。因みにこれを法僧伽尼論(一一二〇)の解に見ると、有貪とは有に於ける有欲、有貪、有喜、有愛……等とあつて、それが英譯者リスデビツ夫人は又再生の意に解し、欲愛、有愛、無有愛の場合等に同ぜるが、これは事實としては、どつちにでも、言葉としては解し得るものならむ。

【一五九】慢隨眠。Māna-A. (No.5. 卽字は梵に準ず。)(Rhys D.—The bias of conceit; Neumann—Anwendung von Dinkel.)—參考、法僧伽足論には(一一六。一一三三)、我れはより勝なりとの慢(我勝慢類)、我れは等しとの慢(我等慢類)、我れはより卑なりとの慢(我劣慢類)の三をとき、毘崩伽論(p. 363)には慢、過慢、慢過慢、我慢、増上慢、卑慢、邪慢の七をとき、更に、發智論(二〇)では、法僧伽尼論のを延長した如き九慢をとく。

【一六〇】無明隨眠。Avijjā-A. (No.7. Avijjā-A.) (Rhys D.—The bias of ignorance; Neumann—Anwendung von Nichtwissen.)

【一六一】三界のとは、三界に於けるの意(「三界に關しての」には非ず)。

【一六二】見隨眠。Dṛṣṭi-A. (No.3. Dṛṣṭi-A.) (Rhys D.—The bias of false opinion; Neumann—Anwendung von Verneinen.)

【一六三】有身見等五見についで、卷三「三惡行の下その外の前註參照」Sattakāya dṛṣṭi (薩迦邪見)、我々所ありとの見。



「一切の識無邊處を超え、無所有處天の如し」

「是れを第七と名く」

「一切の識無邊處を超え、無所有に入り、無處有處を具足して住するあり。無所有處天の如し」とは、謂はく、總じて無所有處天を顯示す。

「是れを第七と名く」とは、漸次、順次、相續の次第の數を第七と爲すなり。

「識住」

「識住」とは、云何が識住なる。答ふ、即ち此の所繫の所有の受・想・行・識蘊を總じて「識住」と名く。

二七 隨眠

七隨眠とは、云何が七と爲す。答ふ、一には欲食隨眠、二には瞋隨眠、三には有食隨眠、四には慢隨眠、五には無明隨眠、六には見隨眠、七には疑隨眠なり。

(一) 欲食隨眠

云何が欲食隨眠なる。答ふ、若し諸の欲に於ける諸の食、等食、乃至、廣く説いて、是れを欲食隨眠と名く。

(二) 瞋隨眠

云何が瞋隨眠なる。答ふ、若し、有情に於いて、損害を爲さむことを欲し、乃至、廣く説いて、是れを瞋隨眠と名く。

(三) 有食隨眠

云何が有食隨眠なる。答ふ、色・無色「界」に於ける、諸の食、等食、乃至、廣く説いて、是れを有食隨眠と名く。

(四) 慢隨眠

云何が慢隨眠なる。答ふ、諸の慢、特執、乃至、廣く説いて、是れを慢隨眠と名く。

(五) 無明隨眠

云何が無明隨眠なる。答ふ、三界の無智、是れを無明隨眠と名く。

【二】云「一切の識無邊處を超えとは、衆集經は唯、「不用處住」大集法門經は「無所有處天」と。

【三】識住—備考、前の註に、諸の惡魔第四靜慮並に有頂天 Bhavāgā (非想非々想處) 等は識を損するが故に識住と立ぬといへるが、これは蓋し、惡魔には重苦受ありて能く識を損害し、第四靜慮の中には無想定と無想果との俱に識を害すること有り、最後に有頂天中には、滅盡定を攝して、これが能く識の相續を壞することある等によると(順正理論(二))。

【三】七隨眠 Saptā anusāya (Sapta anusāya) (Rhyas D.—Seven kinds of latent bias; Neumann—Sieben Arten von Anwandlung.) 漢「經—不記」隨眠 Anusāya (Anusāya) は古くより煩惱 Klesha (Kilesa) を現行惑と見るに對して因位のものに名くすることありて、今のリストデビツ氏の譯の如きも、それを表示しおり、且つ、後にも大衆部の如きは亦盛にこれを説くが(俱舍隨眠品及び宗輪論述記等を見よ)、有部はかゝる區別なく、唯、七種の最根本的煩惱を七隨眠の名によつて表はす。(cf. Vibhanga p. 283.) (因みに、右大衆部に於ける、隨眠に當るものは、有部では煩惱の得といふ。)

【三】欲食隨眠 Kāma-rāga-anusāya (K.-R.-anusāya) (Rhyas D.—The bias of sensual passion; Neumann—Anwandlung von Genußbegier.)

【四】瞋隨眠 Dveṣa or Preṭigā-A. (Preṭigā-A.) (Rhyas D.—The bias of enmity; Neumann—Anwandlung von Gehässigkeit.)

【五】有食隨眠 Bhavarāga-A. (No. 6 pāli 準々) (Rhyas D.—The bias of lust for rebirth; Neumann—Anwandlung von Daseinsbegier.) 即ち「耽學

者は有を存在、再生の義に解せることに留意すべし。換言せば、今の論乃至一般に北傳では欲食と有食とを



「有情」

「有情」とは、謂はく、諦義勝義にては、諸の有情は獲す可らず、得す可らず、所有無く、現有に非ずと雖も、而も、蘊・界・處に依りて、有情を假立して、諸の想、等想、施設、言説は轉ず。謂はく、有情、人、意生、儒童、命者、生者、養者、士夫、補特伽羅と。故に「有情」と名く。

「一切の空無邊處を超え、識無邊處天の如し」

「一切の空無邊處を超え、無邊識に入り、識無邊處を具足して住するあり。識無邊處天の如し」とは、謂はく、總じて識無邊處天を顯示す。

「是れを第六と名く」

「是れを第六と名く」とは、漸次、順次、相續の次第の數を第六と爲すなり。

「識住」

「識住」とは、云何が識住なる。答ふ、即ち此の所繫の所

(七)第七識住

「無色」

「無色」とは、謂はく、彼の有情は無色にして、無色の身を施設し、有色の處無く、有色の界無く、色蘊無し、故に「無色」と名く。

「有情」

「有情」とは、謂はく、諦義勝義にては、諸の有情は獲す可らず、得す可らず、所有無く、現有に非ずと雖も、而も、蘊・界・處に依りて、有情を假立して、諸の想、等想、施設、言説は轉ず。謂はく、有情、人、意生、儒童、命者、生者、養者、士夫、補特伽羅と。故に「有情」と名く。

【三】一切の空無邊處を超え等、衆集經は唯、識處住、大集法門經は、識無邊處天と。

【三】此の所繫は、準上、識無邊處所屬の意。

と名く。

「有情」

「有情」とは、謂はく、諦義勝義にては、諸の有情は獲す可らず、得す可らず、所有無く、現有に非ずと雖も、而も、蘊・界・處に依りて、有情を假立して、諸の想、等想、施設、言説は轉ず。謂はく、有情、人、意生、儒童、命者、生者、養者、士夫、補特伽羅と。故に「有情」と名く。

「一切の色想を超え」

「一切の色想を超え」とは、謂はく、一切の眼識身相應の想を超ゆるなり。

「有對想を減し」

「有對想を減し」とは、謂はく、四識身相應の想を減するなり。

「種々想を思惟せず」

「種々想を思惟せず」とは、謂はく、五識身の所引と意識相應との色等を緣する種々の定を障礙する想の無きなり。

「無邊の空に入り……空無邊處天の如し」

「無邊の空に入り、空無邊處を具足して住するあり。空無邊處天の如し」とは、謂はく、總じて空無邊處を顯示するなり。

「是れを第五と名く」

「是れを第五と名く」とは、漸次、順次、相續の次第の數を第五と爲すなり。

「識住」

「識住」とは、云何が識住なる。答ふ、即ち此の所繫の所有の受・想・行・識蘊を總じて「識住」と名く。

「無色」

「無色」とは、謂はく、彼の有情は無色にして、無色の身を施設し、有色の處無く、有色の界無く、色蘊無し、故に「無色」と名く。

【三】一切の色想等、巴、Sabbaso rūpañhānupa samatikkhamma、漢二經「當字無」。

【三〇】有對想等、巴、Paṭiggaṇṇānam atthangama漢二經「當字缺」。有對の對は礙の義と稱せられ、これに、障礙有對、拘碍有對の二種を分つ。即ち、障礙有對とは物質相互の不可容性 impenetrability を稱し、拘碍有對は物質と精神、及び精神相互の關係で、知覺並に認識上の關係を謂ふ。これにも亦境界有對及び所緣有對の二種に分つが、詳しくは俱舍二、順正理論六等に譲る。今は勿論その中の後の方の有對即ち拘碍有對に關するものにして、想のこと故、障礙有對の所關ではないのは言ふを待たぬ。

【三一】四識身とは、専ら外界關係的なる前五識中、前文中に眼識身は已に別出したるものとして、残りの耳鼻舌身の四識身をいふ。

【三二】無邊の空以下、衆集經は唯、「空處住」。大集法門經「空無邊處天」。

【三三】此の所繫とは、準上、空無邊處天所屬の意。

〔四〕第四識  
住  
「有 色」

「有色」とは、謂はく、彼の有情の有色にして、有色の身を施設し、有色の處有り、有色の界有り、色蘊有り、故に「有色」と名く。

「有 情」

「有情」とは、謂はく、諦義勝義にては、諸の有情は獲す可らず、得す可らず、所有無く、現有に非ずと雖も、而も蘊・界・處に依りて、有情を假立して、諸の想、等想、施設、言説は轉ず。謂はく、有情、人、意生、儒童、命者、生者、養者、士夫、補特伽羅と。故に「有情」と名く。

「一 種 身」

「一種身」とは、謂はく、彼の有情は、一顯色身、一種相、一種形有り。種々の顯色無く、種々の相無く、種々の形無し。故に「一種身」と名く。

「一 種 想」

「一種想」とは、謂はく、彼の有情は、唯、樂想有り。故に「一種想」と名く。

「遍淨天の如し」  
「是れを第四と名く」

「遍淨天の如し」とは、謂はく、總じて <sup>三三</sup>遍淨等の天を顯示す。「是れを第四と名く」とは、漸次、順次、相續の次第の數を第四と爲すなり。

「識 住」

「識住」とは、云何が識住なる。 答ふ、即ち <sup>三六</sup>此の所繫の所有の色・受・想・行・識蘊を總じて「識住」と名く。

〔五〕第五識  
住  
「無 色」

「無色」とは、謂はく、彼の有情は無色にして、無色の身を施設し、有色の處無く、有色の界無く、色蘊無し。故に「無色」

【三五】遍淨等の天―遍淨天は色界第三靜慮攝の三天中の最上天で、「等」とは、その下の（順に）無量淨天、少淨天を等取す。衆集經―「遍淨天―」。是れなり。大集法門經―謂はく、三禪天なり。

【三六】此の所繫とは準上、第三禪天所屬の意。

【三七】無色、Arūpin.

【三八】有色の處無く等は、十二處中の五根五境の十處無く、準じて十八界中の十界無く、かくて五蘊中の色蘊無きをいふ。



「識住」

「識住」とは、云何が識住なる。答ふ、即ち、此の所繋の所有の色・受・想・行・識蘊を總じて「識住」と名く。

「有住」  
「有色」

「有色」とは、謂はく、彼の有情の有色にして、有色の身を施設し、有色の處有り、有色の界有り、色蘊有り。故に「有色」と名く。

「有情」

「有情」とは、謂はく、諸義勝義にては、諸の有情は獲す可らず、得す可らず、所有無く、現有に非ずと雖も、而も蘊・界・處に依りて、有情を假立して、諸の想、等想、施設、言説は轉ず。謂はく、有情、人、意生、儒童、命者、生者、養者、士夫、補特伽羅と。故に「有情」と名く。

「一種身」

「一種身」とは、謂はく、彼の有情は一顯色身、一種相、一種形有りて、種々の顯色無く、種々の相無く、種々の形無し。故に「一種身」と名く。

「種々想」

「種々想」とは、謂はく、彼の有情は、樂想、不苦不樂想有り。故に「種々想」と名く。

「光音天の如し」

「光音天の如し」とは、謂はく、總じて、光音等の天を顯示す。

「是れを第三と名く」

「是れを第三と名く」とは、漸次、順次、相續の次第の數を第三と爲すなり。

「識住」

「識住」とは、云何が識住なる。答ふ、即ち、此の所繋の所有の色・受・想・行・識蘊を總じて「識住」と名く。

【二八】梵衆天の如し、衆集經「梵光音天。大集法門經「初禪天」。即ち、その大集法門經の所記の如く、今、唯、表には梵衆天のみを出せど、事實は、初靜慮天の三すべてを表す。蓋し、そのすべてが同準の意義あるべきの故である。

【二九】劫初起位、Prathamābhiniivṛtta (Pāṭha-rābhiniivṛtta) 衆集經「最初生時は是れなり」。(因みに大正藏經、縮藏共に、劫初起位に作るは、上の本文に照合し、當然誤たることを待ぬ)。

【三〇】此の所繋とは、第一識住の場合に準じ、今の關係範圍たる梵世天、即ち、色界初禪天の所繋の意。

【三一】一種身、Ekavatāyika (Ekatta-kāya) とは、左記及び左註の諸天は顯形、狀貌の異ならざるが故に身一と名く(俱舍八)。衆集經「一身。大集法門經「一身。」

【三二】光音天、衆集經「光音天是れなり」。大集法門經「二禪天なり」。

【三三】光音等の天、光音天は、又、極光淨天と譯す(原梵名等は前註參照)。蓋し色界第二靜慮攝の三天中の最上天である。而して、今、「等」といへるは、俱舍八に曰はく、「この中には後を擧げて、兼ねて以つて初を攝するなり。知るべし、具さに第二靜慮を攝す。若し然らずんば、彼の少光天(三中の最下天)、無量光天(同、中の天)は何れの識住にか攝せん」と。もつて知るべし。右、大集法門經の所記參照。

【三四】此の所繋とは、準上に色界第二禪天の所繋繋

此の有情類は、是れ我が所化なり。我れは此の類及び餘の  
世間に於いて、是れ自在者なり、作者なり、化者なり、生  
者なり、起者なり、是れ眞の父祖なりと。

時に、諸の有情も、亦是の念を作さく、我れ等會つて見るに、  
是くの如きの有情は、獨一にして二無く、長壽にして久住す。

時に彼の有情は長時住し已りて、歎然として愛を生じ、及び、  
不樂を生じ、是くの如きの念を作さく、云何が當さに諸の餘の  
有情をして、我が同分を生じて、我が伴侶と爲らしむべきやと。  
彼れの正しく此の心願を起すの時に於いて、我れ等は便ち彼れ  
の同分内に生じ、彼れが伴侶と爲る。斯れに由りて、我れ等は  
是れ彼れの所化なり。彼れは有情及び世間の物に於いて、是  
れ自在者なり、作者なり、化者なり、生者なり、起者なり、是  
れ眞の父祖なりと。

故に「一想」と名く。

「梵衆天の如し」とは、謂はく、此の義の中には、總じて梵衆  
等の天に生在するものは種々の身有るも、唯、一想有ることを  
顯はす。

「劫初起位」とは、謂はく、劫の初めて生ずるの時なり。

「是れを第二と名く」とは、漸次、順次、相續の次第の數を第  
二と爲すなり。

【101】支分、四肢等の諸支分(Angani)。

【102】形顯とは、形は形色即ち形ち、顯は顯色即ち色  
(イロ)。

【103】空宮殿とは、須彌山上ならぬ空中所居の天の宮  
殿で、六欲界の第三、夜摩天以上はすべて空居天に屬  
し、以下はそれに對して地居天と云ふ。(Antarikṣa  
vāsin, Bhūmanā devān.)

【104】毒の盡くる等の三條件は、すべて光音等の天と  
してのそれが盡くるの意。

【105】梵世とは、色界第一靜慮所攝の大梵、梵輔、梵  
衆等、梵天關係の三天のこと。然し事實としてはこの  
初生は則ち所謂大梵天のことを意味す。

【106】不樂—Anuṭi—退屈。

【107】梵宮は、梵世天の宮殿。

【108】前生者とは、初め獨一無侶にして住し、不樂を  
生ぜるもの。

【109】世間—Loka—とは、有情世間と物器世間と二種  
に分たるゝが、今はその前者とすべし。

【110】自在者以下、俱舍四に、自在者はĪśvara (Issaro)  
—長阿含堅固經參照。自在者はĪśvara (Issaro)

【111】作者—Kartṛ (Kattā)

【112】化者—Nirṇātṛ (Nimātā)

【113】生者—Sṛṣṭi (Sufjita?)

【114】起者、俱舍四には、これの代りに、養者と云ふ  
をおき、巴利堅固經では、Yasī (junstor) と云ふが  
これに當るか。

【115】眞の父祖、俱舍四には、一切の父、巴利堅固經に  
はPita bhūta-dhavyānaṃ 因みに記す、以上、cf.

Otto Franke: Dīgha nikāya (長阿含撰譯) S. 164f.

【116】世間の物とは、生物即ち有情の義で、所詮は上  
の有情を、他の言葉で言ひ換えたもの。



し、根に缺減無く、支分圓滿にして、形顯清淨に、喜を所瞰と爲し、喜を所食と爲し、長壽にして久住す。時有り、分有りて、此の世界の劫の初めて成るの時に於いて、下の空中に於いて、空宮殿の歎然として起る有り。一有情有りて、壽の盡くるに由るが故に、業の盡くるが故に、福の盡くるが故に、先づ光音等の天の衆同分より没して、下の梵世の空宮殿中に生じ、獨一にして二無く、諸の侍者も無く、長壽にして久住す。時に彼の有情は長時住し已りて、歎然として愛を生じ、及び、不樂を生じ、是くの如きの念を作さく、云何が當さに諸の餘の有情をして我が同分を生ぜしめて、我が伴侶と爲らしめんと。彼の有情の此の心願を起すに當りて、餘の有情も、亦、壽の盡くるが故に、業の盡くるが故に、福の盡くるが故に、復た光音等の天の衆同分より没して、下の梵宮に生ずる有り。前の有情と共に伴侶と爲る。時に前生者は便ち是の念を作さく、我れは先きに此に於いて、獨一にして二無く、長壽にして久住す。長時住し已りて、歎然として愛を生じ、及び、不樂を生じ、是くの如きの念を作さく、云何が當さに諸の餘の有情をして、我が同分を生ぜしめて、我が伴侶と爲らしむべきやと。我れは是くの如きの心願を起すの時、是の諸の有情は便ち此の處に生じ、我が意願を滿たし、我が伴侶と爲る。是の故に、當さに知るべし、

經—今と同字。大毘婆沙經—「是れ識の所住なり」但し、七識住の時は七識住といふ。

【九六】此の所繫とは、今は、人及び、六欲天の全なれば、その範圍の所繫の意。

【九七】種々身とは、今は大梵天と梵衆天と、又は寧ろ、梵衆の諸天同志を對照していふものにて、蓋しそれらの考へは一次の如く一なるも、その體は大梵と梵衆と別なり。且つ、梵衆互にも亦別なるが故に、今の言あるものである。

【九八】一種想—Ekatta samjñinah (Ekatta-samjñino) 身は別でも、同一のことを考ふるの意。衆集經—一想。大毘婆沙經—一想。

【九九】此の世界の劫のとは、已に所註の所なれど、印度諸宗教—かくて佛教の宇宙論に従へば、世界は有情の業力の支配する所に從つて、生じ、住し、壞し、而して一定の空時を置いて、再び、生じ……有情の業力の新に作られ舊を相續し、同準の支配力が相續する限りは永遠に同じことを繰返すものとす。而して、これを名けて四劫とし、第一に世界の生時を成劫といひ、次に住時を住劫といひ、壞時を壞劫といひ、空時を空劫といひ、その各は二十劫の大長時に亘り、合して八十劫の大長時こそ、一期世界の生滅する時とせらる。便ち、その中の、今は第三壞劫の時についての言にして、詳しくは長阿含世起經、立世阿毘曇論、俱舍論、順正理論等の各所關の下を参照せよ。下の劫初のことは以つて知るべし。

【一〇〇】光音天、又、極光淨天と稱し、色界第二禪天中の最上天である。

【一〇一】意成の色身、Manomaya-rūpakāya、色界諸天は化生で、父母の精血等を假らず、意のまゝに身の起るが故に、その色身を意成と名く。



「人及び一分の天の如し」

「人及び一分の天の如し」とは、謂はく、總じて人及び欲界の天を顯示す。故に「人及び一分の天の如し」と名く。

「是れを第一と名く」

「是れを第一と名く」とは、漸次、順次、相續の次第の數を第一と爲すなり。

「識住」

「識住」とは、云何が識住なる。答ふ、即ち此の所繋の所有の色・受・想・行・識蘊を總じて「識住」と名く。

「有住」第二識  
「有色」

「有色」とは、謂はく、彼の有情の有色にして、有色の身を施設し、有色の處有り、有色の界有り、色蘊有るが故に「有色」と名く。

「有情」

「有情」とは、謂はく、諦義勝義にては、諸の有情は獲す可らず、得す可らず、所有無く、現有に非ずと雖も、而も蘊界處に依りて有情を假立し、諸の想、等想、施設、言説は轉ず、謂はく、有情、人、意生、儒童、命者、生者、養者、士夫、補特伽羅と。故に「有情」と名く。

「種々身」

「種々身」とは、謂はく、彼の有情は種々の顯色身、種々の相、種々の形有りて、一顯色に非ず、一相に非ず、一形に非ず。故に「種々身」と名く。

「一種想」

「一種想」とは、謂はく、諸の有情は時有り、分有りて、此の世界の劫の將に壞せんとする時に於いて、多く、上の光音等の天の衆同分中に往生して、彼れに於いて、意成の色身を具足

【一】 思惟せず、巴、Amanasikāra.

【二】 無邊の空に入りて、巴、'Ananto ākāso ti' (Rhs D.—'Conscious only of space as infinite'.)

【三】 具足して、巴、Upaṇa (revolving.)

【四】 空無邊處天、Ākāśānantyaśātana (Ākāśānantyaśātana.)

【五】 無邊の識に入りて、'Anantaṃ viññānaṃ ti' (Rhs D.—'Conscious only of 'consciousness as infinite'.)

【六】 識無邊處天、Viññānaṃtyāśātana (Viññānaṃtyāśātana.)

【七】 無所有處天、Ākāśānantyaśātana (Ākāśānantyaśātana.)

【八】 有色、Rūpin] 衆集、大集法門二經は相應の字

缺。

【九】 處とは、十二處中の五根五境の處、界とは十八

界中の同準の界。

【一〇】 有情、Sattva (Satta) — 卷五の三欲生の下の註

参照。衆集經「或ひは衆生有り」云。大集法門經「こ

れが當字もなし。

【一一】 種々身、Nānātyakāya (Nānātyakāya) 俱舍

八には身異に作る。衆集經「若干種身。大集法門經「

種々身。

【一二】 顯色身、Varpa-rūpa-kāya (梵)。種々の色(イ

ロ) の體。(Body)

【一三】 種々想、Nānāsaṃjīnaṃ (Nānāsaṃjīnaṃ) 俱舍八には想異と譯す。衆集經「若干種想。大集

法門經「種々想。

【一四】 人及び一分の天、衆集經「人及び天是れなり。

大集法門經「即ち、欲界の人・天なり。

【一五】 識住、Viññāna-sūti (Viññāna-sūti) 衆集

第六識住

あり。空無邊處天の如し。是れを第五識住と名く。

無色の有情の、一切の空無邊處を超え、無邊の識に入りて、識無邊處を具足して住するあり。識無邊處天の如し。是れを第六識住と名く。

第七識住

無色の有情の、一切の識無邊處を超え、無所有に入りて、無所有處を具足して住するあり。無所有處天の如し。是れを第七識住と名く。

七識住の論  
(一)第一識住  
「有色」

「有情」

此の中「有色」とは、謂はく、彼の有情の有色にして、有色の身を施設し、有色の處有り、有色の界有り、色蘊有るの故に、「有色」と名く。

「有情」とは、謂はく、諦義勝義にては、諸の有情は獲す可らず、得す可らず、所有無く、現有に非ずと雖も、而も蘊界處に依りて有情を假立し、諸の想、等想、施設、言説は轉ず。謂はく、有情、人、意生、儒童、命者、生者、養者、士夫、補特伽羅と。故に有情と名く。

「種々身」

「種々身」とは、謂はく、彼の有情は種々の顯色身、種々の相、種々の形有りて、一顯色に非ず、一相に非ず、一形に非ず、故に「種々身」と名く。

「種々想」

「種々想」とは、謂はく、彼の有情は樂想、苦想、不苦不樂想有り。故に「種々想」と名く。

の安住すべき所といふ意で、諸の惡處、第四靜慮天、並びに、非想非々想處天等の如く、識を壞損する意義なき三界九地の中の諸處を指す。その七については、各下を参照すべし。俱舍八、順正理論二十二一殊に後者を参照せよ。

【七】 有色の有情、巴(増一、七・四一長一五、Ma-hāduddasa sutanta)には「單に有情 Satta」。

【七】 種々身、Nānātva kāyaḥ (Nānatvakāya) 或は譯して「身各、身異等とするもの」(Rhyas D.—Diverse in body)。

【七】 種々想、Nānāvasopajjinaḥ (Nānatva-saṁbhīno) (Rhyas D.—Diverse in mind)。

【七】 一種想、Ekattvasaṁjiniṇaḥ (Ekatta-saṁbhīno (Rhyas D.—Uniform in mind; Neumann—Einzig an Denkart)。

【七】 林衆天の劫初起位、Devā brahmacāyikāḥ prathamābhiniṛvṛtāḥ (Devā brahmacāyikā prathamābhiniṛvṛtā)。

【七】 一種身、Ekattvakāyaḥ (Ekattvakāya) (Rhyas D.—Uniform in body; Neumann—Einig an Körper)。

【七】 光音天、Devā ābhāsavarāḥ (Devā ābhāsavarā)。

【七】 遍淨天、Devāḥ Śubhakarāṇaḥ (Devā śubhakarāṇa)。

【七】 一切の色相を超え、巴 Sabbeva rūpeṇāhānaḥ samatikkāmaṇa (Rhyas D.—Passed wholly beyond all consciousness of matter)。

【七】 有對想を滅し、巴 Paṭigghasāraṇaṇaṇa attha-nūgamaṇa (Rhyas D.—The dying out of the consciousness of sense-objects; Neumann—Vernichtung der Gegenwahrgenommenheit)。

加羅有勝  
有劣

勝劣——謂はく、如是如是の補特伽羅は、如是如是の徳行の、或ひは勝、或ひは劣なる有り——と了知する、是れを知補特伽羅有勝有劣と名く。

是くの如きの七種を名けて妙法と爲す。

妙法の意義

問ふ、何に緣りて、是の七を名けて 妙法と爲すや。答ふ、妙とは、謂はく、善士なり。此れは是れ彼れが法なれば、妙法と名く。謂はく、此の諸の法は善士の邊に「於いて」獲す可く、得す可く、此れは是れ彼の士が、所有、現有の故に、妙法と名く。

二、七識住  
第一識住

七識住とは、云何が七となす。答ふ、有色の有情の 種々身にして 種々想なるあり。人及び一分の天の如し。是れを第一識住と名く。

第二識住

有色の有情の、種々身にして 一種想なるあり。梵衆天の劫初起位の如し。是れを第二識住と名く。

第三識住

有色の有情の、一種身にして種々想なるあり。光音天の如し。是れを第三識住と名く。

第四識住

有色の有情の、一種身にして一種想なるあり。遍淨天の如し。是れを第四識住と名く。

第五識住

無色の有情の、一切の色想を超え、有對想を滅し、種々想を思惟せず、無邊の空に入りて、空無邊處を 具足して住する

七法品第八

【五】 辯才、巴、*Paṭibhāna* = readiness or confidence of speech.

【六】 知衆、巴、*No.ḥ. Parisāṇu* (Rhys D.—Knowledge of groups of persons; Neumann—Er richtet sich nach der Versammlung.)

【五】 長者衆及び居士衆に當るもの、巴増一、七、六四には唯 *Gaṇapadipariśa* のみ記す。轉輪王の七寶中、居士寶はこの字を用ゆ。

【六】 外道衆に當るもの、巴増一、七、六四には缺く。

【七】 *Tṭhaya parisa* なるべきなり。

【八】 行すべく、巴「近づくべく」、*Uyassan-kammita-bham*.

【九】 住すべく、巴、*Ṭṭhabham*.

【一〇】 坐すべく、巴、*Nisiddhabham*.

【一一】 語すべく、巴、*Bhāsītābham*.

【一二】 默すべく、巴、*Tupphibhaviyābham*.

【一三】 知補特伽羅有勝有劣、*Saṅg.—S. Puggalāṇu* (Rhys D.—Knowledge of individuals; Neumann—Er richtet nach der Person.)—巴増一、七、六四では、

「二種の補特伽羅有り。一には聖なるものを見むと欲し、二には欲せず。その見むと欲するものも亦二有り。一には正法を聴かむと欲し、二には聴かむと欲せず……等と數段の人間をなして、舉明・解説す。

【一四】 妙法、*Satpuruṣa-dharma* (*Satpuruṣa-dharma*, 前の非妙法の註を見よ。

【一五】 妙、*Satpuruṣa* (*Satpuruṣa*) 同。

【一六】 善士、*Satpuruṣa* (*Satpuruṣa*) 同上。

【一七】 七識住、*Saṅg.—S. Satta viñāṇa-jñitīyo* (Rhys D.—7 stations of consciousness; Neumann—Sieben Stätten des Bewusstseins.)—漢經にも七

識住」識住 *Vijāṇa-sthiti* (*Vidāṇa-jñitī*) とは識



## (三) 知 時

四九 知時とは、謂はく、正しく、是時と非時と——謂はく、此の時は應さに止相を修すべく、此の時は應さに舉相を修すべく、此の時は應さに捨相を修すべし等——と了知する、是れを知時と名く。

## (四) 知 量

五三 知量とは、謂はく、正しく、種々の分量——謂はく、所飲、所食、所嘗、所噉、若しは行、若しは住、若しは坐、若しは臥、若しは睡、若しは覺、若しは語、若しは默、若しは解勞悶等の所有の分量——を了知する、是れを知量と名く。

## (五) 自 知

五五 自知とは、謂はく、正しく、自らの徳の多少——謂はく、自らが所有の、若しは信、若しは戒、若しは聞、若しは捨、若しは慧、若しは教、若しは證、若しは念、若しは族姓、若しは辯才等——を了知する、是れを自知と名く。

## (六) 知 衆

五六 知衆とは、謂はく、正しく、衆會の勝劣——謂はく、此れは是れ刹帝利衆なり。此れは是れ婆羅門衆なり。此れは是れ長者衆なり。此れは是れ居士衆なり。此れは是れ沙門衆なり。此れは是れ外道衆なり。我れは此の中に於いて、應さに是くの如く行すべく、應さに是くの如く住すべく、應さに是くの如く坐すべく、應さに是くの如く語すべく、應さに是くの如く默すべし等——と了知する、是れを知衆と名く。

## (七) 知 補 特

六六 知補特伽羅有勝有劣とは、謂はく、正しく、補特伽羅の徳行の

に義は得べし。されど、文勢の自然として、寧ろ前者とすること、住とせんのみ。(A. N. の獨譯者、*Vatthioka* 氏も「意義」の意と「age」)

【五二】 知時、*Et' V. Kāṇṇi* (*Rhys D. Knowledge how to choose and keep time; Neumann—Er weiss Zeit zu erlesen.*)

【五三】 止相とは、法結伴伽尼論137(=Sarg.—S. II. 24. a.)に止相(奢摩他相) *Samathā-nimittam* とありて、釋すらく、心の住、等住、近住、不亂、不混亂……等(衆集經——止相に作る)と。蓋し、これに當るか。

【五四】 舉相とは(準じて)同上1358(=Sarg. S. II. 24. b.)に策心相 *Taggaha-nimittam* と稱するあり、記すらく、心の精勤、勇猛、努力、奮進、緊要、奮勵、熾然、……等と(衆集經は精勤相と記す)。蓋し、又これにも配すべきか。

【五五】 捨相とは、衆集經には又捨相とし、上二に準ずれば *Upekkhamittam* 即ち「心の樂に非ず、不樂に非らず、心觸所生の非苦非樂受の性、心觸所生の非苦非樂の受」と云々といふ、應さにこれに配すべし。(以上、衆集經は三法品中の三相参照)。

【五六】 知量、*No. 4. IV. Mattaññu* (*Rhys D. Knowledge how to be temperate; Neumann—Er weiss Mass zu halten.*)

【五七】 所飲等、巴、增一・七・六四には、飲食、衣服、臥具、醫藥等について説く。

【五八】 自知、*Et' No. 3. Attaññu* (*Rhys D. Knowledge of self; Neumann—Er kennt sich selbst.*)

【五九】 信等、巴增一同上には *Saddhā, Sīla, Suta, Cāga, Paññā* 即ち、今同様の信戒聞施(捨)及び慧の五と、今の最後の辯才 *Paññāna* との六のみ出だす。

(七) 不知補  
特伽羅有  
勝義劣

を了知せざる是れを不知衆と名く。

不知補特伽羅有勝有劣とは、謂はく、補特伽羅の徳行の勝劣、

——謂はく、如是如是の補特伽羅は、如是如是の徳行の或ひは勝、或ひは劣なる有り——と了知せざる、是れを不知補特伽羅有勝有劣と名く。

是くの如きの七種を非妙法と名く。

非妙法の意義

問ふ、何に緣りて、是の七を<sup>四三</sup>非妙法と名るや。答ふ、非妙

とは、謂はく、非善士なり。此れは是れ彼れが法なれば非妙法と名く。謂はく、此の諸の法は非善士の邊に「於いて」獲す可く、得す可く、此れは是れ彼の士が所有、現有の故に、此の七を説いて非妙法と名く。

九、第三の七  
妙法

復た、七妙法有りとは、云何が七と爲す。答ふ、一には知法、二には知義、三には知時、四には知量、五には自知、六には知衆、七には知補特伽羅有勝有劣なり。

(一) 知法

知法とは、謂はく、正しく、如來の教法——謂はく、契經、應誦、記説、伽他、自説、因縁、譬喩、本事、本生、方廣、希法、論議——を正知する、是れを知法と名く。

(二) 知義

知義とは、謂はく、正しく、彼々の語義——謂はく、如是如是の語は如是如是の義有りと——了知する、是れを知義と名く。

【四】 不知補特伽羅有勝有劣、準上に類推するに、巴は唯、不知補特伽羅 *Apagocātita* とすべし。

【五】 非妙法 *Asappurisa-dhamma* (*Asappurisa-dhamma*.)

【六】 非妙 *Asatipurisa* (*Asappurisa*.) = *Anūrya* (*Anūrya*.) 即ち、上の非妙、及び妙 (*Asat*, *Sat*) の場合の如く、單に、*Asat*, *Sat* だけでも、非妙、妙、及び、非善士、善士の義あるが如く、更に、それらに、各、*purisa* (*purisa*.) をつけても、同じで、蓋し、これは、次の第二の七妙法の場合より推して、今の論の原梵文も、亦、正しく、同準なりしならむか。

【七】 非善士 *Asappurisa* (*Asappurisa*.)

【八】 復たの七妙法 *Saṅg*—*S*, *Satta* *sappurisa-dhamma* (*Rhys D.*—*Seven qualities of the good; Neumann*—*Sieben Dinge eines guten Menschen*.)

漢二經—無。右第二の七非妙法に準する反對の場合で、自らその意義にいつては知るべし。

【九】 知法 *Ed* *Dhammānāṭi*, (*Rhys D.*—*Knowledge of the Dhamma; Neumann*—*Da kennt ein Mönch die Satzung*.)

【一〇】 知義 *Ed* *Atthaṇāṭi*, (*Rhys D.*—*Knowledge of the meaning [contained in its doctrines]; Neumann*—*Er kennt die Gegenstände*.) 即ち、*Attha* (*Skt. Artha*.) を、*リステヒツ氏* は、今の論同様に解し、*ノイマン氏* は普通、事の義といふに準じた解をして、「諸の對象」と譯す。次の註を參照せよ。

【一一】 如是如是の語とは、*A. VII. 64* (*IV. 113*.) *—Tassa tass' eva bhāṣitassa attham jānāhi...* 即ち、「如是如是の解説の *attham* を了知す……」と記す。便ち、「意味」と釋しても、「對象」と譯しても、兩者共

(二) 不知義

不知義とは、謂はく、彼々の語義——謂はく、如是如是の語は、如是如是の義有りと——了知せざる、是れを不知義と名く。

(三) 不知時

不知時とは、謂はく、是時と非時と、——謂はく、此の時は應さに止相を修すべく、此の時は應さに擧相を修すべく、此の時は應さに捨相を修すべし等——を了知せざる、是れを不知時と名く。

(四) 不知量

不知量とは、謂はく、種々の分量、——謂はく、所飲、所食、所嘗、所噉、若しは行、若しは住、若しは坐、若しは臥、若しは睡、若しは覺、若しは語、若しは默、若しは解勞悶等の所有の分量——を了知せざる、是れを不知量と名く。

(五) 不自知

不自知とは、謂はく、自らの徳の多少、——謂はく、自らが所有の若しは信、若しは戒、若しは聞、若しは捨、若しは慧、若しは教、若しは證、若しは念、若しは族姓、若しは辯才等——を了知せざる、是れを不自知と名く。

(六) 不知衆

不知衆とは、謂はく、衆會の勝劣、——謂はく、此れは是れ刹帝利衆なり。此れは是れ婆羅門衆なり。此れは是れ長者衆なり。此れは是れ居士衆なり。此れは是れ沙門衆なり。此れは是れ外道衆なり。我れは此の中に於いて、應さに是くの如く行すべく、應さに是くの如く住すべく、應さに是くの如く坐すべく、應さに是くの如く語るべく、應さに是くの如く默すべし等——

【三二】 伽他、Gāthā、同一四には韻頌に作る。

【三三】 不知義、準上に、次の七妙法の場合より推して、巴、*Atthaññū* なるべし。

【三四】 不知時、準上に、巴、*Akālaññū* なるべし。

【三五】 是時、*Kāla*、非時、*Akāla*。

【三六】 止相、止、擧、捨の三相共に、七妙法の知時の下の註を見よ。

【三七】 不知量、準上、巴、*Amataññū* なるべし。

【三八】 解勞悶は、勞悶を解くて、心身的休養。

【三九】 不自知、準上、巴、*Anattaññū* なるべし。

【四〇】 不知衆、準上、巴、*Aparisaññū* なるべし。

衆會、巴、*Parisa*。



く。是れを精進と名く。

(五)念

云何が<sup>二</sup>念なる。答ふ、諸の念、隨念、廣く説いて、乃至、心の明記の性、是れを念と名く。

(六)定

云何が<sup>二</sup>定なる。答ふ、諸の心の住、廣く説いて、乃至、心境の性、是れを定と名く。

(七)慧

云何が<sup>二</sup>慧なる。答ふ、如理所引の<sup>三</sup>簡擇と覺とに於いて、如理所引と爲し、不如理所引の簡擇と覺とに於いて、不如理所引と爲す。是れを慧と名く。

是くの如きの七種を名けて妙法と爲す。

妙法の名義

問ふ、何に緣りて、是の七を名けて妙法と爲すや。答ふ、妙とは、謂はく、善士なり。此れは是れ彼れが法の故に妙法と名く。謂はく、此の諸の法は、唯だ、善士の邊に「於いて」獲す可く、得す可く、此れは是れ彼の士が所有、現有の故に、是の七を説いて名けて妙法と爲す。

八、第二の七非妙法

復た、七非妙法有りとは、云何が七と爲す。答ふ、一には不知法、二には不知義、三には不知時、四には不知量、五には不知知、六には不知衆、七には不知補特伽羅有勝有劣なり。

(一)不知法

不知法とは、謂はく、如來の教法、——謂はく、契經、應誦、記說、伽他、自說、因緣、譬喻、本事、本生、方廣、希法、論議——を了知せざる、是れを不知法と名く。

【一〇】念 Sang.—S. Upekkhā-sati loṭi (Rhs. D. 略記: Neumann—Klar bewusst.) 衆集經—總持。

【二】定 Samādhi—但 Sang.—S. は前の七非妙法の場合同様、これに當る所記なく、その代りに、參閱 Bahussuto loṭi (Ko. 4) をおき、衆集經またそれに同す。

【三】慧 Sang.—S. Paññā loṭi (Rhs. D.—略記: Neumann—Witzig erfahren.) 衆集經—多智。

【四】簡擇と覺とは、前の非妙法の場合には唯、簡擇 Paññāya (Paññāya) とあり、今は更にこれに覺 bodhi の字を加えたものなるが、それを今は相違經 Dvādvā (兩首經) に讀みたれども、要するに慧の心所—即ち、心の悟性 Verstand 的活動の兩面を並べたもの。

【五】妙法 Saddharma (Saddhamma)

【六】妙、Sut (前の非妙法の場合の非妙の註參照)。

【七】善士, Sāt. (同上、非善士の註參照)。

【八】七非妙法は、次の七妙法に對すべきものとして、B. Asappurisa-dhamma とあるべきならむも、Sang.—S. は次の七妙法はあるも、この七非妙法はなく、準じて、現 A. N. VII. にも、乃至、自分の闕知する限り、一般巴利經典にも、その例を見出し得ず。されど、その内容は、上の七非妙法及び七妙法に順じ、智、覺、乃至、解脫、涅槃に隨順せざる七の非妙の法をのべたものに他ならぬ。

【九】不知法 次の妙法の場合より推して B. Adhammaṇṇa.

【一〇】契經 以下は所謂十二分教 Dvādaśāṅga-dhammaprayoga (梵) で、卷一四の註參照。

【一〇】記說 Vyākaraṇa (Veyākaraṇa) は、卷一四に記別に作る。(同註參照)。

の性、心流蕩の性、不一境の性、不安住の性、是れを心散亂の性と名く。

(七) 惡慧

云何が<sup>一〇</sup>惡慧なる。答ふ、不如理所引の簡擇に於いて、執して如理所引と爲し、如理所引の簡擇に於いて、執して不如理所引と爲す。是れを惡慧と名く。

是くの如きの七種を非妙法と名く。

非妙法の名義

問ふ、何に緣りて、是の七を非妙法と名くるや。答ふ、非妙とは、謂はく、非善士なり。此れは是れ彼れが法なれば、非妙法と名く。謂はく、此の諸の法は非善士の邊に「於いて」獲す可く、得す可く、此れは是れ彼の士が所有、現有の故に、是の七を説いて、非妙法と名く。

七、七妙法

七妙法とは、云何が七と爲す。答ふ、一には信、二には慚、三には愧、四には精進、五には念、六には定、七には慧なり。

(一) 信

云何が<sup>一六</sup>信なる。答ふ、諸の信、信の性、現前信の性、隨順印可、已忍樂、當忍樂、現忍樂、心清淨、是れを信と名く。

(二) 慚

云何が<sup>一七</sup>慚なる。答ふ、諸の慚、慚の性、乃至、廣く説く。是れを慚と名く。

(三) 愧

云何が<sup>一八</sup>愧なる。答ふ、諸の愧、愧の性、乃至、廣く説く。是れを愧と名く。

(四) 精進

云何が<sup>一九</sup>精進なる。答ふ、諸の非下精進の性、乃至、廣く説

【一〇】 惡慧、Sang. S. Duppaṭṭa (Rhy. D. — Want of insight; Neumann — Er verstand nicht.) 衆集經一無智。

【一一】 簡擇、Pravikara (Pravikara) = investigation.

【一二】 非妙法、Asaddharma (Asaddhamma.)

【一三】 非妙、Asat (このたが次の dharma と連結する際は d に變化す)。

【一四】 非善士、Asat. 即ち、Asat は一語にして、非妙と非善士と(形容詞及び名詞)の二用、二義あるによつて、この釋を出したものである。

【一五】 七妙法、Sapta soddharmāḥ (Satta soddhammā) (Rhy. D. — Seven virtuous qualities; Neumann — Sieben rechte Dinge.) 衆集經一七正法。前の七非妙法の反對で、準じて知るべし。

【一六】 信、Saddhā (Saddha) 但し、今の Sang. S. は人に作りし bhikkhu saddho hoti とす。——なへに Rhy. D. — 略記; Neumann — Da hat ein Mönch Zuversicht.) 衆集經一有信。

【一七】 慚、卷第二參照(本譯上卷 P. 55 of.)。

【一八】 愧、同上 (〳)。

【一九】 精進、Sang. S. Āraddha-viriyaṃ loṭi (Rhy. D. — 略記; Neumann — Tapfer hart er aus.) 衆集經一今の譯に同じ。

# 卷の第十七

## (二) 諸の七法の二

### 六、七非妙法

七非妙法とは、云何が七と爲す。答ふ、一には不信、二には無慚、三には無愧、四には懈怠、五には失念、六には不定、七には惡慧なり。

#### (一) 不信

云何が 不信なる。答ふ、諸の不信、不信の性、不現前信の性、不隨順、不印可、不已忍樂、不當忍樂、不現忍樂、心不清淨、是れを不信と名く。

#### (二) 無慚

云何が 無慚なる。答ふ、諸の無慚、乃至、廣く説いて、是れを無慚と名く。

#### (三) 無愧

云何が 無愧なる。答ふ、諸の無愧、乃至、廣く説いて、是れを無愧と名く。

#### (四) 懈怠

云何が 懈怠なる。答ふ、諸の下精進の性、劣精進の性、怯精進の性、懼精進の性、廣く説いて、乃至、心の懈怠、懈怠の性、心の不勇悍・不勇悍の性、是れを懈怠と名く。

#### (五) 失念

云何が 失念なる。答ふ、諸の空念の性、虛念の性、失念の性、心外念の性、是れを失念と名く。

#### (六) 不定

云何が 不定なる。答ふ、心の散亂の性なり。云何が心の散亂の性なる。答ふ、諸の心散の性、若しは心亂の性、心躁擾

【一】 (二) 諸の七法の二、原漢譯は、七法品第八の二と記す。

【二】 七非妙法 (Sapta asaddharmāḥ (Satta asaddhammā) (Rhys D.-7 vicious qualities; Neumann-Sieben unrechte Dinge.) 衆集經—七非法。非妙法とは解脱、涅槃に至極せず、智に趣かず、覺に趣かざるの法のこと、それに七を數えて、七非妙法といふのである。

【三】 不信 (Sang. S. Asaddha. (Rhys D.—Want of faith; Neumann—[Da hat ein Mönch] keine Zuversicht.) 衆集經—無信。

【四】 無慚、卷二參照。(本譯上卷 p. 54 cf.)

【五】 無愧、同上卷二を見よ。(シ)

【六】 懈怠 (Kausidya (Kusita) (Rhys D.—Slackness; Neumann—Es kümmert ihn wenig.) 衆集經—今と。

【七】 失念 (Sang. S. Mithinasati (Rhys D.—Muddleheadedness; Neumann—trübs sieht er.) 衆集經—多忘。

【八】 不定 (Sang. S. にはこの一を缺き、その代りに不聞 Apyasuta (Rhys D.—Want of doctrinal knowledge; Neumann—Er weiss wenig.) を置き、衆集經も Sang. S. に準じ、少聞といふを記す。—不定は Asamādhī 梵 = 不定) なるべし。

【九】 散亂 (Vikāpa (Skṭ).)



力とをおく。(2 *abhaya-bala*, *ksanti-bala*—梵)。

【三】世尊、同上 3. 6. (IV. 4.)

【四】念力、*Smṛti-bala* (*Smṛti-bala*) (*Rhys D.*—

The power of mindfulness; Neumann—Vernögen

an Einsicht.) 大集法門經—今同。

【五】世尊、同上 3. 7. (IV. 4.)

【六】四種の念住、卷六、四念處參照。

【七】定力、*Samādhi-bala* (*Skṛt. = pati*) (*Rhys D.*—

The power of concentration; Neumann—Vernögen

an Einigung.) 大集法門經—今同。

【八】世尊は、同上 3. 8. (IV. 4.)

【九】世尊、同上 3. 9. (IV. 4.)

【十】世尊とは、準上 3. A. VII. 3—7 (IV. 3 & 5.)

雜二六—大正藏經六八八、六九〇の二經參照。

(七) 速かに等、雜は「諸の有漏を盡すことを得」。又、

Etahi balava bhikkhu sukhaṃ jīvati parijito

(是への如きの諸力あるを證は賢者として安樂に生く)

と。尙「已は右の上に、次の如き二句を有す」。

Yoniso vicine dhammaṃ, paññāyatham vipassati,

parijitass' eva nibbānaṃ, vimokkha hoti cetaso//

(*Nyāyathoka*—

Tief ergründet er die Lehre,

Weise schauend ihren Sinn;

Und gleichwie ein Licht erleuchtet,

Wird sein Herz vom Wahn erlöst.

— Uebersetzung von A. N. Buch VI-VII, S. 164.)

愧恥す可きの惡・不善法に於いて、乃至、廣く説く。是れを愧力と名く。

(五)念力

云何が<sup>一六四</sup>念力なる。答ふ、<sup>一六五</sup>世尊の説くが如し。此の内に於いて循身觀に住し、乃至、廣く説いて、<sup>一六六</sup>四種の念住、是れを念力と名く。

(六)定力

云何が<sup>一六七</sup>定力なる。答ふ、<sup>一六八</sup>世尊の説くが如し。欲・惡・不善法を離れ、尋有り、伺有り、離生の喜樂ありて、初靜慮を具足して住し、廣く説いて、乃至、第四靜慮を具足して住する。是れを定力と名くと。

(七)慧力

云何が慧力なる。答ふ、<sup>一六九</sup>世尊の諸の苾芻に告げて言ふが如し。聖弟子有り、能く如實に、此れは是れ苦の聖諦なりと知る。乃至、廣く説く。是れを慧力と名く。

伽他

此の中に<sup>一七〇</sup>世尊の伽他を説いて曰はく、——  
若し諸の苾芻有り、  
信と、勤と、慚と、愧と、  
及び、念と、定と、慧との力を具せば<sup>一七一</sup>  
速かに衆苦を盡すことを得、  
と。

【一七〇】四種の正勝、Catvāri (samyak)-pradhānāni  
= 四正斷Catvāri (samyak)-prahāṇāni 卷六參照。

【一五】世尊とは、同上、§. 9. (IV. 6.)

【一五】伽他、Gāthā 頌又は偈と譯す。韻文のこと。  
A. VII. 6. (IV. 6.) = A. VII. 5 (IV. 5) 參照。

【一五】富貴、Bh' Adalidāna.

【一五】大士等の一頌、今の巴には見えず。その代りに上の頌を「それを不貪(富貴)と我は呼ぶ」と作る。

【一五】常に等、巴文は等々違ひ、  
Tasmā suddhāṇi ca sīlāni ca

paśādāṇi dharmadassanāṇi //

anuyūjetha medhavi saram  
buddhānāssanam //

(Nyāyaticā) — So gebe hin der weise Mann

Sich dem Vertrauen, der Sittlichkeit,  
Dem Wahrheitsblick, der Zuversicht,

Der Weisung Buddhas eingedenk. —

— Uebersetzung von A. N. Buch VI-VII. S. 164.)

【一五】七力、Sapta-balaṇḍi (Satta balanti) (Bhys D. — 7 powers; Neumann — Sieben Vermögen.) 大

集法門經 — 今の譯に同じ。上の七財にやゝ準じ、佛教的修行徳目として、解脫入涅槃の上に、大力用ある七項目をまとめて掲げたもの。その中、前の財を今、力にしただけのものもあれば、それらは特に原語等を掲げない。 — 雜二六・六七・七八、七力經等を參照せよ。

【一五】世尊のとは、A. VII. 4 (IV. 3.) §. 3.

【一五】精進力、Vijjā-bala (Viriya-bala) (Bhys D. — The power of faith; Neumann — Vermögen an Zuversicht.) 大集法門經 — 今に同。

【一五】世尊とは、同上、§. 4. (IV. 3.)

【一五】世尊は、同上、§. 5. (IV. 3.) 大集法門經はこれ及び次の愧力の二に當るものと代りに、無畏力と認

聞と、捨と、慧との財を具する者は、

眞に<sup>一五五</sup>富貴にして、應さに知るべし、

我れは彼れを<sup>一五五</sup>大士と説く。

虚しく一生を度せず、

常に天・人の中に生じて

富貴の妙樂を受く、

と。

## 五、七 力

七力とは、云何が七と爲す。答ふ、一には信力、二には精

進力、三には慚力、四には愧力、五には念力、六には定力、七には慧力なり。

### (一) 信 力

云何が信力なる。答ふ、<sup>一五九</sup>世尊の諸の苾芻に告げて言ふが如

し、聖弟子有り、如來の所に於いて、淨信を修植し、乃至、廣く説く。是れを信力と名くと。

### (二) 精進 力

云何が精進力なる。答ふ、<sup>一六〇</sup>世尊の説くが如し。已生の惡・不

善法を斷ぜしむるが爲めの故に、欲を起し、乃至、廣く説いて、<sup>一六〇</sup>四種の正勝、是れを精進力と名く。

### (三) 慚 力

云何が慚力なる。答ふ、<sup>一六二</sup>世尊の説くが如し。具慚の者有り、

慚羞す可きの惡・不善法に於いて、乃至、廣く説く。是れを慚力と名くと。

### (四) 愧 力

云何が愧力なる。答ふ、<sup>一六三</sup>世尊の説くが如し。住愧の者有り、

續集者たり。

【一五五】能く語義を持しとは、今の巴文は 'Tathārūpa-saṃ dhammā bahusantā honti dhātā vacasā paricīta'……とあれば、蓋し「是の如きの諸法を多く聞き、持し、語によりて解し……」と譯すべきならむを、

「是くの如きの諸法に於いて多聞なり」 Tathārūpa-saṃ dhammā bahusantā 語の持者なり、dhātā vacasā 通達者なり、'paricīta'……」等とも解したるものなるべく、或ひは原梵文が、今の巴文と違ひたるやも知れぬが、原文の當巴文に近かりし限り、やや、その譯か。

【一五九】心散亂無く、E' Manasānupakkhita (The mind is concentrated.)

【一六〇】見もて等、E' Dīṭṭhiyā suppalividdhā (見によりて、よく、通達せり)。

【一六二】捨財、Tyāgadhana (Cāgadhana) (Rhyas D.—The treasure of self-denial; Neumann—Ein Schatz von Entsagung.)

【一六三】世尊とは、同上、§8. (IV. 6.)

【一六四】能く慳垢等、E' Vighatthanamaṇocherema cetasa=with mind which is freed from the stain of avarice.)

【一六五】居家に住す、E' Agāreṇa nījīvanti.

【一六六】手を舒べて等、E' Payatupāṇi=with outstretched hand=liberal.

【一六七】好んで等、E' Vossaggarata=fond of donation (s.)

【一六八】平等施等、E' Dāna-samvihāga-rato=planning with the distribution of gifts.

【一六九】慧財、Prajā-dhana (Paññā-dhana) (Rhyas D.—The treasure of insight; Neumann—Ein Schatz von Weisheit.)



(五)聞財

云何が<sup>一三三</sup>聞財なる。答ふ、世尊の説くが如し。苾芻當さに知るべし、聖弟子有り、多聞、聞持にして、其の聞を積集す。謂はく、佛の所説の無上の法要の、初・中・後善く、文義は巧妙に、純一圓滿にして清白なる梵行あらしむるなり。彼れは是くの如きの無上の法要に於いて、多聞を具足し、能く語義を持し、極めて善く通利し、心散亂無く、見もて善く通達する、是れを聞財と名く。

(六)捨財

云何が<sup>一三四</sup>捨財なる。答ふ、世尊の説くが如し。苾芻當さに知るべし、聖弟子有り、慳垢の爲めに纏ぜられたる衆中に於いて、能く慳垢を離れ、居家に住すと雖も、而も心著する無く、能く惠施を行じ、能く手を舒べて施し、常に棄捨を樂び、好んで祠祀を設け、惠捨具足し、行施の時に於いて、平等に分布する、是れを捨財と名く。

(七)慧財

云何が<sup>一三五</sup>慧財なる。答ふ、世尊の説くが如し。苾芻當さに知るべし、聖弟子有り、能く如實に、此れは是れ苦の聖諦なり、此れは是れ苦の集の聖諦なり、此れは是れ苦滅の聖諦なり、此れは是れ苦滅に趣く道の聖諦なりと知る、是れを慧財と名く。

伽他

男子或ひは女人の  
信と、戒と、慚と、愧と、

に作る - Rhys D. - Dialogue of the Buddha III. p. 235. footnote 1.)

【三三】信財 Suddhā-dharmā (Saddhā-dharmā) (Rhys D. - The treasure of faith; Neumann - Ein Schatz von Zuversicht.)

【三三】世尊とは、A. VII. 6. 3 (IV. p. 5) 等。

【三三】根生じ等の文は、卷十三、五勝支の下等参照。右巴增一の文には例の如く「如来、應、正等覺……等なり」として、如来に於て「信あり」等と記す。

【三六】戒財 Sīla-dharmā (Sīla-dharmā) (Rhys D. - The treasure of morals; Neumann - Ein Schatz von Tugend.)

【三六】世尊とは、A. VII. 6. 4 (IV. 5).

【三六】慚財 Hridhna (Hiridhna-) (Rhys D. - The treasure of conscientiousness; Neumann - Ein Schatz von Demuth.)

【三六】世尊とは、A. VII. 6. 5 (IV. 5.) (但、この巴の説明は幾分今と相違す。参照すべし。)

【三六】具慚者、B. Hirimā.

【三六】愧財 Apatāpyadhana (Ottāpyadhana) (Rhys D. - The treasure of discretion; Neumann - Ein Schatz von Bescheidenheit.)

【三六】世尊とは、同上 8 6 (IV. 5.)

【三六】住愧者、B. Ottāpyi.

【三六】聞財 Śrutadhana (Suta dhana) (Rhys D. - The treasure of learning; Neumann - Ein Schatz von Kenntnissen.)

【三七】世尊とは、準上に 3 7 (IV. 6.)

【三八】多聞、B. Bahusuta.

【三八】聞持、B. Suta-dhara.

【四〇】其の聞を積集す、B. Sutasamucaya (所聞の

して、大勢力を具し、自在に運轉して、究竟圓滿せしむるが故に、定具と名く。

#### 四、七 財

七財とは、云何が七と爲す。一には信財、二には戒財、三には慚財、四には愧財、五には聞財、六には捨財、七には慧財なり。

#### (一) 信 財

云何が<sup>110</sup>信財なる。答ふ、世尊の説くが如し。苾芻當さに知るべし、聖弟子有り、如來の所に於いて、淨信を修植し、根生じ、安住して、沙門、或ひは婆羅門、或ひは天・魔・梵、或ひは、餘の世間の爲めに、如法に引奪せられず。是れを信財と名く。

#### (二) 戒 財

云何が<sup>111</sup>戒財なる。答ふ、世尊の説くが如し。苾芻當さに知るべし、聖弟子有り、斷生命を離れ、不與取を離れ、欲邪行を離れ、虚誑語を離れ、諸の酒を飲むことを離る。是れを戒財と名く。

#### (三) 慚 財

云何が<sup>112</sup>慚財なる。答ふ、世尊の説くが如し。具慚の者有り、慚羞す可き惡・不善法の、諸の雜染有り、能く後有を感じ、極熾然の苦異熟果有り、能く後世の生老死の法を引くに於いて、深く慚羞を起す。是れを慚財と名く。

#### (四) 愧 財

云何が<sup>113</sup>愧財なる。答ふ、世尊の説くが如し。住愧の者有り、愧恥す可き惡・不善法の、諸の雜染有り、能く後有を感じ、極熾然の苦異熟果有り、能く後世の生老死の法を引くに於いて、深く愧恥を生ず。是れを愧財と名く。

となり、煩惱的の功用を及ぼすこと少なからず。故に、今はそうしたものを一の分障としてあげたるものにして、自ら、俱分解脱の聖は、一切の煩惱障を永斷せるのみならず、その永斷せりとの觀念、即ち、解脱障をも亦解脱し、かくて、二面の解脱(俱解脱)を成就すといふ意を現すが、即ち今の全文の意に外ならぬ。

【110】七定具。Sang. — S. Sattasamādhi-parikkhaṇa (Rhyas D. — Seven requisites of concentration; Neumann — Sieben Geheile der Einigung.) 衆集經一七三昧具。大集法門經一七三摩地緣。八聖道支中の前七支のことにて、その七は第八の正定の緣であり、具足の資助、増盛の條件であるが故に、七定具といふ所である。その一一については、衆集は正見・正思・正語・正業・正命・正方便・正念に作り、大集法門は正觀察・正籌量・正言說・正施作、正活命・正勇猛・正念住に作る。

【111】七道支とは、八正道中の七正道支といふ意。

【112】彼れが相とは、八聖道支中の七聖道支の相の如く。意。かくて、その下にとくから、今はそれに譲つて省くとなり。但し、卷十八の八聖道支下に於いても、略筆して、詳説はしておらぬ。

【113】定具。? Samādhi-pari-kāra (Samādhi-pari-kāraṇa) 七財。Sapta dhanāni (Satta dhanāni) (Rhyas D. — Seven treasures; Neumann — Sieben heilige Schätze.) (漢二經には無し) 財とは、世間の財は佛教に於いては無常の苦法として斥くる所故、今、専ら、佛教獨特のもの、又は、佛道修行の必須の條件たるものを財に譬へて名けたもの。而してそれに七を數くて、七財と稱す。但し、傳によつては、ārya (ārya) の字を、間に挟み、譯して又七聖財とし、その眞義をより鮮明にしてゐるものもある。(例、縮句及び邏輯の印刷本衆集經の如きは聖字を入れ Satta ariyadhanāni



に於いて、身もて已に證し・具足して住すと雖も、而も未だ慧を以つて永く諸漏を斷盡せざる、是れを身證補特伽羅と名く。

### (六)慧解脱

云何が<sup>二五</sup>慧解脱補特伽羅なる。答ふ、若し補特伽羅の、八解脱に於いて、身もて未だ證し・具足して住せずと雖も、而も已に慧を以つて永く諸漏を盡せる、是れを慧解脱補特伽羅と名く。

### (七)俱分解脱

云何が<sup>二六</sup>俱分解脱補特伽羅なる。答ふ、若し補特伽羅の、八解脱に於いて、身もて已に證し・具足して住し、而も復た、慧を以つて永く諸漏を盡せる、是れを俱分解脱補特伽羅と名く。

### 俱分解脱の名義

問ふ、何の故に俱分解脱補特伽羅と名くるや。答ふ、二の分障有り。一には<sup>二七</sup>煩惱分障、二には<sup>二八</sup>解脱分障なり。是れを俱分と名く。此の補特伽羅は彼の二の分障に於いて、心、俱に解脱し、極解脱し、永く解脱す。是れを俱分解脱補特伽羅と名く。

### 三、七定具

七定具とは、云何が七と爲す。答ふ、一には正見、二には正思惟、三には正語、四には正業、五には正命、六には正勤、七には正念なり。

### 七定具<sup>二七</sup>道支

是くの如きの七種は即ち<sup>二九</sup>七道支なり。應さに<sup>三〇</sup>彼れが相の如く、一一を別説すべし。是れを定具と名く。

### 定具の名義

問ふ、何の故に<sup>三一</sup>定具と名くるや。答ふ、定とは謂はく正定なり。七道支の資助し、圍遶するに由りて、彼れをして、増盛

riṣṭo) 大集法門經一五・信解脱。人施設論は「信解脱とは四諦知實知等と説明せる外に、又、隨信行の下に、隨信行の果に安住せるは則ち信解脱なり」と記す(p. 15)。

【二五】見至<sup>一</sup> Dṛṣṭiprāpti (Dīḥiprāpti) (Rhyas D.—They who have won the view; Neumann—Der Aufgeklichte.) 大集法門經は、今の七人に當るものの中に、心解脱を含むが、蓋しこの見至とでも相應すとする外なきなり。人施設論は前の場合に準じ、隨法行の果に安住せるは則ち見至とす。

【二六】身證<sup>二</sup> Kāyasakṣi (Kāyasakṣi) (Rhyas D.—They who have bodily testimony; Neumann—Der Körperzeuge.) 大集法門經—今と同。人施設論の解説も大體同じるが、唯「而も未だ慧をもつて」以下が、

「且つ、慧によりて一部の漏を斷じたるを」と作る。(p. 14f.)

【二七】八解脱<sup>三</sup> Aṣṭau vimokṣāḥ (Aṣṭa vimokṣa) 卷十八、參照。

【二八】慧解脱<sup>四</sup> Prajñāvimukti (Prajñāvimutti) (Rhyas D.—The freed by insight; Neumann—Der Weisheitslöste.) 大集法門經も今の譯語と同じ。人施設論の説明も全く同。(p. 14)。

【二九】俱分解脱<sup>五</sup> Ubhayatobhaga-vimukti (Ubhatobhaga-vimutti) (Rhyas D.—The freed both-ways; Neumann—Der Beiderseiterlöste) 大集法門經—俱解脱。人施設論の説明も全く同じ。(p. 14)。

【三〇】分障<sup>六</sup> Bhāga-āvaraṇa<sup>?</sup>

【三一】煩惱分障<sup>七</sup> Kṛśa-bhaga-āvaraṇa なるべし。

【三二】解脱分障<sup>八</sup> Vimokṣa-bhaga-āvaraṇa なるべし。

蓋し、これは經にも已に解脱の心境を説く最後の文として「……解脱し、また、解脱に於いて解脱すと知る」と等と記する如く、由來、なまかな解脱は又一種の障礙



便ち、是の念を作さく、善哉、善哉、言ふ所の<sup>110</sup>諦は實にして、定むで虚妄ならず。苦は眞に是れ苦、集は眞に是れ集、滅は眞に是れ滅、道は眞に是れ道なり。我れは今者に於いて、應さに自ら審知すべく、應さに自ら審見すべく、應さに自ら審察すべし、——諸行は無常なり、有漏行は苦なり、一切法は空なり、

無我なりと。是の念を作し已りて、便ち、自ら審察すらく、諸行は無常なり、有漏行は苦なり、一切法は空なり、無我なりと。

自ら、諸行は無常なり、有漏行は苦なり、一切法は空なり、無我なりと審察するに由るが故に、便ち、後時後分に於いて、世第一法を修得し、此れより無間に、苦法智忍相應の聖道を生じ、欲界の行を觀じて、無常、或ひは苦、或ひは空、或ひは無我と爲し、隨一現前して、乃至、未だ道類智を起して現在前せず。爾の時を隨法行と名け、是れを隨法行補特伽羅と名く。

(三)信勝解  
云何が<sup>111</sup>信勝解補特伽羅なる。答ふ、即ち隨信行補特伽羅の道類智を得るが故に、隨信行の性を捨し、信勝解の數に入る、是れを信勝解補特伽羅と名く。

(四)見至  
云何が<sup>112</sup>見至補特伽羅なる。答ふ、即ち隨法行補特伽羅の

道類智を得るが故に、隨法行の性を捨して、見至の數に入る。是れを見至補特伽羅と名く。

(五)身證  
云何が<sup>113</sup>身證補特伽羅なる。答ふ、若し補特伽羅の<sup>114</sup>八解脫

とは、一切法が上の如く無常であつて、恒久的實體無く、又下の如く無我にして、同じく、永遠の自性無きをいふもので、今は、殊に小乗的に、一切法に空無我とするものの如きも、總じて、この空の字は巴利傳よりか北傳に多く、この點は留意の價值ありとせん。

【107】世第一法、*Paṇḍita-gādhama* (梵)。卷四の註參照(本譯、上卷 P. 146. [一七五]を見よ)。

【108】苦法智忍、*Dukkhe dhammānāyāsakānti* (梵)同上卷四の註參照。而して、有部では有世第一法の位に已にこの苦法智忍を次刹那に證得すべき可能性に即ち所謂得 *Preṇḍita* ありとして、世第一法とこの苦法智忍の位とを完く瞬間的に相隣りするものとす。故に今も無間といふものである。(因みにかくて、有部は世第一法位を完く一刹那とするが、反之、大衆部等では世第一法—性地法 *Gotra-bhūmika-dharma* といふ—は多念相續の位とし、それよりの退もあり得といふ。宗輪論等—婆沙五—參照)。

【109】聖道、*Āryamārga* とは、こゝでは無漏智のこと。

【110】道類智、*Dugkhe, nvaṇṇāna*。(梵)。準上に卷四の註參照。(これらの智の次第は苦法智忍—苦法智、苦類智忍—苦類智、集法智忍—集法智……)。

【111】隨法行、*Dhammānāsi*(No. 6.) *Dhammānāsāsi* (Rhys D.—The followers of wisdom; Neumann—Der Wissenderegene.) 大集法門經一六・法行。

【112】凡位中、凡夫の當時。

【113】諦とは、*Satya* (Süen) 卽ち眞理の意。

【114】信勝解、*Saddhāvimutta puggala* (Rhys D.—They who are freed by confidence; Neumann—Der Glaubige—

(二) 隨法行

妄ならず。苦は眞に是れ苦、集は眞に是れ集、滅は眞に是れ滅、道は眞に是れ道なり。我れは今者に於いて、應に勤めて觀察すべし、——諸行は無常なり、有漏行は苦なり。一切法は空なり、無我なりと。是の念を作し已りて、遂に勤めて觀察するく、諸行は無常なり。有漏行は苦なり。一切法は空なり、無我なりと。勤めて諸行は無常なり、有漏行は苦なり、一切法は空なり、無我なりと觀察するに由るが故に、便ち、後時後分に於いて、世第一法を修得し、此れより無間に、苦法智忍相應の聖道を生じ、欲界の行を觀じて、無常、或ひは苦、或ひは空、或ひは無我と爲し、隨一現前して、乃至、未だ、道類智を起して現在前せず。爾の時を隨信行と名け、是れを隨信行補特伽羅と名く。

云何が隨法行補特伽羅なる。答ふ、此の隨法行補特伽羅は、先きの凡位中に、性を裏けて、多思惟、多稱量、多觀察、多簡擇、多推求にして、信少く、愛少く、淨少く、勝解少く、慈愍少く、彼れは多思惟、多稱量、多觀察、多簡擇、多推求なるに由るが故に、如來或ひは佛弟子の、正法を宣説し、教授教誡するに遇ふことを得、如來或ひは佛弟子の、正法を宣説し、教授教誡し、無量の門を以つて、苦は眞に是れ苦、集は眞に是れ集、滅は眞に是れ滅、道は眞に是れ道と分別開示するに遇ふに由り、

saṃbojjhaṅg<sup>101</sup>) (Rhys D. — The factor of equanimity; Neumann — Das Gleichmuths Erweckung.) 衆集經 — 護覺意。大集法門經 — 捨覺支。

【九一】七補特伽羅。? Saptha-puṭṭhāḥ (Sang. — S. Sutta puṭṭhā dakinneyyā) (Rhys D. — Seven [types of] persons worthy of offerings; Neumann — Sieben der Verehrung würdige Menschen.) 大集法門經 — 七種補特伽羅。隨信、隨法二行より俱解脫に及ぶ七種の聖を一團にしたもので、これらと所謂四双八輩の聖、即ち、預流向乃至阿羅漢果までの聖との關係については、諸部の見解必ずしも同一ならざる如く、各多少の相違を見るが、詳しくは上座部は人施設論、正量部は三彌底部論、有部は俱舍、婆沙等の所説を参照せよ。

【九二】隨信行、Śraddhānāsari puṭṭhā (No. 7; Saddhānāsari [puṭṭhā]) (Rhys D. — The followers of confidence; Neumann — Der Gläubigergehene.) 大集法門經 — 七、信行。

【一〇〇】善哉、善哉、Sādhu kho sādhu kho (Eh)°。經中絶えず出る文句にして、自ら合點し、他の説を允可承服し、他人の行爲を讃する等の時の用語である。

【一〇一】諸行は無常とは、原典には一切行無常とあつて、行とは變化するものの意で、従つて、實は無常なるが故に行なのである。従つて、その一切行が無常なるや勿論といふべし。

【一〇二】有漏行は苦とは、阿含部の漢巴兩傳のもの等には、右の一切行無常とすが關連し、無常の故に、又は、無常は苦とある所なるが、蓋し、有漏の行は則ち、煩惱的行なれば、結局の意味に於いては、我らに對し苦を價する所として、今、有漏行は苦といへるもの。

【一〇三】一切法は空とは、實は、空、Suñyata (Suñnata)



を思惟し、集に於いて集を思惟し、滅に於いて滅を思惟し、道に於いて道を思惟する無漏の作意に相應する心の住、等住、廣く説いて、乃至、心一境の性、是れを定等覺支と名く。

(七)捨等覺支

云何が捨等覺支なる。答ふ、諸の聖弟子の、苦に於いて苦を思惟し、集に於いて集を思惟し、滅に於いて滅を思惟し、道に於いて道を思惟する無漏の作意に相應する心の平等の性、心の正直の性、心の無警覺、寂靜住の性、是れを捨等覺支と名く。

二、七補特伽羅

七補特伽羅とは云何が七と爲す。答ふ、一には、隨信行補特伽羅、二には隨法行補特伽羅、三には信勝解補特伽羅、四には見至補特伽羅、五には身證補特伽羅、六には慧勝解補特伽羅、七には俱分解脫補特伽羅なり。

(一)隨信行

云何が隨信行補特伽羅なる。答ふ、此の隨信行補特伽羅は、先きの凡位中に、性を裏けて多信、多愛、多淨、多勝解、多慈愍にして、思惟少く、稱量少く、觀察少く、簡擇少く、推求少く、彼れは多信、多愛、多淨、多勝解、多慈愍なるに由るが故に、如來或ひは佛弟子の正法を宣説し、教授教誡するに遇ふことを得、如來或ひは佛弟子の正法を宣説し、教授教誡し、無量の門を以つて、苦は眞に是れ苦、集は眞に是れ集、滅は眞に是れ滅、道は眞に是れ道なりと分別開示するに遇ふに由り、便ち、是の念を作さく、善哉、善哉、言ふ所の語は實にして、定むで虚

【六】 念等覺支 Smṛtisambodhyaṅga (Sati-sambo-jhāṅga) (Rhyas D.—The factor of mindfulness; Neumann—Der Einsicht Erweckung.) 衆集經—念覺意。大集法門經—念覺支。

【六】 擇法等覺支 Dharmavicaya-sambodhyaṅga (Dhamma-vicaya-sambodhiṅga) (Rhyas D.—The factor of study of doctrine; Neumann—Des Tiefsinns Erweckung.) 衆集經—法覺意。大集法門經—擇法覺支。

【九】 諸の簡擇法等、例へば卷第三、奢摩他・毘鉢舍那等の下の文—參照。

【二】 精進等覺支 Viriyasambodhyaṅga (Viriyasambodhiṅga) (Rhyas D.—The factor of energy; Neumann—Der Kraft Erweckung.) 衆集經—精進覺意。大集法門經—精進覺支。

【二】 喜等覺支 Pitisambodhyaṅga (Pitisambodhiṅga) (Rhyas D.—The factor of zest; Neumann—Der Heiterkeit Erweckung.) 衆集經—喜覺意。大集法門經—喜覺支。

【三】 輕安等覺支 Prasrabhisambodhyaṅga (Pāssaddhisambodhiṅga) (Rhyas D.—The factor of serenity; Neumann—Der Lindtheit Erweckung.) 衆集經—猗覺意。大集法門經—輕安覺支。

【三】 身輕安巴 Kāyaprasasaddhi (Vibhāṅga p. 228, Dhammasaṅgani 320 321.)

【五】 心輕安巴 Cittaprasasaddhi (〃)

【六】 定等覺支 Samādhisambodhyaṅga (Samādhisambodhiṅga) (Rhyas D.—The factor of concentration; Neumann—Der Innigkeit Erweckung.) 衆集經—定覺意。大集法門經—定覺支。

【七】 捨等覺支 Upekṣā-sambodhyaṅga (Upekṣā-



く説いて、乃至、心の明記の性、是れを念等覺支と名く。

(二) 擇法等覺支

云何が 擇法等覺支なる。答ふ、諸の聖弟子の、苦に於いて苦を思惟し、集に於いて集を思惟し、滅に於いて滅を思惟し、道に於いて道を思惟する無漏の作意に相應する 諸の簡擇法、廣く説いて、乃至、毘鉢舍那ある、是れを擇法等覺支と名く。

(三) 精進等覺支

云何が 精進等覺支なる。答ふ、諸の聖弟子の、苦に於いて苦を思惟し、集に於いて集を思惟し、滅に於いて滅を思惟し、道に於いて道を思惟する無漏の作意に相應する諸の勤精進、廣く説いて、乃至、勵意して息まざる、是れを精進等覺支と名く。

(四) 喜等覺支

云何が 喜等覺支なる。答ふ、諸の聖弟子の、苦に於いて苦を思惟し、集に於いて集を思惟し、滅に於いて滅を思惟し、道に於いて道を思惟する無漏の作意に相應する心の欣、極欣、數欣、欣の性、欣の類、適意、悅意、可意、踴躍、踴躍にあらざるに非ざる、悅受、適悅、調柔の性、堪任の性、歡悅、歡悅の性、歡喜、歡喜の性、是れを喜等覺支と名く。

(五) 輕安等覺支

云何が 輕安等覺支なる。答ふ、諸の聖弟子の、苦に於いて苦を思惟し、集に於いて集を思惟し、滅に於いて滅を思惟し、道に於いて道を思惟する無漏の作意に相應する 身輕安、心輕安、輕安の性、輕安の類、是れを輕安等覺支と名く。

(六) 定等覺支

云何が 定等覺支なる。答ふ、諸の聖弟子の、苦に於いて苦

經七・四。A. VII. 3—4 (IV. 3.) 雜二六・一 大正藏經 六八一—六九〇。

【七二】 七非妙法 Sang.—S. VII. 4. 衆集經七・一。大集法門經十・無。A. IV. 202. 1 (II. 218); VII. 2 (IV. 145.)

【七三】 七妙法 Sang.—S. VII. 5. 衆集經七・二。大集法門經十・無。A. VII. 2 (IV. 145); VII. 40. 4 (IV. 38.)

【七四】 第二の七非妙法 Sang.—S. wanting. 【七五】 第二の七妙法 Sang.—S. VII. 6. 漢二經無。A. VII. 64. 2 (IV. 113.)

【七六】 七識住 Sang.—S. VII. 10. 衆集經七・三。大集法門經七・六。D. XV. 33 (II. 68); A. VII. 41 (IV. 39.) 俱舍八。順正理論二・一。

【七七】 七隨眠 Sang.—S. VII. 12. 漢二經無。A. VII. 11. (IV. 9); S. 45. 175 (V. 60.) 分別論 p. 383. 【七八】 七無過失事 Sang.—S. VII. 7. 衆集經十・四。大集法門經七・缺。A. VII. 18 (IV. 15); cf. A. IV. 39. 4 (IV. 46.)

【七九】 七止靜法 Sang.—S. VII. 14. 漢二經無。A. VII. 80 (IV. 144.)

【八〇】 七等覺支 Sapta Bodhy-angani (Satta sambojjhanga) (Rhyis D.—Seven factors of enlightenment; Neumann—Sieben Erweckungen.) 衆集經一・七覺意。大集法門經一・七覺支。蓋し Bodhyanga, Sambodhyanga (共に梵) の二様の原語あれど、要するに、覺、即ち、佛教の最高理想としての涅槃を證悟すべき所以としての審知、否、或は涅槃そのものたる所に趣向せしめる七要件(支)といふ意味で立てたのが、先づ覺たり、覺支たり、次いで七覺支に他からな

さ。

諸の弟子の爲めに宣説開示せり。我れ等は、今、應さに、和合結集して、佛滅度の後、乖諍有ること勿からしむべく、當さに、梵行に隨順するの法律をして、久住して、無量の有情を利樂せしめ、世間の諸の天・人の衆を哀愍して、殊勝の義利、安樂を獲しむべし。七法とは云何。

七法の唱牀南

嗢牀南に曰はく、――

支と、數と、具と、財と、力と、

非妙と、妙との各二あると、

識住と、隨眠と、

事と、止諍との、各、七あるなり。

と。

七法十三

七等覺支、七補特伽羅、七定具、七財、七力、七非妙法、七妙法、復た七非妙法有り、復た七妙法有り、七識住、七隨眠、七無過失事、七止諍法有り。

一、七等覺支

七等覺支とは、云何が七と爲す。答ふ、一には念等覺支、二

には擇法等覺支、三には精進等覺支、四には喜等覺支、五には輕安等覺支、六には定等覺支、七には捨等覺支なり。

(一)念等覺支

云何が念等覺支なる。答ふ、諸の聖弟子の苦に於いて苦

を思惟し、集に於いて集を思惟し、滅に於いて滅を思惟し、道に於いて道を思惟する無漏の作意に相應する諸の念、隨念、廣

※數とは、卷第三、諸の三法の二の一の頌等には、數趣と記し(本譯上卷一〇)次に、七、補特伽羅といふものを指す。卷第三の、その註を參照せよ。(同七、p. 113. [169])。

【七】七等覺支、Sang-s. VII. 2. 衆集經七・七。大集法經七・一。D. XVI. 1. 9 (II. 79); D. XXII. 14, 16. (II. 303); A. I. 20. 32 (I. 39); A. IV. 14. (II. 16); IV. 236. 5 (II. 237); S. 46. 1 (V. 63) 一般に S. 46 = 雜二六の覺分品。Eojjhangga-sangyutta 諸經參照。cf. Vibhanga p. 227E.

【七】七補特伽羅、Sang-s. VII. 11. 衆集經缺。大集法門經七・五。A. VII. 14 (IV. 10)

【七】七定具、Sang-s. VII. 3. 衆集經七・六。大集法經七・17。A. VII. 42 (IV. 40); D. XVIII. 27. (II. 216.)

【七】七財、Sang-s. VII. 1. 漢二經無。A. VII. 5-8 (IV. 4.)

【七】七力、Sang-s. VII. 9. 衆集經無。大集法門

寛廣にして、猶ほ、虚空の若く、一切の善法は之れに因りて生長すと。又、是の念を作さく、居家に耽著すれば、彼れは尙ほ恒に世の善も修すること能はず。況んや、能く命を盡して、精勤して、純一圓滿にして清白の梵行を修學することをや。是の故に、我れは應さに鬚髮を剃除し、身に法服を被り、正信捨家し、非家に出趣して、梵行を勤修すべしと。既に思念し已りて、便ち後時に於いて、親財を棄捨し、鬚髮を剃除し、身に法服を被り、正信捨家し、非家に出趣して、淨戒を受持し、精勤して、別解脱律儀を守護し、軌則所行具足せざる無く、微小の罪に於いて、大怖畏を見、諸の學處を受けて、常に毀犯すること無く、斯の戒蘊に依りて、根律儀を修し、具念正知にして、蓋を斷じ、四種の靜慮を證得し、斯れに由りて、展轉して、乃至、漏盡き、心解脱、及び、慧解脱を得、現法中に於いて、自ら通慧を證し、具足して、我が生已に盡き、梵行已に立ち、所作已に辨じ、後有を受けずと覺知す。是れを、白生類補特伽羅の非黑白涅槃法を生起すと名く。

## 七法品第八

### (一) 諸の七法の一

時に、舍利子の、復た、衆に告げて言はく、具壽よ、當さに知るべし、佛は七法に於いて、自ら善く通達し、現等覺し已りて、

【七】淨戒云々以下、巴增一、六・五七の文では、「出家し已つて、四念處を修し、それに安立せるの心もて、更に七菩提分法（七覺支）を如實に修習し、以つて非黑白の涅槃を證生す」といふ。参照すべし。

【七】根律儀、Indriya-samvara とは、これに對する意律儀と共に、正念正知を體とし、専ら、慧の心所によつて記憶することにより、惡を止め、非を防ぐの律儀とさるもので、已註の別解脱律儀等の如く、無表業の形而上學的原理によるに非ずと。俱舍一四等を參照せよ。

【七】蓋とは、五蓋の煩悩。五法品中參照。

【七】七法品第八は、原漢典には、「七法品第八の一」と作り、次の「(一) 諸の七法の一」をばかく。



(五) 白生類  
補特伽羅  
の黒法を  
生起する

すと名く。

云何が 白生類補特伽羅の黒法を生起するや。 答ふ、一類有るが如し、富貴の家に生ず。謂はく、刹帝利の大族、或ひは婆羅門の大族、或ひは長者の大族、或ひは居士の大族、或ひは餘の隨一の富貴の家の、多饒の財寶を生じて、倉庫に盈溢するなり。彼れは此の家に生じて、形容は端正に、人は皆な樂見し、衆は共に稱美す。故に名けて白と爲す。「而して」、是くの如きの白類が身惡行を行じ、語惡行を行じ、意惡行を行じ、「此の」三種の惡行を行するの因縁に由りて、身壞命終して、惡趣に墮し、地獄中に生じ、諸の劇苦を受く。是れを、白生類補特伽羅の黒法を生起すと名く。

(六) 白生類  
補特伽羅  
の非黒非  
白涅槃法  
を生起す  
るもの

云何が 白生類補特伽羅の非黒非白涅槃法を生起するや。 答ふ、一類有るが如し、富貴の家に生ず。謂はく、刹帝利の大族、或ひは婆羅門の大族、或ひは長者の大族、或ひは居士の大族、或ひは餘の隨一の富貴の家の、多饒の財寶を生じて、倉庫に盈溢するなり。故に名けて白と爲す。「而して」、是くの如きの白類の、如來有り、衆の爲めに、「自ら」如實に證する所の法と毘奈耶とを宣説すと聞き、便ち往いて聽受し、既に聽受し已りて、淨信心を得。彼れは是くの如きの淨信心を成するが故に、是の思惟を作さく、居家は迫近にして、譬へば牢獄の如く、諸の塵穢多し。出家は

【六六】 白生類等。E' Ekkeco sukābhijātiko sammāno kaṇham dhammam abhiyānti. (Rhys D.—Others born in bright circumstances lead dark lives; Neumann—Da ist einer von lichter Herkunft, und dunkle Dinge erzielt er sich auf.)

【六七】 白生類等。巴。Ekkeco sukābhijātiko sammāno kaṇham aṇkaṇham nibbānam abhiyānti (Rhys D.—Others born in bright circumstances bring nibbānam to pass, which is neither dark nor bright; Neumann—Da ist einer von lichter Herkunft, und die weder dunkle noch lichte Erlösung erzielt er sich auf.)



説いて——乃至、飲食少きの家なり。彼れは此の家に生じて、形容は醜陋に、人は見ることを憚らず、衆は共に訶毀し、多分に他が爲めに諸の事業を作す。故に名けて黒と爲す。「而して」、是くの如きの黒類が身妙行を行じ、語妙行を行じ、意妙行を行じ、「此の」三種の妙行を行するの因縁に由りて、身壞命終して善趣・天世界中に生じ、諸の妙樂を受く。是れを、黒生類補特伽羅の白法を生起すと名く。

(三) 黒生類  
補特伽羅  
の非黒非  
白涅槃を  
生起する

云何が 黒生類補特伽羅の非黒非白涅槃法を生起するや。答ふ、一類有るが如し、貧賤家に生ず。謂はく、旃荼羅が家、——廣く説いて——乃至、飲食少きの家なり。彼れは此の家に生じて、形容は醜陋に、人は見ることを憚らず。衆は共に訶毀し、多分に他が爲めに諸の事業を作す。故に名けて黒と爲す。「而して」、是くの如きの黒類が、如來有り、衆の爲めに、「自ら」如實に證する所の法と毘奈耶とを宣説すと聞き、便ち、往いて聽受し、既に聽受し已りて淨信心を得、彼れは是くの如きの淨信心を成ずるが故に、是の思惟を作さく、居家は迫迕にして、譬へば牢獄の如く、諸の塵穢多し、出家は寛廣にして、猶ほ虚空の如く、一切の善法は之れに因りて生長すと。又、是の念を作さく、居家に耽著すれば、彼れは尙ほ恒に世の善も修すること能はず。況んや、能く命を盡して、精勤して、純一圓滿にして清白なる梵行

【30】 黒生類等、E' Ekacco kaphabbijāṇiko sammāno akapphāṇaṃ suttakam nibbāṇaṃ abhiyanti (Rhys D.-Others so born bring nibbāṇa to pass, which is neither dark nor bright; Neumann—Da ist einer von dunkler Herkunft, und die weder dunkle noch helle Verlöschung erzieht er sich auf.)



或ひは欲、或ひは貪、或ひは瞋、或ひは癡、或ひは一一の心所に隨ふ、隨煩惱の、應さに生ずべき時に生ずる、是れを觀待法と名く。

### 〔C(13)〕六生類

<sup>五六</sup>六生類とは、云何が六と爲す。答ふ、一には黒生類補特伽羅の黒法を生起する有り。二には黒生類補特伽羅の白法を生起する有り。三には黒生類補特伽羅の非黒非白涅槃法を生起する有り。四には白生類補特伽羅の白法を生起する有り。五には白生類補特伽羅の黒法を生起する有り。六には白生類補特伽羅の非黒非白涅槃法を生起する有り——なり。

(一) 黒生類  
補特伽羅  
の黒法を  
生起する  
もの

云何が <sup>五七</sup>黒生類補特伽羅の黒法を生起するや。答ふ、一

類有るが如し、貧賤の家に生ず。謂はく、<sup>五八</sup>旃荼羅が家——廣く説いて、——乃至、飲食少きの家なり。彼れは此の家に生じて、形容は醜陋に、人は見ることを憚らず、衆は共に訶毀し、多分に他が爲めに諸の事業を作す。故に名けて黒と爲す。而して、是くの如きの黒類が身惡行を行じ、語惡行を行じ、意惡行を行じ、「此の」三種の惡行を行するの因縁に由りて、身壞命終して惡趣に墮し、地獄中に生じ、諸の劇苦を受く。是れを、黒生類補特伽羅の黒法を生起すと名く。

(二) 黒生類  
補特伽羅  
の白法を  
生起する  
もの

云何が <sup>五九</sup>黒生類補特伽羅の白法を生起するや。答ふ、一類有るが如し、貧賤の家を生ず。謂はく、旃荼羅が家、——廣く

【六】 六生類・Sang. - S. Ohajābhijātyo (Rhs D. - Six modes of heredity; Neumann - Sechs Arten der Erzeugung.) 漢二經にはなし。諸の有情の、社會的地位——即ち、生家、生族、生姓、等と、その社會的地位に従つてなす所の道德的及び非道德的所行との二見地によつて、六種を類別し、名けて、六生類とした所である。

【七】 黒生類等、巴、Ekacco kaphābhijātikō samāno kaphāṇa dhummāṇa abhiyāyati (Rhs D. - Some persons being reborn in dark circumstances lead dark lives; Neumann - Da ist einer von dunkler Herkunft, und dunkle Dinge erzieht er sich auf.)

【八】 旃荼羅が家等、卷九、闇より闇に趣等の四補特伽羅の下參照。

【九】 黒生類云云、巴、Ekacco kaphābhijātikō samāno sukham dhummāṇa abhiyāyati (Rhs D. - Others so born lead bright lives; Neumann - Da ist einer von dunkler Herkunft, und helle Dinge erzieht er sich auf.)

能く自らを安樂にし、能く自身を安穩に住せしめ、災愁を超越し、諸の憂苦を滅し、疾かに能く如理の法要を證得せしむと。是れを念無上と名くと。

此の中に、世尊は伽他を説いて曰はく――

若し離相應の安隱にして

無上の見と、聞と、

利と、學と、行と、念とを得ば

必す無憂に越くことを得

と。

### 三(三)六觀待

六觀待とは、云何が六と爲す。答ふ、一には觀待色、二には觀待聲、三には觀待香、四には觀待味、五には觀待觸、六には觀待法なり。

云何が觀待色なる。

### (一)觀待色

答ふ、若し色あり、有漏、有取なり。此

の諸の色、若しは過去、若しは未來、若しは現在なるに於いて、或ひは欲、或ひは貪、或ひは瞋、或ひは癡、或ひは

の心所に隨ふ隨煩惱の、應さに生ずべき時に生ずる、是れを觀

待色と名く。

### (二)―(五)

その他の觀待の例

聲・香・味・觸觀待も、亦、爾なり。

云何が觀待法なる。答ふ、若し法あり、有漏、有取なり。此

### 六觀待法

の諸の法の若しは過去、若しは未來、若しは現在なるに於いて、

【五】 此の中に等は、同く cf. A. VI. 30 (III. 329)

【五】 必す等、E' Te ve kâlena paccanti, yathha dukkham nirujjanti (N'yaṭṭiloka—Ein Solcher mag gar bald erkennen, wo alles Leiden untergeht.)

【五】 六觀待とは、諸衆集經傳の何れにもないが、蓋し、觀待とは相待の義とすべく、畢竟、色聲香味觸法の六境に相待して、三毒、乃至、諸の隨煩惱を生じ、未だ獨離、自存、出離、遠離の境界に至り得ざるをいふ。

【五】 一一のとは、欲、念、瞋、癡の一一の意。

(五)行無上

云何が 行無上なる。答ふ、世尊の説くが如し。苾芻當さに

知るべし、一類の補特伽羅有るが如し。或ひは象行を調し、或ひ

は馬行を調し、或ひは人行を調し、或ひは牛行を調し、或ひは

火行に事し、或ひは月行に事し、或ひは日行に事し、或ひは藥

行に事し、或ひは珠行に事し、或ひは星宿宮殿等の行に事し、或

ひは沙門、若しは婆羅門の邪見・邪見行を發起せる者の受持する

所の行を行ぜば、我れは説く、——彼の類は所行有り、所行無き

に非ずと雖も、而も是れ下賤の本性なり。異生にして、賢聖の行

に非ずと。若し清淨の信愛を修植すること有りて、能く如來及び

佛弟子が所行の行を行ぜば、我れは説く、——彼の類は行無上を

爲し、能く自らを利益し、——廣く説いて、乃至、——疾かに

能く如理の法要を證得せしむと。是れを行無上と名くと。

云何が 念無上なる。答ふ、世尊の説くが如し。苾芻當さに

知るべし、一類の補特伽羅有るが如し。或ひは妻子を念じ、或

ひは財穀を念じ、或ひは親友を念じ、或ひは沙門、若しは婆羅門

の邪見、邪見行を發起する者と 及び彼れの邪法とを念ぜば、我

れは説く、——彼の類は所念有り、所念無きに非ずと雖も、而も

是れ下賤の本性なり。異生にして、賢聖の念に非ずと。若し清淨

の信愛を修植すること有りて、能く如來及び佛弟子を念ぜば、

我れは説く、——彼の類は念無上を爲し、能く自らを利益し、

【八】 行無上、*Paricarya-anuttarya* (*Paricarya-*

*anuttariya*) (*Rhys D.—Certain ministries;*

*Neumann—Unübertreffliche Genossenschaft*)、衆集

經—恭敬無上。大集法門經—分別行。蓋し、*paricarya*

(*paricariya*) の字は *ministry, worship, going*

*about*、(事侍、恭敬、行歩)等、種々の意あれば、右

の諸の漢譯も出でし所なるが、然し、もし今の論の釋

説の如くむば、單に今のく、行「無上」と譯するこ

と最も、適當ならむと、右上の A. VI. 30 の文等に

これを見るとき、刹帝利、婆羅門、居士、その他を

*paricariya* とある故に、これらからせば、右衆集經の

如く、寧ろ恭敬の意にとるべく、例して想像せば、衆

集經の如きは、何らかの註解によつて、かゝる譯をし

た處にてもありならむか。

【九】 火行とは、事火に關して「の意にて、婆羅門教に

て、火を聖視し、三火等と稱して、これに事し、供養

したるにより、今これをもち來れるものとすべく、火

行とは火の燃ゆるをいへる也。因みに、以下の日月行

等も、準同に、寧ろ、婆羅門教の諸儀式に關して、佛

教的には非ず。

【十】 念無上、*Anusmity anuttarya* (*Anusmitya-*

*anuttariya*) (*Rhys D.—Certain memories; Unü-*

*bertreffliche Andacht*)、衆集經—今と同。大集法門經

—念行。

【五】 及び彼れの等の一句は、巴には無し。



を得ば、我れは説く、——彼の類は利を得、利を得ざるに非ずと名くと雖も、而も是れ下賤の本性なり。異生にして、賢聖の利に非ずと。若し清淨の信愛を修植すること有りて、能く如來及び佛弟子に於いて、深き信樂を得ば、我れは説く、——彼の類は無上利を得、能く自らを利益し、——廣く説いて、乃至、——疾かに能く如理の法要を證得すと。是れを利無上と名くと。

## (四)學無上

云何が學無上なる。答ふ、世尊の説くが如し。苾芻、當さに知るべし、一類の補特伽羅有るが如し。或ひは乘象を學し、

或ひは乘馬を學し、或ひは乘車を學し、或ひは彎弓を學し、或ひは放箭を學し、或ひは執鈎を學し、或ひは執索を學し、或ひは執牌を學し、或ひは上乘を學し、或ひは下乘を學し、或ひは馳走を學し、或ひは跳躑を學し、或ひは書數を學し、或ひは算印を學し、或ひは沙門、若しは婆羅門の邪見・邪見行を

發起せる者の所説の學處を學せば、我れは説く、彼の類は所學有り、所學無きに非ずと雖も、而も是れ下劣の本性なり。異生にして、賢聖の學に非ずと。若し清淨の信愛を修植すること有りて、能く如來及び佛弟子が所説の學處を學せば、我れは説く、——彼の類は、無上學を爲し、能く自らを利益し、廣く説いて、乃至、——能く疾かに如理の法要を證得せしむと。是れを學無上と名くと。

【三】學無上、*Sikṣa-anuttarya* (*Sikṣa-anuttariya*) (*Rhys D. Certain trainings; Neumann-Urbertreffeche Tuchtigkeit*) 衆集經—戒無上。大集法門經—學行。

【四】乘象を學し、巴、*Eṭṭhismiṃ sikkhatī*, 乘馬……*Assamiṃ sikkhatī*, 乘車……*Rathismiṃ*。

【五】彎弓、巴、*Dhanusmiṃ*。巴は、この次に唯一尙、*Tharusmiṃ sikkhatī* = to learn in [using] swords (劍を學ぶ) と云ふを記するが、果して今の何れに當るか。

【六】書數、*Paṭip, Saṅkhyā* (Skt.)

【七】算印、*Paṭip, Gaṇana* (or *gaṇita*), *mudrā*——蓋し、この印 *mudrā* と云ふのは又手算とも記し、矢張り、指によつての一種の算法である。

而も是れ<sup>四〇</sup>。下賤の本性なり。異生にして、賢聖の見到に非ずと。若し清淨の信愛を修植すること有りて、如來或ひは佛弟子を往觀せば、我れは説く、——彼の類は無上見を爲し、能く自らを利益し、能く自らを安樂にし、能く自身を安穩に住せしめ、災愁を超越し、諸の憂苦を滅し、疾かに能く如理の法要を證得せしむと、是れを見無上と名くと。

### (二)聞無上

云何が<sup>四一</sup>聞無上なる。答ふ、世尊の説くが如し。苾芻當に知るべし、一類の補特伽羅有るが如し。象聲、馬聲、車聲、步聲、螺聲、大小鼓聲、呼叫聲、歌舞聲、伎樂聲を往聽し、或ひは復た、若しは沙門、若しは婆羅門の邪見・邪見行を發起せる者の所説の邪法を往聽せば、我れは説く、——彼の類は所聞有り、所聞無きに非ずと雖も、而も是れ下賤の本性なり。異生にして、賢聖の聞に非ずと。若し、清淨の信愛を修植すること有りて、如來或ひは佛弟子が所説の正法を往聽せば、我れは説く、——彼の類は無上聞を爲し、能く自らを利益し、——廣く説いて、乃至、——疾かに能く如理の法要を證得せしむと。是れを聞無上と名くと。

### (三)利無上

云何が<sup>四二</sup>利無上なる。答ふ、世尊の説くが如し。苾芻當に知るべし、一類の補特伽羅有るが如し。或ひは妻子を得、或ひは珍財を得、或ひは諸の穀を得、或ひは親友を得、或ひは沙門、若しは婆羅門の邪見・邪見行を發起せる者に於いて、深き信樂<sup>しんけつ</sup>

は、詳しくして、轉輪(聖王)の七寶と名ける。

【一】象寶、*Haṭṭhiraṇa* (*Haṭṭhiraṇa*).

【二】馬寶、*Aśvaratna* (*Aśvaratna*).

【三】珠寶、*Maṇiratna* (*Maṇiratna*). 或ひは如意寶といふ。

【四】女寶、*Strīratna* (*Uthiratanu*). 或ひは王女寶。

【五】主藏臣寶、*Gṛhapatiratna* (*Gahapativratana*) = *treasurer*.

【六】主兵臣寶、*Paṇḍitakaratna* (*P.-ratana*) = *an adviser or a leader*.

【七】邪見等、巴「沙門、若くは婆羅門の、邪見あり、邪所行ある者を見るべく行へ」*Samajam vā brahmapamā vā micchaditṭhikam micchapatipannam dussannāya gacchati.* 云。

【八】下賤の本性等、巴「*Hīnam gummam poṭṭhijāṇikam anariyam* (not holy), *anattasamhitam* (義と相應せず)と。……異生とは蓋し凡夫のこと。已註の如し。

【九】聞無上、*Śravaṇa-anuttariya* (*Savvaṇa-anuttariya*) (*Rhys D.—Certain things heard; Neumann—Unübertreffliches Zuhören.*) 衆集經は今と同じく、大集法門經は開行。」

【一〇】利無上、*Labha-anuttariya* (*L.-anuttariya*) (*Rhys D.—Certain gains; Neumann—Unübertreffliches Gewinn.*) 衆集經—利養無上。大集法門經—利益行。」

## (六)天隨念

云何が<sup>三三</sup>天隨念なる。答ふ、世尊の説くが如し。苾芻當さ

に知るべし、聖弟子有り、是くの如きの相を以つて、諸の天を隨念す。謂はく、『四大王衆天有り、三十三天有り、夜摩天有り、親史多天有り、樂變化天有り、他化自在天有り。』而して、若し無倒の信・戒・聞・捨・慧を成就すること有らば、此より命を捨て、彼の天に生ずることを得。我れも、亦、無倒の信・戒・聞・捨・慧の善を成就す。云何が當さに彼の天を生ずることを得ざらんや』と。

若し、聖弟子の、是くの如きの相を以つて、諸天を隨念するときは、見を根本と爲しての證智相應の諸の念、隨念、別念、憶念、念の性、隨念の性、別念の性、不忘の性、不忘法の性、心の明記の性、是れを天隨念と名く。

## 三(三)六無上法

六無上法とは、云何が六と爲す。一には見無上、二には聞無上、三には利無上、四には學無上、五には行無上、六には念無上なり。

## (一)見無上

云何が<sup>三三</sup>見無上なる。答ふ、世尊の説くが如し。苾芻當さ

に知るべし、一類の補特伽羅有るが如し、輪寶、象寶、馬寶、珠寶、女寶、主藏臣寶、主兵臣寶を往觀し、或ひは復た、若しは沙門、若しは婆羅門の邪見、邪見行を發起する者を往觀せば、我れは説く、——彼の類は所見有りて、所見無きに非ずと雖も、

【四】天隨念、Devānussati (D. — anussati)。衆集經一天念。大集法門經一念天。

【五】四大王衆天、Catummahārājika-devāṅk (Devā Catummahārājika)。六欲天の第一、護世の四天王と稱せられ、持國 Dhṛtarāṣṭra、增長 Virūdhaka、廣目 Virūṇaka、多聞 Vāsudeva の四天を稱し、三十三天に於ける、帝釋天の外將とある。その所居は、須彌山の半腹に在る由健陀羅といふ山上の四方に各一頭ありて、各これにおとす。

【六】三十三天、Trīśatśāśa devāḥ (Devā tāva-tīśas)。欲界の第二天で、須彌山の頂上に在りとされ、その中央には帝釋天あり、四方には各八天ありて、合して三十その三天と總稱せらる。(正法念經二五等參照)。

【七】夜摩天以下は、已註參照。

【八】信・戒・聞・施・慧、卷一〇、四語惡行下參照。

【九】六無上法、Ṣaṭ-anuttarāni (Uḥa anuttariya-ni) (Rhys D. — Six unsurpassable experiences; Neumann — Sechserlei Unübertrefflichkeit)。衆集經

一六無上。大集法門經一六行。こゝに無上 anuttariya (anuttariya) とするは、無上順解脱の意にして、畢竟、下賤横邪なる法に對す。而して、今、これに、見、聞、利、學、行、念の六法を數え、もつて六無上と名くる所である。

【一〇】見無上、Darśana anuttariya (Dassana anuttariya) (Rhys D. — A certain sight; Neumann — Unübertrefflicher Anblick)。衆集經一今に同じ。大集法門經一見行。

【一一】世尊とは、A. VI. 30 (III. 32ff)。以下も準ず。

【一二】輪寶、Cakrentu (Oḥkrentu) 本論卷第九、四法品・四〇・四得自體下の註、【五三】參照。因みに、この輪寶と、並びに、以下の六とを合して、輪正(又



の福田にして、世の供に應ずる所なり」と。

若し、聖弟子の、是くの如きの相を以つて、諸の僧を隨念するときは、見を根本と爲しての證智相應の「等」、廣く説くこと、前の如し。是れを僧隨念と名く。

#### (四)戒隨念

云何が<sup>一</sup>戒隨念なる。答ふ、世尊の説くが如し。苾芻當さに知るべし、聖弟子有り、是くの如きの相を以つて、自らの戒を隨念す。謂はく<sup>二</sup>此の淨戒は缺無く、隙無く——廣く説いて、——乃至、諸の有智者は稱讃して、毀する無し」と。

若し、聖弟子の、是くの如きの相を以つて、自らの戒を隨念するときは、見を根本と爲しての證智相應の「等」、廣く説くこと、前の如し。是れを戒隨念と名く。

#### (五)捨隨念

云何が<sup>三</sup>捨隨念なる。答ふ、世尊の説くが如し。苾芻當さに知るべし、聖弟子有り、是くの如きの相を以つて、自らの捨を隨念す。謂はく、「我れは善く無染の財利を得、我れは慳垢に縛せられたる衆中に於いて、能く慳垢を離れて、心に染著無く、手を舒べて所有の財物を惠施し、財物を棄捨し、心に顧る所無く、分布、施與して、心に偏黨無し」と。

若し、聖弟子の、是くの如きの相を以つて、自らの捨を隨念するときは、見を根本と爲しての、證智相應の「等」、廣く説くこと、前の如し。是れを捨隨念と名く。

【二】僧隨念、*Saṅgha-anussati* (*S'-anussati*)。衆集經—僧念。大集法門經—念僧。この下の文についても、亦、準上に、卷八、四記問下の文參照。

【三】無上の等、*E'* *Anuttara puttakkhetta lokassa*、(世の、無上の福田)。

【二】世の等、世の」は右記の如く、<sup>四</sup>では、福田の方について、次の供に應ずる等に當る字としては、*ahuneyya*, *paluneyya*, *dukkhineyya*, [*ajjakkharanīya*]等の字を置く。

【一】戒隨念、*Sīla-anussati* (*Sīla-anussati*)。漢二經上は、同様に知れ。

【二】自らの戒、*巴* *Attano sīlanti* || 自らの持せる諸戒の意。

【三】此の淨戒等、前卷の六可喜法の六參照。

【三】捨隨念、*Tyāga anusmṛti* (*Cāga-anussati*)。衆集經—施念。大集法門經—念施。

【三】自らの捨とは、上に準じ、自らのなす施の意で、*巴* *Attano cāga*。

## (二)六隨念

六隨念とは、云何が六と爲す。答ふ、一には佛隨念、二には法隨念、三には僧隨念、四には戒隨念、五には捨隨念、六には天隨念なり。

## (一)佛隨念

云何が佛隨念なる。答ふ、世尊の説くが如し。苾芻當さに知るべし、聖弟子有り、世尊の所に於いて、<sup>三</sup>是くの如きの相を以つて、諸佛を隨念す。謂はく、『此の世尊は是れ如來なり、阿羅漢なり、——廣く説いて、乃至、佛、薄伽梵なり』と。

若し、聖弟子の、是くの如きの想を以つて、諸佛を隨念する<sup>三</sup>ときの、見を根本と爲しての證智相應の諸の念、隨念、別念、憶念、念の性、隨念の性、別念の性、不忘の性、不忘法の性、心の明記の性、是れを佛隨念と名く。

## (二)法隨念

云何が法隨念なる。答ふ、世尊の説くが如し。苾芻當さに知るべし、聖弟子有り、是くの如きの相を以つて、正法を隨念す。謂はく、佛の正法は善説、乃至、智者内證すと。

若し、聖弟子の是くの如きの相を以つて、正法を隨念する<sup>二五</sup>ときの、見を根本と爲しての證智相應の「等」、廣く説くこと、前の如し。是れを法隨念と名く。

## (三)僧隨念

云何が僧隨念なる。答ふ、世尊の説くが如し。苾芻當さに知るべし、聖弟子有り、是くの如きの相を以つて、諸の僧を隨念す。謂はく、『佛弟子は妙行を具足し、廣く説いて、乃至、無上<sup>二六</sup>

明並びに、前卷末尾の六通の下を參照すべし。

【五】六隨念、*Ṣaṭ-anussamīyaka* (Oha *anussati-phāṇā*) (Rhys D.—Six matters for recollection; Neumann—Sechserlei Anlass zur Andacht.) 衆集經—六思念。大集法門經—六念。我々の、隨念、思念、觀念して、常に意識裡を離さず、もつて、修道を資助し、否、修道すべしとさるゝ六者をいふものにして、曰はく、佛、法、僧、戒、捨、天、即ちこれなるが、蓋し、これらについては、已に幾度か、學者によりて論ぜられし如く、大乘佛教に至り、稱名念佛の大成するに至れる最も原始の出發點とすべき念のものにて、因みに參考の經例を、聊か枚舉しおけば、雜三・一三一—五、一九〇別譯八・二五—二六、二八、〃A. XI. 12—13; A. VI. 10, 雜二二・一八、〃別雜九・二七〃S. II. 2, 10 (I. 55.) 雜三七・一一等、その例多く、もつて點檢すべきものである。

【四】佛隨、*ā Buddhānussamīyati* (B.—*anussati*) 衆集經—佛念。大集法門經—念佛。(英獨二譯の文は上の一般の文の場合に準じて想像しうべき故に今は掲げず。)

【二】世尊とは、右記諸經參照。以下も準ず。

【三】是くの如きとは、次の如き諸相、又は諸方面に約し意。

【一】念、隨念等を、暫らく法集論等に見ると、*Satti*, (*ā*) *anussati*, (*隨念*) *patisati* (單に記憶、想念の意なるも、今は *prati* or *pajī* 別として、別念としたるものなるべし) *salī*, (*念*) *sarapaṇā* (憶念) *dharapaṇā*, (憶持) *anāpānaṇā* (非皮相的の性) *asa-innasmāṇā*, (不失念の性) 等と記するを常規とす。

【三】法隨念、*Dhammānussamīyati* (Dhammānussati) 衆集經—法念。大集法門經—念法。

【五】佛の正法は等、卷八、四記問の下等參照。



## 卷の第十六

### (三) 諸の六法の二の二

10(10)六順明分想

六順明分想とは、云何が六と爲す。答ふ、一には無常想、

二には無常苦想、三には苦無我想、四には厭食想、五には一切世間不可樂想、六には死想なり。

(一)(四)、(六)の五

此の中、五想は、成熟解脫想の如く説く。

(五)一切世間不可樂

云何が、一切世間不可樂想なる。答ふ、世間とは、謂はく、

五取蘊なり。即ち色取蘊、乃至、識取蘊なり。

諸の苾芻有り、五取蘊に於いて、有思慮俱行の作意を以つて、審諦に思惟し、有恐懼俱行の作意を以つて、審諦に思惟し。不可樂俱行の作意を以て、審諦に思惟し、不可喜俱行の作意を以つて、審諦に思惟するに、彼れが、五取蘊に於いて、是くの如く思惟する時の諸の想、等想、現前等想、已想、當想、是れを一切世間不可樂想と名く。

順明分想の意義

問ふ、何の故に名けて、順明分想と爲すや。答ふ、明に三種

有り。一には、無學宿住智證明、二には無學死生智證明、三には無學漏盡智證明なり。「便ち」、前の六想に由りて、此の三明をして、未生者は生ぜしめ、已生者は増長廣大ならしむるが故に、順明分想と名く。

六法品第七

【一】(三)諸の六法の二の二、原漢典は六法品第七の二に作る。

【二】六順明分想 *ṣṣu-nirvedha bhāgya-sam-jāta* (Sang. i. 5. *Gha nibbedha-bhāgya-saṅgā*) (Rhys D. — Six ideas conducing to nibbāna; Neumann-Secherlei Wahrnehmung von durch-dringender Schärfe.) 漢譯經缺「蓋」。Nirvedha (Nibbedha) とは洞見、洞察 penetration, insight 等の意にて、それ、又は A. VI. 35. には *Gha vijā bhāgya* とあれば — その *vijā* 二の梵字 *vidya* 等を、玄非は今の如く明と譯し、且つ *bhāgya* (bhāgya) 二分等となし、もつて、所謂六明分想としたる所ならんも、要するに、萬有に關し、生死の問題に關し、快明なる洞察を得べき所以の徳目を集めたものにて、— 今の論釋の如くすれば、前の三法品中に説ける如き三明を新獲、増廣せしめる所以と考へられたる六種の思想項目を掲げたるに外ならぬ。而して、リスデビツ氏は、又、それらは直ちに佛教至極の理想としての涅槃に隨趣する意義のものなりとの考より、右の如く、譯して「涅槃隨順の六想」ともせる所たるべし。

【三】五想とは、今の六中の第五を除く餘の五。

【四】成熟解脫想とは、卷一三末參照。かくて、その下に於いて、今の論と *gaṅgā* — 二と已に開きのありし如く、今も亦、相違があつて、巴では、一、無常想、二、無常(に於ける)苦想、三、苦(に於ける)無我想、四、斷想 *Paṭisa suttā*。五、離欲想 *Vivāga*。六、滅想 *Nirodha suttā* 等に作る。

【五】一切世間不可樂想 A. VII. 2 (IV. 148) — *Sabbaloke anubhūtasānā*。

【六】世間 *loka*。

【七】明 *Avijjā* (Avijjā)。

【八】無學宿住智證明等の三明については、卷六の三

四一五



於ける所有の妙智なり。

(四)宿住智  
證通

云何が宿住智證通なる。答ふ、能く隨つて、過去の無量の諸の宿住の事を憶念するなり。謂はく、或ひは一生、乃至、廣く説く。是れを宿住智證通と名く。

問ふ、此の中の、通とは何をか謂ふ所ぞ。答ふ、諸の宿住に於ける所有の妙智なり。

(五)死生智  
證通

云何が死生智證通なる。答ふ、明の如く廣く説く。

(六)漏盡智  
證通

云何が漏盡智證通なる。答ふ、亦た明の如く廣く説く。

【七】宿住智證通、Pūrvanāivānaṃsmṛtiñāna-abhijñā。以下の三については、卷六、三明下の文及び註參照。

【七】死生智證通、Gṛhyapapattijñāna-abhijñā。

【八】漏盡智證通、Āsravakṣaya-jñāna-abhijñā。

六和敬法

九(二)六通

是くの如きを、亦、六和敬法と名く。

六通とは、云何が六と爲す。一には神境智證通、二には天耳智證通、三には他心智證通、四には宿住智證通、五には死生智證通、六には漏盡智證通なり。

(一)神境智證通

云何が神境智證通なる。答ふ、種々の神境を領受示現し、乃至、廣く説く。是れを神境智證通と名く。

通 Abhiñña の意義

問ふ、此の中の、通とは何をか謂ふ所ぞ。答ふ、諸の神境に於ける所有の妙智なり。

(二)天耳智證通

云何が天耳智證通なる。答ふ、天耳を以つて、種々の音聲を聞く。謂はく、人聲、非人聲、遠聲、近聲等なり。是れを天耳智證通と名く。

問ふ、此の中の、通とは何をか謂ふ所ぞ。答ふ、天耳の境に於ける所有の妙智なり。

(三)他心智證通

云何が他心智證通なる。答ふ、他の有情、補特伽羅の尋、伺、心等に於いて、皆な如實に知るなり。謂はく、有貪心は如實に有貪心と知り、離貪心は如實に離貪心と知り、是くの如く有嗔心、離嗔心、有癡心、離癡心、略心、散心、下心、舉心、掉心、不掉心、寂靜心、不寂靜心、不定心、定心、不修心、修心、不解脫心、解脫心を、皆な如實に知る、是れを他心智證通と名く。

問ふ、此の中の、通とは何をか謂ふ所ぞ。答ふ、他の心等に

【一七】六和敬法。Saṅgamo-dharmah (Six articles of politeness)。

【一八】六通。Saṅgābhijñā (Chā abhijñā)。相應の記述は巴梵諸傳の衆集經にすべて缺く。通 abhijñā (abhiñña) とは、已に三法品中の三明下に於つても瞥見したる如く、畢竟、超人間的の神秘力で、今、これに六種を數へ、もつて諸の聖者が諸の修學の成果とせられ、名けて六通とする處である。而してその所謂六を今は神境、天耳、他心、宿通、死生、漏盡の六とするも、これに對し、或は神境、天眼、天耳、他心、宿住、漏盡等の六と作るもある(俱舍一八及二七)。が、こは畢竟天眼と死生との同一事を命名を別にしたのみにすぎず。その體は同じである。

【一九】神境智證通。Raddhivādhi-jāna-abhijñā (梵) 卷六三示導の第一神變示導の文等參照。A. VI. 2. III 280) § 21. cf.

【二〇】天耳智證通。Divya-śrota-jāna-abhijñā—A. VI. 2 (III. 280) § 3. cf.

【二一】他心智證通。Ereclitajāna-abhijñā, A. VI. 2. § 4. cf.

【二二】補特伽羅。Puggala (Puggala)。古來譯して、衆生(舊譯)。又は數取趣(新譯—五趣に數々輪廻するもの、義と)等とし、要するに、上の有情 Sattva (Satta) と同義に解し、事實、それに相違なく、かくして、今も「他の有情」補特伽羅」なるを唯、重複したまで、右巴增一の六・二の文にも今の文の如くしてゐる。

「是の如きの戒に於いて」

平等戒

「諸の有智の同梵行者と」

「等しく共に受持して藏隠する所無し」

「是れを第五可喜法と名冠す」等

「諸所有の見」

「是れ聖、出離」

「是くの如きの見に於いて」

平等見

「是くの如きの戒に於いて、諸の有智の同梵行者と等しく共に受用して、藏隠する所無し」とは、云何が名けて、「是くの如きの戒に於いて」と爲すや。答へて謂はく、平等戒なり。平等戒とは謂はく、八聖道支の中の正語、正業、正命を平等戒と名く。

「諸の有智の同梵行者」とは、謂はく、解橋陳那等を、皆な有智の同梵行者と名く。

「等しく共に受持して、藏隠する所無し」とは、謂はく、此の戒に於いて、諸の有智の同梵行者と共に、義利を一にし、共に所趣を一にし、彼れと此れと相似なるなり。

「是れを第五可喜法と名く」等は、前に廣く説くが如し。

「諸所有の見」とは、云何が名けて諸所有の見と爲すや。答ふ、若し出離遠離が所生の善法に依る、諸の法相に於ける、諸の簡擇、極簡擇、乃至、廣く説いて、是くの如きを名けて、「諸所有の見」と爲す。

「是れ聖、出離」等は、前に廣く説くが如し。

「是くの如きの見に於いて、諸の有智の同梵行者と等しく共に、修學して藏隠する所無し」とは、云何が名けて、「是くの如きの見に於いて」と爲すや。答へて謂はく、平等見なり。平等見とは、謂はく、八聖道支中の正見を平等見と名く。

餘は前に説くが如し。

【七】平等戒、第五可喜法の本文の方の意は、その上文に述べた所をさして、「是くの如きもの」と受けて來て新文を起す意なりしならむも、而して、かゝる意味で、已に諸所有の戒といふを次上に已に論釋したれど、今は更に改めて、「是くの如きの戒」として、この經を施したもにして、結局の意は、必ずしも別なるに非ざるも、留意すべし。蓋し、平等戒は八聖道支中の、今の論文に所掲の三をいひ、正等 Samyuk (Sammā) 平等なる意義の戒法項目の故に、かく名く。



「諸所有の戒」

「諸所有の戒」とは、云何が名けて諸所有の戒と爲すや。答ふ、無漏の身業、語業、及び、命清淨を、一切皆な「諸所有の戒」と名く。

「缺無く……穢無く」

「缺無く、隙無く、雜無く、穢無く」とは、謂はく、此の戒に於いて、恒に隨作し、恒に隨轉し、平等に共作し、平等に共轉するが故に、「缺無く、隙無く、雜無く、穢無く」と名く。

「應 供」

「應供」と言ふは、謂はく、諸の有情の貪・瞋・癡有るを名けて給使と爲し、若し諸の有情の貪・瞋・癡を離るゝを名けて應供と爲す。應さに給使の、衣服、飲食、臥具、醫藥等を以つて、常に供養するを受くべきが故に。

「無 執」

「無執」と言ふは、謂はく、聖弟子の、戒に於いて、若しは取、若しは執を起さざるなり。

「善く究竟し」

「善く究竟し」とは、謂はく、此の戒に於いて、善く守り、善く護りて至極究竟するなり。

「善く受取し」

「善く受取し」とは、謂はく、此の戒に於いて、殷重し、恭敬し、具足し、攝受するなり。

「諸の有智の者の……毀する無し」

「諸の有智の者の稱讃して毀する無し」とは、謂はく、諸の佛、及び、弟子を有智の者と名け、此の諸の智者の皆な共に稱讃して、訶毀する者無ければ、斯れに由るが故に、「諸の有智の者の稱讃して、毀する無し」と説く。

【七〇】應供は、巴は上の如く、Bhujjasa (Bakt. Bhujjasa) で、自由にされ、解放さるゝことを意味し、殊に、原字は奴隸の解放さるゝ意に用ゐらるゝ所なるが故に、今の論釋あるもので、給使とは、即ち、尙解放されぬ奴隸の意で、今は専ら、これを精神的に用ゐたものである。

「攝受」

「一趣」

慈語意業例釋

「法を以つて如法の利養を獲得……」

此の中、「攝受」とは、謂はく、和合せしむるなり。

「一趣」と言ふは、謂はく、一境に趣き、一味現前するなり。

慈身業の如く、慈語意業も、應さに知るべし、亦、爾なり。

「法を以つて、如法の利養を獲得し」とは、云何が法を以つて、如法の利養を獲得する。答ふ、若し諸の利養を矯妄に由らずして得、詭詐に由らずして得、現相に由らずして得、激發に由らずして得、利を以つて利を求むるに由らずして得、然も受用の時、無罪生長す。故に「法を以つて、如法の利養を獲得し」と名く。

「鉢中所受の飲食に下至するまで」とは、謂はく、鉢中に墮せる飲食に下至するまでも尙ほ共に受用す。況んや餘の財物をや「といふなり」。

「此の利養に於いて、諸の有智の同梵行者と等しく共に受用して、別に藏隠せず」とは、謂はく、法を以つて、如法の利養を獲得する、是れを「此の利養に於いて」と名け、若し、苾芻、苾芻尼、正學、勤策、勤策女、近事、近事女、是れを「有智の同梵行者」と名け、「而も」法を以つて得る所の如法の利養を、應さに有智の同梵行者と等しく共に受用して、應さに各別に藏隠し受用すべからず「といふなり」。

「是れを第四可喜法と名く」

「是れを第四可喜法と名く」とは、前に廣く説くが如し。

【六】現相とは、相は、Nimitta、なるべく、種々の不可思議相を現じての意。

【六】苾芻、Bhikkhu (Bhikkhu) 舊譯には比丘と譯し、Bhikkhu 名は比丘より來れる名詞で譯して乞士といふ。即ち、佛陀の教徒が生活に思を煩はすことなくして、専心、學道に精進し得む爲め、古婆羅門教のやり方もまねつゝ、在家者の寄與にまつて生活したるによつて名けしものにして、つまり男子にして、佛陀の眞の(専門的)教徒たるもの、意。

【六】苾芻尼、Bhikkhuni (Bhikkhuni) 同上の女人。舊譯には比丘尼と記す。

【六】正學、Sikkhama (Sikkhama) 又摩尼と音譯し、詳しくは正學女とすべし。若き女性(十八歳—二十歳の満二年間)にして、正當の尼となるべく、準備的階級にあり、概要下記(近事の下)五戒及び非食の六法を精勵修學しつゝあるもの。

【六】勤策、Sāmaṇera (Sāmaṇera) 音譯して沙彌といふもの。廣くは解脱寂靜を求め、勤めてやまぬ比丘全體をいふも、普通には上の苾芻に對して、七歳で出家して以後二〇にして眞の苾芻となるまでの準備的階級にある男子の諸佛敎修行者をいふ。

【六】勤策女、Sāmaṇerika (Sāmaṇerika) 同上の女人にして、正學女に至るまでのもの。

【六】近事、Upāsaka (Upāsaka) 即ち優婆塞と音譯するもの、ことで、不殺生、不偷盜、不邪淫、不妄語、不飲酒の五戒を受け、在家のまゝ、一生を通じて佛陀の正信者たり、かくて又佛敎出家からの外護者である男子。

【六】近事女、Upāsika (Upāsika) 同様に優婆夷で、同上の婦人。

「有智の同梵行者」

「及び、諸の有智の同梵行者」とは、云何が「有智の同梵行者」なる。答ふ、解橋陳那、乃至、廣く説いて、是れを有智の同

梵行者と名く。

「慈身業を起し」

「慈身業を起し」とは、云何が慈身業なる。答ふ、興起俱行、哀

愍俱行の所有の身業を、此の中の意には、説いて慈身業と名く。

「大師の所及び慈身業を起す」

大師の所、及び、諸の有智の同梵行者に於いて、此の慈身業の和合現前するあり。斯れに由るが故に、「大師の所、及び諸の有智の同梵行者に於いて、慈身業を起す」と説く。

「是れを第一可喜法と名く」

「是れを第一可喜法と名く」とは、謂はく、是くの如きの法は是れ能く隨順し、甚だ愛樂す可く、端嚴、應供を長養し、常に支具、資糧を委うす。是の故に、可喜法と名く。

「能く可愛を發し」

「能く可愛を發し」とは、謂はく、此の法に由りて、能く可愛を發するなり。

「能く尊重を發し」

「能く尊重を發し」とは、謂はく、此の法に由りて、能く尊重を發するなり。

「能く可意を發し」

「能く可意を發し」とは、謂はく、此の法に由りて、能く可意を發するなり。

「能く可愛……」

「能く可愛、尊重、可意、悅意、攝受、歡喜、無違、無諍、一趣を引く」とは、謂はく、此の法に由りて、能く、可愛、尊重、可意、悅意、攝受、歡喜、無違、無諍、一趣を引くなり。

## 六法品第七

係あるか。

【三七】若し彼れを等、巴は、*Takkatissa sotthā-takkatikkhayaṇa (nuyyati)* 卽ち、その作者の正盡苦に導くと。

【三八】解橋陳如、*Ajāta Kaṇḍiyya* 卽ち、阿若橋陳如で、已註(本冊 183. st.)の如く、「初めて佛陀の教法を」理解したクンディナ族(又は家の)人の意。

【三九】興起とは、原字は如何ありしか不明なれど、時雨之瀧、萬物無不興起等ありて、盛になることで、今は則ち、時雨の如く、利他的な盛心に俱行する身業……の意とすべし。

【四〇】能く隨順しとは、心意に隨順的にしての意。

【四一】端嚴、應供とは、威儀の端嚴と、從つて應に供養すべき資格とを長養すの意とすべし。



## 第四可喜法

復た、苾芻有り、法を以つて、如法の利養を獲得し、鉢中所受の飲食に下至するまで、此の利養に於いて、諸の有智の同梵行者と等しく共に受用して、別に藏隱せず。是れを第四可喜法と名く。此の法に由るが故に、能く可愛を發し、廣く説いて、乃至、無諍、一趣を引く。

## 第五可喜法

復た、苾芻有り、諸所有の戒の缺無く、隙無く、雜無く、穢無く、應供、無執にして、善く究竟し、善く受取し、諸の有智者の稱讃して毀する無し——是くの如きの戒に於いて、諸の有智の同梵行者と等しく共に受持して、藏隱する所無し。是れを第五可喜法と名く。此の法に由るが故に、能く可愛を發し、廣く説いて、乃至、無諍、一趣を引く。

## 第六可喜法

復た、苾芻有り、諸所有の見の是れ聖、出離にして、能く善く通達し、若し彼れを起作せば、能く正しく苦を盡す、——是くの如きの見に於いて、諸の有智の同梵行者と等しく共に修學して、藏隱する所無し。是れを第六可喜法と名く。此の法に由るが故に、能く可愛を發し、能く尊重を發し、能く可意を發し、能く可愛、尊重、可意、悅意、攝受、歡喜、無違、無諍、一趣を引く。

以上六可喜法の論釋  
大師

「大師の所に於いて」とは、云何が「大師」なる。答ふ、一切の如來、應、正等覺を説いて、「大師」と名く。

門經—現住意業行慈。

【一】法を以つて等、巴は、すべて所得 Tabha の如法 dhamma にして、法によりて獲得せる所たる dhammahitā を云云といひ、大集法門經は、如法に受利し、如法に乞食し、所得有るに隨つて等といふ。

【二】鉢中等、巴 Antamaso patti-pariyāpannamāṅga pi「假令、鉢に攝受せる所に至るまじき」と。(大集法門經は如法而食と作る。)

【三】有智の、巴具戒の Silavattohi(pī, jñā)と。(大集法門經はこの當字無。)

【四】缺無く、巴 Akhaya (unbroken)。大集法門經は次のと共にし、不毀不缺と記す。

【五】隙無く、巴 Aśiddha (faultless)。

【六】雜無く、巴 Asubha (unspotted)(大集法門經は増益善力といふ。)

【七】穢無く、巴 Akammāsa (unblemished) 大集法門經は雜諸過失に當るか。

【八】應供、巴 Bhujisa (befreed)。今は bhuj = to eat の使役態未來形と見、應供と譯する。

【九】無執、巴 Vāṇipattiṇa (not delinquent, undisturbed)。

【十】善く究竟しは、巴 Aprāmañña (unfurnished, inopportune) にち當るか。

【十一】善く受取しは、巴は同準に、Samāhi-saṅgā-tanika (能く三昧に向つて轉ずる所の)に當るか。

【十二】諸の有智者等、巴には缺。大集法門經も同じく無し。

【十三】聖、巴 Ariya (holy)。大集法門經は無。

【十四】出離は、巴 Niyānika (guiding out, delivering) に當る。

【十五】善く通達しは、巴 Niyāti = to go out に關

にして、餘は皆な愚妄なり「等」と執す。是れを「自見に取著し」と名く。

「堅固の執を起し」

云何が「堅固の執を起し」なる。答ふ、即ち自見に取著するに由り、是の故に堅執を起すなり。

「棄捨を教へ難し」

云何が「棄捨を教へ難し」なる。答ふ、自見に於いて、愛樂、等愛樂、現前愛樂を起すに由り、是の故に厭離解脱を教へ難きなり。

八(六)六可善法

第一可喜法

六可喜法とは云何が六と爲す。答ふ、若し、苾芻有り、大師の所、及び、諸の有智の同梵行者に於いて、慈身業を起す。是れを第一可喜法と名く。此の法に由るが故に能く可愛を發し、能く尊重を發し、能く可意を發し、能く可愛、尊重、可意、悅意、攝受、歡喜、無違、無諍、一趣を引く。

第二可喜法

復た、苾芻有り、大師の所、及び、諸の有智の同梵行者に於いて、慈語業を起す。是れを、第二可喜法と名く。此の法に由るが故に、能く可愛を發し、廣く説いて、乃至、無諍、一趣を引く。

第三可喜法

復た、苾芻有り、大師の所、及び、諸の有智の同梵行者に於いて、慈意業を起す。是れを第三可喜法と名く。此の法に由るが故に、能く可愛を發し、廣く説いて、乃至、無諍、一趣を引く。

【三】六可喜は Sang—S. Cha ariyā dhammā

(Rūpa D—Six occasions of fraternal living; Neumann—Sechs nicht zu vergessende Dinge.) 大集

法門經—六離塵法。Sārājya (Eudhist Sanghāt: Sārājya or Suparājya) は語源未だ必ずしも明

ならざるも、可喜 gladdenng, pleasant, 和合的

concliating の兩様の意義がある。今の玄奘は前義に

よつて譯せるものなること、言をまたぬが、とにあ

れ、大師佛陀及び、その聖弟子等に於いて、慈身語意

三行乃至準同の六種の善業、善作業をなし、よつて、

前の六諍根の反對に、諸比丘の互に諍なく、和合一趣

たり得べきをあげて稱する所である。

【三】大師の所等、巴文はなく、唯だ同梵行者に作

り、大集法門經は梵行者にせず、唯だ梵行堅固不壞等

とす。

【二】慈身業、巴 Mettan, kīya-kamma. 大集法

門經は「現に身業に住して慈を行じ」とす。

【三】能く可愛、巴 Sārājya に當るべし。大集法門

經には當語無し。

【三】能く尊重、巴 Garu-karāṇa (尊重の因たり) に

當るべく、大集法門經は又缺。

【三】能く可意、巴 Kīya-karāṇa (愛の因たり) に當

るとすべく、大集法門經は同上缺。

【三】能く可愛、尊重等、巴、大集法門共に無し。

【三】攝受以下、巴は Saṃgahāya (concord 和合)、

Avivādaya (無諍)、Sammagīya (調和)、Ekibhāvaṇa

(同一性) Samvattati (等に向つて轉ず) と作る。大

集法門經は、すべてこれらの文字に當るものなし。

【三】慈語業、巴 Mettan, vacī-kamma. 大集法

門經—現住語業行慈。

【二】慈意業、巴 Mettan, mano-kamma. 大集法

門經—現住語業行慈。

【二】慈意業、巴 Mettan, mano-kamma. 大集法

門經—現住語業行慈。

【二】慈意業、巴 Mettan, mano-kamma. 大集法

門經—現住語業行慈。

天・人の無義、無利、諸の苦惱の事を引く。——是くの如きの諍根を、汝等、若し、或ひは内、或ひは外に、未だ斷ぜざる所有るを見れば、即ち、應さに聚集し、和合し、精勤し、方便して、斷を求めて、放逸なるを得ること無かれ。汝等は應さに是くの如きの諍根をして、餘り無く斷滅して、先きに未だ起らざるが如くならしむべし、是くの如きの諍根を、汝等、若し、或ひは内、或ひは外に、皆な悉く已に斷ずるを見れば、即ち應さに正念・正知・猛利の心を發起し、精進して防護し、當來世に永く復た起らざらしむべし。是れを諍根を正しく斷じ、善く斷ずと爲す。——

以上六諍根法の論釋  
(一) (四)の四諍根法

「忍有り恨有り、若しは瞋・惱有り、若しは嫉・慳有り、若しは誑・誑有り」とは、是くの如きの一切は皆な前に説くが如し。

(五) 第五諍根法  
「邪見・倒見有り」とは、云何が「邪見」なる。

答ふ、諸所有の見の施無きと、祠祀無きと、愛樂無きと、廣く説いて、乃至、自ら、我が生已に盡き、梵行已に立ち、所作已に辦じ、後有を受けずと覺知すること無きとは、是れを「邪見」と名く。

「倒見」と言ふは、謂はく、即ち邪見所見の顛倒なり。

(六) 第六諍根法  
「自見に取著し」とは、

「自見に取著し、堅固の執を起し、棄捨を教え難し」とは、云何が「自見に取著し」なる。

答ふ、我れ及び世間の常を執して、唯だ、此れのみ諦實にして、餘は皆な愚妄なり。廣く説いて、乃至、如來は死後、有に非ず、非有に非ず、唯だ、此れのみ諦實

【三】前にとは、寧ろ、法蘊足論等の豫想なるべく、その卷第九、雜事品第十六、參照。尙、Puggala paribatti II. 1-4; A. II. 16. 1-4. 參照。

【二】諸所有の見の等、卷二、匿見の下參照。

【四】顛倒、Viparyāsa (覺) なるべし。(overturn-of view)。

【三】我れ及び等は、有名な世尊無記の教説にして、已註の如く、北傳は十四無記と稱し、十四に作り、巴利傳は一〇に作る。普通には次の如し。

(一) 世間有常・無常、(常・無常、非常・非無常)。

(二) 世間有邊・無邊(又は有底・無底)、(有無邊、非有邊・非無邊)。

(三) 命即身、命異身異。

(四) 如來滅後有・非有・有非有・非有非々有。

即ち、(一)内を數うれば、十四で、北方所傳であり、それを除けば一〇で、南方所傳である。



く。——是くの如きの諍根を、汝等、若し、或ひは内、或ひは外に、未だ斷ぜざる所有るを見れば、即ち應さに聚集し、和合し、精勤し、方便して、斷を求めて、放逸なるを得ること無かれ。汝等は應さに是くの如きの諍根をして、餘り無く斷滅して、先きに未だ起らざるが如くならしむべし。是の如きの諍根を、汝等、若し、或ひは内、或ひは外に、皆な悉く已に斷ぜるを見れば、即ち應さに正念、正知、猛利の心を發起し、精進して防護し、當來世に永く復た起らざらしむべし。是れを諍根を正しく斷じ、善く斷ずと爲す。

- (二) 覆惱諍  
根  
(三) 嫉慳諍  
根  
(四) 誑諍  
根  
(五) 邪見倒見諍根  
(六) 自見執靜根

復た一類有り、自見に取著し、堅固の執を起し、棄捨を教え難し。若し自見に取著し、堅固の執を起し、棄捨を教え難ければ、便ち大師に於いて、恭敬、供養、尊重、讚歎すること能はず。若し大師に於いて、恭敬、供養、尊重、讚歎すること能はざれば、即ち法を見ず。若し法を見ざれば、即ち沙門を顧みず、若し沙門を顧みざれば、便ち染著、輕弄、鬪諍を起し、染著、輕弄、鬪諍を起すに由りて、所依止と爲り、多くの衆生をして、無義無利にして、諸の苦惱を受けしめ、此れに由りて、無量の

四に於いてに作る。以下すべて準ず。而も漢の二經も、寧ろ巴文に近い。

【二六】即ち法を見ず等、巴は、直ちに、……僧伽に於いて、鬪諍 *Tvāṇam* を生ず。

【二七】所依止、巴無し。蓋し、染著、輕弄、鬪諍の所依止となりての意。

【二八】是くの如きの以下、巴には曰く、「友よ、爾等は是くの如きの諍根を自らの内外に於いて等隨觀見せよ。而して、友よ、爾等はその内にかゝる惡諍根を斷ずべく精勤すべし。友よ、爾等もし是くの如きの諍根を、自らの内外に於いて等隨觀見すること無むば、友よ、爾の時、爾等はその惡諍根を將來除却し能はざるに到らむ」と。

【二九】聚集等、巴は、「斷の爲めに精勤すべし」のみ記す。

【三〇】是れを等、巴は、「かの有罪の諍根の斷は是くの如し。……又、かの有罪の諍根の當來世に於いて除却すべからざるの事も亦是くの如し」。

【三一】覆・惱、巴、*Makkhū, paṭiṇi*。

【三二】嫉・慳、巴、*Iṇaṃki, maccari*。

【三三】誑、巴、*Sāḍha, māyavi*。

【三四】邪見・倒見、巴、*Pāpicco, miccā-ditti*。

(evil intention, wrong opinion)

【三五】自見等、巴、*Sanditti-paṇamisi* = one who is infected with workiness.

【三六】堅固の執等、巴、*ādhāna-gāhi* = one holds one's own place, one who is obstinate. (頑固な人)。

【三七】棄捨等、巴、*Duppeṇināga* = difficult to forsake, or to give up.

## (六)第六出離界

六には具壽有り、是くの如きの言を作さく、我れは我慢を遠離し、我・我所を觀見せずと雖も、而も我が心は猶ほ疑・猶豫の箭の爲めに、纏縛、損害せらるゝと。應さに彼れに告げて曰ふべし、是の言を作すこと勿れ。所以の者何となれば、若し具壽有り、我慢を遠離し、我・我所を觀見せざれば、處も無く、容も無し、其の心の猶ほ疑・猶豫の箭の爲めに纏縛、損害せられむことは。若し心の猶ほ疑・猶豫の箭の爲めに纏縛、損害せらるゝは、是の處有ること無し。謂はく、我慢を遠離し、我・我所を觀見せざれば、必ず能く一切の疑・猶豫の箭を出離すと。

## 第六出離界に於る出離の意義

七(七)六諍根法  
(一)忿恨諍根

今、此の義の中の意は、諸の慢を超越するを説いて出離と名く。六諍根法とは、云何が六と爲す。答へて謂はく、一類有り、忿有り、恨有り。若し忿・恨有らば、便ち大師に於いて、恭敬、供養、尊重、讚歎すること能はす。若し大師に於いて、恭敬、供養、尊重、讚歎すること能はざれば、即ち法を見ず。若し法を見ざれば、即ち沙門を顧みず。若し沙門を顧みざれば、便ち、染著、輕弄、鬭諍を起し、染著、輕弄、鬭諍を起すに由りて、所依止と爲り、多くの衆生をして、無義無利にして、諸の苦惱を受けしめ、此れに由りて、能く無量の天・人の無義、無利、諸の苦惱の事を引

し。

【一五】欲貪等、巴は唯だ貪 *Pāga* のみを出す。【一六】無相心定、*Saṅg*—*S. Animitā*。空三昧、無願三昧と共に三昧となるものなりとして、(*cf.* *Saṅg*—*S. III. 51*。衆集經三・二三。大集法門經三・二二。一本論缺)、佛教の理想としての涅槃を觀じて、三昧發得、精進策勵の所以とするに、涅槃そのものゝ、諸の相を超越せることを觀するを云ふ。【一七】隨相識、巴、*Nimittanāri viññāṇa* とは、依然、涅槃に諸の相ありて隨念するの識を生ずること。【一八】我慢を等、*Saṅg*—*S. 'Amhi' kha me vigāhāna*。觀見せず、巴、*Na sammappasāmi* (等隨觀見せず) 通く、觀ることなしの意。因みに今の我・我所に當る所、巴は、*Ayaṃ ahaṃ amhi* 即ち、「そは我なり」と觀見せずと作る。【一九】疑等、巴、*Vaikeṣā-jāhanikathā-sallāpa*。蓋し、箭とは疑と猶豫との我らの心を害損すること、箭の如き煩惱の意。

【二〇】損害の字は巴無し。

【二一】六諍根法 *Saṅg*—*S. Oha viyāda mūlini* (*Rhys D.*—*Six roots of contention*; *Neumann*—*Sechs Wurzeln des Hades*) 衆集經一六諍本。大集法門經一六種鬭諍根本。忿恨、覆惱、嫉性、誑詬、邪見倒見、自見の執等の六を根本とし、大師に於いて尊崇心なく、遂に鬭諍の根となるを名けて今六諍根法としたものである。【二二】忿有り、巴、*Kodhuno*。【二三】恨有り、巴、*Upanāhi*。

【二四】大師に於いて、巴は、大師、法、僧伽、學處の



第四出離界  
に於る出離  
の意義

纏縛せられむことは。若し心の猶ほ欲貪・瞋の爲めに纏縛せらるゝは、是の處有ること無し。謂はく、捨心定は必らず能く一切の欲貪・瞋を出離すと。

問ふ、此の中の出離とは何をか謂う所ぞ。答ふ、欲貪・瞋の永斷も、亦、出離と名け、欲貪・瞋を超越するも、亦、出離と名け、諸の捨心定も、亦、出離と名く。今、此の義の中の意は、捨心定を説いて出離と名く。

(五)第五出離界

五には具壽有り、是くの如きの言を作さく、我れは無相心定に於いて、已に習し、已に修し、已に多く所作すと雖も、而も我が心は猶ほ隨相識の爲めに纏縛せらるゝ。應さに彼れに告げて曰ふべし。是の言を作すこと勿れ。所以の者何となれば、若し具壽有り、無相心定に於いて、已に習し、已に修し、已に多く所作せば、處も無く、容も無し、其の心の猶ほ隨相識の爲めに纏縛せられむことは。若し心の猶ほ隨相識の爲めに纏縛せらるゝは、是の處有ること無し。謂はく、無相心定は必ず能く一切の隨相識を出離すと。

第五出離界  
に於る出離  
の意義

問ふ、此の中の出離とは何をか謂う所ぞ。答ふ、隨相識の永斷も、亦、出離と名け、隨相識を超越するも、亦、出離と名け、諸の無相心定も、亦、出離と名く。今、此の義の中の意は、無相心定を説いて出離と名く。

#### 六法品第七

【九四】法義論とは、同論第十、多界品第二〇の一參照。(本論第二卷の註も參照)。

【九五】六出離界、*Saṭ-ṇiṣaṇṇipya-dhātavaṃ* (Oha nissaraṇīya dhātuyo) (Rhys D.—Six elements tending to deliverance; Neumann—Sechshebe Art der Entrinnung.) 衆集經—六出要界。大集法門經—六種對治出離界。界 *dhātu* とは種族 *gotra* (眞諦は性)の義と稱せられ、要するに「類」などいふ意で、今、慈心定、悲心定、喜心定、捨心定、無相心定、離我慢を瞋、害、不樂、欲貪、隨相識、疑等の諸惑に對する出離と一、六出離を類集して、以つて一團とせるが故に、六出離界の名を立てた所以である。

【九六】慈心定、巴、*Metta* (已註)。

【九七】已に修し等、巴、*Bhāvita* (修習せられたり)。*Bhāvikatā* (多く所作せられたり) *Yanīkatā* (所乗とせられたり)、*Vatthukatā* (礎にせられぬ。或ひは究竟修習せられぬ)と。

【九八】心は猶ほ等、巴、*Cittam pariyādāya tiṭṭhanti* (心を捕捉し已りて住す)。

【九九】處も無く等、巴、*Aññamaññ eteva anuvaliso* (Rhys D.—This is a blameless and uncalled-for statement; Neumann—Unnöglich ist es und kann nicht sein)。

【一〇〇】是の處等、巴、*Netam ihaṇaṃ vijjanti*。

【一〇一】悲心定、*Saṃg—S. Karuṇā* (已註)。

【一〇二】喜心定、*Saṃg—S. Mudita*。上の慈心定(又は慈定)及び悲心定(又は悲定)と同じ。一切の場合に喜心に住することを目的としての修定(四法品中の四無量下參照)。

【一〇三】不樂、巴、*Arati* *अरति*。

【一〇四】捨心定、*Saṃg—S. Upekkhā* (上に準じて知る)。



を説いて出離と名く。

(三)第三出離界

三には具壽有り、是くの如きの言を作さく、我れは喜心定に於いて、已に習し、已に修し、已に多く所作すと雖も、而も我が心は猶ほ不樂の爲めに纏縛せらるゝと。應さに彼れに告げて曰ふべし。是の言を作すこと勿れ。所以の者何となれば、若し具壽有り、喜心定に於いて、已に習し、已に修し、已に多く所作せば、處も無く、容も無し、其の心の猶ほ不樂の爲めに纏縛せられむことは。若し心の猶ほ不樂の爲めに纏縛せらるゝは、是の處有ること無し。謂はく、喜心定は必ず能く一切の不樂を出離すと。

第三出離界に於る出離の意義

問ふ、此の中の出離とは何をか謂う所ぞ。答ふ、不樂の永斷も、亦、出離と名け、不樂を超越するも、亦、出離と名け、諸の喜心定も、亦、出離と名く。今、此の義の中の意は、喜心定を説いて出離と名く。

四には具壽有り、是くの如きの言を作さく、我れは捨心定に於いて、已に習し、已に修し、已に多く所作すと雖も、而も我が心は猶ほ欲貪・瞋の爲めに纏縛せらるゝと。應さに彼れに告げて曰ふべし。是の言を作すこと勿れ。所以の者何となれば、若し具壽有り、捨心定に於いて、已に習し、已に修し、已に多く所作せば、處も無く、容も無し、其の心の猶ほ欲貪・瞋の爲めに

じ、知覺、認識を起せる場合の色とでも解すべからんか。

【三】所緣 ārambha (ārambha), 認識及び知覺の對象。

【四】處所、恐らく、sthāna (sthāna) なるべく、三界の諸處。

【五】増上, adhiyeti とは、彼々の法(今は則ち色)を中心條件にして、此々の法乃至心所法等を生ずる時、前者を後者に對し、増上縁と名くるが故に、準上に、一定の色が、その増上縁となりて、眼を通じての知覺認識の成り立てる場合をさす。

【六】捨, Uppekā (Uppekā) = indifference, neutrality.

【七】行捨, sampukāra-uppekā (梵) とは、五蘊中の行蘊に攝する捨の意で、これは捨の心所といふ、今、論文にいふ如き特性あるものにして、而も、右註の捨受の如く、五蘊中の受蘊攝のものには非ざれば、特に簡んで、行捨と名く。

【八】六界, Sa. g. S. Cha dhātuyo (Rhya D. — Six elements; Neumann — Sechserlei Artung.) 衆集經——今と同。後の大乗佛教で所謂六大として喧しくなつたもので、物質組成の要素としての地・水・火・風に、更に空及び識の二を加へて、一切萬象は物心二面、殊に、有情身組成の根本とし、又は有情分析の結果とせるもの。

【八】地界, Pṭhivīdhātu (Pṭhivīdhātu)。

【九】水界, Abdhātu (Āpo-dhātu)。

【十】火界, Tejodhātu (??)。

【十一】風界, Vāyudhātu (Vāyodhātu)。

【十二】空界, Ākāśadhātu (Ākāśa-dhātu)。

【十三】識界, Vijñāna-dhātu (Vijñāna-dhātu)。

第一出離界に於る出離の意義

れ。所以の者何となれば、若し具壽有り、慈心定に於いて、已に習し、已に修し、已に多く所作せば、處も無く、容も無し、其の心の猶ほ嗔の爲めに、纏縛せられむことは。若し心の猶ほ嗔の爲めに纏縛せらるゝは、是の處有ること無し。謂はく、慈心定は必ず能く一切の嗔縛を出離すと。

問ふ、此の中の出離とは何をか謂う所ぞ。答ふ、嗔縛の永斷も、亦、出離と名け、嗔縛を超越するも、亦、出離と名け、諸の慈心定も、亦、出離と名く。今、此の義の中の意は、慈心定を説いて出離と名く。

(二)第二出離界

第二出離界に於る出離の意義

二には具壽有り、是くの如きの言を作さく、我れは悲心定に於いて、已に習し、已に修し、已に多く所作すと雖も、而も我が心は猶ほ害の爲めに纏縛せらるゝと。應さに彼れに告げて曰うべし。是の言を作すこと勿れ。所以の者何となれば、若し具壽有り、悲心定に於いて、已に習し、已に修し、已に多く所作せば、處も無く、容も無し、其の心の猶ほ害の爲めに纏縛せられむことは。若し心の猶ほ害の爲めに纏縛せらるゝは、是の處有ること無し。謂はく、悲心定は、必ず能く一切の害縛を出離すと。

問ふ、此の中の出離とは何をか謂う所ぞ。答ふ、害縛の永斷も、亦、出離と名け、害縛を超越するも、亦、出離と名け、諸の悲心定も、亦、出離と名く。今、此の義の中の意は、悲心定

(Rhyas D.—Six investigations of indifference; Neumann—Sechs gleichgültige Angenhungen.) 大集法門經—六捨行。又、準上に知るべし。

【一】眼に色等。E' Cakkhū rūpaṃ disvā upa-kā-ṭṭhānīyaṃ rūpaṃ upavīxanti.

【二】六恒住。S'ag—S. Cha sattha viharā (Rhyas D.—Six chronic states; Neumann—Sechs Sanerzustände) 漢二經無し。恒住 Sattha viharā とは、心の恒住、即ち、不變不動なることの意にて、六境に對して、能く常に心の動變喜愛せず、不斷に捨心に住し、具念正知なるをいふ。

【三】喜ばす。E' N'eva suṇano koṭi (Rhyas D.—Is neither delighted; Neumann—So wird er weder fröhlich.)

【四】憂えず。E' Na dummāno (Rhyas D.—Nor displeased; Neumann—Noch traurig.)

【五】捨に安住す。E' Upekkhako vīharati (Rhyas D.—But remains equable; Neumann—Er bleibt vielmehr gleichgültig.)

【六】觸を覺し。E' Kāyena phoṭṭhabbāṃ phussivā (Neumann—Mit dem Gefühle eine Fassung gestattet.)

【七】所依止とは、眼自らの「依止する所」の己身のこと。

【八】等無間、Samantara とは、一般には心々所の前後唯一つゝ意識の中樞を占領するに名くるものなるも、こゝでは色のことなれば、例へば南傳鉢叉那論の廿四緣中に、一般の場合として、「總じて前々の法の等無間(immediately)に、後々の法を生ずる時んば、その前々の法を、その後々の法に對して等無間緣といふ」と云ふの類とすべく、畢竟、無間緣として心々所を生



無間、或ひは所縁、或ひは處所、或ひは増上の色に於いて、順捨處の作意を以つて思惟し、若し此の色に於いて、順捨處の作意もて思惟するに由りて生ずる所の妙捨は、是れを、眼に色を見りて喜ばず、憂えず、具念正知して、恒に捨に安住すと名く。

(二) 六の恒住

耳・鼻・舌・身・意の恒住も、亦、爾なり。

問ふ、此の中、捨とは何をか謂ふ所ぞ。答ふ、心の平等の性、心の正直の性、心の驚覺無くして、任運に住するの性を、應さに知るべし、此の中には、説いて名けて捨と爲す。

復た次に、有るが説かく、六識相應の、色・聲・香・味・觸・法境を緣じての捨受を捨と名くと。

第二説

本論としての説

今、此の義の中には、應さに知るべし、意として、心の平等の性、心の正直の性、心の驚覺無くして、任運に住するの性なる行捨を説いて捨と名く。

六界とは、云何が六と爲す。答ふ、一には地界、二には水界、三には火界、四には風界、五には空界、六には識界なり。

此の六を分別することは法蘊論の如し。

六の六出離

(一) 第一出離界

六出離界とは云何が六となす。答ふ、一には具壽有り、是くの如きの言を作さく、我れは慈心定に於いて、已に習し、已に修し、已に多く所作すと雖も、而も我が心は猶ほ嘆の爲めに纏縛せらるゝ。應さに彼れに告げて曰うべし。是の言を作すこと勿

【五】 六親待、Sang—S. and others?

【六】 六生類、Sang.—S. VI. 21. 漢二經缺。A. VI. 57. 4 (II. 384)

【七】 六喜近行、Sang.—S. Cūḍamāṇavaṇṇa (Rhya D.—Six pleasurable investigations; Neumann—Sechs erfreuliche Angehungen) 大集法門經

一六可悅意處。近行 Upavāsa とは何ぞ、分別 (Investigation, discrimination) 隣近 environs, neighbourhood 等の意がある。而して、今、可愛、順喜受の六境を認識して、それに伴うて喜受の生ずるときは、その喜受は恐らくは對境のそのまゝの心の反映なりといふ意味で、隣接者たり近行たりとして、今、の目を立てたものとせん。

【八】 眼に色を等、巴 Cakkhū rūpaṃ divā somanassa-ñāṇiyyaṃ rūpaṃ upavāsaṃti (Rhya D.—When on occasion of the sensation through the eyes, the rūpa giving rise to pleasure is examined; Neumann—Hat man mit dem Gesichte eine Form erlickt, so geht man die erfreulich bestehende Form an.) 大集法門經一可愛色を見る、是れ悅意處なり。他の五近行の場合も準するをよめて略す。

【九】 順喜處、巴 Somanassa-ñāṇiyya (Rhya D.—Six diagnostic investigations; Neumann—Sechs uuerforschende Angenhungen.) 大集法門經一六不可悅意處。上の六喜近行に準じて知るべし。

【一〇】 眼に色等、巴 Cakkhū rūpaṃ divā domanassa-ñāṇiyyaṃ rūpaṃ upavāsaṃti.

【一一】 順憂處、巴 Domanassa-ñāṇiyya (Rhya D.—Six investigations of displeasure; Neumann—Sechs unangenehme Untersuchungen.)



の近行なり。

(一)第一捨近行

七五  
眼に色を見已りての順捨處色の近行とは、謂はく、眼に色を見已りて、可愛に非ず。不可愛に非ず・可樂に非ず、不可樂に非ず・可欣に非ず、不可欣に非ず・可意に非ず、不可意に非ざるの色に於いて、順捨處の作意を以つて思惟し、若し此の色に於いて、順捨處の作意もて思惟するに由りて生ずる所の捨受は、是れを、眼に色を見已りての順捨處色の近行と名く。

(二)第二捨近行

四(一)四六恒住

耳・鼻・舌・身・意捨近行も、亦、爾なり。

七五  
六恒住とは、云何が六と爲す。答ふ、一には眼に色を見已りて喜ばず、憂えず、具念正知して、恒に捨に安住す。二には耳に聲を聞き已りて喜ばず、憂えず、具念正知して、恒に捨に安住す。三には鼻に香を嗅ぎ已りて喜ばず、憂えず、具念正知して、恒に捨に安住す。四には舌に味を嘗し已りて喜ばず、憂えず、具念正知して、恒に捨に安住す。五には身に觸を覺し已りて喜ばず、憂えず、具念正知して、恒に捨に安住す。六には意に法を了じ已りて喜ばず、憂えず、具念正知して、恒に捨に安住す——なり。

(二)第二恒住

眼に色を見已りて喜ばず、憂えず、具念正知して、恒に捨に安住すとは、謂はく、眼に色を見、可愛、不可愛、可樂、不可樂、可欣、不可欣、可意、不可意の、或ひは所依止、或ひは等

六法品第七

るべく、便ち、佛の尊嚴を認めるにつけて、こちらが心内に怖心をもつて、これに對することあるの性の意。

【五一】前にとは、卷一、二法品中を見よ。

【五二】(二)諸の六法等、原漢典には無く、今、新に加へたもの。

【五三】六喜近行・Sang.—S. VI. 11. 衆集經缺。大集法門經六・八。M. 140 (III. 253) = 中阿含一六二、分別六界經。cf. S. 36. 22 (IV. 252).

【五四】六憂近行・Sang.—S. VI. 12. 衆集經缺。大集法門經六・九。M. 140 (III. 240).

【五五】六捨近行・Sang.—S. VI. 13. 衆集經缺。大集法門經六・一〇。M. 140 (III. 210).

【五六】六恒住・Sang.—S. VI. 20. 漢二經無。A. IV. 195 (II. 198). A. VI. 1. 83.

【五七】六界・Sang.—S. VI. 16. 衆集經六・一〇。大集法門經無。A. III. 61. 6 (I. 176). M. 140 (III. 240 ff.) &c.

【五八】六出離界・Sang.—S. VI. 17. 衆集經六・一二。大集法門經六・一五。A. VI. 13 (III. 200).

【五九】六靜根法・Sang.—S. VI. 15. 衆集經六・九。大集法門經六・一四。A. VI. 36 (III. 334).

【六〇】六可喜法・Sang.—S. VI. 14. 衆集經六・缺。大集法門經六・一三。A. VI. 11 (III. 288).

【六一】六通・Sang.—S. wanting. 漢二經缺。cf. A. VI. 2 (III. 280).

【六二】六順明分想・Sang.—S. VI. 22. 漢二經缺。

【六三】六隨念・Sang.—S. VI. 19. 衆集經六・一四。大集法門經六・一一。A. VI. 1. 3 (III. 279) &c.

【六四】六無上法・Sang.—S. VI. 18. 衆集經六・一三。大集法門經六・一二。A. VI. 8 & 30 (III. 284, 325).

喜處の作意もて思惟するに由りて、生ずる所の喜受は、是れを、眼に色を見已りての順喜處色の近行と名く。

(二)一(六)  
喜近行

二(三)六  
喜近行

耳・鼻・舌・身・意喜近行も、亦、爾なり。

六憂近行とは、云何が六と爲す。答ふ、一には眼に色を見已りての順憂處色の近行、二には耳に聲を聞き已りての順憂處色の近行、三には鼻に香を嗅ぎ已りての順憂處香の近行、四には舌に味を嘗し已りての順憂處味の近行、五には身に觸を覺し已りての順憂處觸の近行、六には意に法を了じ已りての順憂處法の近行なり。

眼に色を見已りての順憂處色の近行とは、謂はく、眼に色を見已りて、一向不可愛・一向不可樂・一向不可欣・一向不可意の色に於いて、順憂處の作意を以つて思惟し、若し此の色に於いて、順憂處の作意もて思惟するに由りて生ずる所の憂受は、是れを、眼に色を見已りての順憂處色の近行と名く。

(二)一(六)  
憂近行

耳・鼻・舌・身・意憂近行も、亦、爾なり。

六捨近行とは、云何が六と爲す。答ふ、一には眼に色を見已りての順捨處色の近行、二には耳に聲を聞き已りての順捨處聲の近行、三には鼻に香を嗅ぎ已りての順捨處香の近行、四には舌に味を嘗し已りての順捨處味の近行、五には身に觸を覺し已りての順捨處觸の近行、六には意に法を了じ已りての順捨處法の近行なり。

三(三)六  
捨近行

【四】 佛に於いて等、Sang—S. Sattari agāro vibhanti apūṭhio (Riyā D.—To conduct it evenly and inod only to the master; Nennung—Vor dem Meister keine Aeltung, keine Ergebung haben.)

【四】 不與自在、自在とは、恐らく、Māhātmyam (majesty, dignity) 乃至、準同の原字なりしかるべく、かくて、不與自在とは、佛陀の尊嚴を認め、與ふるの性といふ意ならむ。或ひは第一卷所註の如く、Svatantra 即ち、他に頼らずして、自存するもの、意に解するも可なるべく、蓋し、同註の如くこれは、所詮は具徳の意で、かくて不與自在とはそれを認めぬことに歸すべき故である。

【四】 法に於いて…Sang—S. Dhamma agāro……僧に於いて…Sang—S. Sanghe……學に於いて…Sang—S. Sikkhaya……惡言を具すは、Sang—S. Appamāde……即ち、以上の文に同じで、「不放逸に於いて恭敬等せずして住す」と作る。

【四】 惡語等、前の二法品中の惡言・惡友の下(卷一)に説くが如しとの意。

【四】 惡友、前の二法品中では相應の巴語を Pāpamittā とす。然るに、今の Sang—S. には Pāpānātthā とあつて、これは恭敬の交友を意味する。而して、巴の相應所の文はそれに對して、恭敬等せずして住する等となつてゐる。

【四】 前に等、前の二法品中(卷二)參照。

【四】 六順不退法、すべて右順退法の場合に準じ、その反對の六の場合に、現 Sang—S. は、六恭敬法 Oḷaṅ gāruva (Riyā D.—Six forms of reverence; Nennung—Sechs Arten von Aeltung) と作る。二者の相違も上に準ず。

【五】 怖の自在に等、自在は右註の如く、尊嚴の意なり。

## (二) 諸の六法の二の一

### 六法の攝頌第

後の喩陀南に曰はく、  
後の六は十四有り。

謂はく、喜と、憂と、捨と、恒と、

界と、出と、根と、喜と、通と、

明と、念と、上と、觀と、類となり。

### 第二の六法一

#### 一(一)六喜近行

六喜近行、六憂近行、六捨近行、六恒住、六界、六出離界、  
六靜根法、六可喜法、六通、六順明分想、六隨念、六無上法、  
六觀待、六生類有り。

六喜近行とは、云何が六と爲す。答ふ、一には眼に色を見  
已りての順喜處色の近行、二には耳に聲を聞き已りての順喜處  
聲の近行、三には鼻に香を嗅ぎ已りての順喜處香の近行、四に  
は舌に味を嘗し已りての順喜處味の近行、五には身に觸を覺し  
已りての順喜處觸の近行、六には意に法を了じ已りての順喜處  
法の近行なり。

#### (一) 第一喜近行

眼に色を見已りての順喜處色の近行とは、謂はく、眼に色を  
見已りて、一向可愛・一向可樂・一向可欣・一向可意の色に於  
いて、順喜處の作意を以つて思惟し、若し此の色に於いて、順

### 六法品第七

等參照)、今は寧ろ、知覺關係の意義多きに於るとなすべし。この意味で Rhys Davids—Stede: Pali dictionary には、感覺的知覺 sensory perception と云ふはやゝ近しいといふべし、然し、知覺そのものとしては一般に前の想をもつて、それと解すべきなれば、思ふに、思は、知覺に基き、更に進んで、對境に於いて思想する所あるもの、即ち、それとも稱すべく、かくして、意志方面と自らの連絡も保ち來るものといふべし。而して、今は、例により、その六種を數うるが故に、六思身となすものにて、中、今の論は所依の上より六別し、衆集經の漢巴兩傳は對象關係によりて六分すること、六想身の場合に準ず。

【二】六愛身、Sagga—S. Uha Tappā kāyā (Rhys D.—Six craving-groups; Neumann—Sechsz Dürs-tkreise.) 衆集經—六愛身。大集法門經—六愛。愛 (Tappā (Tappa)) とは眞實は、感情、即ち、色聲香、等に基いて得る受への渴愛貪著を意味し、かくして、今の論文にも、受—愛とあり、又かの十二因緣說に於いても、これをとつて、同準に作るが、今は則ちかゝる原則を豫想しつゝ、色、聲、香、味、觸、法の六境に對してのそれを六種に數へ、六愛身とせるもの。その命名に於いて、今の論は所依に約し、兩衆集經傳は對象に約すること例の如し。

【三】六順退法、これの原語は果して如何なりしか。今の Sagga—S. は、六不恭敬 Uha agatāya と作り、その不恭敬法あるの故に、一切善法の退轉を起すとするから、意に於いては今の順退法といふのに相應する。即ち、宗教的に佛法僧及び、學の四と、道法的に惡言、惡友の二とをあげ、もつて六とする所にて、Sagga—S. では、その道德的の二を不放逸と善友とに作る。Rhys D.—Six forms of irreverence; Neumann—Sechs Arten von Missachtung.)



法…僧…  
學に於いて  
恭敬せずして住す

惡言を具すとは、云何が惡言の性なる。答ふ、前に惡語を説くが如し。

(五)惡言を具す

惡友に遇ふとは、云何が惡友の性なる。答ふ、前に惡友を説くが如し。

(六)惡友に遇ふ

六順不退法とは、云何が六と爲す。答ふ、一には佛に於いて恭敬有りて住す。二には法に於いて恭敬有りて住す。三には僧に於いて恭敬有りて住す。四には學に於いて恭敬有りて住す。五には善言を具す。六には善友に遇ふなり。

10、六順不退法

佛に於いて恭敬有りて住すとは、云何が佛に於いて恭敬有るの性なる。答ふ、佛・世尊に於いての諸の恭敬の性、恭敬有るの性、與自在有るの性、怖の、自在に隨つて轉すること有るの性、是れを佛に於いて恭敬有るの性と名く。

法に於いて、僧に於いて、學に於いてのもの、亦、爾なり。

(一)佛に於いて恭敬有りて住す

善言を具すとは、云何が善言の性なる。答ふ、前に善語を説くが如し。

(二)學に於いて恭敬有りて住す

善友に遇ふとは、云何が善友の性なる。答ふ、善友とは、謂はく、佛及び佛弟子、廣く説いて、乃至、癡を遠離し・癡を調伏するの行を行するなり。是れを善友の性と名く。若し是くの如きの善友に於ける諸の習近、等習近、親近、等親近、恭敬、承事、是れを善友に遇ふと名く。

【20】眼觸所生受身、巴 Cakkhū samphassa-jī vedanā.

【21】等起、卷三初參照。

【22】別受、明本、現受に作る。蓋し、次の想、その他を場合より類推するに、この方を寧ろ可とすべし。

【23】耳……意觸所生受、順に巴 Sotā samphassa-jī vedanā, Ghāna-samphassa-jī vedanā, jīhva-S-V., Kya-S-V., Mano-S-V.

【24】六想身、Śaḍ-samjñā-kāyaḥ (Oḥa sātthā kāyā) (Rhyas D.—Six groups of perception; Neumann—Sechs Wahrnehmungskreise.) 衆集經—今と同。大集法門經—六想。想 Samjñā (Satiā) とは種々の意あれど、今のは五蘊(色受想行識)の想と同じく、概言して知覺 perception (Wahrnehmung) の意で、準上に、所依によつて六種とし、今かゝげて六想身と名けたものであるが、巴と漢二經とは、所依の六根から進んで所緣の六境に至り、その六境に基いての想として、色聲香味觸法の六想と作り、今と命名が異つてゐる。蓋し、名は異なるも、所依に約すると、所緣に約すると異なるだけで、實質に於いては何ら相違はない。

【25】眼觸所生想身、巴 Cakkhū samphassa-jī sātthā とをのぞきなれど、今は色想 rūpa-sātthā とす。

【26】耳……意所生想身、巴 (梵) も上に準じて知るべし。

【27】六思身、Śaḍ-samjñā-kāyā (Rhyas D.—Six groups of notions; Neumann—Sechs Vermerkungs-kreise.) 衆集經—今と同。巴 Sātthā-kāyā とは、心をして造作(活動)せしめるの性と稱し、意志的に解すること多きも(例、俱舍四、百法問答抄一

耳—意觸  
所生思身

## 八、六愛身

くべし。

六愛身とは、云何が六と爲す。答ふ、一には眼觸所生愛身、

二には耳觸所生愛身、三には鼻觸所生愛身、四には舌觸所生愛身、五には身觸所生愛身、六には意觸所生愛身なり。

(一)眼觸所  
生愛身

云何が眼觸所生愛身なる。答ふ、眼及び諸の色を縁と爲して眼識を生じ、三和合の故に觸あり。觸を縁と爲すが故に受あり、受を縁と爲すが故に愛あり。「而して」此の中、眼を増上と爲し、色を所縁と爲し、眼所識の色に於いての諸の貪、等貪、執藏、防護、耽著、愛樂、是れを眼觸所生愛身と名く。

(二)耳—意觸  
所生愛身

耳・鼻・舌・身・意觸所生愛身も、所生に隨つて、當さに廣く説くべし。

## 九、六順退法

六順退法とは、云何が六と爲す。答ふ、一には佛に於いて恭敬せずして住す。二には法に於いて恭敬せずして住す。三には僧に於いて恭敬せずして住す。四には學に於いて恭敬せずして住す。五には惡言を具す。六には惡友に遇ふ——なり。

(一)佛に於  
いて恭敬  
せずして  
住す

佛に於いて恭敬せずして住すとは、云何が佛に於いて恭敬せざるの性なる。答ふ、佛・世尊に於いての諸の不恭敬の性、不<sup>一</sup>等恭敬の性、不<sup>二</sup>與自在の性、不<sup>三</sup>等與自在の性、是れを佛に於いて恭敬せざるの性と名く。

(二)法に於  
いて恭敬  
せずして  
住す

法に於いて、僧に於いて、學に於いてのも、亦、爾なり。

げはないであらう。

【一】耳等・耳識〔身〕 *Srotavijāna* (Sota-vijāna) 鼻識〔身〕 *Ghāṇavijāna* (Ghāṇavijāna) 舌識〔身〕 *Jihvavijāna* (Jihvavijāna) 身識〔身〕 *Kāyavijāna* (Kāya-vijāna) 意識〔身〕 *Manovijāna* (Mano-vijāna)

【二】六觸身・*Saṭ-sparśa-kāyāḥ* (Oha phassa kāya) (Rhyas D—Six groups of contact; Neumann—Sechs Berührungskreise.) 衆集經—今に同じ。大集法門經—六觸。觸といふは先、生起的には、六感官と六境と對立して認識、知覺の第一歩が開けて、而もそれに心象 *mental image* の寫象と、究竟の認識とを司る識の活動の加つて、その心象に基いての内外二界の接觸が初めて起る。その接觸が即ちそれであること、次いで、心理解剖的には、心所の「にして」外界と内界との接觸の端的に與る心の活動」即ちそれであるとされる。今は則ちそのやうな觸を、所依の六根に約して六種とし、その六の集團をあげて、六觸身と名けた所である。

【三】眼觸身・*Okaṇusparśa* (Okaḥ-sam-phassa)

の三。

【四】耳等の觸身は「觸に」*Srotavijāna* (Sota-sam-phassa), *Ghāṇavijāna* (Ghāṇa-sam-phassa), *Jihvavijāna* (Jihva-sam-phassa), *Kāyavijāna* (Kāya-sam-phassa), *Mano-sparśa* (Mano-sam-phassa)

【五】六愛身・*Ṣaṭ-vedanā kāyāḥ* (Oha vedanā kāyā) (Rhyas D—Six groups of feeling on occasion of sensory stimulus; Neumann—Sechs Gefühlskreise.) 衆集經—準す。大集法門經—六受。受 *Ve-danā* は則ち、感覺的感情 *sensational feeling* である。今は則ち、それに準上の六種を分けて、六愛身とせるものである。



二には耳觸所生想身、三には鼻觸所生想身、四には舌觸所生想身、五には身觸所生想身、六には意觸所生想身なり。

(一)眼觸所  
生想身

云何が眼觸所生想身なる。答ふ、眼及び諸の色を縁と爲して眼識を生じ、三和合の故に觸あり、觸を縁と爲すが故に想あり。『而して』此の中、眼を増上と爲し、色を所縁と爲し、眼觸が因と爲り、眼觸の等起する、眼觸の種類なる、眼觸の所生なる、眼觸の所起の作意に相應する、眼所識の色に於いての諸の想、等想、現前等想、已想、當想、是れを眼觸所生想身と名く。

(二)耳意觸  
所生想

耳・鼻・舌・身・意觸所生想身も、所應に隨つて、當さに廣く説くべし。

七、六思身

六思身とは、云何が六と爲す。答ふ、一には眼觸所生思身、二には耳觸所生思身、三には鼻觸所生思身、四には舌觸所生思身、五には身觸所生思身、六には意觸所生思身なり。

(一)眼觸所  
生思身

云何が眼觸所生思身なる。答ふ、眼及び諸の色を縁と爲して眼識を生じ、三和合の故に觸あり。觸を縁と爲すが故に思あり。『而して』此の中、眼を増上と爲し、色を所縁と爲し、眼觸が因と爲り、眼觸の等起する、眼觸の種類なる、眼觸の所生なる、眼觸の所起の作意に相應する、眼所識の色に於いての諸の思、等思、現前等思、已思、當思、作心意業、是れを眼觸所生思身と名く。

耳・鼻・舌・身・意觸所生思身も、所應に隨つて、當さに廣く説

淨色の所成に係るもので、即ち、能く知覺するを得といふ。故に、もし識見家の説を取らば、根は則ち、單に消極的に、ある機縁をなすだけで、積極的に知覺の能力なく、かくしてや、無力の能作因に増上縁の趣もあるべきも、而も、そのある機縁と、増上縁の所謂、不障礙の純消極的なとは決して同一ならず。況や、かく根は知覺の能力なしとし、識見を主張するは大眾部等の主張にして、有部の正義は世友一派の根見家、即ち、根は大に積極的知覺能力ありとするの主張なるに於いておや。で、これらの消息より思ふに、この増上とは未だ、六因四縁のそれらに順するものではなく、單なる勝縁 predominating or governing condition 位の意で、前の三法品中の三増上(又は増盛)の増上の字とも準同に解して然るべきにも非るか。それで、こゝに於いて想起するは則ちかの上座部七論中の鈔又那論に於る廿四縁中の第三の増上縁 *Adhipatiya* にして、それに關する同論自らの定義によれば、増上縁は欲相應の諸法及びその同起の諸色に對し、増上縁によりて緣たり、精進増上は……總じてある法を勝縁として、彼々の諸法が、此々の心々所法等を生ずれば、彼々の諸法は此々の諸法に對して増上縁によりて緣たり」といふが、蓋し今もし増上を強いて緣等にとことよせ、解しなればならぬならば、寧ろ、この上座部の増上縁等にも準じて解して然るべきものであらう。

【三】所縁 *Ārambha* (*Ārambha*) とは「緣せらるゝもの、即ち、知覺、認識するゝ對象 *object* (*Geggenstand*) の義にして、是れも、亦六因四縁中の四縁に所縁縁といふありて、心々所に對し、杖の如き任杖の意義ある一切所縁の法に名く」と稱し、又、上座部廿四縁中にも同じものありて準同の釋をされてゐるが、蓋し、これはどつちにしても、かゝる縁の一として解するに妨



四、六觸身

六觸身とは、云何が六と爲す。答ふ、一には眼觸身、二には耳觸身、三には鼻觸身、四には舌觸身、五には身觸身、六には意觸身なり。

(一)眼觸身

云何が眼觸身なる。答ふ、眼及び諸の色を縁と爲して、眼識を生じ、三和合の故に觸あり。〔而して〕此の中、眼を増上と爲し、色を所縁と爲しての、眼所識の色に於ける、諸の觸、等觸、等觸の性、已觸、當觸、是れを眼觸身と名く。

(二)鼻觸身

耳・鼻・舌・身・意觸身も、所應に隨つて、當さに廣く説くべし。六受身とは、云何が六と爲す。答ふ、一には眼觸所生受身、二には耳觸所生受身、三には鼻觸所生受身、四には舌觸所生受身、五には身觸所生受身、六には意觸所生受身なり。

五、六受身

(一)眼觸所生受身

云何が眼觸所生受身なる。答ふ、眼及び諸の色を縁と爲して眼識を生じ、三和合の故に觸あり。觸を縁と爲すが故に受あり。〔而も〕此の中、眼を増上と爲し、色を所縁と爲し、眼觸が因と爲り、眼觸の等起する、眼觸の種類なる、眼觸の所生なる、眼觸の所起の作意に相應する、眼所識の色に於いての諸の受、等受、別受、已受、當受、是れを眼觸所生受身と名く。

(二)耳觸所生受身

耳・鼻・舌・身・意觸所生受身も、所應に隨つて、當さに廣く説くべし。

六、六想身

六想身とは、云何が六と爲す。答ふ、一には眼觸所生想身、

六内處に準じ、心々所の對象として、それらを生長せしめ(處)而も、己身外にある六、即ち六の知覺及び認識の對象を稱するものである。

【九】聲等、聲外處 *śabdāyatana* (śābdāyatana) 香外處 *gandhāyatana* (〃) 味外處 *rasāyatana* (〃) 觸外處 *spṛśyāyatana* (Phoṭṭhabhāyatana) 法外處 *dharmaṭṭana* (Dhammāyatana) 〃の最後の法外處中には心々所法、心不相應法、三無爲法、無表色等を攝する。

【一〇】六識身 *ṣaṭ-vijñāna-kāyaḥ* (*Oṣṭa vijñāna-kāya*) (Rhyas D.—Six groups consciousness; Neumann-Seechs Bewusstseinskreise) 衆集經—今と同。大集法門經—六識(遍耶耶 Kāya) は衆の義にして、所依の六根により、六別しての識(「意」心。體は一なるも、用の別によりて名を異にす)の衆(*group*)をさふもの。

【一一】眼識身 *Cakṣurvijāna* (*Cakṣu-vijñāna*) (Rhyas D.—Visual consciousness; Neumann—Seh-bewusstsein) 衆集經—今と同。大集法門經—眼識。

【一二】増上 *Adhipati* (梵=ti) = predominating; or governor, ruler. 〃は一見彼の成立有宗に於る六因四緣中の増上緣 *Adhipatipramāṇa* の如くけれども、この増上緣とはいふまでもなく、完く消極的なもので、六因中の能作因(殊に無力のそれ)といはるゝものと同じく、單に、他の障礙にならぬだけのもの故、今の眼根が知覺に多大の貢獻ある意義とは同一視すべからざるべし。但し、この知覺論に於いては、根見家で、見家の二等の異説ありて、識見家は、根は唯だ肉團で、それ自らは知覺の能力なしとし、根見家は、根は則ち、

内處なり。

云何が眼内處なる。答ふ、若し眼の、色に於いて、或ひは已に見、或ひは今見、或ひは當に見ると、或ひは彼同分と、是れを眼内處と名く。

(二) 眼内處

二、六外處

耳・鼻・舌・身・意内處は、所應に隨つて、當さに廣く説くべし。六外處とは、云何が六と爲す。答ふ、一には色外處、二には聲外處、三には香外處、四には、味外處、五には觸外處、六には法外處なり。

(一) 色外處

云何が色外處なる。答ふ、若し色の、眼の爲めに、或ひは已に見られ、或ひは今見られ、或ひは當に見らるゝと、或ひは彼同分と、是れを色外處と名く。

(二) 觸外處

三、六識身

聲・香・味・觸・法外處も、所應に隨つて、當さに廣く説くべし。六識身とは、云何が六と爲す。答ふ、一には眼識身、二には耳識身、三には鼻識身、四には舌識身、五には身識身、六には意識身なり。

(一) 眼識身

云何が眼識身なる。答ふ、眼と及び諸の色とを緣と爲して眼識を生ず。「而して、」此の中、眼を増上と爲し、色を所緣と爲しての眼所識の色に於ける、諸の了別の性、極了別の性、了別の性、是れを眼識身と名く。

(二) 耳・鼻・舌・身・意識身

耳・鼻・舌・身・意識身も、所應に隨つて、當さに廣く説くべし。

内入處とも譯す。内は則ち、我身關係、又は我身上の意にして、處又は入處 *Āyatanas* とは、*seat, resting place, abode* 等の義を有し、俱舍一の如きは、處は則ち、生長の義と稱して、心々所が所依となり、對象(所緣)となつて、その心々所を生長せしむるの義になつて名くといふ。便ち、今は六感官又は六根を我身上にあつて、心々所の所依となり、それらを生長せしむるの義によつて、六内處とした所である。

【三】眼内處 *Cakkare āyatanas* (*Cakkhāyatana*)

【四】色 *Rūpa*。これは物質の場合の、廣義の色とは違つて、イロ *Varpa rūpa* (顯色といふ) と形 *Saṅkārādhāna rūpa* (形色といふ) との二をいひ、下の色外處のことをさす。

【五】彼同分、*Tatsablaṅga*、具其所倚とも譯し、同分 *Sablaṅga* に對し、根境、識、即ち、客觀、主觀が認識關係等に於いて、各、自己の役目をなすを同分とし、可能的にはその性質を有しながら、その役目をなさず、その性質を現實的に出さざるを彼同分と名く。即ち、今は初に同分の眼内處を解し、次に彼同分のをあげるものである。因みに、この同分、彼同分は、卷十二所註の衆同分の應用的の一分で、くわしくはその下を参照すべく、乃至、俱舍二の十八界の諸門分別下に於ける論釋等を参照すべし。

【六】耳・鼻等、耳内處 *Srotāyatana* (*Śrotāyatana*)

鼻内處 *Ghrāṇāyatana* (*Ghāṇāyatana*)、舌内處 *Jihvāyatana* (〃)、身内處 *Kāyāyatana* (〃)、意内處、*Manasāyatana* (*Manāyatana*)

【七】六外處、*Ṣaṭ Bāhya-āyatanāni* (*Ṭha bhāhā-ni āyatanāni*) (*Rhys D.—Six external fields* [*of objects of experience*]; *Neumann—Sechs äussere Bereiche*) 衆集經一外六入。大集法門經一外六處。」



# 卷の第十五

## 六法品第七

### (一) 諸の六法の 一

時に、舍利子の、復た、衆に告げて言はく。具壽よ、當さに知るべし。佛は六法に於いて、自ら善く通達し、現等覺し已りて、諸の弟子の爲めに宣説開示せり。我れ等は今、應さに和合結集して、佛滅度の後、乖謬有ること勿からしむべく、當さに梵行に隨順するの法律をして、久住して、無量の有情を利樂せしめ、世間の諸の天・人の衆を哀愍して、殊勝の義利、安樂を獲しむべし。六法とは云何。此の中に、二の唄陀南頌有り。初の唄陀南に曰はく、

初めの六法は十種あり。

謂はく、内と、外と、識と、觸と、

及び、受と、想と、思と、愛と、

退と、不退との各六あるなり。

と。

### ○ 第一の六法 一

#### 一、六内處

六内處、<sup>ニ</sup>六外處、<sup>三</sup>六識身、<sup>四</sup>六觸身、<sup>五</sup>六受身、<sup>六</sup>六想身、<sup>七</sup>六思身、<sup>八</sup>六愛身、<sup>九</sup>六順退法、<sup>一〇</sup>六順不退法有り。

六内處とは、云何が六と爲す。答ふ、一には内處、二には耳内處、三には鼻内處、四には舌内處、五には身内處、六には意

【一】 六法品第七等、原漢譯には、六法品第七の一と作り、次の(一)諸の六法の一は無し。

【二】 六内處 Sang.—S. VI. 1. 衆集經六・一。大集法門經六・一。A. X. 60. 5 (V. 109); S. 56. 14 (V. 426.)

【三】 六外處 Sang.—S. VI. 2. 衆集經六・二。大集法門經六・二。M. 10 (I. 61) = 中阿含九〇、念處經。

【四】 六識身 Sang.—S. VI. 3. 衆集經六・三。大集法門經六・三。M. 148. Chachaka sutta (III. 281) = 中阿含八六、說處經。

【五】 六觸身 Sang.—S. VI. 4. 衆集經六・四。大集法門經六・四。S. XII. 2. 10 (II. 3); XVIII. 4 (II. 246) &c.

【六】 六受身 Sang.—S. VI. 5. 衆集經六・五。大集法門經六・五。M. 9 (I. 51) (= 增一、四九・五)。S. XVIII. 5 (II. 247) &c.

【七】 六想身 Sang.—S. VI. 6. 衆集經六・六。大集法門經六・六。S. XVIII. 6 (II. 247) &c.

【八】 六思身 Sang.—S. VI. 7. 衆集經六・七。大集法門經六・七。S. XVIII. 7 (II. 247)

【九】 六愛身 Sang.—S. VI. 8. 衆集經六・八。大集法門經六・八。S. XII. 2 (II. 3); XVIII. 18 (II. 251.) M. 148 (III. 282) = 中阿含八六、說處經。

【一〇】 六順退法 Sang.—S. VI. 9. 衆集經六・九。大集法門經六・九。cf. A. VI. 40. 5 (III. 340); A. VII. 56. 1 (IV. 84.)

【一一】 六順不退法 Sang.—S. VI. 10. 漢二經缺。A. VI. 40 (III. 340); A. VII. 56. 2 (IV. 84.)

【一二】 六内處 ? Saṅgādhyātmika-āyatanaṇi (Oha ajñattikāni āyatanaṇi) (Rhyas D.—Six fields of personal experience; Neumann—Sechs innere Bereiche.) 衆集經一六入。大集法門經一六處。又數々六



「若し有身を念ずるも」

「若し有身を念ずるも」とは、有身も、亦、有身と名け、五取蘊も、亦、有身と名く。今、此の義の中の意は、五取蘊を説いて「有身」と名く。

「便ち有身に於いて………」

「便ち有身に於いて、心、趣入せず等」とは、前に欲を説くが如し。

「若し有身減を念ぜば」

「若し有身減を念ぜば」とは、有身の減も、亦、減と名け、擇減も、亦、減と名く。今、此の義の中の意は、擇減を説いて減と名け、餘に非ず。

【三六】有身減は、前には有身減涅槃と記す。  
【三七】擇減とは、即ち、涅槃で、その事については已に註せる所に鑑みよ。

第二、悲に於いての出離「悲」

「悲と無悲とに於いての」とは、問ふ、「悲」とは云何。答ふ、悲も、亦、悲と名け、悲界も、亦、悲と名く。今、此の義の中の意は、悲界を説いて「悲」と名く。

無 悲「無」

問ふ、「無悲」とは云何。答ふ、無悲も、亦、無悲と名け、無悲界も、亦、無悲と名け、慈心定も、亦、無悲と名く。今、此の義の中の意は、慈心定を説いて「無悲」と名く。

第三、害に於いての出離「害」

「害と無害とに於いての」とは、問ふ、「害」とは云何。答ふ、害も亦、害と名け、害界も、亦、害と名く。今、此の義の中の意は、害界を説いて「害」と名く。

無 害「無」

問ふ、「無害」とは云何。答ふ、無害も、亦、無害と名け、無害界も、亦、無害と名け、悲心定も、亦、無害と名く。今、此の義の中の意は、悲心定を説いて「無害」と名く。

第四、色に於いての出離「色」

「色と無色とに於いての」とは、問ふ、「色」とは云何。答ふ、色も、亦、色と名け、色界も、亦、色と名け、四靜慮も、亦、色と名く。今、此の義の中の意は、四靜慮を説いて「色」と名く。

無 色「無」

問ふ、「無色」とは如何。答ふ、無色も、亦、無色と名け、無色界も、亦、無色と名け、四無色も、亦、無色と名く。今、此の義の中の意は、四無色を説いて「無色」と名く。

第五、有身に於いての出離「諸有の……具す」

「諸有の多聞の聖弟子衆は猛利の見を具し」とは、前に説くが如し。

【三】慈心定、一切衆生に對し、慈心を懷き、その念に住するの定。

【四】悲心定、同準に、悲心をいだき、その念に住するの定。

【五】四靜慮を色と名くるは、四靜慮を三界的に見れば、則ち、色界に配當すべき故である。

名く。

「善く修習し」

「善く修習し」とは、謂はく、聖弟子は爾の時に當りて、因の故に、門の故に、理の故に、行の故に、修習を殷重し、修習に堅住し、修習を恭敬し、修習を作意するが故に、「善く修習し」と名く。

「諸の欲を縁として……離繫解脱し」

「諸の欲を縁として起る所の諸の漏、損害、熱惱に於いて、皆な解脱を得、彼れより起り已りて離繫解脱し」とは、謂はく、聖弟子は此の因縁に由りて、諸の欲の中に於いて、心、解脱を得、彼れより起り已りて離繫解脱す。斯れに由るが故に、「諸の欲を縁として起る所の諸の漏、損害、熱惱に於いて、皆な解脱を得、彼れより起り已りて離繫解脱す」と説く。

「彼れを因とし……諸の受を受せず」

「彼れを因とし、彼れを縁とする諸の受を受せず」とは、謂はく、諸の欲に於いて、若し未斷未遍知ならば、便ち苦受を受し、若し已斷已遍知ならば、苦受を受せず。斯れに由るが故に、「彼れを因とし、彼れを縁とする諸の受を受せず」と説く。

「是の如きを名けて出離と爲す」  
「出離」

「是の如きを名けて、欲に於ける出離と爲す」とは、問ふ、今、此の中に於いては、何をか「出離」と謂ふや。答ふ、諸の欲を永斷するも、亦、出離と名け、諸の欲を超過するも、亦、出離と名け、塵俗を捨離するも、亦、出離と名け、色界の善根も、亦、出離と名け、初靜慮も、亦、出離と名く。今、此の義の中の意は、初靜慮を説いて「出離」と名く。



「便ち出離に於いて……勝解有り」

「便ち出離に於いて、深く、心、趣入し、信樂し、安住し、勝解有り」とは、謂はく、聖弟子は此の出離に於いて、勝解に俱行する作意を以つて、審かに思惟する時、便ち隨順心、隨順信、隨順欲、隨順心勝解、已勝解、當勝解を生ず。此れに由るが故に、「便ち出離に於いて、深く、心、趣入し、信樂し、安住し、勝解有り」と名く。

「卷縮せず恒に舒泰して」

「卷縮せず、恒に舒泰して」とは、謂はく、聖弟子は此の出離に於いて、稱讚に俱行する作意を以つて、審かに思惟する時、心、樂安にして住し、順趣し、臨入するが故に「卷縮せず、恒に舒泰して」と名く。

「心、厭毀せず、任運に現行し」

「心、厭毀せず、任運に現行し」とは、謂はく、聖弟子は此の出離に於いて、稱讚に俱行する作意を以つて、審かに思惟する時、欲に於いて、心、樂住せず、厭惡し、毀訾し、制伏し、違逆する如くには非ず。此れに由るが故に「心、厭毀せず、任運に現行し」と言ふ。

「其の心安樂」

「其の心安樂にして」とは、謂はく、聖弟子は爾の時に當りて、其の心安樂にして、勞無く、損無く、無倦法を成ず。此れに由るが故に、「其の心安樂にして」と言ふ。

「易く修習し」

「易く修習し」とは、謂はく、聖弟子は爾の時に當りて、數々修習し、數々作意し、修習に相應するが故に「易く修習し」と

身の過去譚とし、成實論には現在の事に因んで、過去世の事を説くものと記す。

【二六】方廣、Vaipulya (Vedalla) 毘佛略、鶻佛略等と記し、覺音は小ペーダル、大ペーダル經等、一切、歡喜及び滿足を得已つて、問ひたるに基く經の意とし、或説は廣大の眞理の經となし、成實は如來廣説の經といふ。

【二七】希法、Abhutaḍḍhama (Abhutaḍḍhamma)

阿浮陀達磨、阿浮達磨と記し、未曾有とも譯す。覺音は「阿難にはこの四の、諸比丘よ、希有の未曾有の存す」といふを初めとしての一切希有、未曾有法相應の經に名くとし、或説は佛の神變不可思議を演ぜるを記したる經といひ、成實論には、劫盡、大變異事、諸天の身量、大地震動等の記の經と書す。

【二八】論義、Udāḍḍa (梵) 優波提舍と記し、法の理を論議問答するの經と或説し、成實等は摩訶迦旃延等諸大の智者の、廣く佛語を解せる所で、有人信ぜず、以て、非佛説となす等といふ。

【二九】五妙欲とは、色聲香味觸の五の妙に欲に順ずるの境。

【三〇】出離界とは、三法品中に記せる、出離を界と見ての記。

【三一】色界の善根等は、欲界を出離せるが故に、出離と名く。

【三二】初靜慮は、「欲、惡、不善法より離れ」等といふを、その内包とするが故に、出離と名くものである。

「便ち、諸の欲に於いて……勝解無く」

「便ち諸の欲に於いて、心、趣入せず、信樂せず、安住せず、勝解無く」とは、謂はく、聖弟子は妙欲の境に於いて、稱讃に俱行する作意を以つて、審かに思惟する時、隨順心、隨順信、隨順欲、隨順心勝解、已勝解、當勝解を起さず。此れに由るが故に、「便ち諸の欲に於いて、心、趣入せず、信樂せず、安住せず、勝解無く」と名く。

「卷縮して伸びず」

「卷縮して伸びず」とは、謂はく、聖弟子は諸の妙欲に於いて、稱讃に俱行する作意を以つて、審かに思惟する時、心、樂住せず、隨順せず、趣向せず、臨入せず。故に、「卷縮して伸びず」と名く。

「棄捨して住し……違逆し」

「棄捨して住し、厭惡し、毀訾し、制伏し、違逆し」とは、謂はく、聖弟子は諸の妙欲に於いて、稱讃に俱行する作意を以つて、審かに思惟する時、諸の妙欲に於いて、棄捨して住し、厭惡し、毀訾し、制伏し、違逆するが故に、「棄捨して住し、厭惡し、毀訾し、制伏し、違逆し」と名く。

「若し出離を念ぜば」  
「出離」

「若し、出離を念ぜば」とは、云何出離なる。答ふ、出離も亦た出離と名け、出離界も亦た出離と名け、色界の善根も亦た出離と名け、初靜慮も亦た出離と名く。「而して」今、此の義の中の意は、初靜慮を説いて「出離」と名く。「便ち」此れに由るが故に、「若しは出離を念ぜば」と名く。

又、數々、經の長行散り文部をいふと註す。成實論には（卷一）、直説の法言なりといつてある。

【二】應誦、Geyn (Geyn) 祇夜等と記す。覺音は一切有偈經をいふと。成實論には佛說弟子説の、偈を以つて、修多羅を頌せるものと。又は重頌ともいひて、重説偈言の偈をいふともいふ。

【一九】記別、Vatkarina (Vatkarina)。和伽羅那など記し、又授記とも譯す。覺音は諸の阿毘曇と無偈經と、他の八支以外の諸の佛語とをいふとし、或説は佛の、他に成佛の決定的豫言を與ふる經をいふといひ、成實論は諸の解義的經を名くと。

【二〇】諷頌、Gatha。又伽施と記す。覺音は法句、長老及び尼等の諸偈經と、スッタニパータ中の準同のものをいふといひ、或説は全偈經をいふとし、成實論には祇夜と準じ、その中の不順煩惱の偈の經をいふとす。

【二一】自説、Udāna。喟然南、優陀那等の記あり。無問自答といひて、佛の感興語の偈とされ、覺音は歡喜慧的の偈に相應せる八二の經 Suttanta のことと。

【二二】因緣、Kiddāna。尼陀那と記し、成實等概ね、諸經中の序文に於る因緣分をいふとし、九分教の中では缺如するものである。

【二三】譬喻、Avadāna。阿波陀那。又九分教中の所缺で、經中の引喻の部といひ、成實には智者の説は本末自ら次第があつて、之れを名くといふも、果して如何？。

【二四】本事、Itivuttaka (Itivuttaka) 伊帝目帝伽、伊帝目多等と記し、覺音は「世尊實にこれを説けり」等といふに初る、「一二の經に名く」とし、或説には佛弟子の過去世の因緣をとくものと稱し、成實にも準じて、經の因緣と次第との過去世にあるものをいふと。

【二五】本生、Jātaka。閼陀伽等と記す。覺音はアバンナカ本生に初る五五〇の本生經の意と釋し、或説は佛自



第一出離の

論釋  
「諸有の」

此の中の「諸有の」とは、謂はく、如是の名、如是の性、如是の類、如是の食、如是の苦樂を受し、如是の長壽、如是の壽の邊際の故に、「諸有の」と名く。

「多聞の」

「多聞の」とは、謂はく、多くの正法を聞くなり。多くの正法とは、謂はく、契經、應誦、記別、諷頌、自說、因緣、譬喻、本事、本生、方廣、希法、論義なり。此の諸の法を聞くが故に、「多聞の」と名く。

「聖弟子」

「聖弟子」とは、聖とは、謂はく、諸の佛なり。佛の弟子を聖弟子と名く。諸の能く佛・法・僧に歸依する者は、一切皆な聖弟子の名を得るが故に、「聖弟子」と名く。

「猛利」

「猛利の見を具し」とは、云何が「猛利の」なる。答ふ、上品圓滿の故に、「猛利」と名く。

「見」

云何が「見」と爲す。答ふ、若し、出離、遠離が所生の善法に依り、法に於いて、簡擇し、極簡擇し、廣く説いて、乃至、毘鉢舍那あるが故に、名けて「見」と爲す。

「諸の欲」

「若し諸の欲を念するも」とは、云何が「諸の欲」とは名くる。答ふ、欲を亦た、諸の欲と名け、欲界を亦た諸の欲と名け、五妙欲の境を亦た諸の欲と名く。今、此の義の中の意は、五妙欲の境を説いて「諸の欲」と名く。此れに由るが故に、「若し諸の欲を念するも」と名く。

「若し諸の欲を念するも」

ては、盡に於いての出離の意ら、巴は、*Vyāpādana nissaraṇam*.

【二三】害と等、同様に、*Vihesāya nissaraṇam*.

【二四】色と等、同じく、*Rūpānaṃ nissaraṇam*.

【二五】有身、巴、*Sakkaya* (Individuality; Person-*lobhant*)。Sakkayaは梵はSakaya(薩迦耶)で、即ち、薩迦耶)は有、迦耶は身を意味し、數次所註の如く、我身、個身、乃至、我を執し、その我の所屬有りとするの考(我、我所見)。

【二六】有身滅涅槃、巴は、*Sakkayanirodha* 即ち、唯だ有身滅のみ記す。蓋し、一切の迷執は有身見を基とし、その意味で、解脫涅槃の根本義は有身見の斷滅に在る。故に、論は、進んで、その意義を明にすべく、今、更に涅槃の二字を追加したもの。

【二七】有身出離、巴、*Sakkaya-nissaraṇam*.

【二八】契經以下は所謂十二分教で、巴利は多く九分教に作り、漢傳は二者を共に傳ふ。恐らくは九分教より十二分教と開展したものとすべし。而して、これが本質に關しては諸家異説あり、或ひは、現在の四阿含五尼柯耶の原型といひ、或ひは五阿含中の第一、雜藏阿含を指すと稱し(四分律の如きはそれである)、乃至、佛陀の正法の教説形式とはいへぬまでも、それを分類したものである等種々にいふけれども、今はその中の第二説をとるものとすべし。されど、敢ていふべくば、右の第二説即ち、四分律等の唱説は資料の古い點等よりしても、當らずといへども最も遠からざるに非ざるか。とまれ今はかく定説もない故に、以下、單に列示的にして註釋しておくにとめる。即ち、契經(Sutta)は、修妬路、修多羅等と記し、覺音は律の經分別部(止惡門)ニッデーサ、鷹陀迦(律度)、パリパーラ(附錄)、及び、スッタニパータの一部等といひ、



泰して、心、厭毀せず、任運に現行し、其の心安樂にして、易く善く修習し、諸の欲を縁として起る所の諸の漏、損害、熱惱に於いて、皆な解脫を得。彼れより起り已りて離繫解脫し、彼れを因とし、彼れを縁とする諸の受を受せず。是くの如きを名けて、欲に於いての出離と爲す。

【一〇】 悲と無悲とに於いてのと、害と無害とに於いてのと、色と無色とに於いてのとも、應さに知るべし、亦た爾なり。

第二、悲、無害、第三、害、無害、第四、色、無色に於る、出離、第五、有身、出離

具壽よ、當さに知るべし、諸有の多聞の聖弟子衆は猛利の見を具し、若し有身を念するも、便ち有身に於いて、心、趣入せず、信樂せず、安住せず、勝解無く、卷縮して伸びず、棄捨して住し、厭惡し、毀皆し、制伏し、違逆し、筋羽を燒かば、卷縮して伸びざるが如く、是くの如く、多聞の聖弟子衆は猛利の見を具し、若し有身を念するも、便ち有身に於いて、心、趣入せず、乃至、廣く説き、「之れに反して」若し有身滅涅槃を念せば、便ち有身滅涅槃に於いて、深く心、趣入し、信樂し、安住し、勝解有り、卷縮せず、恒に舒泰して、心、厭毀せず、任運に現行し、其の心安樂にして、易く善く修習し、有身を縁として起る所の諸の漏、損害、熱惱に於いて、皆な解脫を得、彼れより起り已りて離繫解脫し、彼れを因とし、彼れを縁とする諸の受を受せず。是くの如きを名けて有身出離と爲す。

inoline to) (p.220) と記す。

【一〇三】 卷縮して等、巴 No vimuocati なるべく、この字は普通に、解脫する、せぬの善意に用ひられ、リステビツ、ステッドの巴英字典の如きは、唯、その方の意のみあげたれど、今は勝手に活動させる、させぬの意と解すべく、即ち、does not give rains to の意とすべし。

【一〇四】 出離を等、巴 Nekkhamma, kha paṇi assaṃsaṃsakaroto (Rhs D.—But when he is contemplating renunciation of them.) 即ち「諸の欲境より、出離することを思念する際には」と

【一〇五】 恒に舒泰して等、果して何れが何れと相應するか、必ずしも、定め難きも、巴は次の如く記す—Sugataṃ (well directed), Subhāvitaṃ (well developed) —これは「善く修習し易く」に當らむ、Suvuṭṭhitaṃ (well risen—任運に現行しに當るか)、Suvuṭṭhitaṃ (well given reins to—第一の、舒泰しに當るか) Vāṇavyūṭṭhaṃ kāmehi (諸の欲より離繫し) —と。

【一〇六】 諸の漏等、巴 āyasa, vigāṭa, pavijāṭa (Rhs D.—Intoxicants, miseries and fevers.) 尙、損害とは、巴 Vigāṭa. 又、熱惱とは同 Pavijāṭa (共に p.)

【一〇七】 彼れより立ち已つて等の一句、巴には缺くも、蓋し、それら諸の漏等より、脱し已つてその束縛、控束を解脫しの意なるべし。

【一〇八】 彼れを因として等、巴 No so taṃ vedanā vedeti 彼れはその(とは、それらに基く)の意なるべく、かくて、今の彼れを因とし等の句もあるならむ(受を受せず)。

【一〇九】 欲に於いての—巴 Kāmaṇa, nissaraṇa. 【一一〇】 悲と無害と等は、上の欲の場合に於いて欲と出離とを對照して説けるに準ずるの言にして、出離とし

第二説

天と名く。  
復た次に、色究竟天は、苦に於いて苦を見、集に於いて集を見、滅に於いて滅を見、道に於いて道を見るを以つての故に、色究竟天と名く。

第三説

復た次に、色究竟天が所得の自體は、色趣に生「ざるもの」中」に於いて、最勝第一なるを以つての故に、色究竟天と名く。

第四説—  
礙究竟天

復た次に、此の天は、亦た礙究竟天と名く。礙とは、謂はく礙身なり。此れは是れ礙身の最究竟處の故に、礙究竟天と名く。

第五説

復た次に、此れは是れ彼れの名、異語、増語、諸の想、等想、施設、言説の、色究竟天と謂ひ、或ひは礙究竟天と謂ふが故に、色究竟天と名け、或ひは礙究竟天と名く。

一〇二五出離

第一欲に  
於いての出離

五出離界とは、云何が五と爲す。具壽よ、當さに知るべし、諸有の多聞の聖弟子衆は猛利の<sup>九七</sup>見を具し、若し諸の欲を念ずるも、便ち諸の欲に於いて、心、趣入せず、信樂せず、安住せず、勝解無く、卷縮して<sup>一〇四</sup>伸びず、棄捨して住し、厭惡し、毀訾し、制伏し、違逆し、筋羽を焼かば、卷縮して<sup>一〇三</sup>伸びざるが如く、是くの如く、多聞の聖弟子衆は猛利の<sup>九八</sup>見を具し、若し諸の欲を念ずるも、便ち諸の欲に於いて、心、趣入せず、乃至、廣く説き、「之れに反して」若し出離を念ぜば、便ち出離に於いて、深く心、趣入し、信樂し、安住し、勝解有り、卷縮せず、恒に舒

【九五】 苦に於いて等、Akaniṭṭha=not younger の最上級故、ノイマンは最長老の地と譯したるものなるが、その意味より、最大、最究竟、最徹底の意ともなるべきが故に、この天は四諦現觀の點にて、究竟、徹底せること、色界第一等なりとして、暫く解せんとしたるか。

【九六】 礙究竟天、Dava Agghaṇṇisiddhā とは、礙は有對性の色のことで、その礙色としての身の究竟する所の故に、礙究竟天と名くと(俱舍十一參照)。

【九七】 五出離界、Sang—s. Pañca nissaranīya dhātuyo (Rhyas D.—5 elements tending to deliverance; Neumann—Fünfthe Art der Entrinnung) 衆集經—五出要界。大集法門經—今と同。比丘の立派なのは欲、悲、害、色、有身の五の諸事實に關して、よく修養のつんである點を舉明せるもの。」

【九八】 諸有の等、巴は唯比丘といひ、猛利の見等の句を缺く。

【九九】 諸の欲を念ずるを、巴 Kāme manusikaroto (Rhyas D.—When [a brother] is contemplating sensual desires; Neumann—Während da ein Mönch die Winische bedenkt) ぐまり、感覺的對象のことを心に考へるもの意。

【一〇〇】 心趣入せず、巴 Cittaṃ na iṭṭhāpandati=The heart does not find pleasures in=即ち、心喜はず。

【一〇一】 信樂せず、巴 Nappasidati=does not find satisfaction. 満足せず。

【一〇二】 安住せず、巴 Na santhitthi=as not stuck to; is not fixed in.

【一〇三】 勝解無く、巴の今のテキストは缺。然るにリスデビツ氏の英譯註には Na adhimucati(=does not

善現天と名く。

#### 第四說

復た次に、此れは是れ、彼れの名、異語、増語、諸の想、等想、施設、言説の、善現天と謂ふが故に、善現天と名く。

#### (四)善見天 第一說

云何が善見<sup>九三</sup>天なる。答へて謂はく、此れと彼れとの諸の善見天の、同一類にして、伴侶と爲り、衆同分を共にし、依得、事得、處得の皆な同じきと、又彼の善見天の中に生在するものの、所有の無覆無記の色・受・想・行・識蘊と、是れを善見天と名く。

#### 第二說

復た次に、善見天は、苦に於いて苦を見、集に於いて集を見、滅に於いて滅を見、道に於いて道を見るを以つての故に、善見天と名く。

#### 第三說

復た次に、善見天は、形色の轉た微妙にして、衆の樂んで觀る所、轉た清淨端嚴にして、無煩、無熱、善現〔等〕の天衆に超過するを以つての故に、善見天と名く。

#### 第四說

復た次に、此れは是れ、彼れの名、異語、増語、諸の想、等想、施設、言説の、善見天と謂ふが故に、善見天と名く。

#### (五)色究竟 天 第一說

云何が色究竟<sup>九四</sup>天なる。答へて謂はく、此れと彼れとの諸の色究竟天の、同一類にして、伴侶と爲り、衆同分を共にし、依得、事得、處得の皆な同じきと、又、彼の色究竟天の中に生在するものゝ、所有の無覆無記の色・受・想・行・識蘊と、是れを色究竟

【九三】 善見天・Sudhuraṇḍi devāḥ (Sudassī (deva))  
(Rhys D.—The heaven of sudassī; Neumann—  
Reich der Herrlichen.) 大集法門經—三・善見。

【九四】 色究竟天・Akaniṣṭhā devāḥ (akaniṣṭhā (deva))  
(Rhys D.—The heaven of Akaniṣṭhā; Neumann—  
Reich der Altvordersten.) 大集法門經—今と同。  
前註を見よ。(註〔八〇〕)



得、處得の皆な同じきと、又は若し無熱天の中に生在するものの、所有の無覆無記の色・受・想・行・識蘊と、是れを無熱天と名く。

## 第二説

復た次に、無熱天は、苦に於いて苦を見、集に於いて集を見、滅に於いて滅を見、道に於いて道を見るを以つての故に、無熱天と名く。

## 第三説

復た次に、無熱天は、身に熱惱無く、心に熱惱無く、彼れの身心に熱惱無きに由るが故に、寂靜、遍淨、無漏、微妙の諸受を領受するを以つての故に、無熱天と名く、

## 第四説

復た次に、此れは是れ彼れの名、異語、増語、諸の想、等想、施設、言説の、無熱天と謂ふが故に、無熱天と名く。

## (三) 善現天 第一説

云何が善現天なる。答へて謂はく、此れと彼れとの諸の善現天の、同一類にして、伴侶と爲り、衆同分を共にし、依得、事得、處得の皆な同じきと、又・彼の善現天の中に生在するものの所有の無覆無記の色・受・想・行・識蘊と、是れを善現天と名く。

## 第二説

復た次に、善現天は、苦に於いて苦を見、集に於いて集を見、滅に於いて滅を見、道に於いて道を見るを以つての故に、善現天と名く。

## 第三説

復た次に、善現天は、形色の微妙にして、衆の樂よろこんで觀る所、清淨端嚴にして、無煩・無熱の天衆に超過するを以つての故に、

【九】 善現天・Suddhā devāḥ (Suddhā devā) (Rhys D. — The heaven of suddhā; Neumann — Reich der Hehren.) 大集法門經—四・善現「諸の智現前して、果德現れ易きが故に名く。この意味に於いて、又は勝法の現はるゝ天の故に名くと。

【九二】 苦に於いて等、四諦簡擇、如實知見の智の、善く現はるゝが故に、名くといふ意。

一には色界に行き、二には無色界に行くなり。色界に行く者は、色究竟天を以つて、最極處と爲し、無色界に行く者は、非想非想處天を以つて最極處と爲す。

三(三)五淨居

五淨居天とは、云何が五と爲す。答ふ、一には無煩天、二には無熱天、三には善現天、四には善見天、五には色究竟天なり。

(一)無煩天 第一説

云何が無煩天なる。答へて謂はく、此れと彼れとの諸の無煩天の、是れ一類にして、伴侶と爲り、衆同分を共にし、依得、事得、處得の皆な同じきと、又は、若し無煩天の中に生在するもの、所有の無覆無記の色・受・想・行・識蘊と、是れを無煩天と名く。

第二説

復た次に、無煩天は、苦に於いて苦を見、集に於いて集を見、滅に於いて滅を見、道に於いて道を見るを以つての故に、無煩天と名く。

第三説

復た次に、無煩天は、身に煩擾無く、心に煩擾無く、彼れの身心に煩擾無きに由るが故に、寂靜、遍淨、無漏、微妙の諸受を領受するを以つての故に、無煩天と名く。

第四説

復た次に、此れは是れ、彼れの名、異語、増語、諸の想、等想、施設、言説の、無煩天と謂ふが故に、無煩天と名く。

(二)無熱天 第一説

云何が無熱天なる。答へて謂はく、此れと彼れとの諸の無熱天の、同一類にして、伴侶と爲り、衆同分を共にし、依得、事

【三】色究竟天、俱舍二四に従へば、極點に於いてかく別ある如く、因行に於いても別ありて、この方は雜修因のものとする。

【四】非想非非想處、同上、不雜修因とする。

【五】五淨居天、Sang—S. Paden suddhāvāsa. (Rhyas D.—5 pure abodes; Neumann—Fünf reine Stätten) 大集法門經「五淨居」五種の聖者が所住の地で、色界第四禪に攝し、唯だ、聖の所住にして、凡夫異生の雜住することなきによつて名く。而も、是れらは又、何れも阿那含に還の聖の住する所の故に、別に、五那含天とも稱さる。

【六】無煩天、Avīṭha devāḥ (Avīṭha (devā)) (Rhyas D.—The Heaven called Avīṭha; Neumann—Das Reich der Berausmen.) 大集法門經「今と同。眞諦は無大求天に作る」。一切煩惱の煩雜なき天の意。右上の註をも参照せよ。

【七】是れ一類等、卷十一、五趣の下の論文及び註を見よ。

【八】苦に於いて等、如實に四諦を知見して、從つて苦なきが故に、無煩なりとの意。

【九】名等、同上、卷十一、五趣の下の註参照。

【一〇】無熱天、Atapā devāḥ (Atapā devā) (Rhyas D.—The Heaven called Atapā; Neumann—Reich der Befriedenen) 大集法門經「今と同」。同準に熱惱を離れたる天の意。前註参照。(註七四))

名義(一)

長して、異熟業を起し、及び異熟業を生じ、身壞命終して、彼の色界天の中有を起し已りて、往いて色界の善現天の中に生じ、生じ已りて、後時に、上勝品の雜修の世俗の第四靜慮に入り、命終に臨む時、造作増長して、異熟業を起し、及び異熟業を生じ、身壞命終して、彼の色界天の中有を起し已りて、往いて色界の善見天の中に生じ、生じ已りて、後時に、上々品の最極圓滿の雜修の世俗の第四靜慮に入り、命終に臨む時、造作増長して、異熟業を起し、及び異熟業を生じ、身壞命終して、彼の色界天の中有を起し已りて、往いて色界の色究竟天に生じ、生じ終りて、後時に、方さに如是の無漏の道力を得、進んで、餘の結を斷じ、無餘依般涅槃界に入る。是れを上流補特伽羅と名く。

問ふ、何の故に上流補特伽羅と名くるや。答ふ、二種の流有り。謂はく、生死業と及び彼の煩惱となり。彼れは此の二に於いて、俱に未斷未遍知なり。彼れは此の因及び此の緣に由るが故に、上行し、隨行し、上流し、隨流するが故に、上流補特伽羅と名く。

同上(二)

復た次に、有るが是の言を作して説かく、此の不還補特伽羅は、漸次に勝進して、後々の定に於いて、能く隨領し、能く受し、隨受して、永く退轉無きに由るが故に、上流と名く。

二種の上流

復た次に、上流に略して二種有り。何をか謂ひて二と爲すや。

【六】 善現天、同前八中の第六天。

【七】 上勝品とは、又準上に、更に三心をまし、十二心現前するの意で、即ち、上九心の上に、滅法智、滅類智忍、滅類智の三現前すること。

【七】 善見天、同前、八中の第七天。

【七】 上々品—又、上極品ともいひ、準上に、更に三心を増して、上十二心の上に、更に三心を加へ、合計十五心現前の意で、即ち、上の十三心の外に、道法智忍、道法智、並びに道類智忍現前するなり。

【八】 色究竟天、舊譯無下。所謂阿迦尼(或ひは膩)吒天 Akaniṣṭha devah (Jal) (Akaniṣṭha deva) と、色界の究竟、從つて有部の宗義としては色(物質)の至極の處とさるゝ所。故に、馬勝(阿說示—前出(p. 83<sup>th</sup>))比丘が、大梵天に色のつくる所を聞くや、知らず、衆前を恥じて自讃して終り、後に、同比丘を傍らに誘ひて、釋尊に聞けと教へ、初めて佛陀の、この天のことを指説したといふ説話が、俱舍(卷四)に出ており、又現長阿含二四・堅固經 D. II. Kevaddha-suttaṃ s. 81—にも見ゆる。

【八】 生死業とは、生死に赴かしめる業で、別解脱律儀の無表業ならざる、その外の諸の業。

【八】 彼の煩惱とは、同じく生死に赴かしめる業の因としての煩惱。



に臨む時、造作増長して、異熟業を起し、及び異熟業を生じ、身壞命終して、彼の色界天の中有を起し已りて、往いて色界の梵衆天の中に生じ、生じ已りて、後時に、世俗の第二靜慮に現入し、命終に臨む時、造作増長して、異熟業を起し、及び異熟業を生じ、身壞命終して、彼の色界天の中有を起し已りて、往いて色界の光音天の中に生じ、生じ已りて、後時に、世俗の第三靜慮に現入し、命終に臨む時、造作増長して、異熟業を起し、及び異熟業を生じ、身壞命終して、彼の色界天の中有を起し已りて、往いて色界の遍淨天の中に生じ、生じ已りて、後時に、世俗の第四靜慮に現入し、命終に臨む時、造作増長して、異熟業を起し、及び異熟業を生じ、身壞命終して、彼の色界天の中有を起し已りて、往いて色界の廣果天の中に生じ、生じ已りて、後時に、下品の雜修の世俗の第四靜慮に現入し、命終に臨む時、造作増長して、異熟業を起し、及び異熟業を生じ、身壞命終して、彼の色界天の中有を起し已りて、往ひて色界の無煩天の中に生じ、生じ已りて、後時に、中品の雜修の世俗の第四靜慮に現入し、命終に臨む時、造作増長して、異熟業を起し、及び異熟業を生じ、身壞命終して、彼の色界天の中有を起し已りて、往ひて、往いて色界の無熱天の中に生じ、生じ已りて、後時に、上品の雜修の世俗の第四靜慮に現入し、命終に臨む時、造作増長して、異熟業を起し、及び異熟業を生じ、身壞命終して、彼の色界天の中有を起し已りて、往ひて、往いて色界の無熱天の中に生じ、生じ已りて、後時に、上品の雜修の世俗の第四靜慮に現入し、命終に臨む時、造作増

て因みにいへば、無漏定とは、見道以上の聖者が、無漏智を得る所以の定で、未至定、中間定、四根本定、(上卷二四)の註参照。下三無色定等の九地によつて起すことを得と。

【六】三靜慮を退してとは、欲界で、四靜慮を雜修したのに、後に退緣に遇うて、上三靜慮は退失し、唯初靜慮のみ殘し、その定に對して大に貪著して、その緣もて、梵天に生じ、更にその天中にて、欲界にての修習力により、又第二靜慮まで雜修し等、……他は準じて知るべし。

【六七】梵衆天、卷五、參照。色界第一靜慮攝の初天。

【六八】光音天、極光淨天(遍光天)。同上、第二靜慮攝の第三天。

【六九】遍淨天、同準に、第三靜慮攝の第三天。

【七一】廣果天、同上、第四靜慮攝八天中の第三天。

【七二】下品とは、例の見道に於いて、四諦を現觀するに、四諦に於いて各四種の智を得、かくて四四二十六として、これを十六心と稱し、而して、その第十六心は修道とする中に於いて、俱舍二四に従へば、今の下品とは則ち初三心(苦法智忍、苦法智、苦類智忍)現前すべきの意と。十六心については、上卷二四二及俱舍二三等を見よ。

【七三】無煩天、同前の次上の天。(八中の第四)。

【七四】中品とは、右下品に準じ、六心現前の意。即ち右の三心の上に、苦類智、集法智忍、集法智の三現前するなり。

【七五】無熱天、同前八中の第五天。

【七六】上品は、準上に、更に三心を増して、九心現前の意。即ち、上六心の上に、更に、集類智忍、集類智、及び、滅法智忍の三現前するなり。

て、進んで、餘の結を斷じて般涅槃するに由るが故に、有行般涅槃補特伽羅と名く。

(四)無行般涅槃

云何が無行般涅槃補特伽羅なる。答ふ、諸有の補特伽羅の、即ち現法に於いて、五順下分結は已斷已遍知なるも、五順上分結は未斷未遍知にして、造作増長して、異熟業を起し、及び異熟業を生じ、身壞命終して、彼れは色界天の中有を起し已りて、往いて色界に生じ已りて、後時に無行道に依り、無勤行、無勤作意を以つて、加行道を修めて息まず、進んで、餘の結を斷じ、無餘依般涅槃界に入る。是れを無行般涅槃補特伽羅と名く。

名義

問ふ。何の故に、無行般涅槃補特伽羅と名くるや。答ふ、此の補特伽羅は、無行道に依り、無勤行、無勤作意を以つて、加行道を修めて息まず、進んで、餘の結を斷じて般涅槃するに由るが故に、無行般涅槃補特伽羅と名く。

復説けらく

復た次に、有るが説かく、此の補特伽羅は、無爲緣の定に依りて、進んで、餘の結を斷じ、無餘依般涅槃界に入るに由るが故に、無行般涅槃補特伽羅と名く。

(五)上流般涅槃

云何が上流補特伽羅なる。答ふ、諸有の補特伽羅の、即ち現法に於いて、五順下分結は、已斷已遍知なるも、五順上分結は未斷未遍知にして、乃至、雜修の世俗の第四靜慮に現入し、將さに命終せんとする時、三靜慮を退して、初靜慮に住し、命終

【40】無行般涅槃、Anabhisamkārāpavīriyāyī (No.3.) Asaṅkhamparinibhāyī (Rhs D.—One who so passes without much toil, with ease; Neumann—Ununterbrochentlich zur Erlösung gelangend.) 衆集經—三・今と同。大集法門經—四・無行入。

【41】無行道、巴、Asaṅkharāna ariyamagga sañjñeti (無行によつて、聖道を體得し)とあり、俱舍二四には、「色界に生じ已りて、久しきを經て、加行を懈怠し、多くの功用あらざして、便ち、般涅槃す。勤修と速進との道を缺くを以つての故に」と。前の有行般の場合に準じて解せよ。

【42】無爲緣の定、上の有爲緣の定に準じ、無爲(涅槃等三無爲中、殊に擇滅涅槃無爲)を緣じて定に入り、以つて無漏道を得て般涅槃すること。

【43】上流般涅槃、Urdhvasrotāḥ (Udhamasoto akamijjā-gam) (Rhs D.—One who striving 'Upstream' is reborn in the Akamijjā world; Neumann—Aufwärts entstömen zu dem Altvordersten.) 衆集經—上流阿迦尼吒。大集法門經—上流入。これに二ありて、色究竟天を極點とする雜修因のものと、外に非想非非想處に有頂天を極點となす不雜修因のものとの別を立つ。本文最後部の説明を見よ。

【44】雜修とは、今は「世俗の」と次にいふ如く、有漏の靜慮なるを、その間に、無漏の靜慮を雜じえ修すること。

【45】世俗のとは、有漏の意で、所詮有漏の第四定のこと。蓋し、總じて有漏定とは、有漏の心に相應する定といふ意にて、凡夫が下界を鹿なり苦なり、障なりと觀じ、逆に上界を靜なり、妙なり、離なりと觀じ、且つ、願ひて(以上を有漏の六行觀といふ)、下地の煩惱を斷じて現入止住する所の四禪四無色定をいふ。(かく



名義

問ふ。何の故に、生般涅槃補特伽羅と名くるや。答ふ、此の補特伽羅は、わづ箴かに生じて、未だ久しからずして、便ち如是の無漏の道力を得、進んで、餘の結を斷じて般涅槃するに由るが故に、生般涅槃補特伽羅と名く。

第二の名義釋

復た次に、五十六有るが説かく、是くの如きの補特伽羅は纔かに生じて、未だ久しからず、便ち如是の無漏の道力を得進んで、餘の結を斷じ、此れより後、乃至、壽を盡くして住して、方に無餘般涅槃界に入るが故に、生般涅槃補特伽羅と名くと。

(三)有行殺  
涅槃

云何<sup>五</sup>が有行般涅槃補特伽羅なる。答ふ諸有の補特伽羅の、即ち現法に於いて、五順下分結は已斷已遍知なるも、五順上分結は未斷未遍知にして、造作増長して、異熟業を起し、及び異熟業を生じ、身壞命終して、彼れは色界天の中有を起し已りて、往いて色界に生じ、生じ已りて後時に<sup>五八</sup>有行道に依り、有勤行、有勤作意を以つて、加行道を修めて、息まず、進んで、餘の結を斷じて般涅槃す。是れを有行般涅槃補特伽羅と名く。

名義

問ふ、何の故に、有行般涅槃補特伽羅と名くるや。答ふ、此の補特伽羅は有行道に依り、有勤行、有勤作意を以つて、加行道を修めて息まず、進んで、餘の結を斷じて、般涅槃するに由るが故に、有行般涅槃補特伽羅と名く。

第二釋——

復た次に、有るが説かく、此の補特伽羅は有爲縁の定に依り

【英】有るが等、前の第一釋では、生じ已つて、直ぐ入涅槃するが故に、生のすぐ後に涅槃すといふ意で、生般涅槃といふと釋し、今の説では、生を盡して住して、無餘涅槃界に入るが故に、その名ありと釋す。

【五】有行般涅槃 (Sāhjanasāraṇaparinivāy, No. 4.)  
Sasamkhāraṇarhībhāy) (Rhyas D.—One who so  
passes with toil and difficulty, Neumann—Unter-  
schiedlich zur Erlösung gelangen.) 衆集經—四・  
今と同。大集法門經—三・有行入。

【英】有行道に依り等、巴(人施設論等) Sasapāṇika  
rena na yamagata-magga-sajjineti とあり、俱舍等(二四)  
には、「色界に往ひて、生じ已りて、長時加行して息ま  
ず、多くの功用に由りて、方さらに涅槃す」云云と有りて、  
有行は即ち多くの功用を意味し、今の有勤行、有勤作  
意が即ちそれとすべし。

【五】有爲縁の定、有爲（二行）を縁じて定に入り、無漏道を得て、般涅槃すとの意。



(一) 中般涅槃

には生般涅槃補特伽羅、三には有行般涅槃補特伽羅、四には無行般涅槃補特伽羅、五には上流補特伽羅なり。

云何が中般涅槃補特伽羅なる。答ふ諸有の補特伽羅の、即ち現法に於いて、已に五順下分結を斷じ、未だ五順上分結を斷ぜず、造作増長して、異熟業を起し、及び異熟業を生じ、身壞命終して、彼れは色界天の中有を起し已りて、便ち、如是の無漏の道力を得、進んで、餘の結を斷じて般涅槃す。是れを中般涅槃補特伽羅と名く。

名義

問ふ、何の故に、中般涅槃補特伽羅と名くるや。答ふ、此の補特伽羅は、根は極めて猛利にして、結は極めて微薄なれば、已に欲界を超えて、未だ色界に至らず、其の中間に於いて、便ち如是の無漏の道力を得、進んで、餘の結を斷じて般涅槃するに由るが故に、中般涅槃補特伽羅と名く。

(二) 生般涅槃

云何が生般涅槃補特伽羅なる。答ふ、諸有の補特伽羅の、即ち現法に於いて、五順下分結は、已斷已遍知なるも、五順上分結は未斷未遍知にして、造作増長して、異熟業を起し、及び異熟業を生じ、身壞命終して、彼の色界天に生すべき中有を起し已りて、往いて色界に生じ、而も「生じ已りて未だ久しからず、便ち如是の無漏の道力を得、進んで、餘の結を斷じて般涅槃す。是れを生般涅槃補特伽羅と名く。

【四六】 中般涅槃 *Antarapariniṛvāyī* (*Anta-pariniṛbhāyī*) (*Rhys D.—One who passes away before middle age in that world in which he has been reborn; Neumann—Neb innen zur Erlösung Gehenden*—兩譯共に。) 衆集經—中般涅槃。大集法門經—中入。

【四九】 五順下分結、及び五順上分結は第十二卷參照。

【五〇】 異熟業 *Vipāka-kamma* (*Vipāka-kamma*) 異熟、即ち、業の果報を創造、招來すべきの業。

【五一】 色界天の中有、色界に受生すべき中有。(上座部には尙、この思想顯著でなく、初めて、同部七論中の鉢叉那 *Pāṭhaṇḍapāṇṇa* の如きに至つて、有支 *Blavāṅga* といふが紹介されたる次第なれば、人施設論の如きも、この色界天の中有といふ代りに、「五下分結を斷じ、化生 *Opapātika* となりて」と稱し「天に生れて」の意を示してゐる)。

【五二】 如是の、云云といふ意。人により、種々の無漏道を獲得すべき故にかくいふ。

【五三】 無漏の道力を得とは、巴は「聖道を獲得す」 *Ariyamaggaṃ saṃjānati* (so realize the holy path) と作る。蓋し、所謂聖道は論事に見る所では、半は八聖道で、半は不還果に對してから、不還向のことに關してゐる。

【五四】 結とは、尙斷じ已らざる五順上分結のこと。

【五五】 生般涅槃 *Upapadyapariniṛvāyī* (*Upapadyapariniṛbhāyī*) (*Rhys D.—One who is passed after middle age; Neumann—Mit Ansetzling nach oben zur Erlösung Gehenden*.) 衆集經—生般涅槃。大集法門經—生入。

(一) 信力

問ふ、信力とは云何。答ふ、如來所に於いて、淨信を修植し、根生じ、安住し、沙門、或ひは婆羅門、或ひは天・魔・梵、或ひは餘の世間の爲めに、如法に引奪せられざる、是れを信力と名く。

(二) 精進力

問ふ、精進力とは云何。答ふ、已生の不善法に於いて、永斷するが爲めの故に、欲を生じて策勵し、乃至、廣く説いて、四種の正斷、是れを精進力と名く。

(三) 念力

問ふ、念力とは云何。答ふ、内身に於いて、循身觀に住し、乃至、廣く説いて、四種の念住、是れを念力と名く。

(四) 定力

問ふ、定力とは云何。答ふ、欲・惡・不善法を離し、乃至、廣く説いて、四種の靜慮、是れを定力と名く。

(五) 慧力

問ふ、慧力とは云何。答ふ、如實に、此れは是れ苦の聖諦なり。此れは是れ苦の集の聖諦なり。此れは是れ苦滅の聖諦なり。此れは是れ苦滅に趣く道の聖諦なりと了知する、是れを慧力と名く。

力の名義

問ふ、何の故に、力と名くるや。答ふ、是くの如きの力を因とし、是くの如きの力に依し、是くの如きの力に住して、一切の結・縛、隨眠、隨煩惱、纏を、皆な斷截し、摧伏し、破壊す可きが故に、名けて力と爲す。

(三三) 五不還

五不還とは、云何が五と爲す。一には中般涅槃補特伽羅、二

【E01】 信力、*śraddhā bala* (*Śaddhā-bala*)、今の文は前卷の五勝支の下の第一勝支に關する解説、論釋を見よ。

【E02】 精進力、*Viriyā-bala* (*Viriyā bala*)、四法・品中の四正斷の下等參照。

【E03】 念力、*Smṛti-bala* (*Sattī-bala*)、同上、四法・品中の四念住下及び本卷の上のその註等參照。

【E04】 定力、*Samādhi-bala* (*Skt. = pāṇi*)、同上、四法・品中の四靜慮の下を參照せよ。

【E05】 慧力、*Prajñā-bala* (*Pañña-bala*)。

【E06】 道の聖諦の語は、宋・元・明三本には行に作り、大正藏經も亦是れに従うてゐるが、その原は、巴 *Dukkha-nirodha-gāminī paṭipatti ariya-sacca* たること、改言の要なければ、今は縮藏(及び高麗本等)に従ひてかく改む。(巴文の意は「苦の滅に導く行跡又は手段、方法の神聖なる真理」)。

【E07】 力、*Bala* = power, strength, force.

【E08】 五不還、*Saṃgā*—*S. Pañca anāgāminī* (*Rhys D. 1—5 classes of persons become Never-returns*; Neumann—*Fünf Arten der Nichtwiederkehr*)。衆集經—五人。大集法門經—五十夫入法。四双の聖者中の阿羅漢に次ぐ聖者としての不還果(阿那含果)、即ち、再び、この欲界の生涯に來り生ずることなく、色・無色界等の生より直接に般涅槃する人の五種の別をあげたもので、その五種は、同じく欲界には還生することなきにしても、尙、般涅槃に關しては難易自ら別るゝものあるにより、且らく五段の區別を立てたものである。



第三解脱處  
一而も能く  
他の爲めに  
……」

第四解脱處  
一而も能く獨  
り寂靜に……」

第五解脱處  
一而も能く隨  
一の定相を取  
り……」

「而も能く他の爲めに、會つて聞く所に隨つて、究竟の法要を廣説開示す」とは、謂はく、彼れは而も能く他の爲めに、先きに聞く所の如きの究竟の法要を宣説し、施設し、建立し、開顯し、分別し、明了し、顯示するなり。

「而も能く獨り寂靜に處して、會つて聞く所に隨つて、究竟の法要の所有の義趣を思惟し、籌量し、觀察す」とは、謂はく、能く獨り寂靜に處して、先きに聞く所の如きの究竟の法要の所有の義趣を、盡思し、遍尋思し、簡擇し、遍簡擇し、觀察し、遍觀察するなり。

「而も能く善く隨一の定相を取り、彼の定相に於いて、能く善く思惟し、又、善く了知し、復、善く通達す」とは、謂はく、能く善く定及び定相を取り、彼の定相に於いて、入と住と出との相を、能く善く思惟し、又、善く了知し、復、善く通達するなり。

餘は前に説くが如し。

10(10)五根

五根とは、云何が五と爲す。一には信根、二には精進根、三には念根、四には定根、五には慧根なり。

11(11)五力

此の五根の相は、前に廣く説くが如し。  
五力とは、云何が五と爲す。一には信力、二には精進力、三には念力、四には定力、五には慧力なり。

【三二】五根、Pañcendriyāni (Pañcendriyāni) (Rhyas D.—5 Faculties; Neumann—Fünf Sinneskräfte.) 衆集經—今と同。大集法門經—五勝根。根 Indriya は俱舍論の如きは、最勝にして自在なる光顯の意義あるをいふと稱し、本來は婆羅門哲學の大立物の一たる、因陀羅 Indira に屬する—といふを語義としたのだが、それより、力 (strength, might) 乃至支配的原理、官能 (governing principle and faculty) をいふに至れるものにて、その結果「早く感官 sense organs を六根と立て、又、修道の產物たる諸の順解脱的精神分子をも今の如き五根と立つる等に至つたことは、已に、原始佛典の如きにも見らるゝ。而も、その赴く處、遂に論藏に於いては所謂二十二根説の如きを大成するに至つたけれども、今は、即ち、その中の修行的所產たる、順解脱的精神内容の一團としての五種で、その根としての意義は専ら順解脱的の大官能あるによる。」

【三八】前に廣く等は寧ろ、次の五力に關する説明を參照せよ。

【三九】五力、Pañca balāni (Sang.—5. 無)。漢二典も今の譯字と同ず。内容は全く右の五根に等しく、而も俱舍(二五)等に従へば、中根とは同じものの、忍位、加行道の煖・頂・忍・世第一法等四中の第三にあるに名け、力とは同世第一法位のそれに名くと。(因みに、反之、大衆部に於いては二者は共に無礙位のものときれ、唯大義の相違によつて分つといふ。即ち、その増上の義によるは根といはれ、而して、その不屈の義によるは力と呼べると—俱舍(二五)——以上、參考、婆沙・一四一。



の義の中に於いては、説いて「苾芻、苾芻尼等」と爲す。

「此の處に安住して」とは、謂はく、此の處に住し、等住し、近住す。是の故に、説いて「此の處に安住して」と爲す。

「念の未だ住せざる者等」  
「念の未だ住せざる者は能く正念に住す」とは、謂はく、能く四念住に住するなり。

「心の未だ定せざる……」  
「心の未だ定せざる者は能く正定に住す」とは、謂はく、能く四靜慮に住するなり。

「漏の未だ盡きざる者……」  
「漏の未だ盡きざる者は能く諸漏を盡くす」とは、問ふ、諸漏とは云何。答ふ、三漏有り。謂はく欲漏、有漏、無明漏なり。

彼れは此の三漏に於いて、能く盡くし、等盡し、遍盡し、現盡し、當盡し、速盡す。斯れに由るが故に、「漏の未だ盡きざる者は能く諸漏を盡くす」と説く。

「未だ無上安穩の……」  
「未だ無上安穩の涅槃を得ざる者は能く疾かに「是れを」證得す」とは、謂はく、諸の愛盡し離滅し涅槃を説いて無上安穩の涅槃と爲し、彼れは速かに此れに於いて、能く得、隨得し、能く觸し、能く證す。斯れに由るが故に、「未だ無上安穩の涅槃を得ざる者は能く疾かに「是れを」證得す」と説く。

第二解脱處——  
「而も能く大音聲を以つて……」  
「而も能く大音聲を以つて、曾つて聞く所に随つて、究竟の法要を讀誦す」とは、謂はく、廣大の音聲を以つて、先きに聞く所の如きの究竟の法要を讀誦するなり。

【三四】 此の處、解脱處。

【三五】 四念住、四法品中參照。四段の觀法の形式で身、受、心、法の順により、順に不淨、苦、無常、無我を禪觀すること。

【三六】 三漏、三法品下參照(第四卷)。

「厭の故に能く離す」

を生ず」と説く。

「厭の故に能く離す」とは、謂はく、若し時ありて、五取蘊に於いて、能く厭毀、違逆を生じて住せば、爾の時、便ち貪・瞋・癡の三不善根に於いて、能く損じ、能く薄くして、漸に缺減せしむること、人の水を以つて、黄衣を浸漬して、日光中に置けば、染色速かに脱するが如く、是くの如く、若し時ありて、五取蘊に於いて、能く厭毀、違逆を生じて住せば、爾の時、便ち三不善根に於いて、能く損じ、能く薄くして、漸に缺減せしむ。斯れに由るが故に、「厭の故に能く離す」と説く。

「離するが故に解脫を得」

「離するが故に解脫を得」とは、謂はく、彼れは若し時ありて、三不善根を能く損じ、能く薄くして、能く漸に缺減せしむれば、爾の時、便ち貪・瞋・癡等に於いて、心、解脫を得。斯れに由るが故に、「離するが故に解脫を得」と説く。

「是れを第一と名く」

「是れを第一と名く」とは、漸次、順次、相續の次第の數を第一と爲すなり。

「解脫處」

「<sup>三</sup>解脫處」とは、此の中には、行をか解脫處と云ふや。 答ふ、

此の中には、七法を解脫處と名く。一には正しく法を了知す、二には正しく義を了知す、三には欣、四には喜、五には輕安、六には樂、七には定是れなり。

「諸の苾芻、苾芻尼等」

「諸の苾芻、苾芻尼等」とは、若し<sup>三</sup>能く學の無間道を引くを、此

【三】 解脫處、巴、Vimuttāyatana.

【三】 學の無間道、前卷末參照。

て、身輕軟に、心も輕軟に、身離蓋し、心も離蓋し、身に慳情無く、心に慳情無く、身に疲倦無く、心に疲倦無し。斯れに由るが故に、「心、喜するが故に身輕安に」と説く。

「身輕安の故に樂を受す」

「身、輕安の故に樂を受す」とは、謂はく、身に堪能有り、心に堪能有り、廣く説いて、乃至身に疲倦無く、心に疲倦無きに由るが故に、身に便ち樂有り、心に妙喜を受す。斯れに由るが故に、「身輕安の故に樂を受す」と説く。

「樂を受するが故に心定す」

「樂を受するが故に心、定す」とは、謂はく、樂を受するが故に、勞倦を遠離して、無勞倦法の平等に行するが故に、心住し、等住し、近住し、一趣にして、三摩地を得。斯れに由るが故に、「樂を受するが故に心、定す」と説く。

「心定するが故に如實に知見す」

「心、定するが故に如實に知見す」とは、謂はく、彼れは若し時ありて、心住し、等住して、無二無轉ならば、爾の時、苦に於いて、如實に苦を知見し、集・滅・道に於いて如實に集・滅・道を知見す。斯れに由るが故に、「心、定するが故に如實に知見す」と説く。

「如實に知見するが故に厭を生ず」

「如實に知見するが故に厭を生ず」とは、彼れは若し時ありて、苦に於いて如實に苦を知見し、集・滅・道に於いて、如實に集・滅・道を知見せば、爾の時、五取蘊に於いて、便ち厭毀、違逆を生じて住す。斯れに由るが故に、「如實に知見するが故に厭

【二九】 身輕安の故……巴、*Paśāṇḍha-kāyo sūkhina vedeti* (安靜化されたる身は樂を経験す、又は、感ず)。

【三〇】 樂を受するが故に……巴、*Sukhino attāga bhavadhiyanti* (樂有るの心は三昧に入る)。

【三一】 心定する以下、巴、なし。



「能く正しく  
若しは法を了  
知す」

「能く正しく  
若しは義を了  
知す」

「便ち欣を發  
起す」

「欣の故に喜  
を生ず」

「心喜するが  
故に身輕安に」

く正しく、若しは法を了知す」とは云何。 答ふ、名身、

句身、文身、是れを名けて法と爲す。彼れは此の法に於いて等  
了し、近了し、明了し、品類の差別に通達し、無二無退轉の智  
を獲得するが故に、「能く正しく若しは法を了知す」と名く。

問ふ、「能く正しく、若しは義を了知す」とは云何。 答ふ、名

身、句身、文身が顯す所、了する所、説く所、遍説する所、示  
す所、等示する所、聞く所を義と名け、彼れは此の義に於いて  
等了し、近了し、明了し、品類の差別に通達し、無二無退轉の  
智を獲得す。是れを「能く正しく、若しは義を了知す」と名く。

「正しく、若しは法、若しは義を了知するに由りて、便ち、欣  
を發起す」とは、最初に發する所の喜を名けて欣と爲し、彼れ  
は此の欣を起し、等起し、生じ、等生し、轉じ、現轉し、聚集  
し、出現す。斯れに由るが故に、「便ち欣を發起す」と説く。

「欣の故に喜を生ず」とは、謂はく、上品の欣の轉するを名け  
て喜と爲し、彼れは此の喜を起し、等起し、生じ、等生し、轉  
じ、現轉し、聚集し、出現す。斯れに由るが故に、「欣の故に喜  
を生ず」と説く。

「心、喜するが故に身輕安に」とは、謂はく、彼れは欣より、  
心の喜を生ずるが故に、現法中に於いて、身の重性斷じ、心の  
重性斷じ、身、堪能有り、心、堪能有り、身も細滑、心も細滑にし

尼子、或ひは布刺拳梅咀臘衍尼咀臘 *Puramāditiryojī-*  
*putra* 譯して慈滿子といひ、又圓滿といふ。富蘭那の  
雄辯といはるゝはこの人に關し、説法の第一人者とさ  
る。

【三】 無垢、*Vimala*。

【四】 妙臂、*subhū*。又善手と譯し、莎波手と記す。

【五】 牛主、*Gaṇan-pati*。橋梵鉢提等と記し、牛呵、  
牛王、又牛相等の譯がある。智度論(二)には毘尼法藏  
を知る、舍利弗の弟子とさる。

【六】 舍利子、以下は卷一二參照。

【七】 名身、*Namakāya*。以下三身は心不相應行法(第  
三卷、三善尋下參照)の中で、身とは例により聚の意、  
(順正理論十四には總説と記す)。名は作想 *Saṃjñā-*  
*karṇa* の意とあつて、名稱、名詞の義。

【八】 句身、*Paṇḍakāya*。句とは諸行は無常なり等、業  
用 *kriyā* (動詞) 德 *guṇa* (形容詞) 時 *kālā* (tense) 等  
の關係を示す *clause & sentence* の意。

【九】 文身、*Yatjanakāya* とはアルファベットのこ  
とで、梵語のそれといへば、*a* (哀) *ā* (阿) *i* (悲) *i*  
(伊) 等をつふ。

【一〇】 彼れとは、前文には彼の法要に於いてと成す。

【一一】 法を了知す、*Paṇḍaṇnamapajisānvedī hoti*。

【一二】 義を了知す、*Paṇḍaṇnamapajisānvedī hoti*。

【一三】 欣を發起す、*Paṇḍaṇnamapajisānvedī hoti*。

【一四】 喜、*Paṇḍaṇnamapajisānvedī hoti*。

【一五】 欣の故に喜を生ず、*Paṇḍaṇnamapajisānvedī hoti*。

【一六】 心喜するが故に等、*Paṇḍaṇnamapajisānvedī hoti*。

【一七】 心喜するが故に等、*Paṇḍaṇnamapajisānvedī hoti*。

右の論釋  
第一解脫處  
大師

の未だ住せざる者は能く正念に住し、心の未だ定ぜざるものは能く正定に住し、漏の未だ盡きざる者は能く諸漏を盡くし、未だ無上安穩の涅槃を得ざる者は疾かに能く「是れを」證得す。此の中、「大師、或ひは隨一の尊重すべき有智の同梵行者有りて、爲めに法要を説く」とは、問ふ、「大師」とは云何。答ふ、即ち諸の如來、應、正等覺を説いて「大師」と名く。

「尊重すべき有智の同梵行者」

問ふ、「尊重すべき有智の同梵行者」とは云何。答ふ、解憍陳那、馬勝、賢勝、霧氣、大名、耶舍、圓滿、無垢、妙臂、牛主、舍利子、大採菽氏、大迦葉波、大劫庇那、大營樺氏、大迦多衍那、大執藏、大善見、大路、隨順、無滅、欲樂、金毘羅等は皆な尊重すべき「有智の同梵行者」と名く。

「法」

問ふ、「法」とは云何。答ふ、名身、句身、文身、是れを名けて「法」と爲す。

「大師或ひは隨一の尊重すべき有智の同梵行者の爲めに法要を説く」

即ち、前的大師と、尊重すべき有智の同梵行者との、諸の名身、句身、文身を以つて、彼れが爲めに宣説し、施設し、建立し、開顯し、分別し、明了し、開示する、此れに由るが故に「爲めに法要を説く」と言ふ。

「大師、或ひは隨一の尊重すべき有智の同梵行者有りて、爲めに法要を説く、如如く、是くの如く、是くの如く、彼れは法要に於いて、能く正しく、若しは法、若しは義を了知す」とは、問ふ、「能

【一】 大師、巴・Sattā (nom.)

【二】 尊重すべき有智の同梵行者、巴・Garihiṇāṅko saṁvinnāsi (°)

【三】 解憍陳那 Ajāta Kaṇḍiyya (Ajāta Kōṇḍiyya) 又、阿若憍陳那とも記す。初めて「佛説」法を「理解し得たるクンデイナ Kaṇḍiyya 家(族?)」の人意。佛陀の成道第一の說法を受け、そしてその以前六年苦行時の佛陀の同行者たりし所謂五群比丘の隨一人にして、殊にその名稱の示す如く、最初に、佛陀の教法を理解しえた人。

【四】 馬勝、Aśvajit (Aśvajit) 阿説示、馬師等とも記す。同じく五群比丘の一人にて、曾つてその舉措如法なりし故に、舍利弗、延びて目健連を佛教に誘ひ入れしとして留意さる。但し、律藏中では所謂六群比丘の中に數へられ、隨處に問題を惹起したもの、一人とせらる。

【五】 賢勝、Bhadrīka (Bhaddiya) 又小賢と譯し、跋提、婆提、跋提梨迦その他と記し、同様に五比丘の一。

【六】 霧氣、Vāṣpa (Vappa) 波濕波、婆沙婆、婆頤、婆敷と記し、又、起氣等と譯す。これも五比丘の一である。(中本起經には、これを十力迦葉 Daśabala Kaṇḍiyya と記す)。

【七】 大名、前出(卷一二)を見よ。

【八】 耶舍、Yāsa (Yaso) バラーナシー (Bārāṇasī) 釋尊成道、邪説法の地の富豪の一人子で、五比丘に次ぎ、佛教に入れる人。佛傳に有名な三時殿、婦人の衰相の問題の如きは、或ひはこの人の傳記より轉化しゆけるかと思はるゝ所である。一、Mhāvamsa I, 7, (p. 155)。一、大正藏經本的那舍に作るは誤植。

【九】 圓滿、Pūrṇa (Punpa) 詳しくは宮樓那彌多羅

## 卷の第十四

### 第五解脱處

#### (五) 諸の五法の二の三

復た次に、具壽よ、若し諸の苾芻、苾芻尼等の、大師、或ひは餘の隨一の尊重すべき有智の同梵行者の、爲めに法要を説くことも無く、亦、大音聲を以つて、會つて聞く所に隨つて、究竟の法要を讀誦もせず、亦、他の爲めに會つて聞く所に隨つて、究竟の法要を廣説開示もせず、亦、獨り寂靜に處して、會つて聞く所に隨つて、究竟の法要の所有の義趣を思惟し、籌量し、觀察もせずと雖も。而も能く善く隨一の定相を取り、彼の定相に於いて、能く善く思惟し、又、善く了知し、復、善く通達し、善く隨一の定相を取り、彼の定相に於いて、能く善く思惟し、又、善く了知し、復、善く通達するが如く、是くの如く、是くの如く、彼の法要に於いて、能く正しく、若しは法、若しは義を了知し、正しく若しは法、若しは義を了知するに由りて、便ち欣を發起し、欣の故に喜を生じ、心、喜するが故に身、輕安に、身、輕安の故に樂を受し、樂を受するが故に心、定し、心、定するが故に如實に知見し、如實に知見するが故に厭を生じ、厭の故に能く離し、離するが故に解脱を得。是れを第五解脱處と名く。——是の諸の苾芻、苾芻尼等は此の處に安住して、念

【二】 (五) 諸の五法等、原漢典は「五法品第六の四」に作る。

【二】 隨一の定相を取り、*Et' Attaṭṭhena samādhi-miṭṭhaṃ sugaḥitaṃ loṭi* (Rhys D.—To have well grasped some given clue to concentration; Neumann—Aber er hat irgend einen zur Konzentration tauglichen Eindruck empfangen.)

【三】 能く善く思惟し、*Et' Evasamāsikataṃ*

【四】 善く了知し、*Et' Suppadhāritam*

【五】 善く通達し、*Et' Suppetividdham paṭṭhāya*



究竟の法要を廣説開示もせずと雖も、而も能く【二五】獨り寂靜に處して、曾つて聞く所に隨つて、究竟の法要の所有の義趣を【二六】思惟し、籌量し、觀察するに、獨り寂靜に處して、曾つて聞く所に隨つて究竟の法要の所有の義趣を思惟し、籌量し、觀察するが如く、是くの如く、是くの如く、彼の法要に於いて、能く正しく、若しは法、若しは義を了知し、正しく若しは法、若しは義を了知するに由りて、便ち欣を發起し、欣の故に喜を生じ、心、喜するが故に身、輕安に、身、輕安の故に樂を受し、樂を受するが故に心、定し、心、定するが故に如實に知見し、如實に知見するが故に厭を生じ、厭（あへん）の故に能く離し、離するが故に解脱を得。是れを第四解脱處と名く。——是の諸の苾芻、苾芻尼等は此の處に安住して、念の未だ住せざる者は能く正念に住し、心の未だ定せざる者は能く正念に住し、漏の未だ盡きざる者は能く諸漏を盡くし、未だ無上安穩の涅槃を得ざる者は能く「是れを」證得す。

【二五】獨り云云、巴、缺く。

【二六】思惟し等、巴、*Occhāsi anuvitakketi, anuvitācāreti, manasi 'nupakkhanti* (心によつて、隨尋し、隨伺し、意もて、隨觀察し、)

### 第三解脫處

復た次に、具壽よ、若し諸の苾芻、苾芻尼等の、大師或ひは餘の隨一の尊重すべき有智の同梵行者の、爲めに法要を説くこと無く、亦、大音聲を以つて、曾つて聞く所に隨つて、究竟の法要を讀誦もせずと雖も、而も能く<sup>二三</sup>他の爲めに曾つて聞く所に隨つて、究竟の法要を<sup>二四</sup>廣説開示するに、他の爲めに、曾つて聞く所に隨つて、究竟の法要を廣説開示するが如く、是くの如く、是くの如く、彼の法要に於いて、能く正しく、若しは法、若しは義を了知し、正しく若しは法、若しは義を了知するに由りて、便ち欣を發起し、欣の故に喜を生じ、心、喜するが故に身、輕安に、身、輕安の故に樂を受し、樂を受するが故に心、定し、心、定するが故に如實に知見し、如實に知見するが故に厭<sup>二五</sup>を生じ、厭の故に能く離し、離するが故に解脫を得。是れを第三解脫處と名く。——是の諸の苾芻、苾芻尼等は此の處に安住して、念の未だ住せざる者は能く正念に住し、心未だ定せざる者は能く正定に住し、漏の未だ盡きざる者は能く諸漏を盡くし、未だ無上安穩の涅槃を得ざる者は疾かに能く「是れを」證得す。

復た次に、具壽よ、若し諸の苾芻、苾芻尼等の、大師或ひは餘の隨一の尊重すべき有智の同梵行者の、爲めに法要を説くこと無く、亦、大音聲を以つて、曾つて聞く所に隨つて、究竟の法要を讀誦もせず、亦、他の爲めに、曾つて聞く所に隨つて、

【二三】他の爲めに、巴、*Parekaṃ*。因みに、この第三は巴にては第二解脫處にせられ、前のと入れ違つてゐる。その他は巴は前に準じて知るべし。

【二四】廣説開示し、巴、*Vithāraṇa parisaṇṇa dasseti*（廣く盡して、諸の他が爲めに説く。）

## 第二解脫處

厭の故に能く離し、離するが故に解脫を得。是れを第一解脫處と名く。——是の諸の苾芻、苾芻尼等は此の處に安住して、念の未だ住せざる者は、能く正念に住し、心の未だ定せざる者は能く正定に住し、漏の未だ盡きざる者は能く諸漏を盡くし、未だ無上安穩の涅槃を得ざる者は疾かに能く「是れを」證得す。

復た次に、具壽よ、若し諸の苾芻、苾芻尼等の、大師或ひは餘の隨一の尊重すべき有智の同梵行者の、爲めに法要を説くこと無しと雖も、而も能く大音聲を以つて、會つて聞く所に隨つて、究竟の法要を、讀誦するに、大音聲を以つて、會つて聞く所に隨つて、究竟の法要を讀誦するが如く、是くの如く、是くの如く、彼の法要に於いて、能く正しく、若しは法、若しは義を了知し、正しく若しは法、若しは義を了知するに由りて、便ち欣を發起し、欣の故に喜を生じ、心、喜するが故に身、輕安に、身、輕安の故に樂を受し、樂を受するが故に心、定し、心、定するが故に如實に知見し、如實に知見するが故に厭を生じ、厭の故に能く離し、離するが故に解脫を得。是れを第二解脫處と名く。——是の諸の苾芻、苾芻尼等は此の處に安住して、念の未だ住せざる者は能く正念に住し、心の未だ定せざる者は能く正定に住し、漏の未だ盡きざる者は能く諸漏を盡くし、未だ無上安穩の涅槃を得ざる者は疾かに能く「是れを」證得す。

- 【二三】若しくは法等、巴、*Paṭisaṃ dhamme attha-*  
*paṭisaṃvedī ca holī, dhamma-paṭisaṃvedī ca* (その法に於いて、意義を體顯し、法を體顯す)。覺音法師の註によれば、*attha* & *dhamma* の對照は、釋義と本文との對照を意味す (cf. *Rhys D.*—p. 229 *footnote 2*, & *Rhys D.*; *Stede*—*Pāli Dictionary*).
- 【二四】欣、巴、*Pāmojja* (delight, pleasure)。
- 【二五】喜、巴、*Pīti*.
- 【二六】身輕安、巴、*Kāyo passambhāti* (*Rhys D.*—*The faculties become serene*).
- 【二七】樂を受し、巴、*Sukhaṃ vedeti*.
- 【二八】心定し、巴、*Cittam samādhīyati*.
- 【二九】如實に以下、巴はすべて缺き、以下の他四處についても同ず。諸行の實相——無常、苦、空、非我——を如實に知る意。
- 【三〇】大音聲、巴、缺。この第二は巴では第三解脫處に作らる。
- 【三一】會つて等、巴、*Yathāśantaṃ yathā-periyatāṇa* (「聞けるが如く、記憶しるるが如く」)。
- 【三二】究竟の法要、巴、*Dhammaṃ vithārena* (法を全體的に)。
- 【三三】讀誦し、巴、*Saṃjāyāṃ karoti = to make rehearsal*.



(五) 死想

死想とは云何。答ふ、自らの身命に於いて、極めて善く作意し、無常を思惟する諸の想、等想、現前而想、已想、當想、現想、是れを死想と名く。

——是くの如きの五種を成熟解脫想と名く。

成熟解脫想  
の名義  
三種の解脫

問ふ、何の縁にてか、此の五を成熟解脫想とは名くる。答ふ、解脫に三種有り。一には、心解脫、二には、慧解脫、三には、無爲解脫なり。此の五の想に由りて、有爲解脫の未生なるは生ぜしめ、生じ已れるは増長し、堅固ならしめ、廣大ならしめ、「又」斯れに由りて、速かに無爲解脫を證せしむ。——此の因縁に由りて、成熟解脫想と名く。

九(五)五解脫  
第一解脫處

五解脫處とは云何が五と爲す。具譯よ、當さに知るべし、若し諸の苾芻、苾芻尼等の、或ひは大師有りて、爲めに法要を説き、或ひは隨一の尊重すべき有智の同梵行者有りて、爲めに法要を説くに、大師或ひは隨一の尊重すべき有智の同梵行者有りて、爲めに法要を説くが如く、是くの如く、是くの如く、彼れは法要に於いて、能く正しく、若しは法、若しは義を了知し、正しく若しは法、若しは義を了知するに由りて、便ち、欣を發起し、欣の故に、喜を生じ、心、喜するが故に、身輕安に、身輕安の故に、樂を受し、樂を受するが故に、心、定し、心、定するが故に、如實に知見し、如實に知見するが故に厭を生じ、

——食不淨想。」

【九】厭逆俱行とは、食を服ひ、反感をなす、その心意に俱行相應する……の意。毀皆準じて知るべし。

【九】諸の糜飯等、諸の糜飯を、膾炙せる死屍と禪觀せよとの意。以下準ず。

【一〇】膳に特に菜を加えぬ羹、肉羹。

【一〇】生酥、かまのミルクの類。

【一〇】死想、Sang-s. は上の厭逆食想下參照。衆集經—死想。

【一〇】心解脫、Cittavimutti (Cetovimutti)。卷三、二法品二六明・解脫の下を見よ。

【一〇】慧解脫。Prajñā-vimukti (Paññā-vimutti) 同上。

【一〇】無爲解脫。Asaṅkappa-vimutti (Asaṅkappa-vimutti) 同上。

【一〇】有爲解脫。Sāṃsāra-vimutti (Samsāra-vimutti) とこれは無爲解脫に對し、前の二を稱す。

【一〇】五解脫處。Sang-s. Pañca vimuttāṇāni (Rahys D.—5 occasions of emancipation; Neumann—Fünf Berichte der Erlösung) 衆集經—五喜解脫處。大集法門經—五解脫處。」

【一〇】法要を説き、巴 Dharmam dasseti 「法を説き」。

【一〇】隨一の等。巴 Affinitate gurūhācīto sambhūnācī (Rahys D.—Or a Reverend fellow-disciple.)

【一〇】如如く、原文(今は巴利)に、yathā yathā……と強意的 emphatic に、……の如くの字を二度重ねたるを、そのまゝ、反覆して譯出したもの。

【二】是の如く、も準じて、原に、tathā tathā ……とありしを、そのまゝ譯出した所。

## (三) 苦無我

已想、當想、現想、是れを無常苦想と名く。

苦無我想とは云何。

答ふ、一切行は皆な無常なり。無常の故

に苦なり。苦の故に無我なり。「かくて」無私の行に於いて、

無我に由るが故に、如理に思惟する諸の想、等想、現前而想、

已想、當想、現想、是れを苦無我想と名く。

## (四) 厭逆食

想

厭逆食想とは云何。

答ふ、諸の苾芻等は應さに段食に於いて、

厭逆俱行の作意を發起し、及び、毀皆俱行の作意を起し、

不淨想を以つて、段食を思惟すべし。

其の事は云何。

答ふ、諸の糜飯に於いて、應さに臍腹の死屍

の勝解を起すべし。粥糞膿に於いて、應さに人の稀糞の勝解を

起すべし。生酥、乳酪に於いて、應さに、人の髓腦の勝解を起

すべし。熟酥油、砂糖及び蜜に於いて、應さに人の肪膏の勝解を

起すべし。麁に於いて、應さに骨屑の勝解を起すべし。餅に

於いて、應さに人皮の勝解を起すべし。鹽に於いて、應さに碎

齒の勝解を起すべし。蓮の根莖、生菜の枝・葉に於いて、應さに

に連髪・鬚髯の勝解を起すべし。諸の漿飲に於いて、應さに人の

膿血の勝解を起すべし。——彼れの、段食に於いて是くの如き

の厭逆・毀皆の俱行の作意を發起し、不淨想を以つて、段食を

思惟する諸の想、等想、現前而想、已想、當想、現想、是れを

厭逆食想と名く。

行の故に、その行の一切の即ち無常なるは言を俟たない所である。

【二】現前而想、巴 Sañjiniṭṭaṭṭa = The state of having perceived.

【三】無常苦想、Sang-s. Anicca dukkha-sañña (Ekys D. — The notion of suffering in impermanence; Neumann — Wahrnehmung des Leidens der Vergänglichkeits.)。衆集經は「一切世間不可樂想といへるに當るか。要するに、こは經に諸法は無常の故に苦なりといふを觀法的になほしてかくいへるまでのものである。」

【四】有 Bhava とは、實有の有ではなく、常識的の有で、有爲法に有の意。故に、有は是れ苦なりとは、所詮、一切法に有の行は無常なるが故に、我らに對し、不可意(「苦」)の感を與へるといふの意で、その事實を觀するのが、即ち、無常苦想の意。

【五】苦無我想、Sang-s. Dukkhe anatta-sañña (Ekys D. — The notion of no-soul in suffering; Neumann — Wahrnehmung der Wesenlosigkeit des Leidens.)。衆集經「不淨想を代りにをく」。これも亦、經に(雜阿含初、第 XXII. の諸經等參照)、苦なる現心身は我れらしくない、即ち、無我といふに基く想。

【六】無我、Anātmā (Anattā)。蓋し、前卷所註の如く(五下結下を見よ)「我とは、常一主宰の義で、今は吾らの現身にはかゝる義なきが故にとの理由で、無我と名するもの。」

【九】厭逆食想、Sang-s. 以下 Paṭhava saṁhā, Virāga saṁhā (斷想、離欲想)の二を記し、ヤと相違す。巴利の今に當るものは「A. VII. 2 (IV. 148) 參照。Aññe pajjikkhavaṁsaṁ」とうがある。衆集經



通達慧」と爲す。

「彼所作慧」

「彼所作慧」とは、謂はく、彼れが所引の學の無間道の所有の勝慧を、此の中には、説いて「彼所作慧」と爲す。

「正盡苦慧」

「正盡苦慧」とは、正とは云何。答ふ、因の故に、門の故に、理趣の故に、行相の故に、説いて名けて正と爲す。

盡苦慧とは、五取蘊を名けて苦と爲し、此の慧は能く五取蘊をして、盡き、等盡し、遍盡し、永盡を證せしむるが故に、盡苦慧と名く。

「是れを第五と名く」

「是れを第五と名く」とは、漸次、順次、相續の次第の数の第五たるなり。

「勝支」

「勝支」と言ふは、謂はく、具慧増盛にして、諸の善男子、或ひは、善女人の、後々に、轉た、勝なるに由るが故に「勝支」と名く。

八〇〇五成就解脫想

五成熟解脫想とは、云何が五と爲す。一には無常想、二には無常苦想、三には苦無我想、四には厭逆食想、五には死想なり。

(一) 無常想

無常想とは云何。答ふ、一切行は皆な無常なり。「故に其の」無常の行に於いて、無常に由るが故に、如理に思惟する諸の想、等想、現前而想、已想、當想、現想、是れを無常想と名く。

(二) 無常苦想

無常苦想とは云何。答ふ、一切行は皆な無常なり。而して「無常に由るが故に、有は是れ苦なり」とは、諸の苦の行に於いて、苦想に由るが故に、如理に思惟する諸の想、等想、現前而想、

【八四】 彼所作慧、巴、缺。蓋し、彼れが修行によりて引起する所作等の無間道の勝慧の意。

【八五】 學の無間道、無間道 *Anuṅgāya-mārga* (梵) とは、正に煩惱を斷するの聖無漏慧のこと、その學の聖(四双八輩中の第八阿羅漢を除く餘)に屬するを、即ち學の無間道といふ。第一卷已斷已遍知の註を參照せよ。

【八六】 正盡苦慧、巴 *Sammā (JE) - dukkha (苦) - kkhaya* (盡) *- sammā (に趣へ) - (paṇḍita) (慧 gen.)*

【八七】 正、巴 *Sammā* (普へ)。

【八八】 因の故に等は、云云の因の正しく、門類の正しく、理趣の正しく、行相の正しきが故に、正と名くとの意。

【八九】 五成熟解脫想 *Saṅg - S. Pāṭa viṃatti-pari-piṇḍiya saṅgā (Rhyas D. - 5 thoughts by which emancipation reaches maturity; Neumann - Fünferlei Wahrnehmung zur selbsten Befreiung)* 衆集經一五趣解脫。五種の想、即ち、思想で、何れもよく、解脫、心解放、遠離に趣遇しえしむべきものであるから、名けて、五成熟解脫想となす。即ち、五種の、解脫を成熟せしめる想の意。衆集經のも、準じて五の解脫に趣く又は趣かしめる想の意。

【九〇】 無常想、巴 *Anicca-saṅgā (Skt. Anitya-saṅgā) (Rhyas D. - The notion of impermanence; Neumann - Wahrnehmung der Vergänglichkeit)* 衆集經一四一切行無常想。

【九一】 一切行 *Sarvath saṅskāra (Skt. sarvath saṅskāra) 行 Saṅskāra (Sanskrit)* とは、*Sam + sk + kṛ* より來れる、作りゆく、作る、變化しゆくもの、又はことほどの意とすべく、畢竟、變化するものすべてを攝稱するものに他ならず。かくて、即ち、有爲法と所詮同義とすべき所に外ならぬが、已に變化しゆくものは



「慧」

所生の善法に依り、諸の法相に於いて、能く簡擇し、極く簡擇し、廣く説いて、乃至、毘鉢舍那ある、是れを名けて「慧」と爲す。

「安住」

「安住」と言ふは、謂はく、是くの如きの慧を成就するに由るが故に、諸の法相に於いて、能く勝行を行じ、進趣し證會するなり。

斯れに由るが故に、「具慧安住して」と説く。

「世間の有出沒の慧」

「世間有出沒慧を成就す」とは、世間とは謂はく五取蘊なり。云何が五と爲す。謂はく、色取蘊、受・想・行・識取蘊なり。彼れは是くの如きの慧を成就するに由るが故に、能く如實に、此の五取蘊の生と及び變壞とを知る。斯れに由るが故に、「世間有出沒慧を成就す」と説く。

「聖慧」

「聖慧」と言ふは二種の聖有り。一には善の故の聖なり、二には無漏の故の聖なり。「而して今」、此の慧は具さに二種の聖に由るが故に、説いて名けて聖と爲す。故に「聖慧」と名く。

「出慧」

「出慧」と云ふは、謂はく、彼れは是くの如きの慧を成就するが故に、能く欲界を出離し、及び、能く色・無色界を出離す。故に「出慧」と名く。

「善通達慧」

「善通達慧」とは、謂はく、彼れは是くの如きの慧を成就するが故に、苦・集・滅・道諦に於いて、苦・集・滅・道の相に能く通達し、善く通達し、各別に通達するに由り、是の故に、名けて「善

【六〇】世間の等、巴、Udayattha-guminiyā pabbajya (Gen.)、即ち、「生滅」の理解に「導く所の智」(或ひは慧)、「更らに碎いて」へば、諸の有爲法は生じ又滅するものなることを證知せしめることに導く慧の意。衆集經は已出の如く、「法の起滅を觀察することに於いて、善くす」と記す。而して今の漢譯の義としては、世間、即ち、五取蘊は生滅出沒を性とするものといふことを了知する慧の意。

【八一】聖慧以下、巴文では、すべて、右の有出沒慧の同格で、つまり、有出沒慧のことに係る。もし今の漢譯に随つていへば、巴は Ariyāya [Pañhāya] (Gen.) もあるべきだらう。

【八二】出慧、右聖慧に準ず、巴は缺? (次註參照)。

【八三】善通達慧、巴は或ひは、Nibbedhikāya [Pañhāya] (Gen.) じれに當るか (Nibb-dhika = penetrating, piercing, discriminating)。

「勇・堅・猛あり」

【七五】「勇・堅・猛有り」と言ふは、謂はく、精進力を成就するに、由るが故に、勇決にして取し、堅住して取し、猛利にして取し、諸有所の取の、是れ善にして、惡に非ざると、隨つて取する所の相とを守護して捨てざること、他國を獲て、善く能く守護するが如し。是の故に、説いて「勇・堅・猛有り」と爲す。

「諸の善法に於いて、常に鞭を捨てず」

【七六】「諸の善法に於いて、常に鞭を捨てず」とは、謂はく、善法に於いて、勤勇を捨てず、精進して無斷なり。是の故に、説いて「諸の善法に於いて、常に鞭を捨てず」と爲す。

「求むる所の勝の善法を得むが爲めに……」

【七七】「求むる所の殊勝の善法を得むが爲めに、若し未だ證得せずむば、精進熾然にして、終に中にして廢すること無し」とは、謂はく、若し未だ阿羅漢果を得ざれば、精進熾然にして、常に懈廢無し。斯れに由るが故に、「求むる所の殊勝の善法を得るが爲めに、若し未だ證得せざれば、精進熾然にして、終に中にして廢すること無し」と説く。

「是れを第四と名く」

【七八】「是れを第四と名く」とは、漸次、順次、相續の次第の第四たるなり。

「勝 支」

（五）第五勝

「具慧安住し」と名く。

【七九】「勝支」と言ふは、謂はく、精進の増盛にして、諸の善男子、或ひは、善女人の、後々に、轉た、勝なるに由るが故に、「勝支」と名く。

「具慧安住して」とは、「慧」とは云何。答ふ、若し出離遠離が

【五】 勇・堅・猛有り、巴にはこの句を缺く。

【七六】 取しとは、原には果して如何にありしか。而も、所要は、善い意味の執着、取著をなし、よつてもつて神進努力すること、想像するに足る。

【七七】 諸の善法等。EJ. Anikkutta-dhmo kusalsu dhammesu = not for saking the yoke in good dharmas.

【七八】 求むる所の等、前掲の文中、この前に「假使ひ唯、皮筋骨を餘して身に在りとも、諸の血肉は皆々悉く乾枯し」の文あるも、今無きはそれを脱落せるものか。初めより、論釋を必要とせざるが故に、こゝには省いたものであるとは、餘多の場合に、何でも論釋しあるに鑑み、必ずしも斷じ難い所なるべし。求むる以下は巴にはない。

【七九】 具慧安住して、巴。 Paṇḍitaṃ bhūti.

して勝斷行を修すること能はず。「而も」彼れは極冷熱に非ざる生熟の二藏を成就するに由りて、時節調和して、諸の苦惱無く、飲噉する所有らば、正しく消化し易く、身をして強盛にして、堪任する所有らしむるが故に、能く精勤して勝斷行を修するなり。

「是れを第三と名く」

「是れを第三と名く」とは、漸次、順次、相續の次第の数の第三たるなり。

「勝支」

「勝支」と言ふは、謂はく、少疾等の増盛にして、諸の善男子、或ひは、善女人の、後々に、轉た、勝なるに由るが故に、「勝支」と名く。

(四)第四勝支

「勤めて精進して住し」

「勤めて精進して住し」とは、精進とは云何。答ふ、若し出離遠離が所生の善法に於いて、精勤勇猛にして、勢用あり、策勵し、制伏す可らず、策心の相續する、是れを精進と名く。「而して」彼れは是くの如きの精進を成就するに由りて、修習する所に於いて、能く勝「斷」行を行じ、進趣し、證會す。是の故に、説いて「勤めて精進して住し」と爲す。

「勢有」

「勢有」と言ふは、謂はく、彼れは、上品の精進の圓滿するが故に、「勢有」と名く。

「勤有」

「勤有」と言ふは、謂はく、即ち精進の堅固なるを顯示するが故に、「勤有」と名く。

【三】 勤めて等、巴、Āraddho-viriyo vīharati.

【三】 勢有り、巴、Thānavā.

【三】 勤有り、巴、Dhīṇa-purakkamo (energetic).



斯れに由るが故に、「大師と有智の同梵行者との所に於いて、如實に自らを顯す」と説く。

「是を第二と名く」

「是れを第二と名く」とは、漸次、順次、相續の次第の數の第二たるなり。

「勝 支」

「勝支」と言ふは、謂はく、諂誑無きこと増盛にして、諸の善男子、或ひは善女人の、後々に、轉た、勝なるに由るが故に、

「勝支」と名く。

(三)第三勝

「少 疾」

「少疾」と言ふは、多疾とは云何。答へて謂はく、頭痛等乃至廣く説いて、及び、餘の多種の逼惱、疹疾の、能く種々の不安隱の觸を生ずるもの、身中に住在するを、皆な多疾と名く。而して「是くの如きの疾の無きが故に、「少疾」と名く。

「無 病」

「無病」と言ふは、重ねて少疾なることを顯す。

「等熱腹を成じ、極冷熱に非ず等」

「等熱腹を成じ、極冷熱に非ず、時節調和して、諸の苦惱無く、斯れに由りて、飲食は正しく消化し易し」とは、謂はく、彼れが極冷熱に非ざる、平等成熟の、生熟二藏を成就するなり。蓋し、若し極冷藏を成就すること有らば、諸の飲噉する所は、極めて遅く成熟して、身をして沈重にして、堪任する所無からしむれば、精勤して勝斷行を修すること能はず。又、若し極熱藏を成就すること有らば、諸の飲噉する所は、極めて速かに成熟して、身をして羸劣にして、堪任する所無からしむれば、精勤

【六】 少疾、巴、Appāṇāḥḥo.

【七】 頭痛等、前註の如く、法蘊足論卷六、參照。

【八】 無病、巴、Appāṇāḥḥo.

【九】 等熱腹、巴、Sama-vepākiniyā gahaniyā samānugato, nāstikāya nācūphāya majjhimāya paṭṭhana-kkhamāya 即ち、已解の如く、「假想の消化器たる」ガハニーの、平等善良に消化するを具なへ、決して、極冷に非ず、又極熱に非ず、程合ひにして、かくして、「修行的に」努力に堪ゆるが如き(ガハニー)を成就す」と作る。

【十】 平等成熟、巴、Sama-vepākin (promoting a good digestion)蓋し、vepākin は vepāka = from vipāka = ripening, ripeness, maturity (= 成熟)と關係あるが故に、今の譯ありしなるべきも、意味としては、括弧中の英文の如く、「消化を進むる」の義。【十一】 生熟二藏とは、生藏 āmaśaya と熟藏 Pakvaśaya (共に梵)との二をいふもので、前者は胃(消化器の上部)後者は大腸(下腹部)のこと。

若しは心の姦<sup>かん</sup>の性、若しは心の曲<sup>ま</sup>の性、心の雜亂の性、心の不顯了の性、心の不正直の性、心の不調善の性を、皆な名けて諂と爲す。

是くの如きの諂無きが故に、「諂無く」と名く。

「誑無く」

六「誑無く」と言ふは、誑<sup>わづ</sup>とは云何。答ふ、斗<sup>と</sup>を偽り、秤を偽り、函を偽り、語を偽り、他に於いて罔帽する、極罔帽する、遍罔帽する、罔帽の業、欺弄、迷惑を、皆な名けて誑と爲す。

是くの如きの誑無きが故に、「誑無く」と名く。

「淳直性の類」

六「淳直性の類」とは、謂はく、重ねて諂誑無き性を顯了す。是の故に、復た「淳直性の類」と説く。

「大師と有智の……」  
「大師」

六「大師と、有智の同梵行者との所に於いて、如實に自らを顯す」とは「大師」とは云何。答へて謂はく、諸の如來、應、正等覺を説いて「大師」と名く。

「有智の同梵者」

六「有智の同梵行者」とは云何。答へて謂はく、舍利子、大採菽氏、大營構氏、大迦葉波、大執藏、大劫比那、大迦多衍那、大准陀、大善見、大路、大名、無滅、欲樂、金毘羅等を、皆な、

「有智の同梵行者」と名く。

「大師と有智の同梵行者との所に於いて、如實に自らを顯す」

若し彼の具壽は貪瞋癡多く、違犯<sup>ぼん</sup>する所有れば、便ち、大師、及び、諸の有智の同梵行「者」の所に於いて、如實に陳首し、施設し、建立し、分別し、顯了し、發露し、開示して、覆藏する所無し。

【六】 誑無く、巴 Amyyav = without deceiving.

【六】 淳直性の類、衆經は質直。巴は無し。

【六】 大師と等、巴 Yathābhūtaṃ attamaṃ avika-  
ra Sattvāri vā viññāna vā sabrahmacārisu.  
【六】 大師、巴 Sattvāri (loc.)

【六】 舍利子以下、前卷參照。

「根生じ」

「根生じ」と言ふは、謂はく、此の淨信は、二種の根有り。一には無漏智、二には無漏の善根なり。故に、「根生じ」と名く。

「安住して」

「安住して」と言ふは、謂はく、如是の行相に由りて根生すれば、即ち、如是の行相に由りて安住し、若し如是の行相に由りて安住すれば、即ち如是の行相に由りて根生す。故に、「安住」と名く。

「引奪すること能はず」

「引奪すること能はず」とは、謂はく、是くの如きの淨信を成就するに由りて、一切の世間の、若しは天、若しは魔、若しは梵、若しは沙門、若しは婆羅門、若しは餘の衆生、諸の天・人の類の皆な引くこと能はず、奪ふこと能はず、引奪すること能はず、傾くること能はず、等傾すること能はず、等極傾すること能はず、搖がすこと能はず、等搖すること能はず、等極搖すること能はず、動かすこと能はず、等動すること能はず、等極動すること能はず。是の故に、説いて「能く引奪する能はず」と爲す。

「是れを第一と名く」

「是れを第一と名く」とは、漸次、順次、相續の次第の數の第一たるなり。

「勝 支」

「勝支」と言ふは、謂はく、淨信増盛にして、諸の善男子、或ひは善女人の、後々に、轉た、勝なるに由るが故に、「勝支」と名く。

(二) 第二勝支

「諂 無く」

「諂無く」と言ふは、諂とは云何。答ふ、諸の心の險の性、

於いて、善く、賢聖の行を以て苦の本を盡す」と。

【五五】 如來、Tathagata(梵=巴)

【五六】 淨信、Saddha (Saddha)。

【五七】 二種の根云云、無漏智と、無貪、無瞋、無癡の無漏の三善根とによつて、信の生ずるが故に、信は二種の根ありと稱す。

【五八】 引奪等、上文には「引奪せられず」と記す。巴利にはこの文なし。

※等極搖とは、大正藏經本には、等極と作り、搖の字を脱す、縮藏等にはこれを記する所である。故に今は則ち、補つて讀む。

【五九】 勝支、pattāna-anga (Pattāna-anga)。

【六〇】 諂無く、巴 Aaṅṅlo=without guile.



を成じて、極冷熱に非ず、時節調和して、諸の苦惱無く、斯れに由りて、飲食は正しく消化し易し。是れを第三勝支と名く。

## 第四勝支

復た次に、具壽よ、諸の聖弟子は<sup>五</sup>勤めて精進して、住し、勢有り、勤有り、勇・堅・猛有り。諸の善法に於いて、常に鞭を捨てず。假使ひ、唯だ、皮筋骨を餘して身に在りとも、諸の血肉は皆な悉く乾枯し、求むる所の殊勝の善法を得るが爲めに、發勤精進して、勢有り、勤有り、勇・堅・猛有り、善鞭を捨てず。未だ證得せざれば、精進熾然として、終ひに中にして廢するごと無し。是れを第四勝支と名く。

## 第五勝支

復た次に、具壽よ、諸の聖弟子は<sup>五</sup>具慧安住して、世間有出沒慧、聖慧、出慧、善通達慧、彼所作慧、正盡苦慧を成就す。是れを第五勝支と名く。

(一)第一勝支の釋  
如來

淨信

「如來所に於いて淨信を修植し」

「如來の所に於いて淨信を修植し」とは、<sup>五</sup>「如來」とは云何。答ふ、應、正等覺を説いて「如來」と名く。<sup>五</sup>「淨信」とは云何。答ふ、若し出離遠離が所生の善法に依る諸の信、信の性、隨順の性、印可の性、已愛樂、當愛樂、現愛樂の性、心清淨の性の故に、「淨信」と名く。即ち、此の淨信を、如來の所に於いて、已に修植し、當に修植し、現に修植す。斯れに由るが故に、「如來の所に於いて、淨信を修植し」と説く。

Pañca pradhāna-āryāni 2) (Rhyas D. = 5 factors in spiritual wrestling; Neumann - Fünf kämpfesei- gensehften). 衆集經一五滅盡技。佛陀の聖弟子の精神的肉體的五種の卓越條件を數へたものである。【四】如來の所に於いて等第一勝支、Sāgga<sup>一</sup>の、には「信ありて、如來の覺を信ず。謂はく、「これ實に阿羅漢、正等覺、明行足……佛、薄伽梵なり」と記す。衆集經は一、比丘は如來至眞等正覺十號俱具を信ず。【五〇】詔無く等第二勝支はSāgga<sup>二</sup>の、三、詔なく、欺なく、大師及び有智の同梵行者の所に於いて、如實に自らを示す。又、衆集經一三、實直にして、詔護無し。能く是の如くんば、如來は則ち涅槃の經路を示す。【五一】少疾等第三勝支は、Sāgga<sup>三</sup>の、二、「疾少く、病少く、善消化の性にして、ガハニ器Gahani(a) supposd organ for digestion & gestation)を成就し、それは過冷又過熱に非ず、中庸を得て、勝(又は努力)にたゆむを具す」と。又衆集經は一、二、比丘無病にして、身常に安穩なり」と。【五二】勤めて精進し等第四勝支はSāgga<sup>四</sup>の、四、勤めて精進して住し、不善法を斷じつゝ、善法を成就し力あり(chāmyā), 精力ありdeja-parakkamo 善法に於いて鞭を捨てず aikhitto-dhuno kusalen dhammesu と。衆集經一四、「自ら其の心を専らにして、錯亂せず、昔、飄論する所は憶持して忘れず」と。【五三】善鞭等は、巴 Anikhitta dhura. 蓋 janik-khitta は不捨、dhura=yoke ぐ、精進專念の心持を捨てずとの謂。直ぐ前の、常に鞭を捨てずとも亦同じ。【五四】具慧安住等第五勝支はSāgga<sup>五</sup>の、五、慧あり、Pubbava, 生滅Udyattha (rise & fall)の理解に「趣くの智を成就し、こは神聖にして、鋭く、正に苦盡に趣くと」。衆集經一五、「法の生滅を觀察することに

む。故に、阿羅漢苾芻は諸漏已に盡き、復た堪能ありて、故思もて生命を斷ずること無しと名く。

(二一四) 第四無堪能處

阿羅漢苾芻は諸漏已に盡きて、復た堪能ありて、不與の物を盜心もて取り、非梵行を行じ、姦欲法を習し、正知して虚誑語を説くこと無きも、亦、爾なり。

(五) 第四無堪能處

阿羅漢苾芻は諸漏已に盡きて、復た堪能ありて、諸の欲樂の具を貯積・受用すること無しとは、謂はく、彼の因、彼の縁に由りて、諸の欲樂の具を貯積・用す。「而も」阿羅漢苾芻は諸漏已に盡くるが故に、彼の因縁に於いて已に永斷し、已に遍知すること、樹根を斷じ、多羅頂を截るが如く、後有の趣をして、不立法と成らしむ。故に、阿羅漢苾芻は諸漏已に盡き、復た堪能ありて、諸の欲樂の具を貯積・受用すること無しと名く。

(七) 第五勝支第一勝支

五勝支とは、云何が五と爲す。具壽よ、當さに知るべし、諸の聖弟子は如來の所に於いて、淨信を修植し、根生じ、安住して、沙門、或ひは婆羅門、或ひは天、魔、梵、或ひは餘の世間の爲めに、如法に引奪せられず。是れを第一勝支と名く。

第二勝支

復た次に、具壽よ、諸の聖弟子は諂無く、誑無く、淳直性の類にして、大師と有智の同梵行者との所に於いて、如實に自らを顯す。是れを第二勝支と名く。

第三勝支

復た次に、具壽よ、諸の聖弟子は少疾無病にして、等熟腹

は、廣く再生の舞臺たる地獄趣乃至天趣の舞臺そのものを含めて考へらるると同時に、趣は又能生の有情及び所生の舞臺即ち天趣等の依止處の兩方をいふが故に、結局は二者は共に同義に結すべからん。尙、この種の場合の一般としては唯「後有ををして不立法に成らしむ」といふが通規で、もし「後有に準じていへば、今の讀方は「後有をして不立法に顯成せしむ」とせば可なるべく、又、意としては如上、通ぜざるには非ざらむ。

【三】 不與の物等。E' Abhabbo khināso bhikkhu adinnam theyya-samkhattam ādātam (Rhyas D.—For an Arhat, it is impossible to take what is not given; Neumann—Es kann nicht der wohlversiegte Mönch Nichtgegebenes, was man Diebstahl nennt, sich nehmen.)

【五】 非梵行等。この譯文は諸の律の四波羅夷罪第一の場合參照。E' Abhabbo khināso bhikkhu mettunnā dhammā peṭṭasevuttam (Rhyas D.—……to commit sexual offences; Neumann—Es kann nicht der wohlversiegte Mönch der Paarung pflegen.)

【六】 正知して等。E'……sappajāna-musā bhāsitum (Rhyas D.—……to lie deliberately?); Neumann—……wissentlich eine Lüge sagen.)

【七】 諸の欲樂等。E'……sannidhi-karakaṃ kame paribhujjantū seyyathā pi pubbe agāriya-lālo (Rhyas D.—……to spend stored-up treasures in worldly enjoyments, as in the days before he left the world; Neumann—……in Ueberfluss leben wie etwa einst im Hause.)

【八】 五勝支。Sang.—S. Paṭva padhāniyagāni (Skt.—



(五)或ひは

慈愍語、

或ひは嘆

慈語

慈愍語

或ひは慈愍語、或ひは嘆慈語とは、問ふ、云何が嘆慈語なる。答ふ、且らく、慈愍の、他の慈愍に於いて、嘆慈心有り、損害心有りて、犯戒、犯見、犯軌則、犯淨命〔等〕の罪を擧するが如し。彼れの是くの如きの語を嘆慈語と名く。

問ふ、云何が慈愍語なる。答ふ、且らく、慈愍の、他の慈愍に於いて、慈愍心有り、慈愍と具にして、其の所に往至し、〔その〕所犯の戒、犯見、犯軌則、犯淨命〔等〕の罪を擧するが如し。彼れの是くの如きの語を慈愍語と名く。

——是の故に名けて或ひは慈愍語、或ひは嘆慈語と爲す。

六(二)五無堪能處

(一)第一無堪能處

五無堪能處とは、云何が五と爲す。謂はく、阿羅漢苾芻は諸漏已に盡き、〔一〕復た堪能ありて、故思もて生命を斷すること無し。〔二〕復た堪能ありて、不與の物を盜心にして取ること無し。〔三〕復た堪能ありて、非梵行を行じ、姦欲法を習すること無し。〔四〕復た堪能ありて、正知して虚誑語を説くこと無し。〔五〕復た堪能ありて、諸の欲樂の具を貯積・受用すること無し。阿羅漢苾芻は諸漏已に盡き、復た堪能ありて、故思もて生命を斷すること無しとは、謂はく、彼の因、彼の緣に由りて、故思もて生命を斷す。〔而も〕阿羅漢苾芻は諸漏已に盡くるが故に、彼の因緣に於いて、已に永斷し、已に遍知すること、樹根を斷じ、多羅頂を截るが如く、後有の趣をして、不生法と成らし

【一】或ひは慈愍語、等。Sang. S. No. 5. mettuettena vakkhāmi, no dāsaṇṇuena. (Rhyas D. — I will speak with love in my heart, not enmity. Neumann — Im Geiste der Liebe will ich reden, ohne heimliche Tücke.) 即ち「慈愍の心にて我れは語るべく、悲心にしつゝなることなけむ」(一〇)經心語(九)無慈語。A. V. 108 — mettuettēna bhassita koli 。

【二】嘆慈語。Dosaṇṇa-vācā = (words bearing anger)。

【三】慈愍語。B. Metta-citta-vācā.

【四】五無堪能處。Sang. — S. Paṭisa abhāva-ññānāni (Skt. Paṭisa abhavya-ññānāni?) (Rhyas D. — 5 impossibles; Neumann — 5 unmögliche Fälle.) 漢無。諸漏已盡の阿羅漢の諸徳圓成せる中、五を簡んであげるものである。

【五】阿羅漢等第一は、B. Abhabbo. āvuso khīṇa-savo bhikkhaṇaṇa pāpāni jīvitaṇa voropetum (Rhyas D. — For an Arhant, [it is impossible] to take life intentionally; Neumann — Es kann nicht, ihr Bruder, der wohnverlegte Mönch mit Absicht ein Wesen des Lebens berauben.)

【六】樹根等。B. Pahina uccinna-mūla tālavat-plakata anubhāvaṇṇakata (given up, with roots cut out, like a palm with its base destroyed, referred unabhā to sprout again.)

【七】後有の趣は、原に果して如何にありしか。或ひは dhammābhavaṇṇa, gotid. ともありしか。然し、何れにせよ、こは後有即ち再生 趣とも、再生と趣と(兩首經)とも西方に解しうべきなるが、已註のやうに、後有は再生そのものと、その條件としての業とを含み、その中に



引義利語

問ふ、云何が引義利語なる。 答ふ、且らく、苾芻の、他の苾芻の犯戒、犯見、犯軌則、犯淨命「等」の罪を擧するが如し。然も、他の苾芻は是くの如きの罪に於いて、未だ陳首せず、未だ發露せず、未だ顯示せず、未だ悔除せずして、或ひは餘り有るを餘り有りと云ふ。彼れの是くの如きの語を引義利語と名く。

——是の故に、名けて或ひは引義利語、或ひは引無義利語と爲す。

(四)或ひは細軟語或ひは龜獮語

或ひは細軟語、或ひは龜獮語とは、問ふ、云何が龜獮語なる。 答ふ、且らく、苾芻の、他の苾芻に於いて、恨憤を結び、兇暴の惡意を發し、是くの如きの言を作すが如し、——汝は是くの如きの所犯の罪を見る。汝は是れ惡沙門、愚鈍の沙門、無羞恥の沙門にして、難調難伏ならずや。汝は應さに是くの如きの諸の罪を陳首すべし。覆藏有ること勿れと。彼れの是くの如きの語を龜獮語と名く。

細軟語

問ふ、云何が細軟語なる。 答ふ、且らく、苾芻の、他の苾芻の所に往いて、是くの如きの言を作すが如し、——具壽よ、已に如是如是の罪を犯す。應さに陳首すべく、應さに發露すべく、覆藏すること勿れ。陳首すれば則ち安樂なり、陳首せざれば安樂ならずと。彼れの是くの如きの語を細軟語と名く。

——是の故に、名けて或ひは細軟語、或ひは龜獮語と爲す。

【三】或ひは細軟語。巴。No.3. Sapphavaṇṇa no pharuseṇa. (Rhys D.-I will speak mildly, not roughly; Neumann-Besinnigend will ich reden, nicht verletzend.)。即ち「穩かに我れは語るべく、龜惡ならずらむ」と。衆集經(一〇)和言發(九)虛言發。A. V. 193—sapphā bhāsita loṭi ||

【五】龜獮語。巴。Pharusa vāṇa.

【三】細軟語。巴。Sapphavaṇṇa.

時語

復た堪能有りて他の言論を受け、未だ受具せざる精特伽維の現在前して住すること無き「等の」如し。是れを外の時と名く。

此の中には、所有の内の時、外の時を、總じて略して一數と爲し、之れを時と爲し、是くの如き時の語を名けて時語と爲す。

——是の故に、名けて或ひは時語、或ひは非時語と爲す。

(二)或ひは實語或ひは不實語

或ひは實語、或ひは不實語とは、問ふ、云何が<sup>三</sup>不實語なる。答ふ、且らく、苾芻の他の苾芻の不見、不聞、不疑の犯戒、犯見、犯軌則、犯淨命「等」の罪を擧するが如し。彼れの是くの如きの語を不實語と名く。

實語

問ふ、如何が<sup>三</sup>實語なる。答ふ、且らく、苾芻の、他の苾芻の、實に見、實に聞き、實に疑ある犯戒、犯見、犯軌則、犯淨命「等」の罪を擧するが如し。彼れの是くの如きの語を名けて實語と爲す。

(三)或ひは引義利語

或ひは引無義利語

——是の故に、名けて或ひは實語、或ひは不實語と爲す。

或ひは引義利語、或ひは引無義利語とは、問ふ、云何が引無義利語なる。答ふ、且らく、苾芻の、他の苾芻の犯戒、犯見、

犯軌則、犯淨命「等」の罪を擧するが如し。然も、他の苾芻は是くの如きの罪に於いて已に陳首し、已に發露し、已に顯示し、已に悔除して、實に餘り無きに餘り有りと云ふ。彼れの是くの如きの語を引無義利語と名く。

【二〇】或ひは實語等。B<sup>1</sup> Bhūtena vakkhāmi, no abhūtena (Rhyas D.—I will utter what is true, not what is fictitious; Neumann.—Zur Sache will ich reden, nicht unsachlich.)—「事實にまづいて我れは語るべく、事實なざるにまづかるべし」云。衆集經—(一〇)實發。(九)廣發。A. V. 198—sacca bhassita hoti 〃。

【二一】不實語。B<sup>1</sup> Abhūta-vācā (A. V. 198)。

【二二】實語。B<sup>1</sup> Bhūta-vācā (A. V. 198)。

【二三】或ひは引義利語等。B<sup>1</sup> No. 4. Attha-samphitena vakkhāmi, no anuttha-samphitena (Rhyas D.—I will speak from a desire for his good, not for his hurt; Neumann.—Zu Nutzen will ich reden, nicht zu Schaden.)—即ち「義相應にして、我れは語るべく、非義相應なるべからず」と。衆集經—(一一)義發。(九)非義發(共に第三位)。A. V. 198—atthasamphitā bhāsitā hoti 〃。

外の非時

纏ぜられ、或ひは劇苦に遭ひ、或ひは重病有り、或ひは復た他と言論すること能はざる「等の」如し。是れを、内の非時と爲す。

外の非時とは云何。答ふ、且らく、他の罪を擧する苾芻の舉せむと欲する所の者が、或ひは貪纏に纏ぜられ、或ひは瞋纏に纏ぜられ、或ひは癡纏に纏ぜられ、或ひは劇苦に遭ひ、或ひは重病有り、或ひは復た他の言論を受くること能はず、或ひは未だ受具せざる補特伽羅の現在前して住する「等の」如し。是れを外の非時と名く。

非時語

此の中には、所有の若しは内の非時、若しは外の非時を、總じて略して一數と爲して非時と爲し、是くの如き時の語を非時語と名く。

時語

問ふ、云何が時語なる。答ふ、二種の時あり。一には内、二には外なり。

内の時

内の時とは云何。答ふ、且らく、他の罪を擧する苾芻の、貪纏に纏ぜらるゝに非ず、瞋纏に纏ぜらるゝに非ず、癡纏に纏ぜらるゝに非ず、劇苦無く、重病無く、復た堪能有りて他と言論する「等の」如し。是れを内の時と名く。

外の非時

外の時とは云何。答ふ、且らく、他の罪を擧する苾芻の舉せむと欲する所の者が、貪纏に纏ぜらるゝに非ず、瞋纏に纏ぜらるゝに非ず、癡纏に纏ぜらるゝに非ず、劇苦無く、重病無く、

【二九】或ひは未だ受具せざる等は、「未だ具足戒を受けぬものとは、共に二・三宿すべからず」(例へば四分律、波逸提五)、又、「共に佛經を誦すべからず」(同、六)、乃至「これに向つて他人の罪を説くべからず」(同七)等といふが佛教々團の定めなるに由る。



可樂の果あり、可喜の果あり、可意の果あり、適意の果あり、  
悦意の果あるを以つてなり。「乃至、又」、是くの如きの法は可  
愛の異熟あり、可樂の異熟あり、可喜の異熟あり、可意の異熟  
あり、適意の異熟あり、悦意の異熟あるを以つてなり。——是  
の故に、名けて戒圓滿と爲す。

(五)見圓滿

見圓滿とは云何。答ふ、諸所有の見の、施與有り、祠祀有り、  
愛樂有り、——乃至、廣く説く。又、諸所有の善の見、若しは  
諸所有の如理所引の見、若しは諸所有の定を障礙せざるの見、  
——是くの如きの一切を見圓滿と名く。

問ふ、何の故に、名けて見圓滿と爲すや。答ふ、是くの如き  
の法は是れ可愛、——廣く説いて、乃至、悦意の異熟あるを以  
つてなり。——是の故に、名けて見圓滿と爲す。

五(五)五語路

五語路とは、云何が五と爲す。一には或ひは時語、或ひは非時  
語、二には或ひは實語、或ひは不實語、三には或ひは引義利語或  
ひは引無義利語、四には、或ひは細軟語、或ひは龜獮語、五には  
或ひは慈愍語、或ひは瞋恚語なり。

或ひは時語或ひは非時語とは、問ふ、云何が非時語なる。  
答ふ、二種の非時有り。一には内、二には外なり。

内の非時とは云何。答ふ、且らく、他の罪を擧する苾芻の、  
或ひは貪纏に纏ぜられ、或ひは瞋纏に纏ぜられ、或ひは癡纏に

【二】見圓滿、*Dṛṣṭi-samp (Dṛṣṭhi-samp)*。

【二五】五語路、今の *Saṅgīti* には「擧罪比丘の他を  
擧せんと欲するときは、自らの邊に於いて五法を留意  
し、他を擧すべし」と長文に作るも、蓋し、今の五語  
路の當字は *Paṭisa vācamaṭṭhā* (M. 21. ka'vācama  
sutta I, p. 126.) = 中阿含一九三、牟梨破群那經)なり  
しなるべし。その意は、*Saṅgīti* の文の如く、人の犯罪  
(即ち、犯戒)を、公唱擧説する場合に、擧説者の五項  
の注意ともいふべきをあげたものである。

【二六】或ひは時語等。即ち *Kālena vakkhami no  
akālena* (Rhys D.-I will speak at a timely mo-  
ment, not at untimely moment; Neumann-Zur  
Zeit will ich reden, nicht unzeitig.) 即ち「正」時  
に我れは語るべく、非時ならざる意。衆集經(一〇)時  
發(九)非時發。A. V. 188—*Kālena bhāsita loṭhi* =  
【二七】内とは *Abhāyama* (Ajjhatta) なるべく、即ち  
「自身」の意。

【二八】外は準に *Bahirattha* (Bahiddha) なるべく、  
自己以外の意。

名 義

り。謂はく、王の故、賊の故、火の故、水の故、怨の故に非ざるなり。又、財寶多きも、亦、名けて財富圓滿と爲すことを得。

——是くの如きを名けて財富圓滿と爲す。

問ふ、何の故に、名けて財富圓滿と爲すや。 答ふ、是くの

如きの法は可愛、可樂、可喜、可意にして、餘は前に説くが如くなるを以つてなり。

(三) 無病圓滿

二 無病圓滿とは云何。 答ふ、若し身中に於いて是くの如きの

病無きなり。謂はく、頭痛等廣く説くこと 三 前の如し。又、此の

身中に、諸の疹疾無きも、亦、名けて無病圓滿と爲すことを得。

——是くの如きを名けて無病圓滿と爲す。

問ふ、何の故に名けて無病圓滿と爲すや。 答ふ、是の如き

の法は是れ可愛等廣く説くこと前の如きを以つてなり。

(四) 戒圓滿

三 戒圓滿とは云何。 答ふ、斷生命を離るゝと、不與取を離る

ると、欲邪行を離るると、虚誑語を離るゝと、離間語を離るゝ

と、龜惡語を離るゝと、雜穢語を離るゝとなり。又、諸所有の善

の戒、若しは諸所有の如理所引の戒、若しは、諸所有の定を障

礙せざる戒、是くの如きの一切を、戒圓滿と名く。

名 義

問ふ何の故に、名けて、戒圓滿と爲すや。 答ふ、是くの如き

の法は可愛、可樂、可忍にして、救護有り、違損無く、意に稱

可するを以つてなり。「又」、是くの如きの法は可愛の果あり、

【二】 無病圓滿・Arogya-samp (Skt = pati) (Rhyas D. — Prosperity in health; Neumann — Gewinn von Gesundheit.)

【三】 前の如しとは、本論では前に詳説なし。法蘊足論卷六・聖諦品十中を参照すべし。

【三】 戒圓滿・Sila-samp (Sila = samp) (Rhyas D. — Prosperity in Virtue; Neumann — Gewinn an Tugend.)

の如きの法は非可愛の<sup>一六</sup>異熟あり、非可樂の異熟あり、非可喜の異熟あり、非可意の異熟あり、非適意の異熟あり、不悅意の異熟あるを以つてなり。——是の故に、名けて戒損減と爲す。

(五)見損減

<sup>一七</sup>見損減とは云何。答ふ、諸所有の見の、施與無く、祠祀無く、愛樂無く、乃至、廣く説く。又、諸所有の不善の見、若しは諸所有の非理所引の見、若しは諸所有の定を障礙する見、——是くの如きの一切を見損減と名く。

見損減と名く所以

問ふ、何の故に、名けて見損減と爲すや。答ふ、是くの如きの法は可愛に非ず、——廣く説いて、乃至、不悅意の異熟あるを以つてなり。是の故に、名けて見損減と爲す。

四(二)五圓滿

(一)親屬圓滿

<sup>一八</sup>五圓滿とは云何が五と爲す。一には親屬圓滿、二には財富圓滿、三には無病圓滿、四には戒圓滿、五には見圓滿なり。

<sup>一九</sup>親屬圓滿とは云何。答ふ、若し親屬有りて、諸の災害無きなり。謂はく、王の故、賊の故、火の故、水の故、死の故に非ざるなり。又、親屬多きも、亦、名けて親屬圓滿と爲すことを得。——是くの如きを名けて親屬圓滿と爲す。

名義

問ふ、何の故に、名けて親屬圓滿と爲すや。答ふ、是くの如きの法は可愛、可樂、可忍にして、救護有り、違損無く、意に稱可するを以つてなり。是の故に、名けて親屬圓滿と爲す。

(二)財富圓滿

財富圓滿とは云何。答ふ、若し財富有りて、諸の災害無きな

【一】異熟、Viyaṅka一同上。

【二】見損減、Dṛṣṭi-ry. (Dṛiṭhi-ry) (Rhyas D.—Loss of sound opinions; Neumann—Verlust an Erkenntnis.) 右と同様、卷三、(頁見下を参照せよ。

【三】五圓滿、Pañca sampadā (Skt.=pañi) (Rhyas D.—5 kinds of prosperity; Neumann—5 Arten von Gewinn.) 蓋し、sāmpadāとは成就、又は具足 attainment の意で、今はこれを圓滿と譯したもの、上に準じて知れ。

【四】親屬圓滿、Jātī-samp. (Nāti-samp.) (Rhyas D.—Prosperity in kindred; Neumann—Gewinn von Verwandten.)

【五】財富圓滿、Bhoga-samp. (Skt.=pālī.) (Rhyas D.—Prosperity in wealth; Neumann—Gewinn von Besitzthum.)



財富損減と爲す所以

——是くの如きを名けて、財富損減と爲す。

問ふ、何の故に、名けて財富損減と爲すや、 答ふ、是くの如きの法は可愛に非ず、可樂に非ず、可喜に非ず、可意に非ず——餘は前に説くが如くなるを以つてなり。

(三) 病損減

病損減とは云何。答ふ、若し身中に於いて、是の如きの病に遭ふなり。謂はく、頭痛等——廣く説くこと。前の如し、又、此の身中に、多く疹疾有るも、亦、名けて病損減と爲すことを得。——是くの如きを名けて病損減と爲す。

病損減の義

問ふ、何の故に、名けて病損減と爲すや。 答ふ、是くの如きの法は可愛に非ず——等廣く説くこと、前の如くなるを以つてなり。

(四) 戒損減

戒損減とは云何。 答ふ、害生命と、不與取と、欲邪行と、虚誑語と、離間語と、龜惡語と、雜穢語となり。又、諸所有の不善の戒、若しは諸所有の非理所引の戒、若しは諸所有の定を障礙するの戒なり。——是くの如きの一切を戒損減と名く。

戒損減と名くる所以

問ふ、何の故に、名けて戒損減と爲すや。 答ふ、是くの如きの法は、可愛に非ず、可樂に非ず、可忍に非ず、救護無く、違損有り、不可意なるを以つなり、「又」、是くの如きの法は非可愛の果あり、非可樂の果あり、非可喜の<sup>一五</sup>果あり、非可意の果あり、非適意の果あり、不悅意の果あるを以つてなり。「乃至、又」、是く

【一三】 病損減 (Roga-vy. (? Skt. = pāṇi) (Rhyas D.—Loss of disease; Neumann—Verlust durch Krankheit.) 今の漢原典には上に準じて無病損害に作るも、それは誤。以下も準ず。

【一四】 前の如しとは、前には曾つてこの記なし。但し、法蘊足論卷六等参照。

【一五】 戒損減 (Sīla-vy. (Sīla-vy.) (Rhyas D.—Loss of character; Neumann—Verlust an Tugend.)

【一六】 果 (Phala, 第三卷・二法品・一八・廣戒・廣見下等参照。

(五)身壞命終して當きに善趣・天上に生ずべしと説く。

(五)身壞命終して當きに善趣・天上に生ずべしと説く。

く、闡譯無き等の縁に由るが故に、十方に善名流布すと説く。  
云何が 身壞命終して、當さに善趣・天上に生ずべしなる。

答ふ、諸有の能忍の補特伽羅の、能忍の因縁により、多く、増上の身妙行・語妙行・意妙行を行じ、彼れは増上の身・語・意の妙行を行じ已つて、身壞命終して、當さに善趣・天世界中に生じ、諸の妙樂を受くべし。故に、身壞命終して當さに善趣・天上に生ずべしと説く。

## 三(三)五損減

五損減とは云何が五と爲す。一には親屬損減、二には財富損減、三には 病損減、四には戒損減、五には見損減なり。

(一)親屬損減

親屬損減とは云何。答ふ、若し親屬有りて諸の災害に遭ふなり。謂はく、王に由るが故に、賊の故に、火の故に、水の故に、死の故に。又、親屬の少きも亦、名けて親屬損減と爲すを得。  
——是くの如きを名けて親屬損減と爲す。

親屬損減の意義

問ふ、何の故に、名けて親屬損減と爲すや。答ふ、是くの如きの法は可愛に非ず、可樂に非ず、可忍に非ず、救護無く、違損有りて、不可意なるを以つてなり。是の故に、名けて親屬損減と爲す。

(二)財富損減

財富損減とは云何。答ふ、若し財富有りて諸の災害に遭ふなり。謂はく、王に由るが故に、賊の故に、火の故に、水の故に、怨の故に。又、財寶の少きも、亦、名けて財富損減と爲すを得。

【一】身壞命終等。Sang. S. = A. — Kāyama dheda parāṃ maraṇaṃ sugatim saggaṃ lokam upapajjati (Rhys D. — He is reborn to a happy destiny in a bright world; Neumann — Bei der Auflösung des Körpers, nach dem Tode, auf gute Fährte gerathen, in himmlische Welt.)

【二】五損減。Pañca vyasanāṇi (? Skt. = pali) (Rhys D. — 5 kinds of losses; Neumann — 5 Arten von Verlust.)。損減 Vyasaṇa とは損失、不幸等の意で、その五種を列記したものである。

【三】病損減は原漢譯には無病損害と作るも誤。

【四】親屬損減。Jāti-vy. (Nati-vy.) (Rhys D. — Loss of kinsfolk; Neumann — Verlust von Verwandten.)。

【五】財富損減。Bhoga-vy. (? Skt. = pali) (Rhys D. — Loss in wealth; Neumann — Verlust von Reichtum.)。

## 卷の第十三

### (四) 諸の五法の二の二

(一) 五能忍  
功德

五能忍功德とは、一には不暴惡、二には不憂悔、三には衆生の愛樂す、四には十方に善名流布す、五には身壞命終して、當に善趣・天上に生ずべし——なり。

(一) 不暴惡  
云何が 不暴惡なる。答ふ、諸有の能忍の補特伽羅の、能忍の因縁により、刀杖を集せず、損害を爲さざるを不暴惡と名く。

(二) 不憂悔  
云何が 不憂悔なる。答ふ、諸有の能忍の補特伽羅の能忍の因縁により、身妙行を行じ、語妙行を行じ、意妙行を行じ、彼れは身・語・意の妙行を行じ已りて、憂悔を生ぜず、身心の清涼なるを不憂悔と名く。

(三) 衆生の愛樂す  
云何が 衆生の愛樂する。答ふ、諸有の能忍の補特伽羅の、能忍の因縁により、罵に罵を反さず、嗔に嗔を反さず、打に打を反さず、害に害を反さず、弄に弄を反さず、此れに由りて衆生皆な愛樂するとき、彼れは是くの如く罵を反さざる等の縁に由るが故に、衆生の愛樂すと名く。

(四) 十方に善名流布す  
云何が 十方に善名流布する。答ふ、諸有の能忍の補特伽羅の能忍の因縁により、常に鬭諍無く、相ひ言訟・輕弄・毀蔑せず、此れに由りて、十方に善名流布するとき、彼れは是くの如

【一】 諸の五法等、原漢典には五法品第六の三に作る。

【二】 五能忍功德。Sang.—S. Paṭṭa añisaṃsaṃ sila-vuto sīla-sampadīya (Rhyas D.—5 advantages to the moral man through his success in virtuous conduct; Neumann 5 Forderungen für einen Tüchtigen durch sein Gethöhen an Tugend; A. V. 216—1 Paṭṭa añisaṃsaṃ kṛantīya. (忍者の五利益) 即ち、今のと同等) 上に準じて知るべし。

【三】 不暴惡。A. V. 216. akudḍho=one who is not angry に當らむ。Sang.—ち、は前條に準ず。以下も同様。

【四】 不憂悔。A. V. 216. avippetisari=non-follow-er of fault, or one who is not remorseful.

【五】 衆生の愛樂す。A. Bahuno janasas piyo hoti manāpo' (多衆の愛し、樂ぶ所たり)。

【六】 十方に等。Sang.—S. Kalyāṇo kitti-saddo abhayaṃceti (善名聲公布す)。



す。故に、憂悔と名く。

(三)衆生の  
愛せず樂  
ばず

云何が 衆生の愛せず、樂ばずなる。答ふ、諸の不能忍補

特伽羅の、不忍の因縁によりて、若しは他の罵を被りて、即ち還つて罵を反し、若しは他の嘖を被りて即ち還つて嘖を反し、若しは他の打を被りて即ち還つて打を反し、若しは他の害を被りて即ち還つて害を反し、若しは他の弄を被りて即ち還つて弄を反し、此れに由りて、衆生の愛せず、樂ばざるゝとき、彼れは是くの如く罵等を反すの縁に由るが故に、衆生の愛せず・樂ばずと説く。

(四)十方に  
惡名流布  
す

云何が 十方に惡名流布する。答ふ、諸の不能忍補特伽

羅の不忍の因縁にて、常に與に鬪諍し、好んで相ひ言訟し、輕弄し、毀蔑し、此れに由りて惡名十方に流布するとき、彼れは是くの如き鬪諍等の縁に由るが故に、十方に惡名流布すと説く。

(五)身壞命  
終して當  
さに惡趣  
地獄に墮  
すべし

云何が 身壞命終して當さに惡趣・地獄に墮すべしなる。答

ふ、諸の不能忍補特伽羅の、不忍の因縁にて、多く、増上の身惡行、語惡行、意惡行を行じ、彼れは増上の身・語・意の惡行を行じ已りて、身壞命終して、當さに惡趣・大地獄中に墮し、諸の劇苦を受くべきが故に、身壞命終して當さに惡趣・地獄に墮すべしと説く。

じく五不認過患) = A. V. 216. 諸の忍耐心なき人のな同す所行及びその運命の五種のこゝ。

【三】暴惡、サムギーテイ經はこれなく、その代りに失多財ををく。毘崩伽論は II. Vessahuto = rich in enemy or hostility 下に當るべく、又 A. V. 216 は III. Kudhlo = angry これに當るか。

【三】憂悔 Saṅg. - S. には缺。毘崩伽論は III. Vajjabahuto = rich in fault. 又 A. V. 216. III. Vipparisāri = follower of fault. これに當らむ。

【三】衆生の愛せず、樂ばず、Saṅg. - S. III. 或は刹帝利衆、或は婆羅門衆、或は居士衆、或は沙門衆に於て善巧なく、喜足し得ず等といふに望めて見るべきか。毘崩伽論及び A. V. 216. は I. Bahuno jannassa appiyo hoti amanāpo (衆人の愛せず又喜ばず) に當る。

【三】十方に等、Saṅg. - S. II. Pāpako kitti-suddo abhūgacchati (罪評流布す) に當る。毘崩伽論及び巴増一はこれ無し。

【三】身壞命終等、巴利諸傳一致して記す。曰、Kāyassa bhedā parimā maraṇā apāyana duggatā vinipātān nityam uppijjetī (Rlys D. - On the dissolution of the body after death, he is reborn into an unhappy state, an evil destiny, a downfall, purgatory; Neumann - Bei der Auflösung des Körpers, nach dem Tode, abwärts gerathen, auf schlechte Fährte, zur Tiefe hinab, in höllische Welt.)

附記 - Saṅg. - S. は以上の外、四 Sammūlho kālaṃ karoti = to die bewildering or without confidence といふをそへて五とし(右註(一三九)参照)、毘崩伽及び巴増一(巴)もまたこれを記す。

謂はく、不忍と、及び、忍と、損減と、圓滿と、

語路と、無能處と、

勝支と、解脫想と、

解脫處と、根と、力と、

不還と、及び、淨居と、

出離界との、各五あるなり。

#### 第二の五法十

#### 一(一)五不忍過失

五不忍過失、五能忍功德、五損減、五圓滿、五語路、五無堪能處、五勝支、五成熟解脫想、五解脫處、五根、五力、五不還、五淨居天、五出離界有り。

五不忍過失とは、云何が五と爲す。一には暴惡、二には憂悔、三には衆生の愛せず、樂ばず、四には十方に惡名流布す、五には身壞命終して當さに惡趣・地獄に墮すべし、——なり。

#### (一)暴惡

云何が暴惡なる。答ふ、諸の不能忍補特伽羅の、不忍の因緣によりて、諸の刀杖を集めて損害を爲すことを樂ふなり。故に、暴惡と名く。

#### (二)憂悔

云何が憂悔なる。答ふ、諸の不能忍補特伽羅の、不忍の因緣によりて、身惡行を行じ、語惡行を行じ、意惡行を行じ、彼れは身・語・意の惡行を行じ已りて、多く憂悔を生じ、身心熱惱

【一三】五無堪能處。Sang. — S. V. 10. 漢二經無。D. 29. Pañāśika-suttanta 26 (III. 138) = 長阿含一七・清淨經。

【一七】五勝支。Sang. — S. V. 16. 衆集經五・八。大集法門經無。A. V. 53 (III. 65); M. 85 (II. 95); M. 90 (II. 128) = 中阿含二二・一切智經。

【一八】五成熟解脫想。Sang. — S. V. 26. 衆集經五・一。A. V. 62 (III. 79); cf. A. V. 72 (III. 85f)

【一九】五解脫處。Sang. — S. V. 25. 衆集經五・一四。大集法門經五・一。A. V. 26. (III. 21.)

【二〇】五根。Sang. — S. V. 23. 衆集經五・六。大集法門經五・四。cf. A. V. 2 (III. 27); A. I. 20, 22 (I. 39); III. 152. (I. 297); IV. 162, 2. (II. 149)

【二一】五力。Sang. — S. V. Wanting. 衆集經五・十。大集法門經五・八。A. V. 2 (III. 278)。

【二二】五不還。Sang. — S. V. 18. 衆集經五・一五。大集法門經五・一四。A. III. 86, 3 (II. 233); VII. 16, 4, 17, 4. (IV. 14—15); X. 63, 3 (V. 120); S. 46, 3, 18. (V. 70); S. 48, 15 (V. 201) &c; Pugala-pañhetti I. 42—46.

【二三】五淨居天。Sang. — S. V. 17. 衆集經無。大集法門經五・一三。D. 14, 3, 31 (II. 52) = 長阿含一・大本經。M. 120 (III. 103) = 中阿含一六八・意行經。

【二四】五出離界。Sang. — S. V. 24. 衆集經五・一三。大集法門經五・一〇。A. V. 200 (III. 245)

【二五】五不忍過失。Sang. — S. Pañca ādinavā dussajjasa sila-vipattiya = A. V. 213. (Rūps D. — 5 dussajjasa; Kamm. un. 5 Kūmmernisse für einen Un-tüchtigen durch sein Abweichen von Tugend; Vibhāṅga — Pañca akkhantiyā ādinavā. (即 4 今と

順上分結

順上分結とは、下分とは、謂はく、欲界なり。上分とは、謂はく、色・無色界なり。

掉舉順上分結

此の掉舉の未斷未遍知なるに由るが故に、便ち、色・無色界に往き、色・無色界に生じ、色、無色界の生を結ぶ。故に、掉舉順上分結と名く。

(四)慢順上分結

慢順上分結とは、慢とは云何。答ふ、色・無色界繫の修所斷の法に於ける諸の慢、特執、慢の性、心の高舉、心の輕蔑、是れを慢と名く。

順上分結

順上分結とは、廣く説くこと、前の如し。

(五)無明順上分結

無明順上分結とは、無明とは云何。答ふ、色・無色界繫の修所斷の法に於ける諸の無智、愚癡、無明、黑闇、是れを無明と名く。順上分結とは、下分とは、謂はく、欲界なり。上分とは、謂はく、色・無色界なり。

無明順上分結

此の無明の未斷未遍知なるに由るが故に、便ち、色・無色界に往き、色・無色界に生じ、色・無色界の生を結ぶ。故に、無明順上分結と名く。

# 110 (三)諸の五法の二の1

五法品唱陀南

後の唱陀南に曰はく、――

後の五法は十四なり。

【12】慢順上分結 Māna-ūrdh-sany (No. 3) Māna-udd-sany (Rhy D. - Conceit; Neumann - Dinkel) 衆集經一四・慢。

【13】慢 Māna, cf. Dhammasangani 1116.

【14】無明順上分結 Avidyā-ūrdh-sany (Avijjā-udd-sany) (Rhy D. - Ignorance; Neumann - Nichtwissen) 衆集經一三・無明。

【15】無明 Avidyā (Avijjā)。

【16】(三)諸の五法等、原漢典にはなし。今、新に加へたもの。

【17】五不忍過失 Sang. - S. cf. V. 13. 漢二經無。A. V. 216 (III. 255); V. 213 (III. 252f); Vibhanga p. 378.

【18】五能忍功德 Sang. - S. cf. V. 14. 漢二經無。A. V. 216 (III. 255); V. 213 (III. 252)

【19】五損減 Sang. - S. V. 11. 漢二經無。A. V. 130 (III. 147); Vibhanga p. 378.

【20】五圓結 Sang. - S. V. 12. 漢二經無。A. V. 130 (III. 147)。

【21】五語路 Sang. - S. V. 15. 衆集經五・九・一〇。大集法門經無。A. V. 198 (III. 243) cf. A. V. 167 (III. 196); M. 21. Kakāpūpamānta (I. 126) = 中阿含一・九三・半黎破郡那經。



には無色貪順上分結、三には掉舉順上分結、四には慢順上分結、五には無明順上分結なり。

(一) 色貪順上分結

色貪順上分結とは、色貪とは云何。答ふ、色界繫の修所斷の法に於ける諸の貪、等貪、執藏、防護、耽著、貪愛、是れを色貪と名く。

順上分結

順上分結とは、下分とは、謂はく、欲界なり。上分とは、謂はく、色・無色界なり。

此の色貪の未斷未遍知なるに由るが故に、便ち、色界に往き、色界に生じ、色界の生を結ぶ。故に、色貪順上分結と名く。

(二) 無色貪順上分結

無色貪順上分結とは、無色貪とは云何。答ふ、無色界繫の修所斷の法に於ける諸の貪、等貪、執藏、防護、耽著、貪愛、是れを無色貪と名く。

順上分結

順上分結とは、下分とは、謂はく、欲界なり。上分とは、謂はく、色・無色界なり。

無色貪順上分結

此の無色貪の未斷未遍知なるに由るが故に、便ち、無色界に往き、無色界に生じ、無色界の生を結ぶ。故に、無色貪順上分結と名く。

(三) 掉舉順上分結

掉舉順上分結とは、掉舉とは云何。答ふ、色・無色界繫の修所斷の法に於ける諸の不寂靜、不極寂靜、掉舉生の性、等掉舉生の性、心躁擾の性、是れを掉舉と名く。

【一〇八】色貪順上分結。Rūparāga-ūrdh-samy (Rūparāga-ud-samy). (Rhs D.—Just after rebirth in rūpa world; Neumann — Reiz an Form [als emporzerrende Fesseln.]) 衆集經一色愛。

【一〇九】色貪。Rūparāga.

【一一〇】修所斷。Bhāvanāpeliṭṭavya or Bh-leṭṭa, (Bhāvanāpeliṭṭabho) 第二卷・二法品・一〇・作意善巧下を見よ。

【一一一】順上分結。Urdhva bhāgya samyojana (Uddham bhāgya samyojana)。

【一二】無色貪順上分結。Arūparāga-ūrdh-samy (Arūparāga-uddh-samy). (Rhs D.—Just after rebirth in arūpaworlds; Neumann — Reiz ohne Form.) 衆集經一無色愛。

【一三】無色貪。Arūparāga.

【一四】掉舉順上分結。Auddhatya-ūrdh-samy. (No. 4) Uddhacca-uddh-samy. (Rhs D. — Excitement; Neumann — Stolz.) 衆集經一五・掉。本卷初、五蓋の下參照。

【一五】掉舉。Auddhatya (Uddhacca)。

て、我<sup>九九</sup>或ひは、我所<sup>一〇〇</sup>を、等隨觀見<sup>一〇一</sup>し、此れより起る<sup>一〇二</sup>。忍<sup>一〇三</sup>、欲<sup>一〇四</sup>、慧<sup>一〇五</sup>、觀<sup>一〇六</sup>、見<sup>一〇七</sup>、是れを有身見と名く。順下分結は、廣く説いて、前の如し。

(四)戒禁取  
順下分結

戒禁取順下分結とは、戒禁取とは云何。答ふ、一類有るが如し、戒<sup>一〇八</sup>を執取して謂はく、此の戒に由れば、能く清淨、解脫、出離を得、諸の苦樂を超え、及び、能く超苦樂處を證得すと。復た一類有り、禁<sup>一〇九</sup>を執取して謂はく、此の禁に由れば、能く清淨、解脫、出離を得、諸の苦樂を超え、及び、能く超苦樂處を證得すと。或ひは一類有り、戒と禁とを執取して謂はく、戒と禁とに由りて、能く清淨、解脫、出離を得、諸の苦樂を超え、及び、能く超苦樂處を證得すと、是れを戒禁取と名く。順下分結は、廣く説いて、前の如し。

(五)疑順下  
分結

疑順下分結とは、疑とは云何。答ふ、佛・法・僧、及び苦・集・滅・道に於いて、疑惑を生起し——廣く説いて、乃至、現に一趣に非ざる、是れを疑と名く。

順下分結

順下分結とは、下分とは、謂はく、欲界、上分とは、謂はく、色・無色界なり。

此の疑の未斷未遍知なるに由るが故に、便ち、欲界に往き、欲界に生じ、欲界の生を結ぶ。故に、疑順下分結と名く。

一〇、五順上分  
結

五順上分結とは、云何が五と爲す。一には色貪順上分結、二

【九九】我、Ātman (Atta) 一切迷執の根本となるべき意味のそれで、古來、常・一・主宰の三をその屬性とすと解説さる。即ち、個體そのもの又はその中にある我なるものが常なり、一なり、主宰的意義ありと執し、彼此より自らを簡んで、完く別のものと見るが故に、これが根本となりて、一切の迷執煩惱は生ずと解するものである。

【一〇〇】我所、Ātmanīya (Attānīya) 我に屬するもの。  
【一〇一】等隨觀見、Samannupāsati (Samannupassati) — Dhammasangani — 1003 &c.) = to see, perceive, regard.  
【一〇二】忍、Kāṇṭhi (Skt.), 忍可し、認める作用。  
【一〇三】戒禁取、Śīlavrataparāmarśa (No. 3) Śīlabhata Parāmarśa (Rhyas D. — Wrong judgement as to rules and ritual; Neumann — Stich Khammern an Tugendwerk.) 衆集經 — 二・戒盜結、大集法門經 — 四・戒禁取煩惱分結 (cf. 法僧伽尼論 — 1005)。  
【一〇四】戒、Sīla (Sīla), 第二卷・於善不喜足 (二法品 — 四) 下等參照。  
【一〇五】禁、Vrata (Bata or vata) 同上。  
【一〇六】疑、Vicikitsā (No. 2) Vicikicchā (Rhyas D. — Doubt; Neumann — In Schwancken Gerathen.) 衆集經 — 三・疑結、大集法門經 — 五・疑煩惱分結 (cf. Dhammasangani 1004.)。

【一〇七】五順上分結、Pañca-uddhavaḥāgiya-samyojanāni (Pañc' uddham-bhāgiyāni samyojanāni or saññojanāni) (Rhyas D. — 5 fetters as to upper world; Neumann — 5 empörerende Fesseln.) 衆集經 — 一五上結、大集法門經 — 缺、その意義につては上の五順下分結に準じて知るべし。

「未だ降伏せず、未だ永害せず」

### 九、五順下分結

られ已つて、水澆せらるゝとき、彼れは縛せられ、甚縛せられ、極縛せらるゝと名くるが如く、是くの如く、後の勝所作有る者の、彼れの、此の界に於いて、未だ劬勞を作さず、未だ諸の結を斷ぜずんば、心、便ち縛せられ、甚縛せられ、極縛せらるゝなり。「未だ降伏せず、未だ永害せず」と言ふは、謂はく、未斷未週知なり。

五順下分結とは、云何が五と爲す。一には欲食順下分結、二には瞋恚順下分結、三には有身見順下分結、四には戒禁取順下分結、五には疑順下分結なり。

### (一) 欲食順下分結

欲食順下分結とは、欲食とは云何。答ふ、諸の欲の境に於ける諸の食、等食——廣く説いて——乃至食の類、食の生なる、是れを欲食と名く。

### 順下分結

順下分結とは、下分とは、謂はく、欲界、上分とは、謂はく、色・無色界なり。

此の欲食の、未斷未週知なるに由るが故に、便ち、欲界に往き、欲界に生じ、欲界の生を結ぶ。故に、欲食順下分結と名く。

### (二) 瞋恚順下分結

瞋恚順下分結とは、瞋恚とは云何。答ふ、諸の有情に於いて、損害を爲さむことを欲し——廣く説いて——乃至、現に過患を爲す、是れを瞋恚と名く。順下分結は、廣く説いて前の如し。

### (三) 有身見順下分結

有身見順下分結とは、有身見とは云何。答ふ、五取蘊に於い

【九】 五順下分結、Paṭca avarabhiṅgya-samyojanāni (Paṭo' orumbhāgyani samyojanāni) (Rhyas D.—5 fetters as to lower worlds; Neumann—Fünf niedrigeren Fesseln.) 衆集經—五下分結、大集法門經—五種煩惱分結。蓋し、結 Samyojana とは例により煩惱の異名にして、又下分とは欲界のことを上二界に對して名け、かくして五順下分結とは五個の煩惱で、これを遠離せず、その影響下にあるときは、我らをして、欲界にいつまでも生じ、住し、結びつくをいふ。

【註】 欲食—Kāmacchanda (Skt = pāhi, [No. 4]) (Rhyas D.—Sensuality; Neumann—Wunschesswille.) 衆集經—四・貪欲結、大集法門經—一・樂欲煩惱分結。

【六】 順下分結、Avarabhiṅgya-samyojana (Orumbhāgya samyojana or saññojana) (avara = lower or inferior, bhāgya = belonging to or connected with.)

【七】 瞋恚—Pratiṅgha or Vyāpāda (No. 5.) Vyāpāda (Rhyas D.—Malevolence; Neumann—Hassensgno.) 衆集經—五・瞋恚結、大集法門經—二・瞋恚煩惱分結。

【八】 有身見—Sakkāyaditthi (No. 1.) Sakkāyaditthi (Rhyas D.—Error of permanent entity; Neumann—Persönlichkeit glauben.) 衆集經—一・有身見結、大集法門經—三・有身見煩惱分結 (cf. Dhammasaṅgani 1003).



類あるが如し、唯だ戒禁を得て便ち喜足を生じ、或ひは復た、乃至、唯だ少分の死生智通を證して、便ち喜足を生ずる、是くの如き等を、「少小の證得」と名く。

「後時の所作の勝事有り」と雖も」

「後時の所作の勝事有り」と雖も」とは、謂はく、彼れは未だ能く煩惱を永斷せず。亦た未だ諸の煩惱の斷を證得せず。斯れに由るが故に、「後時の所作の勝事有り」と雖も」と説く。

「而も中にして止息す」

「而も中にして止息す」とは、謂はく、善觀精進を捨てて懈廢するなり。此れに由るが故に、「而も中にして止息す」と名く。

「便ち熾然に於いて」

「便ち、熾然に於いて」とは、謂はく、此の界に於いて、未だ劬勞を作さず、未だ諸の結を斷せず。便ち——永斷に於いて、精勤勇猛にして、勢用あり、策勵し、制伏す可からず、策心の相續する。是れを熾然と名くるに——彼れは此の中に於いて欲樂を起さず。斯れに由るが故に、「便ち、熾然に於いて」と説く。

「便ち加行・上義を證得すること」

「便ち、加行・永斷・寂靜・上義を證得することに於いて」等は皆な前に准じて、應さに説くべし。

「是れを第五と名く」

「是れを第五と名く」とは、漸次、順次、相續の次第の數を第五と爲すなり。

「後の勝所作に於ける心縛」

「後の勝所作に於ける心縛」とは、謂はく、此の界に於いては、未だ劬勞を作さず、未だ諸の結を斷ぜずんば、心、便ち縛せられ、其縛せられ、極縛せらるゝこと、壯人の堅繩索を以つて、縛せ

【九二】唯だ戒禁等、第二卷、二法品二四、於善不喜足等の下參照。

【九三】善觀、觀 dhua とは粗械 yoke の意で、譯字が例の四法品中の煩惱の四觀と同じきが故に、特に善の字をつけて善觀と記す。心を觀し、繫して、忍從、繫念すること。

【九四】此の界とは、止住の欲界の義か。但し？。

「便ち寂靜に於いて」

いて」と説く。

「便ち、寂靜に於いて」とは、謂はく、纏に纏ぜられて、諸の正論に於いて、能く恭敬屬耳して聽く等をせず、便ち——永斷に於いて、空閑の室に住する、是れを寂靜と名くるに——彼れは此の中に於いて欲樂を起さず。斯れに由るが故に、便ち、寂靜に於いて」と説く。

「便ち上義を證得することに於いて」

「便ち、上義を證得することに於いて」とは、謂はく、纏に纏ぜられて、諸の正論に於いて、能く恭敬屬耳して聽く等をせず。便ち——永斷に於いて、愛盡、離滅、涅槃を證得する、是れを上義を證得すと名くるに——彼れは此の中に於いて欲樂を起さず。斯れに由るが故に、便ち、上義を證得することに於いて」と説く。

「心悟入せず、勝解無し」

「心、悟入せず、淨信無く、安住せず、勝解無し」とは、謂はく、纏に纏ぜられて、諸の正論に於いて、能く恭敬屬耳して聽く等をせず、便ち、永斷に於いて、隨順心、隨順信、隨順欲、隨順心勝解、已勝解、當勝解を起さず。是の故に、「心、悟入せず等」と説く。

「是れを第四と名く」  
「心縛」

「是れを第四と説く」と、及び、「心縛の言とは前に准じて應に説くべし。」

「第五心縛」  
「少小の證得」

「少小の證得ありて、後時に所作の勝事有りと雖も、而も中にして止息す」とは、云何が、「少小の證得」なる。謂はく、一

「彼れは是くの如き……受學すること樂はず」

「彼れは是くの如きの論を宣説する時に於いて、恭敬して聽かず、屬耳して聽かず、受教心に住せず、法隨法を行ぜず、大師の教を越え、諸の學處に於いて、受學することを樂はず」とは、謂はく、<sup>九</sup>纏に纏ぜられて、諸の正論に於いて、能く恭敬屬耳して聽く等をせざるなり。

「便ち熾然に於いて」

「便ち、熾然に於いて」とは、謂はく、纏に纏ぜられて、諸の正論に於いて、能く恭敬屬耳して聽く等をせず。便ち——<sup>九</sup>永斷に於いて、精勤勇猛にして、勢用あり、策勵して、制伏す可らず、策心の相續する、是れを熾然と名くるに——彼れは此の中に於いて欲樂を起さず。斯れに由るが故に、「便ち、熾然に於いて」と説く。

「便ち加行に於いて」

「便ち、加行に於いて」とは、謂はく、纏に纏ぜられて、諸の正論に於いて、能く恭敬屬耳して聽く等をせず、便ち——永斷に於いて、若しは習し、若しは修し、若しは多くの所作ある、是れを加行と名くるに——彼れは此の中に於いて欲樂を起さず。斯れに由るが故に、「便ち、加行に於いて」と説く。

「便ち永斷に於いて」

「便ち、永斷に於いて」とは、謂はく、纏に纏ぜられて、諸の正論に於いて、能く恭敬屬耳して聽く等をせず、便ち——永斷に於いて八聖道支ある、是れを、永斷と名くるに——彼れは此の中に於いて欲樂を起さず。斯れに由るが故に、「便ち、永斷に於いて」

ら、その起緣觀をもなす。(第六卷、三示導下諦順忍に關する註記參照。)

【九】纏、Pariyavasthāna (Pariyutthāna) 心を纏じ、身を纏する煩惱のことで、第二卷根門不誑等下の已註參照。

【九】永斷とは、註の如く、直接には所纏の纏を永斷し、進んでは有身を永斷すること。



「解脫智見論」

「解脫智見論」とは、謂はく、此の正論は能く正しく邪智の過患と、正智の功德とを顯了するが故に、「解脫智見論」と名く。

「少欲論」

「少欲論」とは、謂はく、此の正論は能く正しく多欲の過患と少欲の功德とを顯了するが故に、「少欲論」と名く。

「喜足論」

「喜足論」とは、謂はく、此の正論は能く正しく不喜足の過患と、喜足の功德とを顯了するが故に、「喜足論」と名く。

「損減論」

「損減論」とは、謂はく、此の正論は能く正しく生死を増益するの過患と、生死を損減するの功德とを顯了するが故に、「損減論」と名く。

「省事論」

「省事論」とは、謂はく、此の正論は能く正しく多事の過患と、省事の功德とを顯了するが故に、「省事論」と名く。

「永斷論」

「永斷論」とは、謂はく、此の正論は能く正しく諸の結（アム）の過患と結を斷ずることの功德とを顯了するが故に、「永斷論」と名く。

「離染論」

「離染論」とは、謂はく、此の正論は能く正しく貪（アム）染の過患と、離染の功德とを顯了するが故に、「離染論」と名く。

「寂滅論」

「寂滅論」とは、謂はく、此の正論は能く正しく有身の過患と、有身を滅することの功德とを顯了するが故に、「寂滅論」と名く。

「隨順緣性・緣起論」

「隨順緣性・緣起論」とは、謂はく、此の正論は能く正しく、緣起（アセ）、緣已（アセ）生法と、及び、彼れの善忍とを宣説し、施設し、建立し、顯了するが故に、「隨順緣性・緣起論」と名く。

【八三】 少欲論、總じてこの邊の徳目については佛垂般涅槃教誡經（遺教經）を参照せよ。

【八四】 結、Sangyojina (Sattōjina) 心を結び、身を三界の苦界に結ぶ煩惱のことで、下の五順下上分結等参照。

【八五】 染、Samkleśa (梵)、我々の心を染汚する矢張煩惱の意。

【八六】 緣起、Pattiyasamutpada (Paticcasamuppada) 所謂十二緣起のことで、目下尙論議喧しき所なれど、我らの私見を以つてせば、本來、こは佛滅後、遺教徒が所謂法中心主義に基き、佛説を受持する上の勝方便の爲めに、その佛説を、簡單な圖式にまとめたる際、彼ら自の論理をも織込んで、成立せる所にて、畢竟佛説に於る哲學的問題としての苦の心理學的起源の經過をまとめ、その苦の代りに、老病死一生をおき得たるものに他ならず。かくて、その初めの頃は完く、禪觀の思索の一形式に過ぎざりしが、漸次、その圖式そのものの論理的解説をなさねばやみ難き勢になり、その結果、生を少くとも一の分岐點として、或ひは二世一重三世兩重乃至四種の緣起、七種の緣起（彩所知論）等種種の解説を得ることになつた。而して所謂十二支とは無明一行一識一名色 六入一觸一受一取一有一老死をいひ、これらが前後各交互に緣となつて相制約し、所謂此有るによつて、彼あり、此生すれば彼生ず等の故に名けて緣起又は緣生となす。

【八七】 緣已生法、かゝる緣起的關係によつて生ぜられたる法の義にして、一切有爲の法はすべて然り。

【八八】 彼れの善忍、彼れとは、緣起及び緣已生法のことで、それを善く忍可、證悟する智の働きの、所謂諦順忍の一部として、加行道の忍位に四諦を揀擇する力も最も強く、その中に於いて、苦集二諦を觀する下に自

「是れ聖」

遠離が所生の善法に依りて發起する語論、言説、宣唱、評議、顯了、詞辯、語路、語音、語業、語表、是れを「正論」と名く。「是れ聖」と言ふは、二種の聖有り。謂はく、善に由るが故に、及び、無漏の故に。此の中、言論は善に由るが故に聖にして、無漏に由るが故に是れ聖と説くには非ず。

「是れ」除遣」

「是れ」除遣」と言ふは。謂はく、此の正論は長夜、能く少欲、喜足、易滿、易養、損滅、除遣、杜多功德、知量清淨を引くが故に「除遣」と名く。

「能く心をして離蓋可樂に趣向せしむ」

「能く心をして離蓋可樂に趣向せしむ」とは、今、此の義の中には、心を説いて心と名く。謂はく、此の正論は心をして蓋を斷じて、清淨可樂ならしむ。斯れに由るが故に、能く心をして、離蓋可樂に趣向せしむと説く。

「戒論」

「戒論」と言ふは、謂はく、此の正論は能く正しく犯戒の過患と、持戒の功德とを顯了するが故に「戒論」と名く。

「定論」

「定論」と言ふは、謂はく、此の正論は能く正しく散動の過患と、正定の功德とを顯了するが故に「定論」と名く。

「慧論」

「慧論」と言ふは、謂はく、此の正論は能く正しく惡慧の過患と、妙慧の功德とを顯了するが故に「慧論」と名く。

「解脫論」

「解脫論」とは、謂はく、此の正論は能く正しく邪解脫の過患と、正解脫の功德とを顯了するが故に「解脫論」と名く。

【七〇】 少欲、喜足、Alpeccha-santustha(梵)

【七一】 易滿、Subharita(梵)(abundantness)。

【七二】 易養、Suharita(prosperity)。

【七三】 損滅、除遣、とは下の本文中の損滅論の字釋參照。

【七四】 杜多功德、Duttaguṇa 杜多は又頭陀に作る。蓋し、除遣 shuklo off を義とし、世間を遠離し、欲を遠離し、勝善法を懇求すべきの勝方便とさるゝ所である。恐らくは耆那教等苦行學派の影響の尤も多きにおける所なるべく、かの大迦葉はその道の第一人者として知らるゝ。その徳目については梵傳は十二に作り、古來十二頭陀の語は周く知らるゝも、巴利はそれに對し十三に作り、その間に自らの開きがある。今試に列記對照すると――

梵 傳 巴 利 傳

一、糞掃衣(糞掃衣の梵名)Paṃsukūṭika

二、但三衣(三衣の梵名)Trioṭvarika Teotvarika

三、著染色衣(著染衣の梵名)Nāmanika 無

四、常乞食 Piṇḍapāṭika

五、一坐食 Ekasanika

六、中後不飲漿(中食後)Khalapāsā-bhaktika

七、阿練若住 Āranyaka

八、樹下住 Vṛkṣamūṭika Rukhamūṭika

九、露地住 Ōḍhyavakāśika Abhokāśika

一〇、塚間住 Smaṣṭanika Somanika

一一、唯坐不臥 Naśadika Nesaṇṭika

一二、隨處住(隨處の梵名)Yathāsmam Yathāsmantika

一三、薩婆住(薩婆の梵名)Sāpānasaṃvita(梵)Pattapajjika(梵)

未だ離貪等せざる心縛」

に於いて深く願戀を生ぜば、彼れの心は縛せられ、甚縛せられ、極縛せらるゝこと、壯人が堅繩索を以つて縛せられ已つて水澆せらるゝとき、彼れは縛せられ、甚縛せられ、極縛せらるゝと名くるが如く、是くの如く、身に於いて深く願戀を生ぜば、彼れの心は縛せられ、甚縛せられ、極縛せらるゝなり。

「未だ降伏せず、未だ永害せず」

「未だ降伏せず、未だ永害せず」と言ふは、謂はく、未斷未遍知なり。

第二心縛

「欲に於いて未だ離貪等せざるの心縛も、廣く説くこと、亦た爾なり。

第三心縛  
「在家出家と雜住することを樂ふ」

「在家・出家と雜住することを樂ひ」とは、謂はく、常に在家・出家と雜雜にして、住することを樂ふなり。

「樂に於いて……苦に於いて、苦を同うす」

「樂に於いて樂を同うし、苦に於いて苦を同うす」とは、謂はく、樂事に於いては同じく其の樂を受け、諸の苦事に於いては同じく其の苦を受くるなり。

「喜を同うす」

「喜を同うし、憂を同うす」とは。謂はく、喜事に於いては同じく歡喜を生じ、諸の憂事に於いては、同じく愁憂を起すなり。

「諸の事務に於いて、皆な共に興起し等」

「諸の事務に於いて、皆な共に興起し、究竟隨轉して、相ひ捨離せず」とは、謂はく、種々の所作の事業に於いて、皆な共に相ひ助けて、身心の、怠ること無きなり。

餘は前に説くが如し。

第四心縛  
「正論」

諸の正論に於いてとは、云何が「正論」なる。謂はく、出離



「便ち、永斷に於いて」

云何が「便ち、永斷に於いて」なる。謂はく、若し身に於いて願戀を生ぜば、便ち——永斷に於いて、八正道支ある、是れを永斷と名け——彼れは此の中に於いて欲樂を起さず。斯れに由るが故に、「便ち、永斷に於いて」と説く。

「寂靜に於いて」

云何が「便ち、寂靜に於いて」なる。謂はく、若し身に於いて願戀を生ぜば、便ち——永斷に於いて、空閑の室に住する、是れを寂靜と名け——彼れは此の中に於いて欲樂を起さず。斯れに由るが故に、「便ち、寂靜に於いて」と説く。

「便ち、上義を證得することに於いて」

云何が「便ち、上義を證得することに於いて」なる。謂はく、若し身に於いて願戀を生ぜば、便ち——永斷に於いて愛盡、離減、涅槃を證得する、是れを、上義を證得すと名け——彼れは此の中に於いて欲樂を起さず。斯れに由るが故に、「便ち、上義を證得することに於いて」と説く。

「心悟入せず、勝解無し」

「心、悟入せず、淨信無く、安住せず、勝解無し」とは、謂はく、若し身に於いて願戀を生ぜば、彼れは永斷に於いて、隨順心、隨順信、隨順欲、隨順心勝解、已勝解、當勝解を起さず。是の故に、「心、悟入せず等」と説く。

「是れを第一と名く」

「是れを第一と名く」とは。漸次、順次、相續の次第の數を第一と爲すなり。

「身に於いて」

「身に於いて、未だ離貪等せざる心縛」とは、謂はく、若し身

如上の論釋

第一心縛  
「身に於いて  
未だ離食せず  
……未だ離渴  
せず」

「便ち熾然に  
於いて」

「便ち加行に  
於いて」

證得等に由るが故に、便ち、熾然と、加行と、永斷と、寂靜と、上義を證得することゝに於いて、心、悟入せず、淨信無く、安住せず、勝解無し。若し熾然と加行と等に於いて、心、悟入せず、乃至、勝解無ければ、是れを、第五、後の勝所作に於ける心縛を、未だ降伏せず、未だ永害せずと名く。

此の中「身に於いて、未だ離食せず、未だ離欲せず、未だ離親せず、未だ離愛せず、未だ離渴せず」とは、謂はく、身を顧戀し、心をして、被縛して出離を得ざらしむるが故に、「身に於いて未だ離食せず等」と説く。

「便ち、熾然と、加行と、永斷と、寂靜と、上義を證得することゝに於いて」とは、云何が「便ち、熾然に於いて」なる。謂はく、若し身セに於いて顧戀を生ぜば、便ち——永斷に於いて、精勤勇猛にして、勢用あり、策勵して、制伏す可らず、策心相續する、是れを熾然と名け——彼れは此の中に於いて欲樂を起さず。斯れに由るが故に、「便ち、熾然に於いて」と説く。

云何が「便ち、加行に於いて」なる。謂はく、若し身に於いて顧戀を生ぜば、便ち——永斷に於いて、若しは習し、若しは修し、若しは多くの所作る、是れを加行と名け——彼れの、此の中に於いて欲樂を起さず。斯れに由るが故に、「便ち、加行に於いて」と説く。

〔七〕若し身に於いて等は、文章の上表に拘泥せば、文義不通の如くならむも、實は、譯文やゝ混雜せる爲めに、これは、凡そ、永斷、即ち、苦的の現身を永斷遠離することに、精勤勇猛乃至、策心の相續するを熾然（熱心）と名け、而も、もしこゝに一人ありて、その永斷すべき身に於いて顧戀愛著を生ぜば、便ち、彼れはかゝる熾然に於いて欲し、樂ふ心を起さない故に、心縛と名くとの意にして、以下もすべて、これに同じて解すべきものである。

を樂う等に由るが故に、便ち、熾然と、加行と、永斷と、寂靜と、上義を證得することゝに於いて、心、悟入せず、淨信無く、安住せず、勝解無し。若し、熾然と加行と等に於いて、心、悟入せず、乃至、勝解無ければ、是れを第三・相ひ雜住することを樂うの心縛を、未だ降伏せず、未だ永害せずと名く。

## 第四心縛

復た、次に、具壽よ、一類有るが如し。<sup>七四</sup>諸の正論の、是れ聖「是れ」除遣にして、能く心をして離蓋可樂の所に趣向せしむる——謂はく戒論、定論、慧論、解脫論、解脫智見論、少欲論、喜足論、損減論、省事論、永斷論、離染論、寂滅論、隨順緣性緣起等の論——彼れの、是くの如きの論を宣説する時に於いて、恭敬して聽かず、屬耳して聽かず、受教心に住せず、法隨法を行せず、大師の教を越え、諸の學處に於いて受學することを樂はず。彼れは是くの如きの論を宣説する時、恭敬して聽かざる等に由るが故に、便ち、熾然と、加行と、永斷と、寂靜と、上義を證得することゝに於いて、心、悟入せず、淨信無く、安住せず、勝解無し。若し熾然と加行と等に於いて、心、悟入せず、乃至、勝解無ければ、是れを第四・諸の正論に於ける心縛を、未だ降伏せず、未だ永害せずと名く。

## 第五心縛

復た次に、具壽よ、一類有るが如し、<sup>七五</sup>少小の證得有りて、<sup>七六</sup>後時の所作の勝事有りと雖も、而も中にして止息す。彼れは少小の

【七四】諸の正論等、巴では完くこれに連想すべきをも記せず。唯だ、第三に色に於る *rupa*……といふを記す。

【七五】少小の證得等、巴には無。その代り、第五として、ある天衆（に屬せんこと）を譏望して梵行を修し、所爲らく、我れはこの禁により、戒により、行（又は苦行）により、梵行により（*ariya, sīla, tapasa, brahmacariya*）天、或はとにかくもある天たらむと。彼れはかくして、心、熾然、加行……等に傾かず云」といふを記す。

【七六】後時の等、尙後になすべき勝事のあるに拘らずの意。



類有るが如し<sup>六二</sup>。身に於いて、未だ<sup>六三</sup> 離貪せず、未だ<sup>六四</sup> 離欲せず、未だ<sup>六五</sup> 離親せず、未だ<sup>六六</sup> 離愛せず、未だ<sup>六七</sup> 離渴せず。彼れは身に於いて、未だ離貪等せざるに由るが故に、便ち、熾然と、加行と、永斷と、寂靜と、上義を證得することゝに於いて、心、悟入せず、淨信無く、安住せず、勝解無し。若し、熾然と加行と等に於いて、心、悟入せず、乃至、勝解無ければ、是れを、第一・身に於いて、未だ離貪等せざるの心縛を未だ降伏せず、未だ永害せずと名く。

第二心縛 復た、次に、具壽よ、一類有るが如し<sup>七二</sup>。諸の欲の境に於いて

未だ離貪せず、未だ離欲せず、未だ離親せず、未だ離愛せず、未だ離渴せず。彼れは欲に於いて、未だ離貪等せざるに由るが故に、便ち、熾然と、加行と、永斷と、寂靜と、上義を證得することゝに於いて、心、悟入せず、淨信無く、安住せず、勝解無し。若し、熾然と加行と等に於いて、心、悟入せず、乃至、勝解無ければ、是れを、第二・欲に於いて、未だ離貪等せざるの心縛を、未だ降伏せず、未だ永害せずと名く。

第三心縛 復た、次に、具壽よ、一類有るが如し<sup>七三</sup>。在家出家と雜住することを樂ひ、樂に於いて樂を同うし、苦に於いて苦を同うし、喜を同うし、憂を同うし、諸の事務に於いて、皆な共に興起し、究竟隨轉して、相ひ捨離せず。彼れは在家・出家と雜住すること

【六二】 身に於いて Kāye は Saṅgiti-S. では、第二とす。

【六三】 離貪せず、巴 Avigata-rāga.

【六四】 離欲せず、巴 Avigata-chanda.

【六五】 離親せず、巴 Avigata-piema.

【六六】 離愛せず、巴 Avigata-niṇṇa.

【六七】 離渴せず、巴 Avigata-piṇṇa.

備考、巴利はその外に尙、離熱せず Avigata-pari-jāla を加ふ。

【六八】 熾然、巴 ātappa (glow, heat) zeal, ardour

と。後の長行の文の釋を見よ。

【六九】 加行、巴 Anuyoga (application, devotion to, practice of).

【七〇】 永斷、巴はこの次に、Sāmaṇa (persistence,)

padāhāna (or padāhāna = exertion) の二あれば、今

はこの二を一にして永斷とせるか。殊に、もし然らば

論の原典には、巴の padāhāna or padāhāna は iṭṭhā-

na (斷) に當る字があり、乃至は、それと同一に解せ

しものなるべし。

【七一】 寂靜及び上義證得の二は今の巴文には無し。

【七二】 諸の欲の境、巴 Kāme or Kāma. 巴はこれを第一とす。

【七三】 在家出家云云、巴は第四の「充腹飲食し已りて勝樂、觸樂、睡眠樂に隨順して住す」といふにも對せしむべきか。因みに、大正大藏經本では「在家出家と雜住する云々」と作るも、これは雜住の誤である。

「悟入せず」

云何が「悟入せず、勝解無く、淨信無し」なる。答ふ、若し有智の梵行者の所に於いて、瞋恚し、毀罵し、欺辱し、觸惱せば、便ち、彼れが斷に於いて、隨順心、隨順欲、隨順信、隨順勝解、已勝解當勝解を發起すること能はず。是れを「悟入せず、勝解無く、淨信無し」と名く。

「是れを第五と名く」

云何が「是れを第五と名く」なる。答ふ、漸次、順次、相續の次第の數を第五と爲すなり。

「諸の有智の梵行者に於ける心裁」

云何が「諸の有智の梵行者の所に於ける心裁」なる。答ふ、若し有智の梵行者の所に於いて、瞋恚し、毀罵し、欺辱し、觸惱せば、便ち、彼れに於いて、心の、自ら裁事を作すこと、譬へば、農夫の如く、良田有りと雖も、若し耕墾せざれば、卽便ち、堅硬にして、諸の栽蔕多く、穢草も植えず、何ぞ況んや嘉苗をや。諸の有智の梵行者の所に於いて、瞋恚し、毀罵し、欺辱し、觸惱するも、亦た復た是くの如く、其の心を覆蔽し、心をして剛強にして、栽蔕の事を作さしめ、尙ほ、心をして邪決定をも得しめず、況んや、正決定をや。是れを「諸の有智の梵行者の所に於ける心裁」と名く。

「未斷未遍知」

云何が「未斷未遍知なる。答ふ、彼れ的心裁に於いて、未だ降伏せず、未だ永害せざる、是れを「未斷未遍知」と名く。

八、五心縛  
第一心縛

五心縛とは、云何が五と爲す。具壽よ、當に知るべし、一

【五】 大善見 Mahā-sundarīna (Malā-mundarīna)?

【五】 大路 Mahāpantika (Skt. p. h.) 摩訶薩陀迦、莫訶半託迦等と音譯す。周利(祝利)鰲陀迦 (Cūṭi-lapantika) と共に路邊の棄子なりし因縁によりその名ありとせられ、神通によつて隱顯自在の德をもつて稱せらる。(Mahāpantika [路] + ka [生]) かくて又大路邊生等とも譯さる(分別功德論參照)。

【五】 六名 Mahānāma 摩訶男。佛陀の初教授を受けし所謂五群比丘の一にして、又、神通を以つて稱せらる。又摩訶那摩等にも作る。

【五】 無減 Anuraddha (Anuruddha) 阿那律、阿那律陀、阿菟楸陀等幾多の音譯有りて、天眼第一と稱せられ、十大弟子の一人で、殊に釋尊の從兄弟に當る。四念處に關係して説かれたる經多し(雜一九、及び二〇、五、五三の諸經參照)。

【五】 欲樂 Nanda 難陀なるべく、譯して華歡喜又は歡樂等ともいふ。増一阿含には大體端正、而も諸根寂靜心不變易の比丘とある。

【五】 金毘羅 Kimbila 增一(漢)阿含三に靜坐に獨處して、專意消念第一とせらる、解開比丘(直弟子)の一人。S. 54. 10 (V. 32ff) &c. 參照。

【二】 五心縛 卽 Pañca cetano vimukhā (Pañca D-5 bondages of the mind; Neumann 5 Fesseln des Herzens) 漢二典無。五個の心を縛して、佛教的極趣に向つて勇猛邁進することを妨げるものを云ふ。

「大師」

有智の同梵者

「若し苾芻の上座の聰慧にして、久しく佛法に入り、久しく梵行を修し、乃至、大師、及び、諸の有智の同梵行者の、共に稱讃し、護念し、敬愛する所なる、是くの如きの有智の梵行者の所に於いて、瞋恚し、毀罵し、觸惱し、悟入せず、勝解無く、淨信無き、是れを、第五・諸の有智の梵行者の所に於ける心裁の未斷未遍知と名く」とは、云何が、「大師」なる。答へて謂はく、諸の如來、應、正等覺なり。

云何が「有智の同梵行者」なる。答へて謂はく、舍利子、大採菽氏、大營構氏、大飲光、大執藏、大劫戔那、大迦多衍那、大准陀、大善見、大路、大名、無滅、欲樂、金毘羅等の賢聖弟子、是れを「有智の同梵行者」と名く。

若しは大師、及び、諸の有智の同梵行者の爲めに、共に、稱讃、護念、敬愛せらるゝ所、是れを「苾芻の上座の聰慧にして、久しく佛法に入り、久しく梵行を修す」と名け、即ち、此の苾芻を「有智の梵行者」と名く。

「是くの如きの有智の……觸惱して」

云何が「是くの如きの有智の梵行者の所に於いて」瞋恚し、毀罵し、觸惱し、觸惱し」なる。答ふ、彼の有智の梵行者の所に於いて、瞋恚心を起し、不隨順の語、不隨順の語表を發して、毀辱し、歎突する、是れを「是くの如きの有智の梵行者の所に於いて」瞋恚し、毀罵し、歎辱し、觸惱し」と名く。

【四】舍利子、Śāriputra (Śāriputra) 又は舍利弗等と音譯し、身子等と義譯す。十大弟子の隨一で、第二の法王、佛陀の法嗣と曰はれ、智慧第一 Mahāprajña (Mahāprajña) とする。

【五】大採菽氏 Mahā-muśalya (Mahā-mogallāna) (Mahā) 大 + mudga = phaeolus Mungo + lya = from /ā = to receive, obtain としての譯) 所謂大目犍(又は乾連のことでも)と舍利弗と共に、六師外道中の刪耶耶 Śākyā の徒首たりしもの。神通第一といはれ、執杖外道の爲めに、法難にあつて佛よりも先に死す。

【五〇】大飲光 Mahā-kāśyapa (Mahā-kassapa) (Mahā + kāsī kasya = shining + pa = from /ā = to drink と解せる譯、所謂摩訶迦葉で、第一結集時の長老、頭陀第一の實行家と稱さる。

【五一】大執藏 Mahā-upāli か。もし然らば、普通には近執と譯す。十大弟子の一人で、第一結集に際し、律典結集の主座といはるゝ所。持律第一の聖と稱せられ、四分律四等には優波離剃髮師と云ふ。

【五二】大劫戔那 Mahā-kṣipra (A. N. Mahā-kṣipra) 又は大劫賓那と作る。よく星宿を知ること第一と云ふ。巴利増一には教誡第一 bhikkhu ovaḥkāra と記す。

【五三】大迦多衍那 Mahā-kaccāyana (Mahā-kaccāyana or M. Jaccāna) 論議の祖と仰がれ、諸の論典を歸記さるゝ人。又、大迦旃延等と作る。十大弟子の一人。

【五四】大准陀 Mahā-undha (Skt. = pañi) 又純陀、闍陀、周那、その他に作る。佛陀が最後の所謂梅檀非義を供養せられたりとさるゝ人物。もと拘尸那城(佛陀入滅の地)の工巧師たり。



尙、已註を参照せよ。

種々の疑惑、猶豫を生起する、是れを、「教誠に於いて疑惑し、猶豫し」と名く。

「悟入せず…  
淨信無し」

云何が「悟入せず、勝解無く、淨信無し」なる。 答ふ、若し教誠に於いて、種々の疑惑、猶豫を生起せば、便ち、彼れの斷に於いて、隨順心、隨順欲、隨順信、隨順勝解、已勝解、當勝解を發起すること能はず。是れを「悟入せず、勝解無く、淨信無し」と名く。

「是れを第四  
と名く」

云何が「是れを第四と名く」なる。 答ふ、漸次、順次、相續の次第の數を第四と爲すなり。

「教誠所に於  
ける心裁」

云何が「教誠所に於ける心裁」なる。 答ふ、若し如來、應、正等覺が正知正見して、半月半月に説く所の別解脱戒經に於いて、種々の疑惑、猶豫を生起せば、便ち、彼れに於いて、心の、自ら裁事を作すこと、譬へば農夫の如く、良田有りと雖も、若し耕墾せざれば、即便ち、堅硬にして、諸の栽孽多く、穢草も植えず、何ぞ況んや嘉苗をや。教誠所に於ける疑惑、猶豫も亦た復た是くの如く、其の心を覆蔽し、心をして剛強にして、栽孽の事を作さしめ、尙ほ、心をして邪決定をも得しめず、況んや、正決定をや。是れを「教誠所に於ける心裁」と名く。

「未斷未遍知」

云何が「未斷未遍知」なる。 答ふ、彼れの、心裁に於いて、未だ降伏せず、未だ永害せざる、是れを「未斷未遍知」と名く。

「未斷未通知」

第四の心裁

「教 誡」

正等覺が正知正見して施設せる學處に於いて、種々の疑惑、猶豫を生起せば、便ち、彼れに於いて、心の、自ら裁事を作すこと、譬へば農夫の如く、良田有りと雖も、若し耕墾せざれば、即使ち、堅硬にして、諸の栽摩多く、穢草も植えず、何ぞ況んや嘉苗をや。所學處に於ける疑惑、猶豫も亦た復た是くの如く、其の心を覆蔽し、心をして剛強にして栽摩の事を作さしめ、尙ほ、心をして邪決定をも得しめず、況んや正決定をや。是れを、「所學處に於ける心裁」と名く。

云何が「未斷未通知」なる。答ふ、彼れの、心裁に於いて、未だ降伏せず、未だ永害せざる、是れを、「未斷未通知」と名く。

「若し教誡に於いて、疑惑し、猶豫し、悟入せず、勝解無く、淨信無し。是れを、第四・教誡所に於ける心裁の未斷未通知と名く」とは、云何が「教誡」なる。答ふ、若し諸の如來、應、正等覺の正知正見して、半月半月に説く所なる別解脱戒經、是れを「教誡」と名く。説くが如し。——我れは是くの如く教誡し、我れは此の事を教誡しては、理と善法とに於いて、證得すること能はず。我れは是くの如く教誡し、我れは此の事を教誡して、理と善法とに於いて、則ち、能く證せりと。

云何が「教誡に於いて疑惑し、猶豫し」なる。答ふ、諸の如來、應、正等覺の半月半月に、説く所の別解脱戒經に於いて、

「教誡に於いて疑惑し、猶豫し」

【四六】 半月半月の上、本來、上の學處の場合の如く、正知正見して「施設せる」の字の有らざりしや。とまれ、半月半月とは、下の別解脱戒經を半月半月の所謂布薩 *Posadha* or *Upravasā* (*Upoṣatha*) に於いて、誦唱し、集合の比丘らが、自ら所犯なきかを反省するその半月半月の二夜のことなるが、よりる際には必ずしも佛陀自らこれを誦唱すとは素より限るべからず。寧ろその僧伽に於ける長老のなす所なりしなれば、今の文では自らやゝ意の透徹し難き所あるべく、又上の學處下の文にも相應せざる所あらむ。尙、半月半月とは巴利上座部(大品有薩埵度)では月の十四、十五兩日と記し、四分律十誦律亦大體準じ、五分律は月の八日十四日に聽法十五日説戒即ち、布薩と定めたが、蓋し、これは曆法の關係による記述の相違にして、畢竟新月及び満月の夜をもつてその半月半月に於ける當日とし、陰曆の十五日と廿九日又は三十日が大概その日とさる。(詳しくは各律典の説戒薩度又は布薩薩度中參照)。

【四七】 別解脱戒經、*Prātimokṣa-sūtra*(*Prātimokṣa-sutta*)。これは蓋し *prāti* = *separatively*; *moṁsa* = *emanicipation*; *sūtra* = *an article* (箇條) として別解脱戒經(又は別々——)と譯する所。即ち、所謂小乘二百五十戒と概稱する(實際は諸部派の律典によつて相違す)隨時應事に佛陀が比丘らの日常言動の規準として宣示教誡せるものにして、これが一、一はそれを圓滿受持する所に、別々によく擇滅涅槃を證得して、遂に圓成的に、完成的解脱を大集しうべき所以のもの、故に、各に名けて別解脱戒經となすものである。但し、この原字は又 *prāti* (= *prati*) = *near to*, *to wards*; *moṁsa* = *emanicipation*(戒經は同じ)等とも解しうべく、かくてかの遺教經の如きに於いては、戒は是れ正順解脱の本と記され、順解脱(戒經)等とも譯されたる所である

第三の心裁

「所學」

未だ降伏せず、未だ永害せざる、是れを、「未斷未遍知」と名く。  
 「若し所學に於いて、疑惑し、猶豫し、悟入せず、勝解無く、淨信無し。是れを、第三・所學所に於ける心裁の未斷未遍知と名く」とは云何が「所學」なる。答ふ、若し諸の如來、應、正等覺の、正知正見して施設せる學處、是れを「所學」と名く。

説くが如し、我れは是くの如く學し、我れは此の事を學しては、理と善法とに於いて證得すること能はず。「然れども」我れは是くの如く學し、我れは此の事を學して、理と善法とに於いて、則ち能く證得せりと。

「所學に於いて疑惑し、猶豫し」

云何が「所學に於いて疑惑し、猶豫し」なる。答ふ、諸の如來、應、正等覺が施設せる學處に於いて、種々の疑惑、猶豫を生起する、是れを、「所學に於いて、疑惑し、猶豫し」と名く。

「悟入せず……淨信無し」

云何が「悟入せず、勝解無く、淨信無し」なる。答ふ、若し所學に於いて、種々の疑惑、猶豫を生起せば、便ち、彼れが斷に於いて、隨順心、隨順欲、隨順信、隨順勝解、已勝解、當勝解を發起すること能はず。是れを、「悟入せず、勝解無く、淨信無し」と名く。

「是れを第三と名く」

云何が、「是れを第三と名く」なる。答ふ、漸次、順次、相續の次第の數を第三と爲すなり。

「所學に於ける心裁」

云何が、「所學に於ける心裁」なる。答ふ、若し、如來、應、

【四五】 理と善法とは、理とは真理で、差別相としての個々のもの（事）に對する普遍的通則、即ち、無常、苦、空、無我等なるべく、善法とは、廣くかゝる理の認識と、その認識によつての最後の理想とに到達すべき有漏無漏の善法、殊に智と乃至涅槃の至上善と等といふなるべし。



槃、是れを「正法」と名く。

「正法に於いて疑惑し、猶豫し猶豫し」

云何が「正法に於いて疑惑し、猶豫し」なる。答ふ、若し愛盡、離滅、究竟、涅槃に於いて、種々の疑惑、猶豫を生起する、

是れを、「正法に於いて、疑惑し、猶豫し」と名く。

「悟入せず、淨信無し」

云何が、「悟入せず、勝解無く、淨信無し」なる。答ふ、若し正

「是れを第二と名く」

法に於いて、種々の疑惑、猶豫を生起せば、便ち、彼れが斷に於いて、隨順心、隨順欲、隨順信、隨順勝解、已勝解、當勝解を發起すること能はず。是れを、「悟入せず、勝解無く、淨信無し」と名く。

云何が、「是れを第二と名く」なる。答ふ、漸次、順次、相續の次第の數を第二と爲すなり。

「正法所に於ける心裁」

云何が「正法所に於ける心裁」なる。答ふ、若し愛盡、離滅

、究竟、涅槃に於いて、種々の疑惑、猶豫を生起せば、便ち、彼れに於いて、心の、自ら栽事を作すこと、譬へば農夫の如く、良田有りと雖も、若し耕墾せざれば、即便ち、堅硬にして、諸の栽摩多く、穢草も植えず、何ぞ況んや嘉苗をや。正法所に於ける疑惑、猶豫も亦た復た是くの如く、其の心を覆蔽し、心をして剛強にして、栽摩の事を作さしめ、尙ほ、心をして邪決定をも得しめず、況んや、正決定をや。是れを、「正法所に於ける心裁」と名く。

「未斷未通知」

云何が「未斷未通知」なる。答ふ、彼れの、心裁に於いて、

伽羅下を見よ。

師に於いて、種々の疑惑、猶豫を生起せば、便ち、<sup>三九</sup>彼れが斷に於いて、隨順心、隨順欲、隨順信、隨順勝解、已勝解、當勝解を發起すること能はず。是れを、「悟入せず、勝解無く、淨信無し」と名く。

「是れを第一と名く」

云何が、「是れを第一と名く」なる。 答ふ、漸次・順次・相續の次第の數を第一と爲すなり。

「大師の所に於ける心裁」

云何が、「大師の所に於ける心裁」なる。 答ふ、若し如來、應、正等覺に於いて、種々の疑惑、猶豫を生起せば、便ち、<sup>四〇</sup>彼れに於いて、心の、自ら <sup>四一</sup>裁事を作すこと、譬へば農夫の如く、良田有りと雖も、若し耕墾せざれば、<sup>四二</sup>即便ち、堅硬にして、諸の栽摩多く、穢草も植えず。何ぞ況んや嘉苗をや。大師の所に於ける疑惑、猶豫も亦た復た、是くの如く、其の心を覆蔽し、心をして剛強にして、栽摩の事を作さしめ、尙ほ心をして <sup>四三</sup>邪決定をも得しめず、況んや正決定をや。是れを、「大師の所に於ける心裁」と名く。

「未斷未通知」

「正法」

云何が「未斷未通知」なる。 答ふ、彼れの、心裁に於いて、未だ降伏せず、未だ永害せざる、是れを「未斷未通知」と名く。  
「若し正法に於いて疑惑し、猶豫し、悟入せず、勝解無く、淨信無き、是れを、第二・正法所に於ける心裁の未斷未通知と名く」とは、云何が、「正法」なる。 答ふ、<sup>四四</sup>愛盡、<sup>四五</sup>離滅、<sup>四六</sup>究竟、<sup>四七</sup>涅槃

味では開けるものと稱すべき十業道、即ち、不殺生、不々與取、不欲淫、不妄語、不龜語、不惡口、不兩舌、不貪、不瞋、不癡等あり、何れも學處といふべく、要するに佛教の道德にして、修行哲學たる學習の徳目といふ所である。

【五】教誡所とは、巴利は恐らく右 所學處中に含攝するの意なるべく、これを記せず。その代りに、第三として僧伽に於ける……をおいてある。教誡所とは後の本文中の解説の如く所謂小乘二百五十戒等の波羅提木叉、即ち、比丘等の日常言動の規範としての教誡をいふ。

【六】諸の苾芻等、巴語傳は唯、同梵行者に於いて、*śāhānucāraṇa* といふ。

【七】如來等、卷八、四記問下參照。

【八】彼れがとは、大師に於ける種々の疑惑、猶豫を斷すること。

【九】隨順心、斷することに違背せず、隨順する心。以下も準じて解すべし。

【一〇】隨順勝解、勝解とは、上註の如く、……に心を傾けること(*inclination*)で、從つて隨順勝解とは、斷に隨順する心の傾き。

【一一】彼れとは、同前に疑惑、猶豫。

【一二】我事とは、本文なき爲め、原字不明の故に此だ快明なるは得ざるも、もし心裁の場合の如く *Khiṇa* (*skhā-pāṇi*) 等とありしならば、これは「よく手入れされた地の間にある」不墾の地 *uncultivated or waste land* の意で、自ら、我事とは、心に疑あるまゝに、不懇にしておくこと云云の意とすべく、かくして前後大體に於いて諒然たるを得む。

【一三】邪決定、謬てる邪しき決斷。

【一四】愛盡等、卷九、四法品(四一)、順流行等四補特

第五の心裁

教誡所に於ける心裁の未斷未遍知と名く。

一類有るが如し。諸の苾芻の上座の、聰慧にして、久しく佛法に入り、久しく梵行を修し、乃至、大師、及び、諸の有智の同梵行者の、共に稱讃し、護念し、敬愛する所なる、「是くの如き」の有智の梵行者の所に於いて、瞋恚し、毀罵し、執辱し、觸惱し、悟入せず、勝解無く、淨信無し。「而して是くの如く」、若し苾芻の上座の、聰慧にして、久しく佛法に入り、久しく梵行を修し、乃至、大師、及び、諸の有智の同梵行者の共に、稱讃し、護念し、敬愛する所なる、是くの如きの有智の梵行者の所に「於いて」瞋恚し、毀罵し、執辱し、觸惱し、悟入せず、勝解無く、淨信無ければ、是れを、第五・諸の有智の梵行者の所に於ける心裁の未斷未遍知と名く。

若し大師に於いて疑惑し、猶豫し、悟入せず、勝解無く、淨信無ければ、是れを、第一・大師の所に於ける心裁の未斷未遍知と名くとは、云何が、「大師」なる。答へて謂はく、諸の如來、應、正等覺、是れを大師と名く。

云何が、「大師の所に於いて疑惑し、猶豫し」なる。答ふ、諸の如來、應、正等覺に於いて、種々の疑惑、猶豫を發起する、是れを、「大師の所に於いて、疑惑し、猶豫す」と名く。

「悟入せず」  
「淨信なき」

云何が「悟入せず、勝解無く、淨信無し」なる。答ふ、若し大

五法品第六

【八】 五心裁、巴、*Pañca ceto'khiḥ* (Khy. D. 1-5 spiritual bareness; Neumann—*Fünf Herzbekümmungen*) 漢二典無。蓋し、裁 *Khiḥ* とは、不慧の地 *waste or uncultivated land* の一部なる意で、自ら心裁 *Uttokhiṇa* とは心の荒蕪の意に當り、今、その條件五をあぐるが故に、五心裁と稱す。【中阿含二〇六には心穢とし「*Lord Uḥāṇesi—5 hantvā Fāḥova* (中阿含英譯 I. p. 71.) *Nāṇāḥloka 5 Gāḥovvā-rūṭṭhungen* (A. N. 譯 V. S. 261.)

【九】 大師の所、巴、*Sattvaṇi* (loc. of Sattvaṇi)。

【一〇】 勝解せず、巴、*Nādimuccati* = does not inclined to (因みに「悟入せずとは巴には不見」)

【一一】 淨信無し、巴、*Na sampasādati* = not tranquillized or reanmrod.

【一二】 未斷未遍知 (巴は常に前者のみあるて *appalīno* と記す)、斷とは斷煩惱の無漏智が煩惱の爲めに間隔さるゝことなく、方に斷惑すること (これを無間道によりて斷ずといふ)。又遍知とは、かく無間道によつて斷惑し盡して、その裏に擇滅涅槃を證得すること (このときの聖智を解脫道といふ)。而も今は未斷、未遍知なれば、かゝる無間、解脫二道によつて、未だ、一當面の大師の所に於ける疑惑、猶豫を斷じ、よつてもつてその裏に擇滅を證得するに至らず、かくて疑惑等が未だそのまゝにあること。第一卷食の諸門分別下參照。

【一三】 正法所、巴、*Dhamme* (loc. of dhamma) 佛説の正法のこと。

【一四】 所學處、巴、*Sikkhīya* (oo. of sikkhīya) 蓋し或は三學處といひて、已に三法品四一—とける如く、増上の戒・心・慧學を稱し、又或ひは五學處と稱して、主に在家白衣の爲めなる不殺生、不々與取、不邪淫、不妄語、不飲酒をあげ、乃至或はこの五學處を或る意



## 疑蓋

く。

云何が疑蓋なる。答ふ、此の疑に由るが故に、心を障し、

心を蔽し、心を鎮し、心を隠し、心を蓋し、心を覆し、心を纏し、心を衰す。故に、疑蓋と名く。

## 七、五心裁

## 第一の心裁

三

五心裁とは、云何が五と爲す。具壽よ、當さに知るべし、一類有るが如し。<sup>二九</sup>大師の所に於いて、疑惑し、猶豫し、悟入せず、勝解無く、淨信無し。<sup>三〇</sup>「而して、是くの如く」若し大師に於いて疑惑し、猶豫し、悟入せず、勝解無く、淨信無ければ、是れを、第一・大師の所に於ける心裁の未斷未遍知と名く。

## 第二の心裁

一類有るが如し。<sup>三一</sup>正法所に於いて疑惑し、猶豫し、悟入せず、勝解無く、淨信無し。<sup>三二</sup>「而して、是くの如く」若し、正法に於いて疑惑し、猶豫し、悟入せず、勝解無く、淨信無ければ、是れを第二・正法所に於ける心裁の未斷、未遍知と名く。

## 第三の心裁

一類有るが如し。<sup>三四</sup>所學處に於いて疑惑し、猶豫し、悟入せず、勝解無く、淨信無し。<sup>三五</sup>「而して、是くの如く」若し所學に於いて疑惑し、猶豫し、悟入せず、勝解無く、淨信無ければ、是れを第三・所學處に於ける心裁の未斷未遍知と名く。

## 第四の心裁

一類有るが如し。<sup>三六</sup>教誡所に於いて疑惑し、猶豫し、悟入せず、勝解無く、淨信無し。<sup>三七</sup>「而して是くの如く」若し教誡に於いて疑惑し、猶豫し、悟入せず、勝解無く、淨信無ければ是れを第四・

dhacca-kukkuca-niv.) (Rlys D. - Hindrance of excitement and worry; Neumann - Hemming durch stolzen Unmuth?) 衆集經 - 掉戲蓋、大集法門經 - 惡作障。

【一六】掉舉、Andhatya (Uddhacca 但、S. 45, 177. Adhacca に作す) (法僧伽尼論一一五九參照)。

【一七】不寂、巴、Aviprasamo

【一八】不靜、巴、Cetso vikkhepo (unbalanced of mind)。

【一九】惡作、Kankhaya (Kukkuca) 漢譯は作を惡くむと訓す、善事をなせざるを悔ひ、惡事をなせるを悔ゆるもので、つまり悔と同じ。(法僧伽尼論一一六〇參照、曰 - 不正當の事に於いて、正當の事たりとの想をなす性、その逆の性、無罪法に於いて罪法想をなす性、その逆の性 - かくの如き類の惡作等と)。

【二〇】疑蓋、Vikkhaya-niv. (Vikkhaya-niv.) (Rlys D. - Hindrance of doubt; Neumann - Hemmung durch Schwanken.) 衆集經 - 今と同。大集法門經 - 疑惑障。(法僧伽尼論一一六一を見よ)。

【二一】佛・法・僧、所謂三寶、Tiratna なる佛教の三位一體 Buddhi trinity といふべきもので、教祖佛陀、所説の理教、その理教の仲媒者としての僧のこと。

【二二】二分、巴、Dvayukta = 心の二分すること即ち疑。(Skt. Dvaidhukya)。

【二三】二路、巴、Dvaidhāpatho = 心の岐路に立つて稱量、疑惑、躊躇して不決なこと。

以下についても、法僧伽尼論の所記詳細なれど、果して何れに配すべきか、なれば、所欲に従つて親しく參究すべし。

【二四】巴に一趣に非ざる、以下、三世に於ける、心の二分して岐路に立てるをいふ。





# 卷の第十二

## (二) 諸の五法の一の二

### 六、五蓋

二 五蓋とは、一には貪欲蓋、二には瞋恚蓋、三には昏沈睡眠蓋、四には掉舉惡作蓋、五には疑蓋なり。

### (一) 貪瞋蓋

貪 欲

貪欲蓋とは、云何が貪欲なる。答ふ、諸の欲の境に於ける諸の貪、等貪・執藏・防護・堅著・愛樂・迷悶・耽嗜・遍耽嗜・内縛・希求・耽湎・苦の集・貪の類、貪の生、是れを貪欲と名く。

### 貪欲蓋

云何が貪欲蓋なる。答ふ、此の貪欲に由りて、心を障し、心を蔽し、心を鎮し、心を隠し、心を蓋し、心を覆し、心を纏し、心を裹す。故に、貪欲蓋と名く。

### (二) 瞋恚蓋

瞋 恚

瞋恚蓋とは云何が瞋恚なる。答ふ、諸の有情に於いて、損害を爲さむことを欲する、内に栽孽を懷ける、擾惱を爲さむと欲する。已瞋・當瞋・現瞋なる、樂うて過患を爲す、極めて過患を爲す、意の極めて憤恚する、諸の有情に於いて、各相ひ違戾し、過患を爲さむと欲する、已に過患を爲す、當に過患を爲す、現に過患を爲す、是れを瞋恚と名く。

### 瞋恚蓋

云何が瞋恚蓋なる。答ふ、此の瞋恚に由りて、心を障し、心を蔽し、心を鎮し、心を隠し、心を蓋し、心を覆し、心を纏し、心を裹す。故に、瞋恚蓋と名く。

【一】(二) 諸の五法の一の二は廢漢には、五法品第六の二に作る。

【二】五蓋、Pañca Nivāraṇāni (pañca Nivāraṇāni) (Rhys D. - 5 hindrances; Neumann - Fünf Hemmnngen、衆集經・今と同、大集法門經・五障。蓋、Nivāraṇa or nivāraṇa (Nivāraṇa) とは、Ni + √vra to hinder, prevent, なる動詞より來れる字で、障礙 obstacle, 障礙 hindrance を意味し、我らをして、

順正の思惟・如實の觀察をなさしむることを得え、涅槃、解脱の境に至ることを妨ぐる煩惱の性能に喩えて、その煩惱に名くる所。而も、普通には、該況煩惱中、特に貪と、瞋と、昏沈睡眠と掉舉惡作と疑との五煩惱を撰び特に蓋の名を與へ、稱して五蓋となすことになつてゐるが、今は則ち、これを説くものである。

【三】貪欲蓋、Kāma-cchanda-nivāraṇa (kāma-cchanda-nivāraṇa) (Rhys D. - Hindrance of sensuality; Neumann - Hemmung durch Wunscheswillen、衆集經・今と同、大集法門經・樂欲障)

【四】貪欲、Kāma-cchanda.

【五】諸の欲の境等、卷第四、三法品二、三變の下參照。そこには諸の欲に於けることある。

【六】鎮しは、おさへつけること。

【七】瞋恚蓋、Vyāpāda-Niv. (Vyāpāda-Niv.) (Rhys D. - Hindrance of illwill; Neumann - Hemmung durch Hassungroll.) 衆集經・今と同、大集法門經・瞋恚障。

【八】瞋恚、Vyāpāda (卷三、三不善根下の瞋の下參照)。

【九】栽孽、下註の如く(心裁の下)、我は梵字の義として荒蕪にして手入せぬ地を意味し、孽は切株から發せる手入せぬまゝのヒコバエを意味するが、何れに



gati)(Rlys D. — The destiny of the animal kingdom; Neumann — Tierischer Schooss.) 大集法門經「畜生趣」。蓋し、如上と同様の類推が動物界に及んで、有情輪廻の範圍の一とせられたるもの。

【一〇六】愚鈍のとは、惡見としては愚鈍で、従つて前地獄生を受けさせたものよりは惡性の薄い行の意。

【一〇七】鬼趣(Preta-gati (peti-gati) (Rlys D. Destiny of the realm of the departed; Neumann — Gespensterreich.) 大集法門經「餓鬼趣」。一已註の如く恐らく本は吠陀時代に於ける父祖の精靈 Pitṛ の思想が漸次、現世に於ける道德的功罪と結びつけて考へらるゝに至り、開展した思想なるべく、喜んで他が物を盗み、多くは怯劣にして形、癡悴し、身心輕躁なれ

ば、名くとは古來の一般的經名である。

【一〇八】人趣(Manūya-gati (manusa-gati) (Rlys D. — Destiny of mankind, Neumann — Menschen.) 大集法門經「今」と同。

【一〇九】下品のとは、下等ので、妙行として下等のもの。

【一一〇】天趣(Devā gati (Skt. = path) (Rlys D. — Destiny of the devas; Neumann — Götter.) 大集法門經「今」と同。一吠陀以來の諸神格を、殊に佛教では、すべて、唯、道德的修道の結果、乃至は、尙途中的なる善果にして、畢竟は依然苦網中にあり、無常動搖を免れずとする立場より、輪廻の範圍に入れたもので、たゞその範圍では最上位の存が者とされる。

じ、人中の生を結ぶ、是れを人趣と名く。

### 第三説

復た次に、人趣とは、是れ名、是れ號、異語・増語・想・等想・

施<sup>〔九〕</sup>・言説の故に、人趣と名く。

### (五) 天趣

#### 第一説

云何が、天趣なる。答ふ、諸の天衆と一性一類なる衆同分等の依得・事得・處得、若しは諸所有の天上に生じ已れる無覆無記の色・受・想・行・識、是れを天趣と名く。

#### 第二説

復た次に、上品の身妙行・語妙行・意妙行を若しは習し、若しは修し、若しは多く所作するに由りて、天上に往き、天上に生じ、天上の生を結ぶ、是れを天趣と名く。

#### 第三説

復た次に天趣とは是れ名・是れ號・異語・増語・想・等想・施設・言説の故に、天趣と名く。

【一〇】處得 *Schana-pāpīti* ? 處とは三界の中に於いて、欲界は地獄に八大地獄の別ありて八處、餓鬼、畜生は各一として二處、人は四大洲(東勝身洲、西牛貨洲、南閼浮洲、北俱盧洲)の別あつて四處、天は六欲天があつて六處、かくして合計二〇處の別あり、準じて色界に一七處(無色界は處なく、たゞ、空無邊、識無邊、無所有、有頂等、業別による區別を立つ)、等あるその處を意味し、その諸の處中、何れに生をうくるべきやを決定する得を即ち今の處得と名く。(因みに以上三得こと获原雲來博士に負ふもの多きを記し、感謝の意を表す)。

【一〇】無覆無記とは、字義は已註(參照(本卷))、而してかく定める所以のものは、もしその他の性とする。

この集異門足論等の當時これありしや否や、今はこれを審にせむ所にして、たゞ、字としては未だこれを見ないのが事實である。

【九】依得 *āśeṣya-pāpīti* 得 *pāpīti* は亦、心不相應行の一にして、いふ所によれば、我々が一切の有爲法と涅槃の擇滅等とを成就するには一の特別な原理の作用により、所詮、まづ、その原理を成就して、次にその原理が、云云の法を我らをして成就せしむるものに外ならぬ。而してその原理が即ち得であると。

また、例の有部の三世實有、法體恒有等の素朴實在論 *naïve realism* 的考方の所産に他ならぬが、今はその得の所依の身心に關するものを以て即ち依得と名けたものにして、これに當るものを法蘊足論一〇には住得とするが、蓋し、それは依得の誤記か。

【一〇】事得 *Vaslu-pāpīti* ? 事は色心等の諸法のこと、右所依の身心を部分的に見て、その一一に關しての得が即ち事得。

一趣の中にも、五趣の業と煩惱とを具備することになり雜亂を來すの故である。―俱舍八等參照。

【一〇三】上品とは、上等の意で、上等の惡行故、最惡の行を云ふ。

【一〇四】名等 *cf. Dhammasaṅgani 1306* には増語の説明として *Saṅkhā, samudhā, padattati, yohāro, nāman, nāmakammam, nāmadhaya yu, nirutti, vyajjāna abhihiyo* 等を一聯に記す。(Rhye D.—An enumeration, a designation, an expression, a corrupt term, a name, denomination, a distinctive mark of discourse) 蓋し、參照すべく、尙、已註をも參照せよ。

【一〇五】誘生趣 *Tiryagyonigati* (*Tiryacchānyoni-*

(一) 傍生趣  
第一說

云何が<sup>〇五</sup>傍生趣なる。答ふ、諸の傍生と一性一類なる衆同分等の依得・事得・處得、若しは諸所有の傍生に生じ已れる無覆無記の色・受・想・行・識、是れを傍生趣と名く。

第二說

復た次に、愚鈍の身惡行・語惡行・意惡行に由りて、傍生に往き、傍生中に生じ、傍生の生を結ぶ、是れを傍生趣と名く。

第三說

復た次に、傍生趣とは、是れ名、是れ號、異語・増語・想・等想・施設・言説の故に傍生趣と名く。

(三) 鬼趣  
第一說

云何が<sup>〇六</sup>鬼趣なる。答ふ、諸の鬼衆と一性一類なる衆同分等の依得・事得・處得、若しは諸所有の鬼界に生じ已れる無覆無記の色・受・想・行・識、是れを鬼趣と名く。

第二說

復た次に、慳慳の身惡行・語惡行・意惡行を若しは習し、若しは修し、若しは多く所作するに由りて、鬼界に往き、鬼界中に生じ、鬼界の生を結ぶ、是れを鬼趣と名く。

第三說

復た次に、鬼趣とは、是れ名、是れ號、異語・増語・想・等想・施設・言説の故に鬼趣と名く。

(四) 人趣  
第一說

云何が<sup>〇七</sup>人趣なる。答ふ、諸の人衆と一性一類なる衆同分等の依得・事得・處得、若しは諸所有の人中に生じ已れる無覆無記の色・受・想・行・識、是れを人趣と名く。

第二說

復た次に、下品の身妙行・語妙行・意妙行を若しは習し、若しは修し、若しは多く所作するに由りて、人中に往き、人中に生

とすべく、同論は五趣説を記する處にある。

【六】 地獄趣、Nirayugati (Skt. = pāli) (Rhyas D. — Destiny of purgatory; Neumann. Unterwelt.) 大集法門經は今と同。こは要するに、印度の天地を類推の根據にして考へた古昔の人が、印度の地上生活から、雪山乃至天の崇高を思ひ、そこに所謂天趣を立つると共に、地下又は地外に、より苦にして惡なる境界を推測し、もつて地獄趣と立てし所にて、爲めに、諸の典籍の記する所にも、一説では地下とし、一説では須彌山組織の外(鐵圍山外)の生活とする二説がある。衆生の懲罰的に苦患を受けるの所及び所生の有情自らのことをいふ。

【七】 諸の地獄、同じ地獄の生を受けおる有情。

【八】 衆同分、Nikkaya-sambhagata. 古來分とは因の義とされ、恰も、勝論外道 Vaiseshika (衛世師) に於ける同句義の如く(手近くは木村泰賢教授著六派哲學參照)、有情と有情とを互に同類の有情として類同せしめる所以の原理に名く。心不相應行法の一で、後の成立有部諸典では、これに、無差別 abhinna 衆同分(一切有情たる限りは有情として同一ならしめ、非情の無生物と簡ばしむる原理)と有差別 bhinnā 衆同分(かゝる有情中で、同じ有情ではあれど、天は天に同じ、人は人、乃至、地獄の有情は地獄の有情に同じて各他より簡別せしめる原理)の二別を設け、又以上はすべて生物、即ち、有情に關するもの故、有情同分(又は有情衆同分) sattva-sambhagata とするに對して、又、蘊、處、界等の諸法(必ずしも無生物とはいへぬ)、有情の要素に約し)は、かゝる諸法として、同様に、蘊は蘊乃至界は界に對し、各互に同ぜしむべき原理に即ち、衆同でもあるべきなればこれを名けて法同分 Dharma-sambhagata とすと。而も、かゝる分別が果して



願はくは我れ獨り能く正法を宣説して、餘は皆な能はざらむことを。

願はくは、我れ獨り能く他をして誦念せしめて、餘は皆な能はざらむことを。

願はくは、我れ獨り能く問答、決擇して、餘は皆な能はざらむことを。

願はくは、我れ獨り能く素相續、及び毘奈耶・阿毘達磨を持して、餘は皆な能はざらむことを。

願はくは、我れ獨り能く諸の論を分別し、解釋し、及び、自ら能く造り、餘は皆な能はざらむことを。

彼は「是くの如く」教法に於いて、願戀繫心し、他の有情に於いて障礙し、遮止して施さず、惠まず、隨施惠せず、棄せず、捨せず、遍棄捨せざる、是れを法慳と名く。

五趣とは、一には地獄趣、二には傍生趣、三には鬼趣、四には人趣、五には天趣なり。

云何が地獄趣なる。答ふ諸の地獄と一性一類なる、衆同分等の依得・事得・處得、若しは諸所有の地獄に生じ已れる無覆無記の色・受・想・行・識、是れを地獄趣と名く。

復た次に、上品の身惡行・語惡行・意惡行を若しは習し、若しは修し、若しは多く所作するに由りて、地獄に往き、地獄中に生じ、地獄の生を結ぶ、是れを地獄趣と名く。

復た次に、地獄趣とは、是れ名・是れ號・異語・増語・想・等想・施設・言説の故に、地獄趣と名く。

【六九】 記念す *Tapati* = to fry, to whisper, to mutter 。

【七〇】 問答決擇は、問答して、問答の疑を決擇理解させてやること。

【七一】 素相續、已註參照。Sūtra (sutta) 經のこと。

【七二】 毘奈耶、同上。Vinaya 律のこと。

【七三】 阿毘達磨、同上。Abhidharma (Abhidhamma) 論 *paṭisambhāra* or *śāstra* 典のこと。

【七四】 理教を善くする者等、佛教の理論教法に練熟せる、例へば法救 *Dharmatrāṭa* 世友 *Vasumitra* 乃至その外が、教法撮要、説明、組織等の爲めに作つた諸の論典—法救の雜阿毘曇心論、世友の尊婆密著薩所集論の如き—をよく分解、解説、釋明し、又、自らも準同のものをよく作りえんことを意。

【七五】 五趣 *Pañca gatiṃ* (pañca gatiyo) (Rkya D. 5 ways of destiny; Neumann—Fünf Fährten) 大集法門經—今と同。(衆集無) 又譯して五道と云ふ。

原字 *gati* を轉生しゆくべき處と見れば趣と云ふ、輪迴の道と見れば道と譯すべし。所詮、我らの現生活に於ける功罪によつて、當に趣生すべき五の境界の意にして、これを五とするは上座、有部等のことに屬し、犢子部 *Vātsīputrīya* (Vāṇiputtaka) アナンダカ *Andhaka* 及び北道部 *Uttarapāṭhaka* 等は、外に阿須羅 *Asura* 趣を加へ、六趣説と云ふ(智度論一〇末。K. V. VIII. & its commentary by Buddhaghosa 等) 又正量部 *Saṃmitīya* or *Saṃmatīya* (Saṃmiti) は或は六趣説をとり、或は更に中有 *Antarābhava* (已註參照) をも一趣として加へて七趣説をも主張せしと云ふ(三彌底部論—正量部論參照) 而してもし現在の分別功德論にして、或は學者のいふ如く、印度撰述で且つ、大衆部所説なり得ば、大衆部は亦五趣説なりし

## 五、五趣

### (一) 地獄趣

### 第二説

### 第三説

飲食資具等の管

らむことを。唯だ。我れ善く飲食及び、餘の資具を受用して、飲食する所は時に随つて消化し、資具は長養して、面色に光澤あり、皮膚は細軟に、衆の愛樂する所たらしむるを知り、餘の及ぶ能はさらむことを。唯だ、我れ善く冠帶、衣服及び諸の嚴具の形貌を莊飾し、極めて顯好ならしむるを知り、餘の皆な及ばさらむことをと。彼れは「是くの如く」色讃に於いて顧戀繫心し、他の有情に於いて障礙し、遮止して、施さず、惠まず、隨施惠せず、棄せず、捨せず、遍棄捨せざる、是れを色讃慳と名く。

(四)利養慳

云何が 利養慳なる。答ふ、若し利養に於いて顧戀繫心するなり。謂はく「人」有るが如し。是くの如きの念を作さく、願はくは我れ獨り世間の 利養を得て、餘は得る能はさらむことを。願はくは獨り、我れを 差して諸の利養を受けしめ、餘人が差さざらむことを。願はくは獨り我が大福慧を具するを知りて、時に随つて衣服・飲食・臥具・醫藥、及び、餘の資財を布施し、一切世間の我れに及ぶ者無からむことをと。彼れは「是くの如く」利養に於いて顧戀繫心し、他の有情に於いて障礙し、遮止して、施さず、惠まず、隨施惠せず、棄せず、捨せず、遍棄捨せざる、是れを利養慳と名く。

(五)法慳

云何が 法慳なる。答ふ、若し教法に於いて、顧戀繫心するなり。謂はく、「人」有るが如し。是くの如きの念を作さく、

【四】資具とは、諸の臥具等の資具が、よく、身體を守つて寒熱を防ぎ、身勞を暨し、もつてよく身を長養するの意。

【金】利養慳 (Labha-m. (3. Labha-m.) (Bhys D. — Manness in ginn agured; Neumann — Eigenschaft den Besitz lieben.) 衆集經 — 三・利養僧嫉。大集法門經 — 三・今と同字。

【六】利養 (Labha = ginn, 利得のこと。  
【七】差すとは、特に指名しての意。

【八】法慳 (Dharma-m. (Dharma-m.) (Bhys D. — Manness in [monopolizing leart] trulst; Neumann — Eigenschaft die Lehre lieben.) 衆集經 — 法僧嫉。大集法門經 — 今と同。

なり。謂はく、一「人」有るが如し。是くの如きの念を作さく、願はくは此の住處は我れに屬して餘に非らざれ。我れのみ此の處に於いて、經行し、敷設し、居止し、受用して、餘は復た得ること勿れと。彼れの「是くの如く」住處に於いて願戀繫心し、他の有情に於いて障礙し、遮止して、施さず、惠まず、隨施惠せず、棄せず、捨せず、遍棄捨せざる、是れを住處慳と名く。

## (二) 家慳

云何が 家慳なる。答ふ、若し施主の家に於いて願戀繫心するなり。謂はく、一「人」有るが如し。是くの如きの念を作さく、願はくは此の施主の家は我れに屬して餘に非らざれ。我れは此の家に於いて獨り入り、獨り出で、往還し、親昵し、居止し、受用して、餘は復た得ること勿れと。彼れの「是くの如く」施主の家に於いて願戀繫心し、他の有情に於いて障礙し、遮止して施さず、惠まず、隨施惠せず、棄せず、捨せず、遍棄捨せざる、是れを家慳と名く。

## (三) 色讃慳

## 色 慳

## 色 慳

云何が 色讃慳なる。答ふ、若し色讃に於いて願戀繫心するなり。謂はく、一「人」有るが如し。是くの如きの念を作さく、願はくは我れ獨り微妙の好色を得て衆に樂見せられ、顏貌端正にして、第一清淨、圓滿の諸の 顯形色を成就し、餘の及ぶ者無らむことを。願はくは我れ獨り廣大の名稱・善聲・善譽を得、諸の方維に通じ、一切世間の皆な共に讃頌して、餘の及ぶ者無

【20】經行 *Cankramati* (*camkramati*) = to go here and there. 即ち、あちこち歩くこと。坐禪の間に足部の血脈循環をはかる爲めの運動。禪家では今日キンヒンと訓ず。

【21】家慳 *Kula-mātaryā* (*kula* *noctic-jā*) (*Rhys* D.-Meanness in [monopolizing a ministering family; Neumann *Eigenschaft den Stamm lieben*]) 衆集經・檀越情婁。大集法門經・善事慳(=)

【22】色讃慳 ? *Vaiya-m.* (No. 4. *vaiya-m.*) (*Rhys* D.-Meanness in beauti-physical and moral; Neumann *Eigenschaft die Schönheit lieben*) 衆集經・四・色僧婁。大集法門經・四・色相慳。蓋し、今の文以外はすべて唯色相(形貌)の一面のみなるも、今の論はその色相の外、聲譽、名聞をも讃として加ふるもので、その點、諸他の典籍と簡す。

【23】顯形色とは、顯色 *Vaiya rūpa* (Skt.) 及び形色 *Saṃsthāna-rūpa* (Skt.) 卽ち前者は色 colour 後者は形 shape or form.



欲と名く。

(四)舌所識の味妙欲

四には舌所識の味の、可愛・可樂・可喜・可意にして、此の可愛の味の、能く、諸の欲を引き、染著に隨順するを、舌所識の味妙欲と名く。

(五)身所識の觸妙欲

五には身所識の觸の、可愛・可樂・可喜・可意にして、此の可愛の觸の、能く諸の欲を引き、染著に隨順するを、身所識の觸妙欲と名く。

右の論釋

(一)色妙欲

云何が眼所識の色妙欲なる。 答ふ、若し色の、欲界繫にして、眼觸所生の愛の所縁なる、是れを眼所識の色妙欲と名く。

(二)聲妙欲

云何が耳所識の聲妙欲なる。 答ふ、若し聲の、欲界繫にして、耳觸所生の愛の所縁なる、是れを耳所識の聲妙欲と名く。

(三)香妙欲

云何が鼻所識の香妙欲なる。 答ふ、若し香の、欲界繫にして、鼻觸所生の愛の所縁なる、是れを耳所識の香妙欲と名く。

(四)味妙欲

云何が舌所識の味妙欲なる。 答ふ、若し味の、欲界繫にして、舌觸所生の愛の所縁なる、是れを舌所識の味妙欲と名く。

(五)觸妙欲

云何が身所識の觸妙欲なる。 答ふ、若し觸の、欲界繫にして、身觸所生の愛の所縁なる、是れを身所識の觸妙欲と名く。

四、五 慳

五慳とは、一には住處慳、二には家慳、三には色讚慳、四には利養慳、五には法慳なり。

(一)住處慳

云何が住處慳なる。 答ふ、若し住處に於いて願戀繫心する

【三】 眼所識の色妙欲。 *Ḍ* Oakkhu-viññeṭṭhā rūpa kāmāgūṇā.

【四】 耳所識の等。 *Ḍ* Sota-viññeṭṭhā saddā k.-g.

【五】 鼻所識等。 *Ḍ* Ghāṇa-viññeṭṭhā gandhā k.-g.

【六】 舌所識の味妙欲。 *Ḍ* Jivhā-viññeṭṭhā rasā k.-g.

【七】 身所識等。 *Ḍ* Kāya-viññeṭṭhā phoṭṭhabhā k.-g.

【三】 五慳。 *Pañca mātsaryāni* (*pañcamocchariyāni*) (*Rhys D.*—5 forms of meanness; Neumann—5 Arten der Eigensucht.) 衆集經—五特嫉。大集法門經—今と同。慳 *mātsaryā* (*mocchariyā*) = selfishness とは後の成立有部の所謂七十五法の分別よりいへば、十の小煩惱地法の一で、心所法の一に當り、専ら祕慳を性とし、惠捨する能はざる煩惱種である。百法問答抄一、一六左、而して、今はそれをその祕慳不惠捨の對象の、住處、施主家、色相、利得、並びに教法なるにより、五分して、稱して、五慳とする所である。

【三】 住處慳。 *Avāsa-mātsarya* (*Avāsamocchariyā*) (*Rhys D.*—Meanness in hospitality; Neumann—Eigensüchtig den Ort lieben.) 衆集經—住處特嫉。大集法門經—飲食慳といふに當る。

(三)想取蘊

云何が<sup>六五</sup>想取蘊なる。答ふ、若し想の有漏にして、諸の取に隨順し、此の諸の想の若しは過去、若しは未來、若しは現在なるに於いて、欲の生ずる時、或ひは貪、或ひは瞋、或ひは癡、或ひは一一の心所に隨う隨煩惱を生ぜば、是れを想取蘊と名く。

(四)行取蘊

云何が<sup>六六</sup>行取蘊なる。答ふ、若し行の有漏にして、諸の取に隨順し、此の諸の行の若しは過去、若しは未來、若しは現在なるに於いて、欲の生ずる時、或ひは貪、或ひは瞋、或ひは癡、或ひは一一の心所に隨う隨煩惱を生ぜば、是れを行取蘊と名く。

(五)識取蘊

云何が<sup>六七</sup>識取蘊なる。答ふ、若し識の有漏にして、諸の取に隨順し、此の諸の識の若しは過去、若しは未來、若しは現在なるに於いて、欲の生ずる時、或ひは貪、或ひは瞋、或ひは癡、或ひは一一の心所に隨う隨煩惱を生ぜば、是れを識取蘊と名く。

三、五妙欲

(一)眼所識の色妙欲

五妙欲とは、一には<sup>六八</sup>眼所識の色の、可愛・可樂・可喜・可意にして、此の可愛の色は、能く諸の<sup>七二</sup>欲を引き、染著に隨順するを、眼所識の色妙欲と名く。

(二)耳所識の聲妙欲

二には耳所識の聲の、可愛・可樂・可喜・可意にして、此の可愛の聲の、能く諸の欲を引き、染著に隨順するを、耳所識の聲妙欲と名く。

(三)鼻所識の香妙欲

三には鼻所識の香の、可愛・可樂・可喜・可意にして、此の可愛の香の、能く諸の欲を引き、染著に隨順するを、鼻所識の香妙

【七〇】 想取蘊 Samjāt-up-sk. (Saññupādāna-kkhandha)(Rhyas D.—Aggregate of perception [regarded as vehicle] of grasping; Neumann—Ein Stück Anhangen an der Wahrnehmung.) 衆集經 想受陰。大集法門經は今と同。

【七一】 行取蘊 Samkāra-up-sk. (sankhāropādāna-kkha)(Rhyas D.—Aggregate of volitional complexes [regarded as vehicle] of grasping; Neumann—Ein Stück Anhangen an der Unterscheidung.) 衆集經 一行受陰。大集法門經—今と同。

【七二】 識取蘊 Vijñānopādāna-sk. (viññānopādāna-kkha)(Rhyas D.—Aggregate of consciousness [regarded as vehicle] of grasping; Neumann—Ein Stück Anhangen am Bewusstsein.) 衆集經 識受陰。大集法門經—今と同。

【七三】 五妙欲 Pañca kāmagnūḥ (pañca kāmagnūḥ)(Rhyas D.—5 kinds of sensuous pleasures; Neumann—Fünf Begierungen.) 大集法門經—五欲(衆集經—數々原字通りに五欲功德と譯され、聖典隨處に見出さるゝ項目にして、妙欲とは妙なる欲の境たるものを意味し、五根の對象としての五境(色・聲・香・味・觸)が、五根を通うし、我らの欲をあふり、欲を催うさしめ、我らを染著させ、執着せしむるが故に名く。

【七四】 眼所識 E' Oakkhu-viññeyya=sognizable through the eye.

【七五】 可愛等 E' Iṭṭhā, kaṇṭhā, manāpā, piya(Rhyas D.—desirable, pleasant, agreeable, charming.)

【七六】 欲を引く E' Kāmyapaṇahita (Neumann—Dem Begehren entsprehen.)

【七七】 染著に隨順とは E' Rajinīya (Neumann—Reizendend; Rhyas D.—Exciting the passions.)



近の識と名く。

是くの如きを名けて、若しは遠、若しは近と爲す。

「是くの如きの一切を略して一聚と爲し」

「是くの如きの一切を、略して一聚と爲し」とは、云何が一切を略して一聚と爲すや。答ふ、推度し、思惟し、稱量し、觀察して集めて一聚と爲す。是の故に名けて「是くの如きの一切を、略して一聚と爲し」と爲す。

「説いて識蘊と名く」

「説いて識蘊と名く」とは、云何が説いて識蘊と名くるや。答ふ、此の識蘊に於いて、識を顯し、蘊を顯し、身を顯し、聚を顯す、是の故に、名けて「説いて識蘊と名く」と爲す。

## 二、五取蘊

五取蘊とは、一には色取蘊、二には受取蘊、三には想取蘊、四には行取蘊、五には識取蘊なり。

### (一) 色取蘊

云何が<sup>六二</sup>色取蘊なる。答ふ、若し色の有漏にして、諸の取に隨順し、此の諸の色の、若しは過去、若しは未來、若しは現在なるに於いて、欲の生ずる時、或ひは貪、或ひは瞋、或ひは癡、或ひは<sup>六三</sup>一々の心所に隨う隨煩惱を生ぜば、是れを色取蘊と名く。

云何が<sup>六四</sup>受取蘊なる。答ふ、若し受の有漏にして、諸の取に隨順し、此の諸の受の若しは過去、若しは未來、若しは現在なるに於いて、欲の生ずる時、或ひは貪、或ひは瞋、或ひは癡、或ひは<sup>六五</sup>一一の心所に隨う隨煩惱を生ぜば、是れを受取蘊と名く。

云何が<sup>六六</sup>想取蘊なる。答ふ、若し想の有漏にして、諸の取に隨順し、此の諸の想の若しは過去、若しは未來、若しは現在なるに於いて、欲の生ずる時、或ひは貪、或ひは瞋、或ひは癡、或ひは<sup>六七</sup>一一の心所に隨う隨煩惱を生ぜば、是れを想取蘊と名く。

【六二】五取蘊 *Pañcōpādāna-skāndhāḥ* (*pañcō upādāna-kkhandhā*) (*Ellys D.—Five aggregates* [*regarded as vehicles*] of grasping; Neumann—Fünf Stücke des Anhangens) 衆集經 五受陰。大集法門經—今と同。取 *Upādāna* (*clinging or grasping*) とは煩惱の異名で、已註の如く、五蘊のかゝる煩惱の所産であり、又煩惱の生縁となるべきを名けて五取蘊といふものである。

【六三】色取蘊 *Kūpōpādāna-skāndha rūp' upādāna-kkhandha* (*Ellys D.—Aggregate of material qualities* [*regarded as vehicle*] of grasping; Neumann—Ein Stück Anhangen an der Form.) 衆集經—色受陰。大集法門經は今に同じ。

【六四】一一の心所とは、心所は少くとも直接には貪・瞋・癡の三を指す。蓋し、隨煩惱(或は小分惑) *Upakilesa* (*upakilesa*) とは、今の貪・瞋・癡等の根本惑 *kleśa* (*kleśa*) or *mūlakleśa* に隨つて起るが故に名る所に於いて、從つて今は、前行の三毒三心所に隨つて起る隨煩惱との意味にて、文の如く記す所である。

【六五】受取蘊 *Vedanā-upādāna-skāndha* (*Vedanā-upādāna-kkhandha*) (*Ellys D.—Aggregate of feeling* [*regarded as vehicle*] of grasping; Neumann—Ein Stück Anhangen am Gefühl.) 衆集經—受受陰。大集法門經は今に同じ。





龜識と細識

のなる。是れを外の識と名く。

若しは龜、若しは細とは、云何が龜の識と、細の識とを施設するや。 答ふ、觀待して龜の識と、細の識とを施設す。

「是れは」復た如何等なる。 答ふ、若し無尋唯伺の識に觀待せば、則ち、有尋有伺の識を龜と名け、若し有尋有伺の識に觀待せば、則ち、無尋唯伺の識を細と名け、若し無尋無伺の識に觀待せば、則ち、無尋唯伺の識を龜と名け、若し無尋唯伺の識に觀待せば、則ち、無尋無伺の識を細と名け、若し色界の識に觀待せば、則ち、欲界の識を龜と名け、若し欲界の識に觀待せば、則ち、色界の識を細と名け、若し無色界の識に觀待せば、則ち、色界の識を龜と名け、若し色界の識に觀待せば、則ち、無色界の識を細と名け、若し不繫の識に觀待せば、則ち、無色界の識を龜と名け、若し無色界の色に觀待せば、則ち、不繫の識を細と名く。是くの如く龜の識と細の識とを施設す。——是くの如きを名けて若しは龜、若しは細と爲す。

劣識と勝識

若しは劣、若しは勝とは、云何が劣の識と、勝の識とを施設するや。 答ふ、觀待して劣の識と勝の識とを施設す。

「是れは」復た如何等なる。 答ふ、若し有覆無記の識に觀待せば、則ち、不善の識を劣と名け、若し不善の識に觀待せば、則ち、有覆無記の識を勝と名け、若し無覆無記の識に觀待せば、則

の識と爲す。

過去の識

若しは過去、若しは未來、若しは現在とは、云何が過去の識なる。答ふ、若し識の已に起れる、已に等起せる、已に生ぜる、已に等生せる、已に轉ぜる、已に現轉せる、已に聚集せる、已に出現せる、過去に落謝せる、盡滅せる、離變せる、過去の性なる、過去の類なる、過去世の攝なる、是れを過去の識と名く。

未來の識

云何が未來の識なる。答ふ、若し識の未だ已に起らざる、未だ已に等起せざる、未だ已に生ぜざる、未だ已に等生せざる、未だ已に轉ぜざる、未だ已に現轉せざる、未だ聚集せざる、未だ出現せざる、未來の性なる、未來の類なる、未來世の攝なる、是れを未來の識と名く。

現在の識

云何が現在の識なる。答ふ、若し識の已に起れる、已に等起せる、已に生ぜる、已に等生せる、已に轉ぜる、已に現轉せる、聚集せる、出現せる、住せる、未だ已に謝せざる、未だ已に盡滅せざる、未だ已に離變せざる、和合現前せる、現在の性なる、現在の類なる、現在世の攝なる、是れを現在の識と名く。

内の識

若しは内、若しは外とは、云何が内の識なる。答ふ、若し識の此の相續に在りて、已に得て失はざる、是れを内の識と名く。

外の識

云何が外の識なる。答ふ、若し識の此の相續に在りて、或ひは本より未だ得ざる、或ひは得て已に失へる、若しは他の相續



來の行なり。

近の行

云何が近の行なる。答ふ、現在の行なり。

遠の行第二説

復た次に、云何が遠の行なる。答ふ、若しは行の過去にして、無間に滅せるに非ざる、若しは行の未來にして、現前に起れるに非ざる、是れを遠の行と名く。

近の行第二説

云何が近の行なる。答ふ、若しは行の過去にして、無間に已に滅せる、若しは行の未來にして、現前に正に起れる、是れを近の行と名く。

是くの如きを名けて若しは遠、若しは近と爲す。

「是くの如きの一切を略して一聚と爲す」

「是くの如きの一切を、略して一聚と爲す」とは、云何が一切を略して一聚と爲すや。答ふ、推度し、思惟し、稱量し、觀察し、集めて一聚と爲す。是の故に名けて、「是くの如きの一切を、略して一聚と爲す」と爲す。

「説いて行蘊と名く」

「説いて行蘊と名く」とは、云何が説いて行蘊と名くるや。答ふ、此の行蘊に於いて、行を顯し、蘊を顯し、身を顯し、聚を顯す。是の故に名けて「説いて行蘊と名く」と爲す。

諸所有の識

諸所有の識とは、云何が名けて諸所有の識と爲すや。答ふ、盡諸有の識なり。謂はく、六識身なり。何等か六と爲す。謂は

く、眼識、耳・鼻・舌・身・意識なり。是くの如きを名けて諸所有

【六】六識身、上の六受身等に準じて知るべし。

劣の行と勝の行

如きを名けて若しは鹿、若しは細と爲す。

若しは劣、若しは勝とは、云何が劣の行と、勝の行とを施設するや。答ふ、觀待して劣の行と勝の行とを施設す。

「是れは」復た如何等なる。答ふ、若し有覆無記の行に觀待せば、則ち、不善の行を劣と名け、若し不善の行に觀待せば、則ち、有覆無記の行を勝と名け、若し無覆無記の行に觀待せば、則ち、有覆無記の行を劣と名け、若し有覆無記の行に觀待せば、則ち、無覆無記の行を勝と名け、若し有漏善の行に觀待せば、則ち、無覆無記の行を劣と名け、若し無覆無記の行に觀待せば、則ち、有漏善の行を勝と名け、若し無漏善の行に觀待せば、則ち、有漏善の行を劣と名け、若し有漏善の行に觀待せば、則ち、無漏善の行を勝と名け、若し色界の行に觀待せば、則ち、欲界の行を劣と名け、若し欲界の行に觀待せば、則ち、色界の行を勝と名け、若し無色界の行に觀待せば、則ち、色界の行を劣と名け、若し色界の行に觀待せば、則ち、無色界の行を勝と名け、若し不繫の行に觀待せば、則ち、無色界の行を劣と名け、若し無色界の行に觀待せば、則ち、不繫の行を勝と名く。是くの如く劣の行と、勝の行とを施設す。——是くの如きを名けて若しは劣、若しは勝と爲す。

遠の行

若しは遠、若しは近とは、云何が遠の行なる。答ふ、過去未

【五〇】 若しは劣等も、毘崩伽のそれは完く上に準ず。

【五一】 若しは遠等、毘崩伽論の所述は上に同じて知れ。

内 の 行

滅せざる、未だ已に離變せざる、和合現前せる、現在の性なる、現在の類なる、現在世の攝なる、是れを現在の行と名く。

若しは内、若しは外とは、云何が内の行なる。答ふ、若し行の此の相續に在りて、已に得て失はざる、是れを内の行と名く。

外 の 行第二釋

云何が外を行なる。答ふ、若し行の此の相續に在りて、或ひは本より未だ得ざる、或ひは得て已に失へる、若しは他の相續の、若しは非有情數なる、是れを外の行と名く。

行 龜の行と細の行

<sup>五七</sup> 若しは龜、若しは細とは、云何が龜の行と、細の行とを施設するや。答ふ、觀待して龜の行と細の行とを施設す。

「是れは」復た如何等なる。答ふ、若し無尋唯伺の行に觀待せば、則ち、有尋有伺の行を龜と名け、若し有尋有伺の行に觀待せば、則ち、無尋唯伺の行を細と名け、若し無尋無伺の行に觀待せば、則ち、無尋唯伺の行を龜と名け、若し無尋唯伺の行に觀待せば、則ち、無尋無伺の行を細と名け、若し色界の行に觀待せば、則ち、欲界の行を龜と名け、若し欲界の行に觀待せば、則ち、色界の行を細と名け、若し無色界の行に觀待せば、則ち、色界の行を龜と名け、若し色界の行に觀待せば、則ち、無色界の行を細と名け、若し不繫の行に觀待せば、則ち、無色界の行を龜と名け、若し無色界の行に觀待せば、則ち、不繫の行を細と名く。是くの如く龜の行と、細の行とを施設す。——是くの

【五七】 若しは龜等、毘崩伽論の説は全く上の想等の場合に同ず。



答ふ、此の想蘊に於いて、想を顯し、蘊を顯し、身を顯し、聚を顯す。是の故に、名けて「説いて想蘊と名く」と爲す。

## 諸所有の行

諸所有の行とは、云何が名けて諸所有の行と爲すや。 答ふ、

盡所有の行なり。謂はく、<sup>五六</sup>六行身なり。何等か六と爲す。謂はく、眼觸所生の行、耳・鼻・舌・身・意觸所生の行なり。是くの如きを名けて諸所有の行と爲す。

## 過去の行

若しは過去、若しは未來、若しは現在とは、云何が過去の行なる。 答ふ、若し行の已に起れる、已に等起せる、已に生ぜる、已に等生せる、已に轉ぜる、已に現轉せる、已に聚集せる、已に出現せる、過去に落謝せる、盡滅せる、離變せる、過去の性なる、過去の類なる、過去世の攝なる、是れを過去の行と名く。

## 未來の行

云何が未來の行なる。 答ふ、若し行の未だ已に起らざる、未だ已に等起せざる、未だ已に生ぜざる、未だ已に等生ぜざる、未だ已に轉ぜざる、未だ已に現轉ぜざる、未だ聚集せざる、未だ出現せざる、未來の性なる、未來の類なる、未來世の攝なる、是れを未來の行と名く。

## 現在の行

云何が現在の行なる。 答ふ、若し行の已に起れる、已に等起せる、已に生ぜる、已に等生せる、已に轉ぜる、已に現轉せる、已に聚集せる、出現せる、住せる、未だ已に謝せざる、未だ已に盡

【五六】六行身、前の六受身等に類して知るべし。因みに、盡所有の以下の全文を宋・元・明、及び、宮内省本の四本には次の如く記す。

盡所有の行蘊に略して二種有り。一には心相應行蘊、二には心不相應行蘊なり、云何が、心相應行蘊なる。 答ふ、思、觸、作意、乃至、諸所有の現觀なり。復、此の餘にも、是くの如き類の法の、心と相應する有り。——是くの如きを名けて心相應行蘊と爲す。云何が心不相應行蘊なる。 答ふ、得、無想定、乃至、文・身なり（已註參照）。復此の餘にも、是くの如き類の法の、心不相應なる有り。——是くの如きを名けて心不相應行蘊と爲す。此の中には、若しは心想應行蘊、若しは心不相應行蘊なり。

名け、若し色界の想到觀待せば、則ち、無色界の想を勝と名け、若し不繫の想到觀待せば、則ち、無色界の想を劣と名け、若し無色界の想到觀待せば、則ち、不繫の想を勝と名く。是くの如く劣の想と、勝の想とを施設す。——是くの如きを名けて、若しは劣、若しは勝と名く。

至  
若しは遠、若しは近とは、云何が遠の想なる。答ふ、過去未來の想なり。

近 想

云何が近の想なる。答ふ、現在の想なり。

遠想(第二説)

復た次に、云何が遠の想なる。答ふ、若しは想の過去にして、無間に滅せるに非ざる、若しは想の未來にして、現前に起れるに非ざる、是れを遠の想と名く。

近想(第二説)

云何が近の想なる。答ふ、若しは想の過去にして、無間に已に滅せる、若しは想の未來にして現前に正に起れる、是れを近の想と名く。

是くの如きを名けて若しは遠、若しは近と爲す。

「是くの如き一切を略して一聚と爲し」

「是くの如き一切を、略して一聚と爲し」とは、云何が一切を略して、一聚と爲すや。答ふ、推度し、思惟し、稱量し、觀察して、集めて一聚と爲す。是の故に、名けて「是くの如き一切を略して一聚と爲し」と爲す。

「説いて想蘊と名く」

「説いて想蘊と名く」とは、云何が説いて想蘊と名くるや。

【五】若しは遠等、毘崩伽論は上の受の場合に準ず。近の場合も然り。

劣想と勝想

待せば、則ち、欲界の想を龜と名け、若し欲界の想に觀待せば、則ち、色界の想を細と名け、若し無色界の想に觀待せば、則ち、色界の想を龜と名け、若し色界の想に觀待せば、則ち、無色界の想を細と名け、若し不繫の想に觀待せば、則ち、無色界の想を龜と名け、若し無色界の想に觀待せば、則ち、不繫の想を細と名く。是くの如く龜の想と、細の想とを施設す。——是くの如きを名けて若しは龜、若しは細と爲す。

【五】若しは劣、若しは勝とは、云何が劣の想と勝の想とを施設するや。答ふ、觀待して劣の想と、勝の想とを施設す。

「是れは」復た、如何等なる。答ふ、若し有覆無記の想に觀待せば、則ち、不善の想を劣と名け、若し不善の想に觀待せば、則ち、有覆無記の想を勝と名け、若し無覆無記の想に觀待せば、則ち、有覆無記の想を劣と名け、若し有覆無記の想に觀待せば、則ち、無覆無記の想を勝と名け、若し有漏善の想に觀待せば、則ち、無覆無記の想を劣と名け、若し無覆無記の想に觀待せば、則ち、有漏善の想を勝と名け、若し有漏善の想に觀待せば、則ち、無漏善の想を勝と名け、若し色界の想に觀待せば、則ち、欲界の想を劣と名け、若し欲界の想に觀待せば、則ち、色界の想を勝と名け、若し無色界の想に觀待せば、則ち、色界の想を劣と

【五】若しは劣等、毘崩伽論には不善の想、劣、善無記の想、勝。乃至有漏想、劣、無漏想、勝等と記す。



現在の想

內  
想

外  
の  
想

廬想と細想

【五】若しは龜等、毘崩伽論には有對觸所生の想<sub>レ</sub>龜、增語觸所生 *aññavaṇṇasaṃphassaṃ* の想<sub>レ</sub> 細、不善想<sub>レ</sub> 龜、善及び無記の想<sub>レ</sub> 細。乃至有漏の想<sub>レ</sub> 龜、無漏の想<sub>レ</sub> 細等と記す。

無漏の想ニ細等と記す。

「是くの如き  
の一切を略し  
て一聚と爲す」

「是くの如きの一切を、略して一聚と爲す」とは、云何が一切を略して一聚と爲すや。答ふ、推度し、思惟し、稱量し、觀察して集めて一聚と爲す。是の故に名けて「是くの如きの一切を略して一聚と爲す」と爲す。

「説いて受蘊  
と名く」

「説いて受蘊と名く」とは、云何が説いて受蘊と名くるや。

答ふ、此の受蘊に於いて、受を顯し、蘊を顯し、身を顯し、聚を顯す。是の故に名けて「説いて受蘊と名く」と爲す。

諸所有の想

諸所有の想とは、云何が名けて諸所有の想と爲すや。答ふ、  
盡所有の想なり。謂はく、<sup>五二</sup>六想身なり。何等か、六と爲すや。

謂はく、眼觸所生の想、耳・鼻・舌・身・意觸所生の想、是くの如きを名けて諸所有の想と爲す。

過去の想

若しは過去、若しは未來、若しは現在とは、云何が過去の想なる。答ふ、若し想の已に起れる、已に等起せる、已に生ぜる、已に等生ぜる、已に轉ぜる、已に現轉ぜる、已に聚集せる、已に出現せる、過去に落謝せる、盡滅せる、離變せる、過去の性なる、過去の類なる、過去世の攝なる。——是れを過去の想と名く。

未來の想

云何が未來の想なる。答ふ、若し想の未だ已に起らざる、未だ已に等起せざる、未だ已に生ぜざる、未だ已に等生ぜざる、

【五二】 六想身とは、前註【四八】六受身に類して知るべし。

則ち、有漏善の受を勝と名け、若し無漏善の受到に觀待せば、則ち、有漏善の受を劣と名け、若し有漏善の受到に觀待せば、則ち、無漏善の受を勝と名け、若し色界の受到に觀待せば、則ち、欲界の受を劣と名け、若し欲界の受到に觀待せば、則ち、色界の受を勝と名け、若し無色界の受到に觀待せば、則ち、色界の受を劣と名け、若し色界の受到に觀待せば、則ち、無色界の受を勝と名け、若し不繫の受到に觀待せば、則ち、無色界の受を劣と名け、若し無色界の受到に觀待せば、則ち、不繫の受を勝と名く。是くの如く劣の受と勝の受とを施設す。——是くの如きを名けて若しは劣、若しは勝と爲す。

遠 受  
若しは遠若しは近とは、云何が遠の受なる。 答ふ、過去と未來との受なり。

近 受  
云何が近の受なる。 答ふ、現在の受なり。  
遠受第二説  
復た次に、云何が遠の受なる。 答ふ、若しは受の過去にして、無間に滅せるに非ざる、若しは受の未來にして、現前に起れるに非ざる。是れを遠の受と名く。

近受第二解  
云何が近の受なる。 答ふ、若しは受の過去にして、無間に已に滅せる、若しは受の未來にして、現前に正しく起れる。是れを近の受と名く。

是くの如きを名けて、若しは遠、若しは近と爲す。

【五】若しは等、毘崩伽論は、準じて、不善受は善及び無記の受より遠、逆に善及び無記の受は不善の受から遠、又、善受は不善と無記との受からは遠（逆も亦同）、……乃至、苦受は樂及び非二受からは遠（逆も同）、樂受は他の二受からは遠（逆も同）……。有漏の受は無漏の受から遠（逆も同）、等と記す。



設 龜細二受の施

「是れは」復た如何等なる。答ふ、若し無尋唯伺の受到に觀待せば、則ち、有尋有伺の受を龜と名け、若し有尋有伺の受到に觀待せば、則ち、無尋唯伺の受を細と名け、若し無尋無伺の受到に觀待せば、則ち、無尋有伺の受を龜と名け、若し無尋唯伺の受到に觀待せば、則ち、無盡無伺の受を細と名け、若し色界の受到に觀待せば、則ち、色界の受を細と名け、若し欲界の受到に觀待せば、則ち、色界の受を細と名け、若し無色界の受到に觀待せば、則ち、色界の受を龜と名け、若し色界の受到に觀待せば、則ち、無色界の受を細と名け、若し不繫の受到に觀待せば、則ち、無色界の受を龜と名け、若し無色界の受到に觀待せば、則ち、不繫の受を細と名く。是の如く龜の受と、細の受とを施設す。——是の如きを名けて若しは龜、若しは細と爲す。

勝受と劣受  
若しは劣、若しは勝とは、云何が劣の受と勝の受とを施設するや。答ふ、觀待して劣の受と勝の受とを施設す。

「是れは」復た如何等なる。答ふ、若し有覆無記の受到に觀待せば、則ち、不善の受を劣と名け、若し不善の受到に觀待せば、則ち、有覆無記の受を勝と名け、若し無覆無記の受到に觀待せば、則ち、有覆無記の受を劣と名け、若し有覆無記の受到に觀待せば、則ち、無覆無記の受を勝と名け、若し有漏善の受到に觀待せば、則ち、無覆無記の受を劣と名け、若し無覆無記の受到に觀待せば、

【四〇】無尋唯伺等、尋及び何の二心所と受との相應如何により、受の龜細を分ち得とするものにて、直接にしては卷六、三法品四四の三定即ち、有尋有伺定、無尋唯定、無尋無伺定に各相應する受の龜細の別と見ればよく解し得べし。毘崩伽論には不善受は龜で、善及び無記受が細、善及び不善の受が龜で、無記が細、善受が龜で、樂及び非二受が細、樂、苦二受が龜で、非二受が細等と記す。參照すべし。(p. 3-4)

【五〇】觀待して等、毘崩伽論は準上に、不善受劣、善受勝、善不善受劣、捨(非二)受勝等とす。

已に等生せる、已に轉ぜる、已に現轉せる、已に聚集せる、已に出現せる、過去に落謝せる、盡滅せる、離變せる、過去の性なる、過去の類なる、過去世の攝なる。是れを過去の受と名く。

未來の受

云何が未來の受なる。 答ふ、若し受の未だ已に起らざる、未だ已に等起せざる、未だ已に生ぜざる、未だ已に等生せざる、未だ已に轉ぜざる、未だ已に現轉せざる、未だ聚集せざる、未だ出現せざる、未來の性なる、未來の類なる、未來世の攝なる、是れを未來の受と名く。

現在の受

云何が現在の受なる。 答ふ、若し受の已に起れる、已に等起せる、已に生ぜる、已に等生せる、已に轉ぜる、已に現轉せる、聚集せる、出現せる、住せる、未だ已に謝せざる、未だ已に盡滅せざる、未だ已に離變せざる、和合現前せる、現在の性なる、現在の類なる、現在世の攝なる、是れを現在の受と名く。

内の受

若しは内、若しは外とは、云何が内の受なる。 答ふ、若し受の此の相續に在りて、已に得て失はざる、是れを内の受と名く。

外の受

云何が外の受なる。 答ふ、若しは受の此の相續に在りて、或ひは本より未だ得ざる、或ひは得て已に失へる、若しは他の相續のなる、是れを外の受と名く。

龜受と細受

若しは龜、若しは細とは、云何が龜の受と、細の受とを施設するや。 答ふ、觀待して龜の受と、細の受とを施設す。

四五  
て、無間の滅せるに非ざる、若しは色の未來にして 現前に起るに非ざる。是れを遠の色と名く。

近色(第二説)

云何が近に色なる。 答ふ、若し色の過去にして無間に已に滅せる、若しは色の未來にして現前に正に起れる、是れを近の色と名く。

是くの如きを名けて若しは遠、若しは近と爲す。

「是くの如きの一切を略して一聚と爲し」と名く

「是くの如きの一切を略して一聚と爲し」とは、云何が一切を略して一聚と爲すや。 答ふ、推度し、思惟し、稱量し、觀察して、集めて一聚と爲す。是の故に名けて「是くの如きの一切を略して一聚と爲し」と爲す。

「説いて色蘊と名く」

「説いて色蘊と名く」とは、云何が説いて色蘊と名くるや。 答ふ、此の色蘊に於いて、色を顯し、蘊を顯し、身を顯し、聚を顯す。是の故に、名けて「説いて色蘊と名く」と爲す。

諸所有の受

諸所有の受とは、云何が名けて諸所有の受と爲すや。 答ふ、盡所有の受なり。謂はく、六受身なり。何等か六と爲す。謂はく、眼觸所生の受、耳・鼻・舌・身・意觸所生の受なり。是くの如きを名けて諸所有の受と爲す。

過去の受

若しは過去、若しは未來、若しは現在とは、云何が過去の受なる。 答ふ、若し受の已に起れる、已に等起せる、已に生ぜる、

【四〇】 無間等、無間のすぐ前に滅した許りならば、尙近色といふべき故に、然らざる遠い色の意。

【四一】 現前も、遠色のことゆへ、現前に起らんとする近色を簡らぶ。

【四二】 身 Kaya も聚の義で、蘊は聚 Heṣa の義なるに基く。

【四三】 六受身とは、受は感覺的感情で、六とはその感情が六根の何れを所依として起るかによつて分ち、身とは聚の意。



劣色と勝色

若しは劣若しは勝とは云何が劣の色と、勝の色とを施設するや。答ふ、觀待して劣の色と勝の色とを施設す。

「是れは」復た如何等なる。答ふ、若し、有覆無記の色に觀待せば、則ち、不善の色を劣と名け、若し不善の色に觀待せば、則ち、有覆無記の色を勝と名け、若し無覆無記の色に觀待せば、則ち、有覆無記の色を劣と名け、若し有覆無記の色に觀待せば、則ち、無覆無記の色を勝と名け、若し有漏善の色に觀待せば、則ち、無覆無記の色を劣と名け、若し無覆無記の色に觀待せば、則ち、有漏善の色を勝と名け、若し、無漏善の色に觀待せば、則ち、有漏善の色を劣と名け、若し有漏善の色に觀待せば、則ち、無漏善の色を勝と名け、若し色界の色に觀待せば、則ち、欲界の色を劣と名け、若し欲界の色に觀待せば、則ち、色界の色を勝と名け、若し不繫の色に觀待せば、則ち、色界の色を劣と名け、若し色界の色に觀待せば、則ち、不繫の色を勝と名く。是くの如く、劣の色と勝の色とを施設す。——是くの如きを名けて、若しは劣、若しは勝と爲す。

若しは遠、若しは近とは云何が遠の色なる。答ふ、過去未來の色なり。

云何が近の色なる。答ふ、現在の色なり。

復た次に、云何が遠の色なる。答ふ、若しは色の過去にし

四双八輩の聖者の法と涅槃とをいふに他ならぬ（一五九一）とす（有部の無表色Ⅱの説は卷三を参照せよ）。その變化を見るべし。因みにその有部では無色界は文字通り無色とする故、今、無色界の色とは記せず（大衆部は無色にも微妙の色あるを認む）宗輪論述記發勒四・二六右、三〇左參照）。

【四】有覆無記、無記 *Aryakṛta* (*avyākṛta*) とは、卷第一中所註の如く、善不善の積極性を記すべからざる中性の意なるが、それに又、細分して二種あり、（一）には、煩惱性で、これを今の有覆無記 *palakṣaṇīya* (*palakṣaṇīya*) と稱し（二）には非煩惱性で、これは無覆無記 *anirvāṇakṛta* (*anirvāṇakṛta*) と稱する。蓋し、覆 *nivṛta* covered とは、煩惱に覆はれたるの意である（婆沙五一、俱舍一三參照）。

【三】有漏善、無漏智を起さざる以前の凡夫の善法で、五戒（離殺生、離不與取、離邪淫、離妄語、離飲酒等在家の守るべきもの）、十善（五戒の初四の外に、離虛惡語、離離間語、離綺語、離貪、離瞋、離邪見、何れも已出）、及びその外の一切の見道以前の善法をいふ。蓋し無漏善の如く、尙、完く煩惱に關係なしとはいへぬ善の故である。

【四】無漏善、準じて、完く煩惱（漏）に關係のない善の意で、見道以上の聖者が所起の善を稱し、もつと具體的にいへば、四雙八輩の聖中、四向三果の有學善と、阿羅漢の無學の善と、最後に涅槃の最上勝義の善とを總稱す。

近色  
遠色（第二説）

内 の 色

に盡滅せざる、未だ已に離變せざる、和合現前せる、現在の性なる、現在の類なる、現在世の攝なる、是れを現在の色と名く。  
 若しは内、若しは外とは、云何が内の色なる。答ふ、若し色の此の相續に在りて、已に得て失はざる、是れを内の色と名く。

外 の 色

云何が外の色なる。答ふ、若し色の此の相續に在りて、或ひは、本より未だ得ざる、或ひは、得て已に失へる。若しは他の相續の、若しは非情數のなる、是れを外の色と名く。

色 と 細 色

若しは色、若しは細とは、云何が色の色と、細の色とを施設するや。答ふ、觀待して色の色と、細の色とを施設す。

「是れは」復た如何等なる。答ふ、若し無見有對の色に觀待せば、則ち、有見有對の色を色と名け、若し有見有對の色に觀對せば、則ち、無見有對の色を細と名け、若し無見有對の色に觀待せば、則ち、無見有對の色を色と名け、若し無見有對の色に觀待せば、則ち、無見無對の色を細と名け、若し色界の色に觀待せば、則ち、欲界の色を色と名け、若し欲界の色に觀待せば、則ち、色界の色を細と名け、若し不繫の色に觀待せば、則ち、色界の色を色と名け、若し色界の色に觀待せば、則ち、不繫の色を細と名く。是の如く色の色と細の色とを施設す。

——是くの如きを名けて、若しは色、若しは細と爲す。

【三】 未だ已に等、同前に、第三卷三法品十一、三世の下の註參考。

【三】 已に起れる等、また卷三、三法品三世の下參照。  
 【三】 相續、*Samkhū* (heap, multitude) とは身の意(分別論等、巴利の相應文には *yaṃ rūpaṃ teṇa teṇa u. sattaṇa* =)

【三】 他の相續、巴には、*Parasattanaṃ janyug-sattanaṃ* 即ち「他の有情・他の補特伽羅の」。

【三】 非情數、*Asattākhyā* (Skt.) 又は非有情數と記し、有情即ち生物の類數に攝せられざるもの。

【三】 復た如何等なとは、觀待し、相對的に色細の色を分つといふは如何に分つかとの問意。

【四】 無見有對とは、無見で且つ有對なることで、第一卷の諸門分別下參照。以下も準ず。及び卷三、三色處下を見よ。

【四】 不繫、繫とは則ち煩惱の足に繫縛せらるゝの意とは婆沙の解である(五二)。即ち、かくして、欲界の煩惱に繫せらるゝは欲界繫であり、乃至、かゝる繫縛の一切無く、自ら、三界關係の全然缺くるものが即ち今の不繫である。而して、いふ所の不繫の色とは則ち、所謂、無漏の色で、右に無見無對の色(卷三、三色處下參照)といふものに當り、又、道共戒の無表色、無漏律儀無表色等とも名け、見道以上の聖者が、よつてもつて無漏智を證得する所の無漏定に入るの際、自ら發得する所の止惡非防の戒の無表とさる。」然るに、今、これを上座部の宗義——例へば法僧伽尼論所說に見るに、不繫 *apariyāpanna* (*apariyāpanna*) は即ち煩惱の繫なき意で、從つて三界にも關係なきことなれば、その中に色は攝すべきでなく、一切の色と名く限りは繫法 *pariyāpanna dhammā* に配すべき(一五九〇)、不繫法 *apariyāpanna dhammā* とは則ち、

右解の詳解  
諸所有の名

細、若しは劣、若しは勝、若しは遠、若しは近なる。是くの如きの一切を、略して一聚と爲し、説いて識蘊と名く。

此の中、諸所有の色とは、云何が名けて諸所有の色と爲すや。答ふ、盡<sup>じん</sup>所有の色なり。謂はく、四大種、及び、四大種所

造の諸の色——是くの如きを名けて諸所有の色と爲す。復た次に、盡所有の色なり。謂はく、十色處と、及び、法處所攝の色となり。——是くの如きを名けて諸所有の色と爲す。

過去の色

若しは過去、若しは未來、若しは現在とは、云何が過去の色なるや。答ふ、若し色の已に起れる、已に等起せる、已に生ぜ

る、已に等生せる、已に轉ぜる、已に現轉ぜる、已に聚集せる、已に出現せる、過去に落謝せる、盡滅せる、離變せる、過去の性なる、過去の類なる、過去世の攝なる、是れを過去の色と名く。

未來の色

云何が未來の色なる。答ふ、若し色の未だ已に起らざる、未だ已に等起せざる、未だ已に生ぜざる、未だ已に等生ぜざる、未だ已に轉ぜざる、未だ已に現轉ぜざる、未だ聚集せざる、未だ出現せざる、未來の性なる、未來世の攝なる、是れを未來の色と名く。

現在の色

云何が現在の色なる。答ふ、若し色の已に起れる、已に等起せる、已に生ぜる、已に等生せる、已に轉ぜる、已に現轉ぜる、聚集せる、出現せる、住せる、未だ已に謝せざる、未だ已

一、S. XXII. の諸經を見よ。

【一】未來 Anāgata (Skt = pālī)

【二】現在 Paccutpanna (paccupanna)

【三】内 Adhyātman (ajjāta)

【四】外 Bahya or bahirdhā (bahiddhā)

【五】處 Andāra (ojā-āka)

【六】細 Sūkṣma (sukha ra)

【七】劣 Hīna (Skt = pālī)

【八】勝 Prāṇīta (Paṇīta)

【九】遠 Dūra

【十】近 Antīka

【十一】受蘊 Vedanā-skandha (V-ekhandha) (Rhy D. - feeling; Neumann - Ein Stielck Gefühl)

【十二】想蘊 Saṃjñā-skandha (saññā-ekhandha) (Rhy D. - perception; Neumann - Ein Stielck Wahrnehmung)

【十三】行蘊 Saṃskāra-sk. (saṃkāra-ekkh.) (Rhy D. Volitional complexes; Neumann - Ein Stielck Unterstellung)

【十四】識蘊 Viññāna-sk. (viññāna-ekkh.) (Rhy D. - Consciousness; Neumann - Ein Stielck Bewusstsein)

【十五】四大種 卷一、初を見よ。Catvāri mahābhūtāni (cattāro mahābhūtā)

【十六】四大種所造 卷二、二法品一七、根門能護、於食知量の註等を見よ。(E) Catumma mahābhūtānam upādāya rūpam.

【十七】十色處 卷四、三法品・二二、三變第一の下の十處を見よ。

【十八】法處所攝の色、卷六、四法品一、四念住下參照。

【十九】已に起れる等、卷三、三法品三世等の下を見よ。



## 一、五 蘊

五蘊とは、一には色蘊、二には受蘊、三には想蘊、四には行蘊、五には識蘊なり。

## (一) 色 蘊

云何が、色蘊なる。答ふ、諸所有の色の、若しは過去、若しは未來、若しは現在、若しは内、若しは外、若しは處、若しは細、若しは劣、若しは勝、若しは遠、若しは近なる。是くの如きの一切を、略して一聚と爲し、説いて色蘊と名く。

## (二) 受 蘊

云何が、受蘊なる。答ふ、諸所有の受の、若しは過去、若しは未來、若しは現在、若しは内、若しは外、若しは處、若しは細、若しは劣、若しは勝、若しは遠、若しは近なる。是くの如きの一切を、略して一聚と爲し、説いて受蘊と名く。

## (三) 想 蘊

云何が、想蘊なる。答ふ、諸所有の想の、若しは過去、若しは未來、若しは現在、若しは内、若しは外、若しは處、若しは細、若しは劣、若しは勝、若しは遠、若しは近なる。是くの如きの一切を、略して一聚と爲し、説いて想蘊と名く。

## (四) 行 蘊

云何が、行蘊なる。答ふ諸所有の行の、若しは過去、若しは未來、若しは現在、若しは内、若しは外、若しは處、若しは細、若しは劣、若しは勝、若しは遠、若しは近なる。是くの如きの一切を、略して一聚と爲し、説いて行蘊と名く。

## (五) 識 蘊

云何が、識蘊なる。答ふ、諸所有の識の、若しは過去、若しは未來、若しは現在、若しは内、若しは外、若しは處、若しは

【10】 五順下分結、Sa-r.-S. V. 7. 衆集經五四。大集法門經五四。A. IX. 67 (IV. 450); X. 13 (V. 17); S. XXII. 55 (III. 56); ibid. 89. (III. 130); D. 16. 7 (II. 92f). Vibhanga p. 377.

【11】 五順上分結。Sang.-S. V. 8. 衆集經五五。大集法門經缺。A. IX. 70 (IV. 460); X. 13 (V. 17); S. 47. 93-102 (V. 191f). Vibhanga. p. 377.

【12】 五蘊。Pañca-skandhāḥ (pañcakhandhāḥ) (Rhys D.—Five aggregates; Neumann—Fünf Skandhe) 衆集經一五入。蘊は衆 (Rasā) の義。色等五種は、何れも、細く分けてくば、品類差別して、種々なりと雖も、それらを大別して、かく色等五種となすべきが故に、名けて五蘊とす。蓋し、古來、佛陀が心法に關き者の爲めに施設せる分類と稱され、無常無我共にこれによつて説くと雖も、就中、無我説を、是れによつてとくの多き所。直接には我ら現身の分類觀にて、色とはその中の、専ら物質的方面を指し、受とは苦樂の感覺的感情、想は知覺、行はその受、想及び次の識の根本心性を除く、所餘一切の心性的派生活働、識はその根本心性をいふ。而も、所謂無我説については佛陀は又一切無我といへる如く、完く全稱的の言なりし故、その無我論を、よつてもつて説きしこの五蘊の分類も、換言する限り、また萬有に關する分類にして、もし萬有を物心の二とし得ること、普通によくする如くならば、佛陀はその中の物を専ら色蘊によつて總標すると共に、心を受想行識の四に分割示標し、もつてこの五蘊の分類とせる所ともすべし。

【13】 色蘊。Rūpa-skandha (Rūpakhandha) (Rhys D.—Material qualities; Neumann—Ein Stuck Form.)

【14】 過去。Atita (以下は經文そのまゝを引く、譯

# 卷の第十一

## 五法品第六

### (一) 諸の五法の一の

#### 五法

時に、舍利子の、復た、衆に告げて言はく、具壽よ、當さに知るべし、佛は五法に於いて、自ら、善く、通達し、現等覺し已りて、諸の弟子の爲めに宣説、開示せり。我れ等は今應さに和合結集して、佛滅度の後、乖靜有ること勿らしむべく、當さに梵行に隨順するの法律をして、久住して、無量の有情を利樂せしめ、世間の諸の天・人の衆を哀愍して、殊勝の義利、安樂を獲しむべし。五法とは云何。此の中に、二の嗠怛南頌有り。初めの嗠怛南に曰はく、

#### 第一の嗠怛南

初めの五法は十種あり。

謂はく、蘊と、取と、妙欲と、

慳と、趣と、蓋と、裁と、縛と、

下と、上との結との、各、五あるなり、

と。

#### 十の五法

五蘊・五取蘊・五妙欲・五慳・五趣・五蓋・五心裁・五心縛・五順下分結・五順上分結有り。

#### 五法品第六

【一】五法品等。原漢典には、五法品第六の一と作り次の(一)諸の五法等は無し。

【二】五蘊。Sang. — S. V. 1. 衆集經五・無。大集法門經五・無。A. IV. 200. 9 (II. 214); IX. 66 (IV. 147)

【三】五取蘊。Sang. — S. V. 2. (衆集經五・一)。大集法門經九・一。A. IV. 41. 5 (II. 45); IV. 30. 3 (II. 30); IX. 66 (IV. 458); X. 4 (V. 109); M. 23. Yamnika sutta (I. 144) = 大正九五・摩訶經(未施護譯參照)。

【四】五妙欲。Sang. — S. V. 3. 衆集經五・無。大集法門經五・一。A. VI. 63. 3 (III. 411); IX. 31. 3 (IV. 415); 33. 6 (IV. 430); 65 (IV. 458); M. 13. Mahadukka-khandhasutta (I. 85) = 中阿含九・苦陰經。

【五】五慳。Sang. — S. V. 5. 衆集經五・一。大集法門經五・五。A. IX. 69 (IV. 459); Dharmasangani 1122; Vibhanga p. 377; Mahānidāna p. 227.

【六】五趣。Sang. — S. V. 4. 衆集經五・無。大集法門經五・一。A. IX. 67 (IV. 459); S. 56. 102—131 (V. 474—477); M. 12. Mahāsihanādisutta (I. 73.)

【七】五蓋。Sang. — S. V. 6. 衆集經五・三。大集法門經五・三。D. 2. 68 (I. 71) Samatthapahā-S. = 長二一・沙門果經。D. 18. 30 (I. 246) Jevijā-S. = 長二一・三明經。S. 45. 177 (V. 60) Dhammasangani 1152 ff. (無明蓋を加(六)と) Vibhanga p. 378.

【八】五心裁。Sang. — S. V. 19. 漢二經缺。A. V. 205 (III. 248); IX. 71 (IV. 460); X. 14 (V. 17); M. 16. Cetokhila-sutta (I. 101) = 中阿含二〇六・心穢經 Vibhanga p. 377.

【九】五心縛。Sang. — S. V. 20. 漢二經無。A. IX. 72 (IV. 461); M. 16. Cetokhila-sutta (I. 101) = 中阿含二〇六・心穢經。Vibhanga p. 377.

【一〇】六・心穢經。Vibhanga p. 377.

目

次

四



卷の第二十……………〔五三〕—〔五四〕……………三六

二種の十法の下……………〔五三〕—〔五四〕……………三六

讀勸品第十二……………〔五四〕……………三六



索引……………卷……………末

諸の六法の一	……………	[三九一—三九六]	……………	[〇五]
諸の六法の二の一	……………	[三九七—四一四]	……………	[二一]
卷の第十六	……………	[四一五—四三八]	……………	[二九]
諸の六法の二の二	……………	[四二五—四二七]	……………	[二九]
七法品第八	……………	[四二七—四六五]	……………	[四二]
諸の七法の一	……………	[四二七—四三七]	……………	[四二]
卷の第十七	……………	[四三九—四六六]	……………	[五五]
諸の七法の二	……………	[四三九—四六五]	……………	[五五]
卷の第十八	……………	[四六七—四九五]	……………	[八一]
八法品第九	……………	[四六七—五〇〇]	……………	[八一]
諸の八法の一	……………	[四六七—四九五]	……………	[八一]
卷の第十九	……………	[四九六—五二一]	……………	[三〇]
諸の八法の二	……………	[四九六—五〇〇]	……………	[三〇]
九法品第十	……………	[五〇〇—五〇六]	……………	[三二]
二種の九法	……………	[五〇〇—五〇六]	……………	[三二]
十法品第十一	……………	[五〇七—五四三]	……………	[三三]
二種の十法の上	……………	[五〇七—五二一]	……………	[三三]

# 目次

## 阿毘達磨集異門足論(二十卷中後十卷)

(本丁)

(通頁)

### 卷の第十一

〔二八七—三二五〕

### 五法品第六

#### 諸の五法の一の一

〔二八七—三九〇〕  
〔二八七—三四〕

### 卷の第十二

〔三二六—三四二〕

#### 諸の五法の一の一

〔三二六—三四〇〕

#### 諸の五法の一の一

〔三四〇—三四二〕

### 卷の第十三

〔三四三—三六六〕

#### 諸の五法の一の一

〔三四三—三六六〕

### 卷の第十四

〔三六七—三九〇〕

#### 諸の五法の一の一

〔三六七—三九〇〕

### 卷の第十五

〔三九一—四一四〕

### 六法品第七

〔三九一—四一七〕





毗  
曇  
部  
二

渡  
邊  
棐  
雄  
譯



CHENG YU TUNG  
EAST ASIAN LIBRARY  
UNIVERSITY OF TORONTO LIBRARY  
130 St. George Street  
8th FLOOR  
TORONTO, CANADA M5S 1A5



國譯一切經

大東出版社藏版

大東出瑞珠藏

國翠一財珠











